

博士論文

団塊世代の音楽受容にみる階層性

—音楽体験の変遷を中心とした分析から—

Hierarchy in the Musical Acceptance
of Dankai(Baby-Boom) Generation
—from Analyses Focusing on the Changes
of Their Musical Experiences—

国立大学法人 横浜国立大学大学院

環境情報学府

長谷川 倫子

NORIKO HASEGAWA

2013年12月

目 次

内 容	頁
1. 研究の背景	1
2. 先行研究	4
3. 研究の目的	7
4. 研究方法の検討	7
5. 研究Ⅰ「団塊世代の音楽体験・音楽観・世代像」	
(1) 研究Ⅰの目的	10
(2) 研究方法	10
(3) 結果	12
(4) 研究Ⅰの考察	21
6. 研究Ⅱ「団塊世代の音楽体験の変遷にみる音楽受容と階層性」	
(1) 研究Ⅱの目的	23
(2) 研究方法	23
(3) 団塊世代の誕生から15歳頃まで	24
(4) 団塊世代の青年期(15～30歳頃まで)	35
(5) 団塊世代の30～40代	47
(6) 団塊世代の50代半ば	58
(7) 団塊世代の退職期(57～61歳)	67
(8) 団塊世代の高齢期への移行期(62～66歳)	81
(9) 学歴の世代間移動と音楽ジャンルとの相関	104
(10) 団塊世代のイメージと格差意識	108
(11) 今後団塊世代に求められる音楽	111
(12) 研究Ⅱのまとめと考察	113
7. 総合考察	118
8. 本研究の限界と今後の研究の方向性	126
脚注	128
引用参考文献	132
謝辞	135

1. 研究の背景

第二次世界大戦後、1947～49年のベビーブームに生まれた約806万人（2009年10月1日現在では664万4千人「総務省統計局」¹⁾）を「団塊世代」と呼ぶ。これは、作家の堺屋太一が自らの小説²⁾で命名したものであるが、1947～49年生まれは人口が突出して多いという観点から、狭義の団塊世代と定義される。一方、時代的・文化的・思想的な共通性からの分類として、戦中の出生数を大きく上回った1947～51年生まれ（2009年10月1日現在では1063万4千人「総務省統計局」）、さらに、1946年の出生数に戻るまでの1947～55年生まれを広義の団塊世代と捉えられる場合もある³⁾。一般的には、団塊の世代は狭義の1947～49年生まれを指す場合が多い。

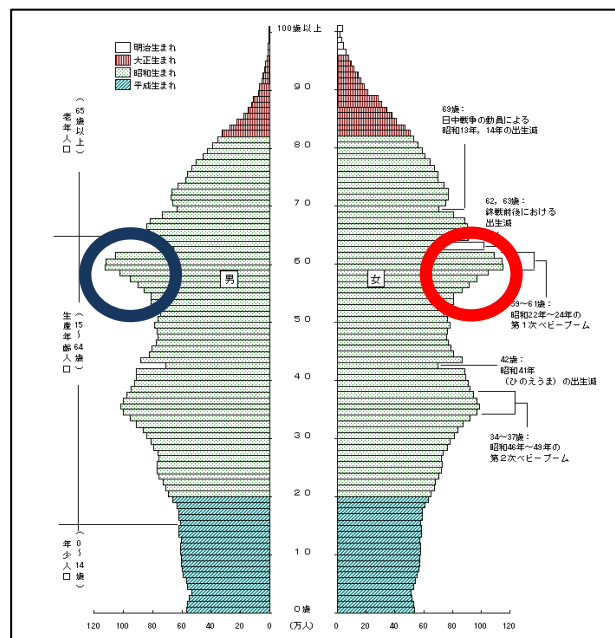


図1 日本の人口ピラミッド（2009年10月1日現在 総務省統計局）

※○が団塊世代（左が男性、右が女性）

団塊世代は戦後の日本の歩みとともに生き、現在の日本社会を中心となって作り上げてきた世代である。団塊世代の父親の多くは復員兵であり、復員後大量に結婚しベビーブームとなった。その時生まれた団塊世代は、人数が多いゆえに受験戦争など厳しい競争を強いられた世代でもある。1960年代の高度経済成長期には、多くの団塊世代が地方から都会に集団就職し、彼らは「金の卵」と呼ばれた。また、青年期には学生運動が活発化したり、新しい文化・風俗が流行したりと激動の時代を過ごしている。結婚後は「ニューファミリー」を築き新しい家族観を作り上げていった。その後、バ

ブル期⇒バブル崩壊⇒平成不況を経験しながら、2007年頃まで日本経済を中心となって牽引してきた世代である。

その団塊世代が2013年で64～66歳になり、高齢期への移行期を迎えている。それに伴い、「2007年問題」や団塊世代が65歳に達する「2012年問題」がクローズアップされ、労働力の減少や技術継承の断絶などが危惧されてきた。しかし、2007年では、60歳定年後の継続雇用が進んだため、2007年問題は大きな問題が生じることなく5年後の2012年に持ち越されていた。そして、2012年を過ぎた現在において、危惧された2012年問題はさほど発生しなかった。多くの団塊世代が2012年には完全リタイアしているが、不況の影響で、技術力の低下以上に人件費削減が進み企業としてはメリットの方が大きかった。しかし、今後は彼ら的高齢期に向けて年金給付の急激な増大が見込まれるため、社会保障制度への深刻な影響が波及していくことが懸念されている。

また、2007年以降、退職をしたり就労時間の短縮により、団塊世代は余暇活動を楽しむなどライフスタイルにも変化がみられるようになった。そして、2013年現在、多くが完全リタイアし、高齢期を迎えた団塊世代にとって、より健康的で豊かな老後をおくるための趣味や社会活動は重要なものになってきている。そして、この余暇利用の増加とともに、退職金や貯金などの金融資産や固定資産を所有し、将来的には介護の膨大な需要が高まることから、団塊世代は、ビジネスチャンスのターゲットとしても注目されている。

団塊世代は突出した人口であるため、これまでに日本の政治・経済・社会・文化に大きな影響を与えてきた。価値観を変え、多くの需要や流行を生み出した世代でもある。そして、現在は高齢期への移行期にあり社会的な問題や注目度は大きい。

以上のことから、団塊世代について調査・研究することは、戦後の歩みを分析し、今後の社会の動向を予測するうえでも意義のあることと考える。

団塊世代は、メディアなどで「一括り」にされて扱われることが多い世代である。しかし、彼らは自らの世代をどのように感じているのだろうか。「団塊世代の男女に聞く、自分たちの世代観調査」というアンケート調査(2007)⁴がある。「あなたが“団塊世代”から連想することはどんなことですか？」という質問への回答を表1に示す。

表1より、団塊世代が自らの世代をイメージする上位10項目は、1位「受験戦争」、2位「人が多い」、3位「学園紛争」に次いで、4位「フォークソング」、5位「グループサウンズ」、6位「ビートルズ世代」と続いている。7位の「激しい競争」は1位の「受験戦争」2位の「人が多い」に通じるものがある。8位と10位は若者たちの風俗である。そして、9位に「企業の中核」であったという自負もある。男女別では、「学園紛争」は男性が多く、「ミニスカート」は女性が多いが、他の項目は性別で大差はない。ここで注目すべきことは、4、5、6位に音楽のジャンルが来ていることである。これらは、団塊世代が青年期に流行した音楽である。このことから、多くの団塊世代

にとって、これらの音楽が自分たちの世代をイメージするものだと考えていることがわかる。上位に3項目も音楽が入っていることから、団塊世代と音楽の結びつきは深いものがあると考えられる。

今までメディアにおいても、団塊世代の情報のBGMに青年期に流行した音楽が流れていたことも多かったと感じている。団塊世代の定年退職がクローズアップされてきた頃は、「団塊世代はビートルズ世代」というイメージでよく取りあげられていた。最近では、団塊世代を中心に、「音楽への回帰」の傾向が見られ、音楽への憧れやノスタルジアを消費していると言われている⁵。おやじバンドを結成したり、ヤマハでは、「50歳からの音楽教室」⁶が開講されたり、青年期に流行したミュージシャン（吉田拓朗など）のコンサートに多くの団塊世代が集まったり、ギターなどの楽器や高級なステレオが売れているという。

以上のように、多くの団塊世代にとって、人生と重なる音楽へのノスタルジアや高齢期への余暇としての音楽の存在は大きくなっており、今後ボリュームのある世代がどのように音楽と関わっていくのかは、文化・芸術の発展や音楽ビジネスのあり方にも大きく影響すると思われる。本研究では、以上のことに注目し、団塊世代における音楽との関わりを調査・研究することとする。このような文化をとおした研究は、団塊世代を理解する上で意義あることと考える。

表1 団塊世代から連想すること (複数回答3つまで上位10位)

順位	連想すること	男 (250人) %	女 (250人) %	全体 (500人) %
1	受験戦争	33.2	36.0	34.6
2	人が多い	32.4	31.2	31.8
3	学園紛争	36.0	26.8	31.4
4	フォークソング	21.6	22.0	21.8
5	グループサウンズ	18.0	18.4	18.2
6	ビートルズ世代	18.4	17.6	18.0
7	激しい競争	16.0	15.6	15.8
8	Gパンや長髪	12.0	10.8	11.4
9	企業の中核	10.4	8.0	9.2
10	ミニスカート	3.2	14.0	8.6

団塊世代の男女に聞く 自分たちの世代観調査
 くらしの友(2007) (インターネット調査)

2. 先行研究

団塊世代に関する著書や記事は数多く存在する。国立国会図書館サーチにおいて、「団塊世代」で検索すると1987件ヒットした(2013年9月6日現在)。内容も多種多様である。さらに、「団塊世代、音楽」で検索すると37件ヒットした。この中で、研究論文として捉えることができるのは10件にも満たなかった。しかし、Web上(Google)では「団塊世代、音楽」で121万件もヒットした(2013年9月6日現在)。団塊世代と音楽に関する学会誌上の研究論文は少ないが、Web上では新しい情報やデータも公開され、主にマーケットリサーチの対象としての団塊世代が分析されている。本研究においては、団塊世代についてリアルタイムでの研究も含むため、学会誌の論文のデータや内容では古いものが多く、必要に応じてWeb上でのデータや記述も参考にすることを避けられないのが現状である。しかし、Web上での個人や団体の記述やデータがどのくらい信憑性のあるものかが問われてくる。本研究において、このあたりの見極めが非常に重要になってくると感じている。

以上の背景を踏まえた上で、この先行研究では、団塊世代に関する研究的著書や学会誌等に掲載された研究論文や記事について検討していく。

三浦(2005)は、著書『団塊世代を総括する』において、団塊世代の7つの特徴を挙げている。「大きな社会的影響力を持つ世代」「保守性と革新性を併せ持った世代」「量が質に転化する世代」「アメリカに洗脳された世代」「大都市に大量流入した世代」「恋愛結婚と友達夫婦の世代」「子育てに失敗した世代」と述べている。また、三浦(2006)の「団塊格差2000人実態調査」では、「団塊世代の音楽趣味はかなり雑食的」と述べている。さらに三浦(2007)は、2006年の調査を著書『団塊格差』にまとめ、団塊世代の「所得格差」「資産格差」「仕事格差」「結婚格差」「定年格差」「子育て格差」について分析し、団塊世代と音楽に関しても、階層意識別に好きな音楽を示している。これらの三浦の研究から、団塊世代の特徴や格差の実態を理解することができ、本研究にも参考になる個所が多いと感じた。しかし、これは2006年の調査であることから、その後の団塊世代の状況は不明である。やはり、2007年以降の団塊世代の状況を調査することは必要不可欠であると思われた。

次に、公益財団法人「音楽文化創造」出版の「音楽文化の創造 vol.46」(2007)に掲載された「団塊世代がつくる音楽シーン」という特集について挙げる。その特集の中で、八木正一(2007)は、「団塊世代の音楽的コーホートは何ととってもビートルズである。ビートルズに熱狂したのはまさに団塊の世代であり、この時期を境にして日本のポップス界は大きく転換していくこととなった。」また、「団塊世代の世代は近代の私たちの歴史の中で、はじめて自分らしさや自分の楽しみを堂々と追求できるようになった世代だ。」と述べている。この特集には他の音楽関係者の記事も掲載されてお

り、「ビートルズ世代である団塊世代はどんな J-POP でも歌える」という仮説を立てたり、「おやじバンド」や「団塊世代がつくり出す音楽市場」の視点で団塊世代と音楽の関係を盛り上げている。2007年の時点では、確かに団塊世代の音楽市場はかなり期待されていたと思われる。しかし、その後、リーマン・ショックや東日本大震災などが起こり、日本は激動の時代を迎えた。そういう点から、2007年時点でのこの記載内容をそのまま鵜呑みにすることは難しいのではないだろうか。また、八木の「団塊世代の音楽的コアホートはビートルズ」と断定的に述べているが、その理由が明確にされていないので、この点も追及していく必要性を感じた。

また、本研究の筆者である長谷川（2009）は、「音楽愛好者の語りにみる学校教育での音楽学習—音楽愛好へどのように繋がっていったか—」において、インタビュー調査による質的研究で、各世代の音楽愛好家に対し、学校での音楽教育や音楽活動がどのように関わっていったかを論じた。その中で、団塊世代の男性（1948年生まれ）が、「高校生の時グループサウンズに影響され、学校のバンド活動でサクソフォンを始めた。現在、ブルーノートなどでジャズを聴くのが楽しみだ。」とインタビューで語っている。当時流行した音楽がバンド活動の動機となり、その後の音楽嗜好に繋がっていったのである。また、その男性は、「大学生の時学生運動にも大変興味があり、反体制的なフォークソングなどをよく聴いていた。」と語っている。この団塊世代の男性の場合、音楽の流行や社会背景が音楽嗜好に大きく影響し、他世代とはいくつか異なる面がみられた。このことから、団塊世代と音楽の関わりを研究しようという本研究の動機となったのである。本研究では、こうしたことを背景に、同じような質的研究法を用いて研究を進めたいと考えている。

また、宮入恭平（2010）は、「団塊世代は、音楽によって引き起こされたノスタルジアを商品として消費している。量から質への転換が消費につながる。」と述べている。60歳を迎えた団塊世代は、ライフスタイルの変化に伴い、昔を懐かしむノスタルジアが強く見られるようになった。音楽もそのひとつで、特に青年期に触れた音楽への回顧・回帰がみられ、その質を重視した転換が消費につながるということである。本研究では、消費動向やマーケットリサーチのための研究ではないため、宮入の研究の「ノスタルジア」をキーワードとして本研究の参考にしたいと考えている。

本論にも含まれる研究として、筆者による団塊世代の音楽体験をインタビューによる質的研究で語りを構造化した研究がある。長谷川（2011）は、「団塊世代はどのように音楽と関わってきたか—音楽の語りをとおして見る世代像—」において、インタビューによる団塊世代の音楽体験を分析ワークシートで概念→カテゴリーに分析し、それらの関係を生涯学習の理論にもとづき、垂直的次元と水平的次元による結果図として構造化した。さらに、「団塊世代にとって音楽とは」「自分たちが考える団塊世代像」についての語りも結果図に表した。これらのことから、「団塊世代には格差が存在し、

それが音楽にも投影されているのではないか。」という仮説が生成された。この研究は本研究の元となる研究であり、研究 I として掲載することとする。ただし、この論文は学会誌のスペースの関係上、研究の全てが誌上に掲載されているわけではなく完全とはいえない。本論の研究 I ではその不足分を補い、多少修正を加え、より詳細な分析を行うこととした。

さらに、以上のような格差と音楽の関連を論ずるにあたり、団塊世代には特化していないが、階層と文化についての先行研究も挙げる。この分野の先駆けとなったのは、フランスのピエール・ブルデュー⁷である。彼は、教育と社会階級を中心に分析した。文化資本（正統とされる文化や教養や習慣等）の保有率が高い層ほど高学歴であること、またその子供も親の文化資本を相続し、同じく高学歴になることを統計的に証明し、それを「文化的再生産」と名付けた。この研究は、著書『ディスタンクシオン』⁸としてまとめられ、その中で、自己を他者から区別する「卓越化」が作りだされる過程の分析や階級闘争などを論じている。

また、ピエール・ブルデューの文化資本論を日本の実情にあてはめて調査・研究した片岡栄美（1998）は、「音楽愛好者の特徴と音楽ジャンルの親近性－音楽の好みと学歴・職業－」において、「高学歴層は正統的音楽、低学歴層は大衆音楽を好む。」と述べている。また、「階層研究における『文化』の位置－階層再生産と文化的再生産のジェンダー構造－」（2002）においては、「女性の方がハイカルチャー志向であり、女性が文化的再生産を担う。」と論じている。さらに、「「芸術文化消費と象徴資本の社会学－ブルデュー理論からみた日本文化の構造と特徴－」（2008）では、「日本文化には、正統文化から大衆文化まで広く親しむ多面的な文化消費を行う文化的オムニボア（omnivore）が存在する。」と述べている。

以上、ピエール・ブルデューや片岡栄美の研究は、格差・階層と文化を論じる上で基礎となる研究であり、本研究のような団塊世代と音楽に特化した研究にも当てはまる部分は大きいと思われる。本論の考察において参考にしていきたい。

3. 研究の目的

突出した人口を占める団塊世代が高齢期への移行期を迎えている。その団塊世代の世代観において音楽との関わりが多いことに注目し、彼らが子供の頃から現在に至るまで、どのような音楽体験をしてきたかを調査する。そこから、競争社会を生き抜いてきた団塊世代の音楽受容の特徴とその中にみる階層性との関連を分析・考察することを研究目的とする。

4. 研究方法の検討

本研究において、団塊世代という限定された世代を扱うこと、そしてその音楽体験を調査することが最初の課題であり、この課題に適切な研究方法を吟味した。過去の資料や Web 上において、団塊世代についての様々なアンケート調査を見つけることができた。その多くが、退職後の音楽市場を期待した調査であった。その中において、本研究のメインである団塊世代の音楽体験を質的に調査・分析した先行研究は非常に少なく、筆者自らが調査する必要性が出てきた。

音楽体験のようなライフヒストリー研究において、インタビューにより個々の語りを調査・分析することは必須である。それぞれの特徴を持った個と個、個と場の関係は、数量的に表せるものではなく、語りの文脈に立ち現れるものである。ゆえに、このような語りの研究には、限定された質問項目による量的研究法よりも、自由度の高い（縛りの少ない）語りを分析する質的研究法が妥当であると考えた。

ただし、質的研究方法を用いる場合でも、研究に広義の科学性を担保する必要がある。西條（2009）は、①現象（に内在する特定の事象群）を構造化し、②構造化に至る軌跡を開示すること（プロセスの可視化）で、「広義の科学性を担保する」ことが可能であると述べている。筆者も同様の考えを持っており、本研究の前半において、西條の説にもとづき、語りの構造化（結果図の作成）をし、分析ワークシートを用いてプロセスの可視化を行う。

この分析ワークシートを用いた質的研究法は、先行研究である長谷川（筆者）の論文「音楽愛好者の語りにみる学校教育での音楽学習－音楽愛好へどのように繋がっていったか－」（2009）と「団塊世代はどのように音楽と関わってきたか－音楽の語りをとおして見る世代像－」（2011）ですで行っている。本研究では、この2本の論文の質的研究法を取り入れ、内容についても、必要に応じて修正を加えながら利用することとする。

しかし、本研究は団塊世代というボリュームのある世代を扱う研究である。前述の数名の語りによる質的研究法だけで、日本の人口の約1割を占める団塊世代（広義）の音楽体験を説明することは不正確で不十分であることは否めない。より科学的な分析結果による裏付けが必要となってくる。

そこで、インタビューの分析による質的研究から見えてきたこと（問題意識など）をもととして、その検証をするために、さらに多くの団塊世代へのアンケート調査を実施し、統計データによる量的研究法を行うこととした。

本研究の研究方法の流れは、図2のような質的・量的研究を組み合わせた研究となる。

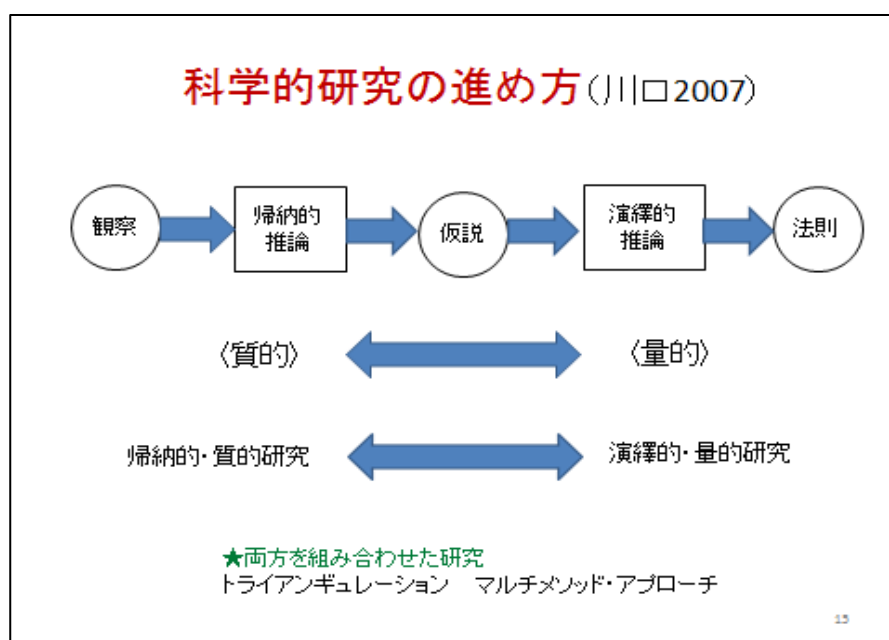


図2 科学的研究の進め方（川口 2007） 看護教育 vol. 48 より

川口（2007）は、「科学的な研究の進め方は、観察されたものを質的研究で帰納的に推論し仮説を生成する。その仮説をもとに量的研究で演繹的に推論し法則を見出すことである。」と図に示している。本研究では、この科学的研究方法を参照し、研究Ⅰを質的研究法、研究Ⅱを量的研究法として進める。また、このような質的研究法から見出された「仮説」を「問題意識」とし、量的研究法で検証される「法則」は「一般的傾向」として捉えることとする。佐藤（2005）は、「方法論的複眼（トライアングレーション）⁹の最大公約数的な意味は、複数の証拠を組み合わせた重なり合わせることによって、推論の根拠を確かなものにし、またその妥当性を高める。」と述べている。

現在、質的・量的両視点を合わせた研究で「団塊世代と音楽」に関する先行研究が見当たらないことから、本研究がその先駆けとなれることを希望している。

研究の調査対象者について、団塊世代は一般には狭義の1947～49年生まれを指す場合が多いが、本研究では音楽との関わりを研究する目的であるため、文化的な視点から、狭義より生年の範囲を広く設定し、広義の1947～51年生まれ（2009年10月1日現在では1063万4千人「総務省統計局」）を団塊世代として扱うこととする。この広義の団塊世代の人口は、日本の総人口の約1割近くを占め、日本社会に大きく影響を及ぼす世代でもある。

本研究における研究方法の詳細は、研究Ⅰ、研究Ⅱの各研究方法で述べることとする。

5. 研究 I

団塊世代の音楽体験・音楽観・世代像

—インタビュー調査 2010 の分析—

(1) 研究 I の目的

本研究では、団塊世代が自らの世代観の上位に青年期に触れた音楽を挙げていることに注目し、彼らの人生における音楽体験や音楽についての思い、世代観などをインタビューし、その語りを質的に分析・構造化する。そこから、音楽を通して見た団塊世代像について考察することを研究目的とする。

(2) 研究方法

1. 研究の枠組み

研究 I では、2010 年 4～8 月にかけて、1947～51 年生まれの団塊世代男女 13 人を対象にインタビュー調査を実施した。インタビューでは、人生における音楽体験や音楽観、世代観などについて聞いた。まず、音楽体験の語りの分析において、時系列（垂直的次元）での視点と、社会的・空間的な次元（水平的次元）の視点が必要となる。生涯学習の理論¹⁰において、水平的次元は、個人・社会全体にわたる空間であり、その中でも、学校教育・家庭教育・社会教育が代表的である。

本研究においては、生涯学習の考え方を参考にしつつ、そこから教育・学習だけに限定しない水平的次元を学校・家庭・社会と大きく 3 つに分けてインタビューし、団塊世代の音楽体験を分析していくこととした。

2. 研究方法の検討

研究 I では、人生における音楽についての語り、つまり人間と音楽との関係の中において、その文脈の中に立ち現れることがらを分析・考察することを目的とする。一般化や仮説の検証をする研究目的ではないことから、質的研究が妥当であると判断した。

しかし、質的研究においても、研究に広義の科学性を担保する必要がある。そのためには、知見がどのように導き出されたかを明示すること（プロセスの可視化）が必要である。本研究において、多くの語りのデータを整理し、概念抽出や概念をカテゴリーにしていくプロセスを可視化するために、分析ワークシートを使った分析方法を用いることとした。

3. インタビュー

3-1. 調査対象者

団塊世代男女 13 名にインタビューを実施した。表 2 は、調査対象者の属性である。属性に偏りができないようなサンプリングを心がけたが、最終学歴について中学卒業者が含まれていない。今回 2 名の中学卒業者に依頼したが、本格的なインタビューに対して、「うまく話せないから。」という理由で協力を得られなかった。また、音楽の専門家については、それが仕事であり、一般とは音楽へのモチベーションが異なるため除外した。

表 2 調査対象者の属性（インタビュー調査 2010）（2010 年 9 月現在）

	生年	性別	最終学歴	職業等	出身地
1	1949	男	高校	自営業	東京都
2	1947	男	大学	NPO 活動(元地方公務員)	東京都
3	1948	男	大学院	大学教員	愛知県
4	1950	男	大学	高校非常勤講師(元教諭)	愛知県
5	1949	男	高校	無職(元会社員)	愛知県
6	1947	男	大学院	大学教員	東京都
7	1948	男	大学(夜間)	元地方公務員	岐阜県
8	1947	男	大学院	大学院生(元小学校教諭)	徳島県
9	1947	女	高校	パート職員	長野県
10	1948	女	大学	専業主婦	大阪府
11	1948	女	短大	パート職員	東京都
12	1951	女	大学	高校教諭	愛知県
13	1951	女	高校	財団臨時職員	愛知県

3-2. インタビューの方法と質問項目

調査対象者 13 名それぞれに、60 分前後の半構造化面接¹¹によるインタビューを行い、以下の A～E の質問をした。

- A. 現在どんな音楽が好きで、どのように楽しんでいるか。
- B. 学校・家庭・社会において、どのように音楽と出会い、関わってきたか。
- C. 自分にとって音楽とは何か。
- D. 団塊世代についてどう思うか。
- E. 今後、団塊世代が求める音楽はどのようなものだと考えるか。

3-3. データの分析

1) 逐語起こし

ICレコーダーに録音したインタビューでの語りを、その流れや心情を読み取るため、逐語起こしした。

2) 概念の生成

逐語起こししたデータの中の関連個所に着目し、それをひとつの具体例とし、かつ、他の類似具体例をも説明できると考えられる概念を生成した。分析ワークシートには、概念名・定義・具体例・メモを記入した。

3) カテゴリーの生成

生成した概念と他の概念との関係を個々に検討し、複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成した。

4) 結果図の作成

質問 B、C、D において、カテゴリー相互の関係から結果図を作成した。図 4 の矢印は時間の経過や影響を及ぼしている方向、また破線矢印は、昔の音楽への回顧・回帰・再開の方向を示している。この結果図で示された概念の分析ワークシートについては、資料として巻末に提示する。

(3) 結果

1. 団塊世代の音楽嗜好について

質問 A 「現在どんな音楽が好きか」について、インタビューの中で自分の好きな音楽または苦手な音楽について語られたことを図 3 に示す。「好きな音楽」として一番多く語られたのがクラシック音楽であった。「クラシック音楽を聴くと落ち着く」「ピアノやチェロの音色が好き」「バロックが好き」「精神的な深さを感じる」などである。演歌や歌謡曲は、「日本的なものがいい」「大人になって好きになった」などである。邦楽では、「琴や尺八が好き」そして「仏教音楽」を好む調査対象者もいた。民族音楽では、留学や海外旅行の経験からインドやアイルランド、エジプトの民族音楽の良さについて語られた。学校音楽では、「荒城の月」「花」「夏の思い出」が好まれていた。好きな音楽のイメージとして、「青春の歌」や「懐かしい歌」「しみじみとした歌」「叙情歌」など、ノスタルジアを感じる歌や心にしみる歌が好まれているようだ。好きな音楽にポップスが入っていないことが意外でもあったが、おそらく「青春の歌」や「歌謡曲」に含まれていると考える。

反対に「苦手な音楽」として、「今どきの歌」が多く挙げられた。「英語やカタカナ」「言葉が多い」「テンポが速い」「デジタルな音」など、若者に人気のある音楽は総じて苦手であるようだ。

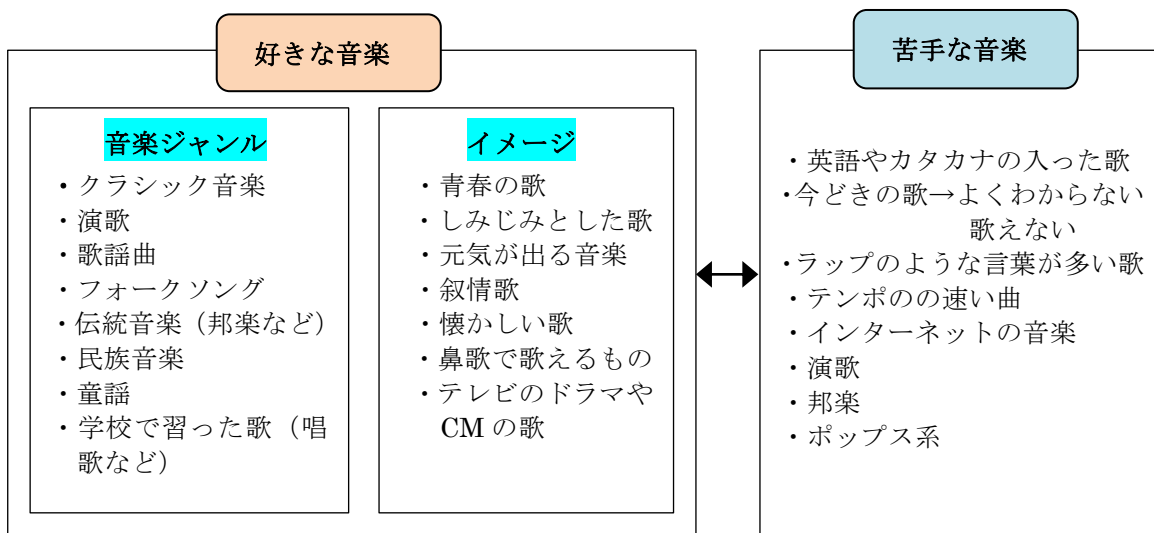


図3 語りにみる団塊世代の好きな音楽と苦手な音楽（インタビュー調査 2010）

以上のことから、この調査をみる限り、団塊世代はかなり保守的な音楽嗜好を持つと思われる。日本独特の旋律や日本人の心を歌った歌詞などに多くが共感している。一般的に、団塊世代はビートルズなどの斬新な音楽を受け入れてきた世代というイメージがあるが、本当のところは、新しい音楽をうまく取り入れることが苦手な世代だったのではないかと思われる。

2. 音楽体験についての語りの分析

次に、質問 B について、人の一生という時系列にそった垂直的次元と個人および社会の生活全体にわたる水平的次元の統合としてみていく生涯学習の視点で語りを分析する。その分析結果を結果図として表す。図 4 において、まず、子供の頃からみていくと、水平的次元の「学校」についての語りでは、「学校での音楽」というカテゴリーに 5 つの概念が生成された。「音楽の授業」では、「好きだった」というプラスの印象や「好きではなかった」というマイナスの印象が語られた。プラスの印象では、「いろいろな音楽を教えてくれて、歌ったり笛を吹いたりできてよかった。」など好印象が残っており、マイナスの印象では、「教育内容も教師も未熟だった。」など厳しい感想が語られた。また、「教師の影響」や「歌・楽器演奏の楽しさ」が後の音楽への興味・実践に繋がったという調査対象者もみられた。「音楽の課外活動や行事の影響」では、合唱部やブラスバンド部、またギターサークルなどへの所属が、現在の音楽活動の基礎になっていると語り、その経験は、人前へ出ることへの自信や協調性の学習、忍耐力の形成に大きく関わったと述べている。そして、この学校での音楽体験が、現在の音楽活動に影響し、また、その頃の歌や曲を懐かしんだり、演奏を再開したりして楽しんでいる。

次に、「家庭」においては、語りの内容が「結婚前」と「結婚後」に分けられ、「結婚前」では5つの概念が生成され、それは「音楽のあった家庭」と「音楽のなかった家庭」の2つのカテゴリーに分けられた。「音楽のあった家庭」では、「家族での音楽聴取や歌唱」が経験されていた。いろいろな歌を祖父母や両親から聴き、ギターやピアノなどを兄弟姉妹から教えてもらったりという「家族からの影響」が見られた。家庭の中では、ラジオ・テレビ・レコードなどの音楽を主体的に聴いていた。「習い事」としては、日本舞踊やピアノが挙げられ、ギターやハーモニカの「楽器演奏」も行われていた。反対に、「音楽がなかった家庭」では、「家族で音楽を楽しむ習慣がなかった」と述べ、ラジオやテレビから流れてくる音楽は、BGM的に聞き流していたようだ。

結婚後では、「音楽のなかった家庭」に育った人も、子供へピアノなどの音楽教育を受けさせていた。「音楽のあった家庭」で育った人は、子供に音楽教育を受けさせるだけでなく、結婚後も配偶者や子供と音楽を楽しむ傾向にあった。家庭での音楽体験は現在にも影響し、また、現在からは音楽のあった家庭は懐かしく、「その頃の音楽を聴くと父母を思い出す」という調査対象者もいた。

「社会」においては、「青少年期の社会参加」として、祭りなどの「音楽を伴う地域行事」への参加を経験していた。そして、彼らの青年期には、1966年の「ビートルズ来日」、1967~69年に大流行した「グループサウンズ」、1975年頃まで人気のあった「フォークソング」など、新しい音楽が紹介されたり生み出され、「音楽ブーム」が巻き起こった。

ビートルズに関しては、先行研究やメディアにおいて、「団塊世代＝ビートルズ世代」と言われ、また、団塊世代自らも、ビートルズを自分たちの世代の象徴だと考えている。しかし、今回のインタビューにおいて、ビートルズにリアルタイムで熱中した調査対象者にめぐり会えなかった。一様に、「当時ビートルズに熱中していたのは、ごく一部だった」と述べている。

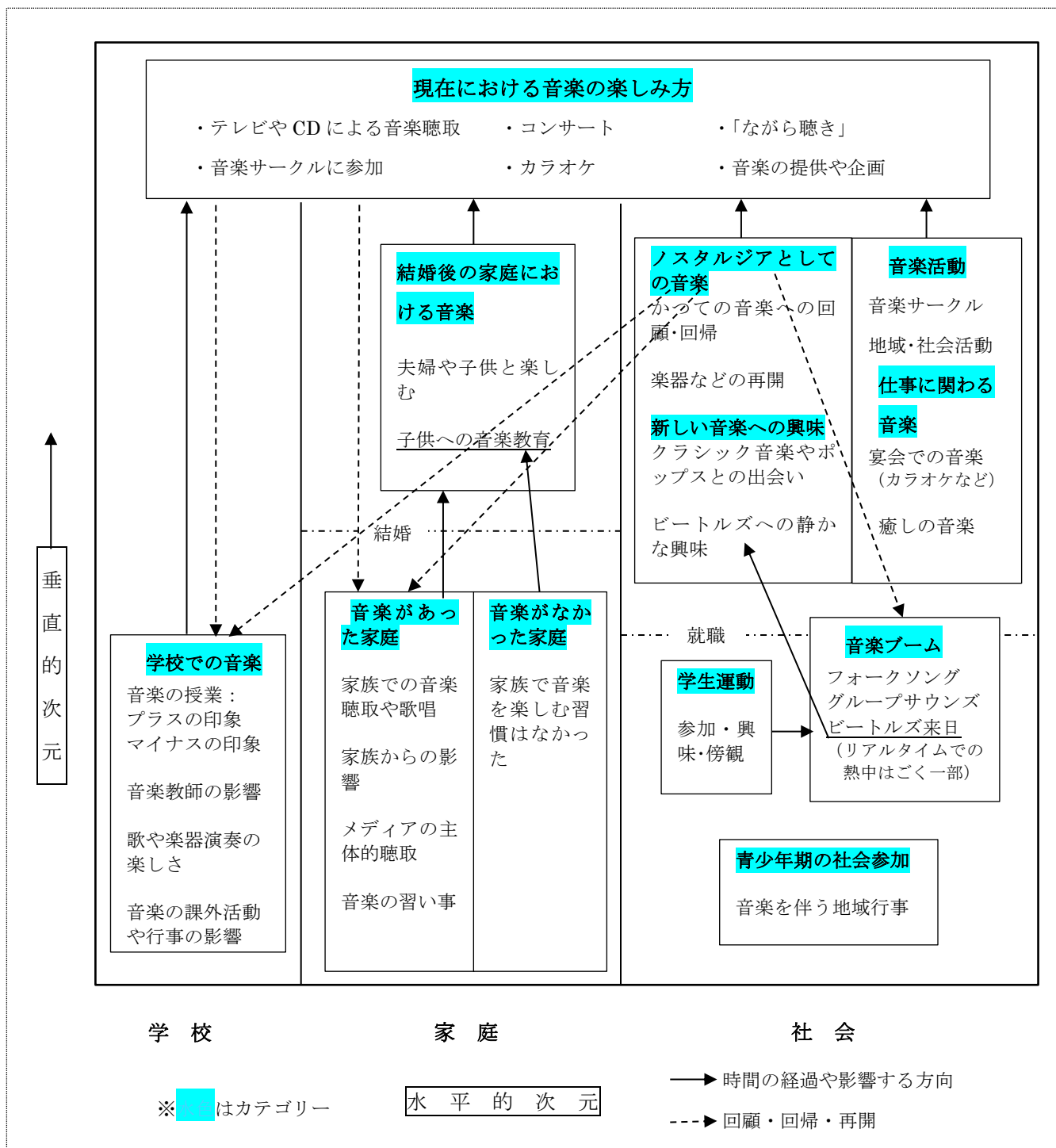


図4 団塊世代の音楽体験についての語りの結果図（インタビュー調査2010）

反対に、グループサウンズやフォークソングについては、リアルタイムで受け入れられていたようだ。グループサウンズへの評価は「聴きやすくて好き」と「チャラチャラして安っぽい感じ」など好き嫌いが分かれた。フォークソングについては、「親近感がもてる」「青春と絡む」など肯定的な語りがみられた。

音楽ブームと並行して社会的に活発となった「学生運動」については、「参加」したり、「興味」を持ったり、「傍観」していただけないなどいろいろな行動に分かれたが、「学生運動は反体制的なフォークソングとの結びつきが強い。」と語られた。

そして、団塊世代が社会に就職した後、音楽ブームは下火となるが、これらの音楽は彼らの心に残り、特に「ビートルズへの静かな興味」（表3 分析ワークシート①）が湧き、レコードを購入したりしていた。次第にビートルズが好きになっていき、これは他のポップスやロックなどの音楽への興味にも繋がっていった。

表 3 分析ワークシート①

概念名	ビートルズへの静かな興味
概念の内容 (定義)	1966 年に来日したザ・ビートルズにリアルタイムで熱中したのではなく、その後ゆっくりと興味を持ち始めたということ。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・リアルタイムで「キャーキャー」はほとんどしなかったです。多分そういうのとちょっと違って、みんなが「わー」って騒いでるのを客観的に見て、冷えて見えてたんですが、ビートルズの曲に、その曲に、ああすごいんだなというふうに入って。ちょっと入り口が違うと思いますね。・・・ひかれたんですね。こういうジャンルでこういうふうにするんだっていう、論理で。 ・(リアルタイムで熱中していたのは) 実に少なかったね。大学生の中ではごく一部だった。下宿の友達 1 人しかいなかった。あとはみんな彼に「どうだ、いいだろう、いいだろう」って無理に聴かされて。そうすると時々彼らがフルオーケストラの編成でやったりすることあるでしょ。「あ、いいじゃない」って。それで彼に無理に聴かされてやっとポップスに対するアレルギーが無くなったのかなっていう感じかな。 ・ビートルズを当時は知らなかったんです。何も分からなくて、後になって弟がレコード 2 を枚買ってきました。そのうちの前半の方はとても好きになりました。 ・ビートルズなんかやってたら、「エレキなんかやって、おまえら不良だ」って言われたんです。だからそういう社会背景もあって、あんまり積極的にそういう方にはいかない性格だったんで。(リアルタイムよりも、その後ひかれていった感じですか?)。そうそうそう、そうですね。そうですね。
メモ	「新しい音楽への興味」の下位概念

就職後、社会や家庭において、「新しい音楽への興味」として、ポップスだけでなく、特に「クラシック音楽に出会い癒された」と感じたようだ。団塊世代は、日本の経済的發展のために中枢となって働いてきた世代である。彼らは仕事の付き合いとして、「宴会での音楽」の場であるカラオケで、演歌や歌謡曲、ポップス等を歌ってきた。その反面、疲れを癒す「癒しの音楽」（クラシック音楽など）を求めていった。

彼らが 50 歳代前後にさしかかると、青春時代の音楽や子供の頃に慣れ親しんだ音楽

に懐かしさを感じるようになってくる。その「ノスタルジアとしての音楽」に「回顧・回帰」しようとした。聴くだけでなく、ギターとか「楽器などの再開」も見られた。「ノスタルジアとしての音楽」からの破線矢印は、学校や家庭で親しんだ音楽、そして青春時代の音楽ブームへの回顧・回帰を示している。

また、もっと主体的に音楽に関わろうとするケースもあり、合唱団などの「音楽サークル」に所属したり、音楽を介した「地域・社会活動」をする人も現れてきた。

そして、現在において、団塊世代はいろいろな楽しみ方をしている。テレビや CD で音楽を聴いたり、コンサートに行ったり、時にはドライブや家事の「ながら聴き」で楽しんだり、また、音楽サークルへの参加や、カラオケを楽しんだりしている。さらに、楽器の演奏をしたり、地域でコンサートを企画したり、福祉施設への慰問演奏をしたりと主体的に活動している調査対象者も見られた。現在楽しんでいる音楽は、子供の頃からの学校や家庭や社会での音楽体験の影響によるところが大きい。「高齢期にさしかかった団塊世代は、子供の頃から体験してきた音楽に自分の人生を重ね合わせている。」と、インタビューをとおして感じられた。なお、図 4 の各概念の分析ワークシートについては巻末資料にて提示する。

3. 「自分にとって音楽とは何か」の分析

質問 C 「自分にとって音楽とは何か」についての分析結果を図 5 に示す。

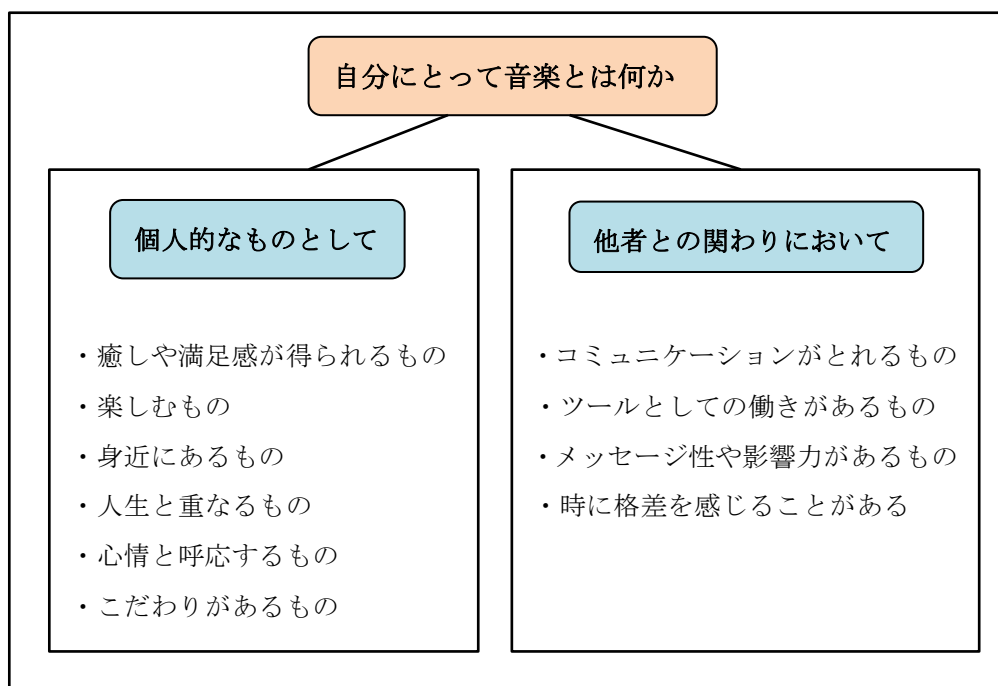


図 5 「自分にとって音楽とは何か」(インタビュー調査 2010)

この語りは、10個の概念に分けられ、それらは「個人的なものとして」と「他者との関わりにおいて」の2つカテゴリーに分けられた。この中で、「ツールとしての働きがある」では、音楽は「世代を超えて人との心を通わすツール（道具）として最高」「社会活動や社会を渡るツールとして役立つ」「祝祭事を盛り上げるのに便利」などが具体的に語られた。

また、「時に格差を感じることもある」では、表4の分析シート②に具体例を示した。これは、音楽に触れる時、他者との関係において、レベルの違いなど格差を感じるということである。これについては、5の考察で述べる。また、他の概念の分析ワークシートについては巻末資料にて提示する。

表4 分析ワークシート②

概念名	時に格差を感じることもある
概念の内容(定義)	音楽に触れる時、他者との関係において、レベルの違いなど格差を感じるということ。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・クラシック音楽を常に聴いて大きくなった、そういう方と話なんかすると「全然違うな」って思うわけよ。 ・やっぱり大学に行って、それなりの形をとっていた人というのは、わりと音楽との関わりは深いと思う。友達やなんかを見ててもそうだしね。 ・(団塊世代は)結果的にすごい人数いるんだけど、有効性を持てるのは3割か4割。あと多くは、日本経済を圧迫するだけの人たち。高齢者になった時にそういう人たちは、残念ながら音楽にも親しんで来なかった人であったり、歳をとっても音楽に関心がなかったり、という人が多い。 ・やっぱり人によっていろいろ音楽のレベルがあって、やっぱり聴き取り方は全然違うんじゃないかな。 ・例えばね、今の若い子からしたら EXILE といったらすごく人気がある。60歳を超している団塊の世代の私でも、そういうものを素直に受け入れられる、というふうに対応していける。けど、多くの団塊世代の人と話すと、「EXILE なんてあんな・・・」ってなってしまうわけ。そこの分かれ目がある。で、階層的に見ればね、階層で人をランク付けしているわけではないけど、要するに高学歴化・・・かな。 ・変化があると言えば、それ私は演歌が好きなのは思ってなかったのね。少なくとも、小中高の出会いからしたら、やっぱりちょっと流行歌の歌手みたいなのはちょっとワンランク下みたいなイメージがあるじゃないですか。
メモ	「他者との関わりにおいて」の下位概念

4. 語りにみる団塊世代像

質問 D「団塊世代についてどう思うか」について、語りの分析結果を図 6 に表した。

→ は影響を与える方向、実線は関連のある事柄を結び、↔ は相反する概念を結んだ。

作図していくと、「人数が多い」が核になっていった。そこから「すし詰め教室」「競争社会」(表 5)「格差・階層」などマイナスの概念が抽出され、反対に、「友人が多い」「話し合いをよくする」「生み出す世代」などプラスの概念も抽出された。その「生み出す世代」は「音楽ブーム」、とも関連している。注目すべきは、人数が多くて「一括りに」にされがちな団塊世代であるが、本当は競争が激しく「格差・階層」を感じており、また、大勢の中で自分を埋没させないためにも「一括りにされたくない」と主張していた。「学生運動」も一括りにされたくない団塊世代の気持ちと関連している。なお、各概念の分析ワークシートについては巻末資料にて提示する。

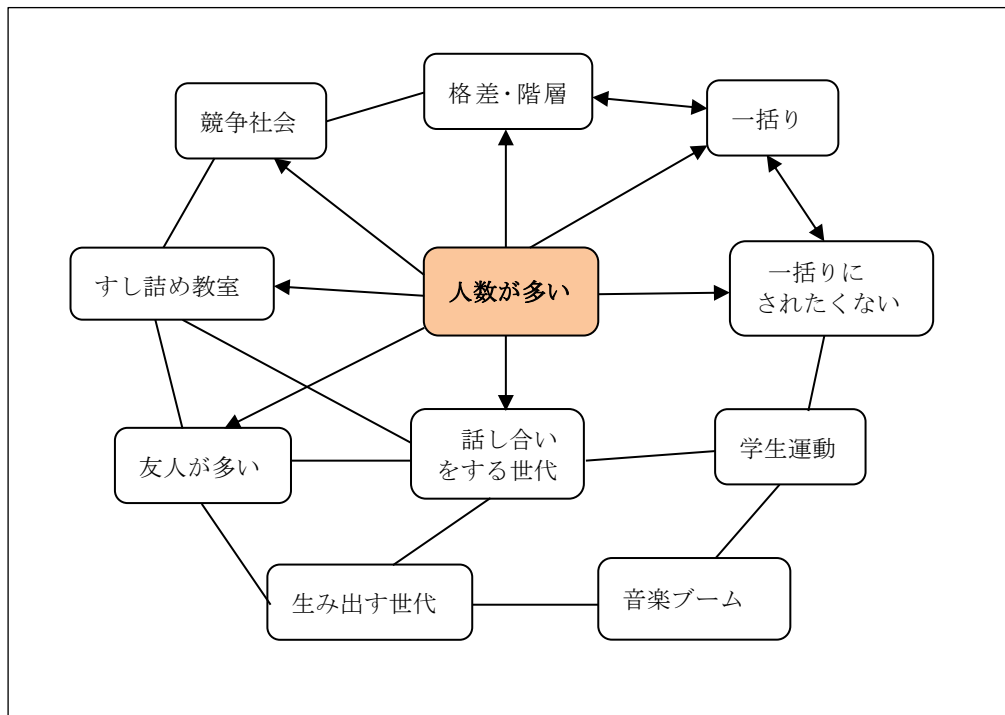


図 6 語りに見る団塊世代像 (インタビュー調査 2010)

表 5

分析ワークシート③

概念名	競争社会
概念の内容 (定義)	団塊世代は人数が多く様々な面で競争が激しかったということ
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・競争相手はめっちゃくちゃ多いし、ちょっとほかの世代とは違う。すごく人数があふれてるもんだから、やっぱり目立つようにしないと駄目ですよ。強くしない人は埋没していくんですね。だから埋没していくことができる人とできない人とあると思うんですけど、そういう中であがいてるっていうのがすごい強くて。 ・(競争率が高いということですか。) そういうことですね。(人数が多く競争に) あふれていましたということです。 ・小・中・高ぐらいまでっていう時は日本もまだ貧しい時代だったから。物質的には恵まれなかった。しかも人数が多かったから。大変な時代だったけど。 ・おっとりしていちゃ生き延びてこれないです。そういう人が多いと思います。 ・競争が激しいというか、それが当たり前だったから別になんとも思わなかったけど。大学の入試が競争率 40 倍、50 倍っていても、「はあ、何それ。大したことないじゃん」って。
メモ	「人数が多い」の下位概念

5. 今後、団塊世代が求める音楽について

質問 E の「今後、団塊世代が求める音楽はどういうものか。」の回答をまとめたものを図 7 に示す。

今後、団塊世代に求められると思う音楽は、大きく 5 つのカテゴリーに分けられた。「癒しのある音楽」として、安らぎや落ち着きのあるクラシック音楽や叙情歌が挙げられ、「人生の下山にふさわしい音楽」もこの中に含めた。また「多様性」では、現在の好みの音楽と同じく、今後も様々な生き方に呼応した音楽が支持されていくと語られた。また、「昔好きだった曲は今も好き」「青春時代に帰る歌」「感覚の同時代性はそのまま高齢化する」など「ノスタルジア」や「継続性」が挙げられた。また、昔を懐かしむだけではなく、新しい音楽や、自らが創り出す音楽、メッセージ性のあるもの、昔の曲をアレンジしたものなど、新しく生み出す「オリジナル性」も必要であると感じていた。さらに、自らが演奏したり、家族で楽しんだり、社会のコミュニケーションとして音楽を役立てたり、若者の好きな音楽も拒否しないで受容していく姿勢を見せるべきだなど、「積極的方向性」も語られた。これら 5 つのカテゴリーは、音楽の持

つ要素や役割を大方網羅しており、団塊世代は、幅広い、多種多様な音楽を求めていることが考察された。

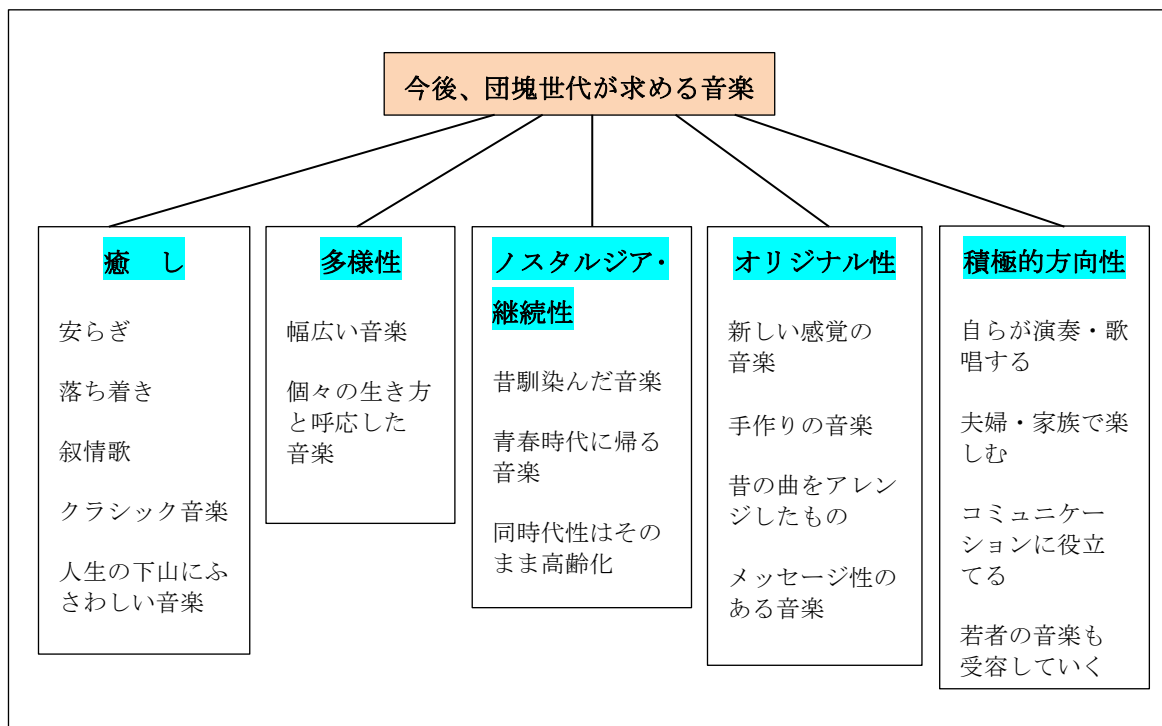


図7 今度、団塊世代が求める音楽（インタビュー調査 2010）

（4）研究Ⅰの考察

団塊世代が初めて音楽と接したのは、やはり家庭であろう。そこでは祖父母や両親からの影響を受けていた。唱歌・軍歌・民謡・流行歌・童謡などを子守唄に幼少期を過ごした。この時期に、人生で最初の音楽が、ハビトゥス(ピエール・ブルデューが言うところの社会的に獲得された性向の総体)として身体化されていったと思われる。ただ、都会出身者の何人かはピアノなど西洋音楽が流れる家庭環境で育っている。この相違が後の音楽観形成に少なからず影響したであろうと語りから推測された。

こうした家庭環境とともに、学校での音楽環境の影響も大きかった。小学校高学年頃から学習指導要領（音楽科）が改訂され（1958年告示、61年実施）、共通教材として西洋音楽を多く取り入れた授業が展開される。しかし、教師や子供たちのほとんどが、それまで日本的な音楽をハビトゥスとして獲得していたため、学校音楽へは少なからず抵抗があったと考える。この抵抗が「音楽授業へのマイナス感情」となったのではないだろうか。しかし、学校教育において西洋音楽を繰り返すことで、次第に新しいハビトゥスが獲得されていった。そこに音楽の楽しさを見つけ、授業だけでなく、課外活動（合唱部やブラスバンド部）での経験は、その後の音楽への関わり方に大き

く影響し、さらには人間形成にも関与していることが語りから考察された。

また、テレビやレコード、テープレコーダーなど、新しい音楽メディアの進歩（音楽聴取方法の変化）を子供の頃に経験した世代でもあり、さらに幅広い芸術・芸能文化に接するようになり、どんどん新たなハビトゥスを獲得していったと思われる。

そして、青年期に新しい前衛的な音楽に出会う。その代表がビートルズの音楽であった。ビートルズの来日時に15～19歳だった団塊世代は、新しい音楽に飛び込み熱中しても良い年頃なのに、「熱中したのはほんの一部」だったと語っている。学校から「エレキギターをやるのは不良」というレッテルをはられたのも原因のひとつだと考える。その後、団塊世代は就職し、自らビートルズの良さを発見、確認していったと語っている。その頃、ビートルズはすでに解散し、レジェンドとなってその音楽は世の中に浸透し始めていた。世の中が認めたので安心して入り込めたのか、経済的余裕ができてレコードが購入できたからなのかその理由は様々だと推測されるが、多くの団塊世代は「ビートルズ好き」になっていった。団塊世代が社会人となってからは、ビートルズのようなポップスのみならず、クラシック音楽や宴会でのカラオケで演歌を歌うなど、様々な音楽に触れていった。また、家庭では子供たちに音楽教育をさせたり、一緒に楽しんだり、今度はハビトゥスを得るばかりでなく与える側立場にもなっていた。そして、最近では、音楽サークルに所属したり、演奏したりと、積極的な音楽活動をする団塊世代も増えた。それと同時に、かつての音楽への回顧・回帰も見られるようになり、「ノスタルジア」がキーワードとなってきている。特に、団塊世代が青年期に触れた音楽（フォークソング、グループサウンズ、ビートルズ）で自らの世代観を表現する傾向が強く見られ、これは団塊世代の世代的特徴であり、彼らの人生において音楽が大切な要素のひとつであることのあらわれであると考えられる。

一方、本研究のインタビューから、団塊世代には格差意識が強いということが考察できた。図6から、「人数が多い」ので「一括り」にされるが、本当は「競争」「格差・階層」が存在し、個々に意識していると考えられる。これは、表1の1位「受験戦争」と7位「激しい競争」とも重なる。格差には学歴格差や経済的格差などいろいろ存在する。そして、これは音楽における格差意識にも及んでいた。表4の分析ワークシート②の具体例で示すように、育った環境の違いを音楽に投影したり、学歴などの格差意識で音楽レベルを評価している。以上のことから、「団塊世代における格差・階層意識は、音楽の受容とも関連があるのではないか。」を本研究の問題意識とする。次の研究Ⅱでは、この問題意識にもとづき、団塊世代の音楽受容の特徴と階層意識など階層性との関連を中心に分析を行う。彼らを図4の結果図に沿って子供の頃から時系列で追っていき、量的研究方法により、さらに詳細な分析や考察をしていく。

6. 研究Ⅱ

団塊世代の音楽体験の変遷にみる音楽受容と階層性 —日本版 General Social Surveys (JGSS-2003、2008) と インターネット調査 2013 による分析をもとにして—

(1) 研究Ⅱの目的

研究Ⅰの質的研究において、インタビューデータを構造化し結果図を示した。そこから、「団塊世代には人数が多いゆえの競争や格差・階層意識が存在し、それが音楽の受容とも関連があるのではないか。」という問題意識がみいだされた。研究Ⅱでは、その問題意識を検証するために、時系列で団塊世代の音楽受容をまとめ、そこから階層意識など階層性との関連を量的研究法にて分析・考察していく。

(2) 研究方法

研究Ⅱでは、JGSS-2003¹²、JGSS-2008¹³のデータによる二次分析、また、筆者が行ったインターネットアンケート調査 2013¹⁴と必要に応じてインターネット調査 2012¹⁵によるデータを用いて分析する。社会調査のJGSS（日本版 General Social Surveys）は、層化2段抽出法により対象者を抽出しているため母集団に偏りが少ない調査データが得られる。2000年から調査が開始された中で、2003年版には「娯楽の頻度：音楽鑑賞」と「娯楽の頻度：カラオケ」、2008年版には「娯楽の頻度：音楽鑑賞」「娯楽の頻度：カラオケ」「好きな音楽」という音楽に関する質問項目があるため採用することとした。しかし、JGSS調査では、音楽鑑賞の内容や方法が分けられていないこと、音楽ジャンルの種類が少ないこと、他の音楽行動については質問がなされていないこと、時系列で追っていくためのデータが少ないことが挙げられる。そこで、インターネットによるアンケート調査を行い、それらを補充する必要性が出てきた。インターネット調査 2012では、団塊世代と音楽の関わりについていろいろと調査したが、分析を進めていくうちに本研究に必要な質問事項が少ないことが判明したため、さらにインターネット調査 2013で子供の頃からの質問など必要事項を追加して調査することとした。本研究では、インターネット調査 2013の分析を中心とし、必要に応じてインターネット調査 2012を利用することとした。研究Ⅱでは、以上4種類の調査データを用い、以下の時点での団塊世代の音楽受容の特徴と階層性との関連を中心に分析・考察していく。

団塊世代（1947～51生まれ）

- ①誕生から15歳頃まで ②青年期（15～30歳頃まで） ③30～40代
④50代半ば ⑤退職期（57～61歳） ⑥高齢期への移行期（62～66歳）

(3) 団塊世代の誕生から 15 歳頃 (1947~66 年頃) まで

1. 時代背景

団塊世代の誕生から15歳頃までの主な社会背景をまとめると以下のようになる¹⁶。

① 誕生 (1947~51 年)

日本国憲法施行(1947)、東京裁判判決(1948)、湯川秀樹ノーベル賞受賞(1949)、朝鮮戦争勃発(1950)、サンフランシスコ講和条約調印(1951)

② 幼児期 (1952~56 年)

テレビ放送開始(1953)、第五福竜丸事件(1954)、

③ 小学校入学から低学年 (1954~60 年)

男女同権の民主教育、すし詰め教室、
三種の神器 (電気洗濯機・電気冷蔵庫・白黒テレビ)

④ 小学校高学年 (1957~62 年)

米国文化の浸透、団地族、東京タワー完成(1958)、皇太子ご成婚(1959)

⑤ 中学生 (1960~66 年)

高度成長期のはじまり、安保闘争勃発、東西冷戦、東京オリンピック(1964)、
東海道新幹線開通(1964)、3C (カラーテレビ・カー・クーラー)

団塊世代が 15 歳頃までの社会背景をみると、戦後、日本国憲法が施行され、民主主義の下で新しい日本がすさまじい勢いで作られていったことがわかる。同じように、音楽に関するメディアも進歩していった。以下に各音楽メディアの開始や発売について示す。

○ラジオ (聴く)

1925 年 放送開始 (社団法人東京放送局 : 現 NHK)

1951 年 民放放送開始

1955 年 トランジスターラジオ発売

○テレビ (見て聴く)

1953 年 テレビ放送開始 (現 NHK)、その後多くの民法放送が開始。

シャープより国産第 1 号の白黒テレビ発売

1959 年 皇太子のご成婚パレードが日本全国に放送(テレビ普及 200 万台突破)

1960 年 NHK と民放 4 局がカラーテレビの本放送をスタート

○レコード (再生して聴く)

1951 年 日本コロムビアが日本初の LP を輸入発売。

1958 年 日本ビクターがステレオ録音レコードの発売

○テープレコーダー（録音再生して聴く）

1950年 東京通信工業（現ソニー）が紙テープ式のモデルを発売

1951年 ソニーが取材用可搬型テープレコーダー（デンスケ）を開発

以上から、1950年代は音楽メディアが次々と開始、発売されていった時代である。団塊世代が生まれてから15歳頃までに、聴くだけであった「ラジオ」から、見て聴く「テレビ」、再生して聴く「レコード」、録音再生して聴く「テープレコーダー」と、単なる機器の進歩だけではなく、「音楽鑑賞方法」の劇的な変化がみられた。これだけの大きな変化は、1995年以降のインターネット普及に匹敵するほどの革新であったと思われる。以上に記載した年度は、開始・発売の年である。一般市民に広く普及するまでには、ラジオを除いて他のメディアは1960年以降であった。この頃は、団塊世代が小学校高学年～中学生であったので、非常に多感にメディアの変化を吸収する時期であった。これは、時代背景と共に、団塊世代特有の世代効果だと考える。

また、学校教育においても、1958年、団塊世代が小学校高学年～中学生の頃に新しい学習指導要領（音楽科）が改訂され（1958年告示、61年実施）、それまで戦後の音楽教育の主流となっていた叙情歌や風景や暮らしを歌った歌から西洋音楽を多く取り入れた共通教材の歌唱や音楽鑑賞教育が行われるようになり、西洋音楽が身近になった。これは、団塊世代にとって、学校という場をとおした新しい音楽との出会いであったと考えられる。

以上のような子供時代を生きた団塊世代について、時代背景や音楽メディアの進歩をふまえ、以降は、団塊世代の15歳頃の家庭の生活レベルと音楽の受容の関連について、JGSS-2008とインターネット調査2013のデータをもとに、分析・考察していく。

2. 「15歳頃の世帯収入レベル」と基本属性等との関連

団塊世代が15歳の頃はまだ子供のため、階層意識が成立しておらず、それを調査することは難しい。しかし、家庭環境や生活レベルで当時置かれていた階層を推し量ることは可能である。そこで、JGSS-2008の「15歳頃の世帯収入レベル」を使用することとする。質問は、「あなたが15歳の頃のあなたの世帯収入は、当時の平均的な世帯と比べてどうでしたか。」である。選択肢は、「平均よりかなり多い」「平均より多い」「ほぼ平均」「平均より少ない」「平均よりかなり少ない」の5点尺度である。団塊世代が2008年時点で15歳の頃を振り返り、当時の平均的な世帯と比べるという自らの感覚で回答しているため正確とは言えない部分もある。しかし、この15歳の頃の世帯収入レベル（生活レベル）は、子供の頃に置かれた階層と置き換えることもでき、後に獲得した階層意識の出発点にあたる時期と考えられる。「15歳頃の世帯収入レベル」の分布は図8に示す。平均値は3.35である。「ほぼ平均」が男女とも最も多く、次に「平

均より少ない」がきている。「平均よりかなり少ない」は、男性がかなり多い。この調査において、全体的に団塊世代の女性の方が、15歳頃の世帯収入レベルは高かったと感じている。ただ、男性の方が世帯収入レベルに関しては厳しい基準をもっているともいえる。

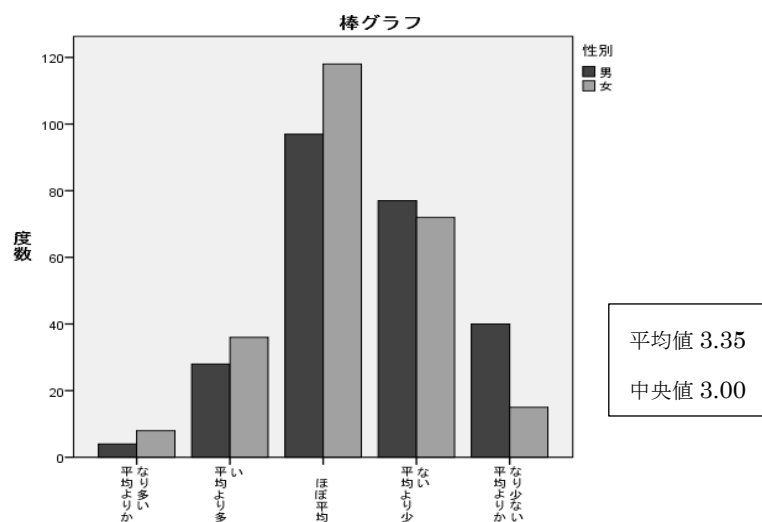


図8 団塊世代が15歳頃の世帯収入レベル (JGSS-2008)

次に、この「15歳頃の世帯収入レベル」を従属変数とし、その頃考えられる基本属性を中心とした独立変数を投入し重回帰分析をし、その関連要因をみていく。独立変数は「性別」(ダミー変数)、「15歳頃の居住地規模」(大都市・中小都市・町・村)、「教育年数(父親)」¹⁷、「教育年数(母親)」を投入する。さらに、他世代との比較も試みる。世代区分については、JMR生活総合研究所『消費社会白書2006』を参考にしたが、団塊世代以前は、回答者の生年分布を踏まえ「昭和一桁世代」「戦前・戦中世代」とした。その詳細は表6の(注3)に示す。

表 6 世代別「15 歳頃の世帯収入レベル」への重回帰分析 (JGSS-2008)

	昭和 一桁 世代	戦前・ 戦中 世代	団 塊 世 代	断 層 世 代	新 人 類 世 代	団 塊 ジ ュ ニ ア 世 代	断 層 ジ ュ ニ ア 世 代
性別	-.049	-.109 **	-.091	.020	-.053	.005	.010
15 歳頃の居住地規模	.099	.097 *	.100	.129 **	-.041	.046	.030
教育年数 (父親)	-.084	-.174 **	-.153 *	-.239 ***	-.130 *	-.034	-.196 **
教育年数 (母親)	-.050	-.057	-.115	-.027	-.144 *	-.189 **	-.183 **
N	278	657	350	533	548	298	388
調整済み R ²	.020 *	.079 ***	.085 ***	.091 ***	.055 ***	.037 **	.113 ***

従属変数 15 歳頃の世帯収入レベル

(注 1) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(注 2) 数値は標準化係数 β

性別の標準化係数 β は、- が女性、+ が男性である。

教育年数(父親・母親)の標準化係数 β は、- が正の関連、+ が負の関連である。

(注 3) 各世代の生年と 2008 年時の年齢

昭和・一桁世代(1927~34 年)…74~81 歳	戦前・戦中世代(1935~46 年)…62~73 歳、
団塊世代(1947~51 年)…57~61 歳	断層世代(1952~60 年)…48~56 歳
新人類世代(1961~70 年)…38~47 歳	団塊ジュニア世代(1971~75 年)…33~37 歳
断層ジュニア世代(1976~85 年)…23~32 歳	

※全ての独立変数の VIF 値は 2 未満であり、重大な多重共線性は生じていない。

表 6 より、団塊世代の「15 歳頃の世帯収入レベル」は、「教育年数 (父親)」と関連がみられた。父親の教育年数が長い団塊世代は、その頃の世帯収入レベルも高かったといえる。他世代と比較すると、4 つの独立変数のうち父親のみに関連がみられたのは団塊世代だけであった。父親の教育年数が関連しない世代は、「昭和・一桁世代」と「団塊ジュニア世代」である。「新人類世代」以降は母親の教育年数が関連している。「新人類世代」以降の母親は、戦後の新しい学制の教育を受けており、教育年数が長くなり、さらに就業もし、家庭の世帯収入レベルに大きく関わっていったことがわかる。

まず、団塊世代が 15 歳頃の世帯収入レベルに関連した父親の教育年数の分布を表 7 に示す。父親の教育年数の平均は 9.32 年であった。表では示していないが、母親の平均は 8.94 年であり、多くが専業主婦や農業などの家族従業に携わっており、主な稼ぎ

は父親が担っていたと考えられる。父親の就労状況を調べたところ（表は省略）、父親の職種は、農耕・養蚕作業者が一番多く、就業形態は小規模な企業への勤め人と自営業者・自由業者が多かった。

団塊世代「15歳の頃の父：職種」（多いもののみ）

1. 農耕・養蚕作業者 19.8%
2. 総務・企画事務員 9.0%
3. 小売店主 4.0%
4. 大工・会計事務員 2.0%
5. 自動車運転者・製材工・木工 1.8%

表7 団塊世代の父親の最終学校の分布（JGSS-2008）（）は教育年数

	度数(人)	%	有効%	累積%
旧制尋常小学校（6年）	108	21.6	29.0	29.0
旧制高等小学校（8年）	101	20.2	27.2	56.2
新制中学校（9年）	11	2.2	3.0	59.1
旧制中学校・高等女学校・実業 学校・師範学校（11年）	97	19.4	26.1	85.2
新制高等学校（12年）	7	1.4	1.9	87.1
旧制高等専門学校・高等師範学 校（15年）	26	5.2	7.0	94.1
新制大学（16年）	5	1.0	1.3	95.4
旧制大学（17年）	15	3.0	4.0	99.5
新制大学院（18年）	2	.4	.5	100.0
合計	372	74.3	100.0	
わからない	115	23.0		
欠損値 無回答	14	2.8		
合計	129	25.7		
合計	501	100.0		

また、団塊世代が15歳頃の父親のしつけをみると（表8）、「厳しかったが、あなたの意見も聞き入れてくれた」が49.2%あり、厳しいだけでなく子供の言うことも聞くことができる父親が多かったといえる。

表8 団塊世代が15歳頃の父親のしつけ（JGSS-2008）

		度数(人)	%	有効%	累積%
有効	厳しく、一方的にしかることが多かった	50	10.0	10.1	10.1
	厳しかったが、あなたの意見も聞き入れてくれた	244	48.7	49.2	59.3
	やさしく、何でもいうことを聞いてくれた	113	22.6	22.8	82.1
	あなたに無関心だった	38	7.6	7.7	89.7
	いなかった	51	10.2	10.3	100.0
	合計	496	99.0	100.0	
欠損値	無回答	5	1.0		
合計		501	100.0		

3. 「15歳頃の世帯収入レベル」と音楽環境との関連

6-(3)-2で分析したことをもとに、次に音楽との関連をみていく。この場合、JGSS-2008では音楽に関する有効な質問事項がなく分析が不可能であるため、インターネットアンケートによる調査で求めたデータを使用することとする。この調査は、2013年4月に、全国の団塊世代500人（男250人・女250人）を対象に実施した。質問項目は、研究Ⅰの結果図にもとづいたものが中心である。図9において、インターネット調査2013の「15歳頃の世帯年収レベル」の平均値は2.95で、JGSS-2008の平均3.35に比べるとやや高めである。このように、インターネット調査は、インターネットを扱える層のみが回答していることから、この母集団はJGSSに比べやや高い階層性がみられる¹⁸。このことを踏まえ、以降の分析の際には常に留意するよう心がけていく。

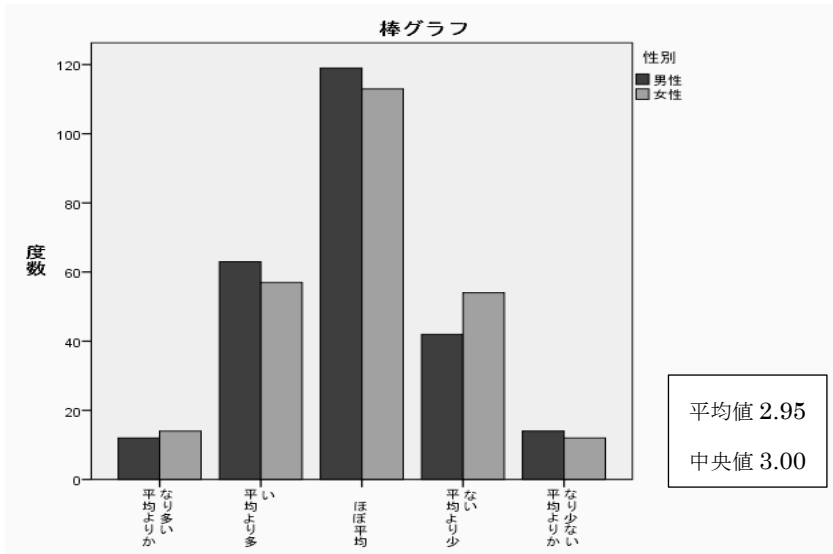


図9 団塊世代が15歳頃の世帯収入レベル (インターネット調査2013)

インターネット調査 2013 では、以下の質問項目が 15 歳頃までに関連したものである。

A. 子供の頃の音楽環境に関する変数

「小中の頃の音楽授業 (好きだったか)」「小中の頃の楽器演奏・歌唱 (得意だったか)」「子供の頃、音楽の習い事の有無」「子供の頃の音楽聴取方法」(ラジオ、テレビ、レコード、コンサート、映画館)

B. 子供の頃の父母の影響に関する変数

「父親の教育年数」「母親の教育年数」「子供の頃の父親の音楽聴取頻度」「子供の頃の母親の音楽聴取頻度」「父親が好きだった音楽」(クラシック音楽、唱歌・童謡、民謡・浪曲・邦楽、歌謡曲、演歌、軍歌、ポピュラー音楽、フォークソング、ジャズ・ブルース、ロック、映画音楽)「母親が好きだった音楽」(父親と同様)

以上のように独立変数を A・B に分け、さらに A と B を合わせて、「15 歳頃の世帯年収レベル」を従属変数とした重回帰分析を試みた。この場合、「15 歳頃の世帯年収レベル」を世帯年収の金額の大小と捉えるのではなく、15 歳当時の生活レベル意識の高低 (階層意識の高低) として捉えることとする。重回帰分析の結果は表 9 に示す。この場合、B「父母の影響」の変数として「父親が好きだった音楽」「母親が好きだった音楽」を全て投入したところ、全ての音楽ジャンルに有意な関連はみられなかった。そのためこれらの音楽ジャンルは独立変数から削除した。

表 9 「15 歳頃の世帯収入レベル」への重回帰分析（インターネット調査 2013）

	A（子供の頃の音楽環境）	B（父母の影響）	AとB
性別	-.029	-.141**	-.099
15歳頃の居住地規模	.151**	.147**	.117*
小中学校の頃：			
音楽の授業が好きだった	-.010		-.060
楽器や歌が得意だった	.092		.080
子供の頃の音楽の習い事の有無	.179***		.159**
子供の頃の音楽聴取方法：			
ラジオ	-.001		-.014
テレビ	.092		.104
レコード	.133*		.105
コンサート	.051		-.033
映画館	.003		.031
教育年数（父親）		-.180**	-.169**
教育年数（母親）		-.114	-.088
子供の頃：			
父親の音楽聴取頻度		.133*	.079
母親の音楽聴取頻度		.016	-.049
N	500	375	375
調整済みR ²	.167***	.145***	.187***

従属変数：15歳頃の世帯収入レベル

(注1) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(注2) 数値は標準化係数 β

性別の標準化係数 β は、-が女性、+が男性である。

教育年数(父親・母親)の標準化係数 β は、-が正の関連、+が負の関連である。

※全ての独立変数のVIF値は2未満であり、重大な多重共線性は生じていない。

次に、この重回帰分析の独立変数を因子分析したところ、「子供の頃の音楽聴取方法：テレビ」「子供の頃の音楽聴取方法：レコード」「子供の頃の父親の音楽聴取頻度」の3つが第1因子となった。そこで、これらをまとめて潜在変数「子供の頃の家庭での音楽環境」を作成した。

以上の重回帰分析と因子分析の結果をもとに、図10のようにモデルを作成しパス

解析（構造方程式モデリング）を行った。モデル適合度をみると、df（自由度）=10、 $\chi^2=16.942$ 、 $p=0.076$ 、CFI=0.982、RMSEA=0.037 となり、有意確率は低めだが 0.05 以上あり、CFI 値 0.95 以上、RMSEA 値は 0.05 以下で適合しており、当てはまりの良いモデルとなった。

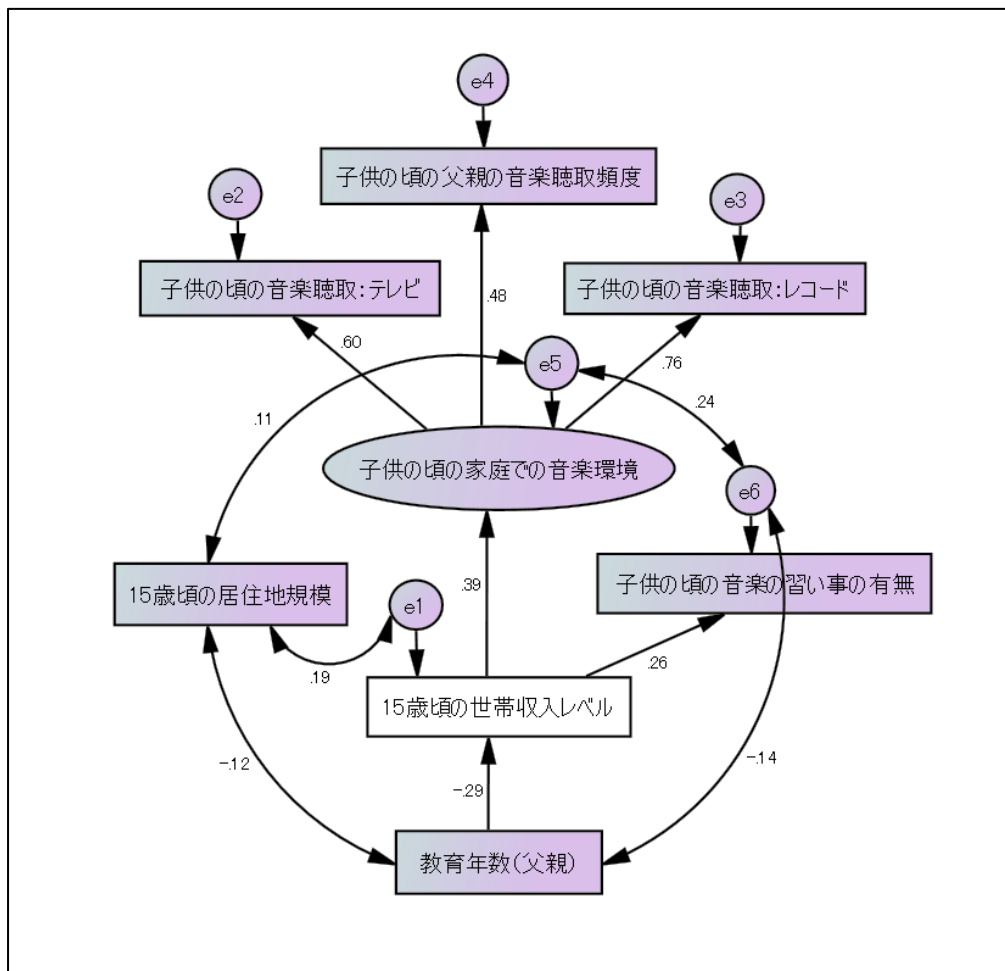


図 10 15 歳頃の世帯収入レベルにおけるパス解析（インターネット調査 2013）

$n=375$ $df=10$ $\chi^2=16.942$ $p=0.076$ $CFI=0.982$ $RMSEA=0.037$

※数値は標準化推定値（全ての数値が 5%水準で有意である）

教育年数(父親)の標準化推定値は、他の変数との関係において、-が正の関連・相関、+は負の関連・相関である。

※関連(因果関係) \longrightarrow 相関 \longleftrightarrow

図 10 より、「15 歳頃の世帯収入レベル」は、「教育年数（父親）」が関連している。父親の教育年数が長い団塊世代の 15 歳頃の世帯収入レベルは高かったといえる。また、表 9 の重回帰分析では「15 歳頃の居住地規模」が「15 歳頃の世帯収入レベル」

に有意に関連していたが、因果関係が確定できないためこれらは相関関係とした。父親の教育年数が長く、15歳頃大きな都市に住んでいた団塊世代は、15歳頃の世帯収入レベルも高かったといえる。

また、「15歳頃の世帯収入レベル」は、「子供の頃の習い事の有無」や潜在変数の「子供の頃の家庭での音楽環境」に影響していた。そしてこの「子供の頃の家庭での音楽環境」は「子供の頃の父親の音楽聴取頻度」や「子供の頃の音楽聴取：レコード」「子供の頃の音楽聴取：テレビ」という因子で構成されていた。15歳頃の世帯収入が高かった家庭の子供の父親は音楽をよく聴き、子供はレコードやテレビで音楽をよく聴き、音楽の習い事もよくさせてもらっていたといえる。

この調査では、父親の教育年数の平均値は11.05年であった。JGSS-2008が9.32年であったので、このインターネット調査2013の方が教育年数は長い。その父親の教育年数が、音楽の習い事と相関していた。この調査では、音楽の習い事を「していた」が24.4%（男性12.8%、女性36.0%）で女性の方が多かったが、全体的には「していなかった」が75.6%であり、この頃に音楽の習い事ができる家庭は多くなかったようだ。習い事の内容として、「ピアノ・オルガン」が16.4%で突出して多く、「ヴァイオリンなどの弦楽器」は3.0%、他はほとんどなかった。ピアノやオルガンは、家庭になくても先生宅や音楽教室で習うことも可能であった。しかし家庭での練習や演奏を望んだ場合、当時、高価なピアノやオルガンを購入できる家庭は少なく、置き場所も必要なことから、かなり恵まれた家庭環境であったと思われる。聞き取り調査でも、「ピアノを搬入する時は、近所に目立たないように夜搬入してもらった。」という証言もみられ、ぜいたく品として捉えられていたようだ。

団塊世代が15歳の頃、1960年代には音楽関係のメディアの劇的な進歩があり、聴くだけのラジオから、録音再生できるテープレコーダーまで音楽鑑賞方法が変化していった。この波に乗り、経済的に余裕のある家庭から新しい機器を購入していったと思われる。その代表としてテレビが最たるものであり、さらに、レコードはステレオの購入もできる裕福な家庭の象徴であった。このことから、当時、新しい音楽メディアを所有していることはステイタスであったと考えられる。

この調査では、レコードでよく聴いたのは34.0%であった。レコードに関しては、新しい学習指導要領「音楽科」（1958年告示、61年実施）で、クラシック音楽を多く取り入れた共通教材の音楽鑑賞教育が行われるようになり、学校を通してレコードが身近なものになっていった時期である。必ずしも家庭のみでレコードを聴いたとは考えられない。それを考慮したとしても、テレビやステレオ、レコードを購入し、家庭で聴いていた経済的にゆとりある父親像がみえてくる。そのため、父親の音楽聴取頻度が世帯収入レベルに関連したと考えられる。

さらに、父親が好んだ音楽との関連を調べるために、「子供の頃の父親の音楽聴取頻度」を従属変数とし、「父親が好きだった音楽」（クラシック音楽、唱歌・童謡、民謡・浪曲・邦楽、歌謡曲、演歌、軍歌、ポピュラー音楽、フォークソング、ジャズ・ブルース、ロック、映画音楽）を独立変数として重回帰分析を行った（表は省略）。その結果、「子供の頃の父親の音楽聴取頻度」に対し、「クラシック音楽」「民謡・浪曲・邦楽」「歌謡曲」「演歌」「ポピュラー音楽」「ジャズ・ブルース」「映画音楽」に正の関連がみられた。このようないろいろな音楽ジャンルを好んだ（聴く機会があった）団塊世代の父親は、その音楽鑑賞頻度も多かったといえる。

以上のことから、団塊世代の子供の頃の生活レベル意識や音楽環境に対して、父親の教育年数や音楽聴取頻度が関連し、父親の影響が大きかったことが考察できた。以降の研究でも、団塊世代の父親像をみていきたいので、父親の特徴と音楽との関連については以降の分析で必要に応じて述べていきたい。

(4) 団塊世代の青年期 (15～30 歳頃まで) 1962～81 年頃

1. 時代背景

団塊世代の青年期である15歳から30歳頃までの主な社会背景や音楽メディア・文化の特徴をまとめた。

① 10 代後半

- 1963 年 日米間衛星中継成功、ケネディ暗殺、「巨人・大鵬、玉子焼」流行語
- 1964 年 名神高速道路・東海道新幹線開通、東京オリンピック開催、
- 1965 年 ベトナム戦争、エレキギターブーム
- 1966 年 いざなぎ景気始まる、ビートルズ日本公演、3C ブーム

② 20 代

- 1967 年 ミニスカート流行
- 1968 年 三億円事件、グループサウンズ全盛
- 1969 年 東名高速道路開通、安田講堂事件、マイホーム主義
- 1970 年 日本万国博覧会大阪で開催
- 1971 年 ドルショック、
- 1972 年 日本列島改造論、浅間山荘事件、札幌冬季オリンピック開催、沖縄返還
- 1973 年 第一次オイルショック
- 1975 年 第二次ベビーブーム
- 1976 年 ロッキード事件、堺屋太一著「団塊の世代」刊行
- 1977 年 日本航空ハイジャック事件
- 1978 年 成田空港開港、インベーダーゲーム発売
- 1979 年 第二次オイルショック
- 1980 年 ソ連アフガニスタン侵攻、ジョン・レノン射殺

音楽メディアの流れ¹⁹

- 1960 年 ステレオ LP 本格化
- 1964 年 フィリップスがカセットテープ開発
- 1970 年 4CH ステレオ開発 (75 年まで)
- 1971 年 録音レコード発売、カラオケ誕生
- 1975 年 ステレオ普及率 50% 超える。
- 1976 年 シングル盤 1 億枚突破、第一次カラオケブーム (音楽のみのカラオケ)
- 1979 年 SONY ウォークマン発売、カセットテープ累計 1 億 7 千万巻
- 1980 年 貸しレコード店誕生、オープンリールの音楽テープ生産打ち切り

1960年に策定された池田内閣の「所得倍増計画」を旗印に、日本経済は高度成長期に入り、この景気は1973年の第一次オイルショックまで約13年間続いた。高速道路や新幹線が開通し、東京オリンピックが開催され、「3C（カラーテレビ、カー、クーラー）」が普及し、1960年代は他の年代に例をみないほど飛躍的に文明的な生活が進歩を遂げた時期であった。これらを作ったのは団塊世代より上の世代であったが、20歳の成人を迎える前後に団塊世代は若くしてこの恩恵に浴していったのである²⁰。

この高度成長期に、青年期の団塊世代は、教育的、政治的、文化的な多くの局面に向き合うこととなった。まず、団塊世代は人数が圧倒的に多いことから激しい競争を強いられることとなった。その代表的なものは「受験戦争」である。当時の大学進学率（短大を含む）は、1967年前後で約24%（男26%、女21%）であった²¹。この受験戦争は、経済的に余裕のない家庭の子供たちが国公立の大学進学を目指したため、国公立大学の競争率が特に高かった。また、大学進学をしなかった多くの団塊世代は、高校卒業または中学卒業で就職した。特に、地方から就職口を求めて大都市に集団就職した人たちは「金の卵」と呼ばれ、日本経済の底を支えたのである。

受験戦争を勝ち抜いた大学生は、既存の社会体制への批判から、「大学改革」「ベトナム反戦」「安保闘争」を主張する反体制運動に直面し、その運動に身を投じた学生も多く存在した。1968～69年にかけて多くの大学で紛争が起こった。しかし、1969年、東大安田講堂占拠に失敗、70年安保闘争も不調に終わり、1970年の「よど号ハイジャック事件」、1972年の「浅間山荘事件」などの事件で世の中の批判を受けるようになり、次第に学生運動離れが進んだ。その後、学生たちは就職し、企業戦士となったといった。

文化的には、欧米文化が浸透し、ファッションではジーンズやミニスカートが流行した。また、当時の青年たちはレジャーやドライブも好み、団塊世代は消費文化の担い手となっていった。音楽では、1965年にベンチャーズが来日し、エレキギターブームが起こった。また、1966年にはビートルズが来日し一大ブームを巻き起こしていた。その影響から日本でもたくさんのグループサウンズが結成され大ヒットをとばしていった。テレビの普及で、多くの音楽番組も放送され、歌謡曲やフォークソングが流行していった。この音楽ブームにより、団塊世代は青年期に新しい音楽と出会っていったのである。団塊世代が自分たちの世代イメージを語るとすると、①受験戦争、②人が多い、③学園紛争に次いで④フォークソング、⑤グループサウンズ、⑥ビートルズであった（表1）。10項目中上位3つに青年期に触れた音楽を挙げており、団塊世代と音楽は密接な関係にあると考えられる。

音楽メディアでは、1960年代はステレオが進歩しレコード全盛期であった。その後、カセットテープも伸びていった。1979年にはウォークマンが発売され、移動しながら

聴けるという新しい音楽鑑賞方法が誕生した。この頃、8トラックテープによる音楽のみのカラオケのブーム（第一次カラオケブーム）がみられた。

また、1970年代には、20代になった団塊世代の多くが結婚した。民主主義思想のもとで育った団塊世代は、それまでの見合い結婚ではなく自由な恋愛を経て結婚した。労働省の「出産力調査」によると、1970～74年の婚姻における恋愛結婚の比率は67.4%であった²²。男女同権の教育を受け、夫婦対等の「友達夫婦」を理想とし、アメリカ風の「ニューファミリー」を築いていった。そして、この時期に結婚した夫婦から第一子が生まれ、第二次ベビーブームが起こった。

2. 「青年期に好きだった音楽」の分析

インターネット調査2013では、「青年期に好きだった音楽」について質問した。音楽ジャンルは10種類、選択肢は1「非常に好きだった」2「好きだった」3「あまり好きでなかった」4「嫌いだった」の4点尺度で、そのうちの1と2をまとめて「好きだった」、3と4をまとめて「好きでなかった」の2項にした。表10に「好きだった」の割合を各ジャンル別、男女別に示す。フォークソングやグループサウンズは歌謡曲やポップスに、ビートルズは海外のポップスやロックに含まれるが、団塊世代の世代観調査の上位に、「フォークソング」「グループサウンズ」「ビートルズ」が挙げられており、これらを独立したジャンルとして質問した。

表 10 団塊世代が青年期に好きだった音楽（インターネット調査 2013）（複数可）

順位	青年期に好きだった音楽	男(250人中)%	女(250人中)%	全体(500人中)%
1	フォークソング	84.0	83.2	83.6
2	映画音楽	78.4	79.2	78.8
3	グループサウンズ	74.4	74.0	74.2
4	歌謡曲	72.0	71.6	71.8
5	ビートルズ	68.0	63.2	65.6
6	海外のポップス	64.4	63.2	63.8
7	クラシック音楽	41.2	48.0	44.6
8	ジャズ・ブルース	46.0	32.8	39.4
9	演歌	44.8	29.6	37.2
10	ロック	39.6	30.4	35.0

※数値は「好きだった」割合

表 10 より、団塊世代が青年期に好きだった音楽ジャンルの中で、「フォークソングを好きだった」が 83.6%と第 1 位でかなり多い。その他、2 位の「映画音楽」から 6 位の「海外のポップス」までは多くの団塊世代に好まれていた。性別では、「クラシック音楽」は女性に、「ビートルズ」「ジャズ・ブルース」「演歌」「ロック」は男性に好まれていたという結果になった。

1 位のフォークソングについては、「カレッジフォーク」や「反戦フォーク」などいろいろな種類があり、それを分けて質問していないのでわからないが、1970 年頃の吉田拓郎、かぐや姫、井上陽水などが人気のフォークシンガーで、若者の心を捉えていった。次いで、「映画音楽」「グループサウンズ」「歌謡曲」「ビートルズ」「海外のポップス」である。日本における映画は、1960 年に日本映画史上で最高製作本数となる 547 本を製作しピークを迎えた。しかし、観客動員数は 1958 年の 11 億人強を最高に、ゆるやかに下降し、1963 年には半分以下の 5 億人強になった²³。1960 年前後、映画は一般市民の代表的な娯楽であり、そこで聴く音楽も多種多様であった。映画音楽は、クラシック音楽からロック、現代音楽までありとあらゆるジャンルを含む劇伴音楽であり、他のジャンルとは異なる性質を持つが、挿入された音楽が単独で流行することもよくある。当時も、好きな映画との相乗効果で「映画音楽」を好む層が多かったのではないかと考えられる。グループサウンズ (GS) は 1967 年から 69 年に大流行した。1966 年のビートルズ来日公演以降、エレキギターを持ったグループが次々とデビューした。ジャッキー吉川とブルー・コメッツ、ザ・スパイダース、ザ・タイガース、ザ・テンプターズなどが GS の代表で活躍した。しかし、長髪やエレキギターは不良の象徴と言われ、まじめな大人たちからの風当たりは強かった。GS のコンサートに行った高校生を停学か退学処分にする学校も存在したという。また、歌謡曲において、1970 年代は、新三人娘、花の中三トリオ、新御三家、キャンディーズ、ピンクレディなど多くの歌手が続々と登場し、第一期アイドル黄金時代とも言われ歌謡曲が大流行した。この頃にはほとんどの家庭にテレビが普及し、これらの歌手の歌を 20 代である団塊世代もよく聴いたと思われる。ビートルズに関しては、1966 年の来日公演頃は、ビートルズに熱狂した団塊世代は意外に多くなく、その後グループサウンズやフォークソングが流行するにつれて、次第にビートルズを好きになっていったようだ。研究 I のインタビューにおいても、リアルタイムでビートルズに熱狂した調査対象者は皆無で、その後次第にビートルズが好きになっていったと述べている。

以上のように、1960～70 年代は、テレビの普及と共に、音楽の流行においても激動の時代であった。そして、団塊世代が青年期には、同時にいろいろな種類の音楽ジャンルを好んでいたことが表 10 から読みとることができる。

そこで、まず、青年期に好きだった音楽 10 種類の主成分分析を試みた。主成分分析の結果、表 11 のように 3 つの主成分に分けられた。第 1 主成分は、海外のポップス、

ビートルズ、ロック、ジャズ・ブルース、グループサウンズ、フォークソング、映画音楽のいわゆる軽音楽系であった。第2主成分は、日本の歌謡曲と演歌の大衆音楽系で、第3主成分はクラシック音楽（ロックとは逆相関）であり、いわゆる正統音楽系であった。第1主成分には、海外の音楽と日本の音楽が含まれている。団塊世代が青年期だった頃は、おおよそこの3つの音楽嗜好に分けられたようだが、実際は、他の成分の音楽ジャンルと混合した嗜好も多かったと考えられる。各音楽ジャンルの相関係数を調べたところ、他の成分同士で有意な正の相関関係（相関係数が0.2以上）にあったのは、クラシック音楽と海外のポップス(.215)、クラシック音楽とジャズ・ブルース(.232)、クラシック音楽と映画音楽(.249)、歌謡曲とフォークソング(.275)、歌謡曲とグループサウンズ(.382)、演歌とグループサウンズ(.217)であった。青年期にクラシック音楽を好んだ団塊世代は、海外のポップス系も好む傾向がみられた。歌謡曲とフォークソング、グループサウンズにはきちんとした線引きがないため音楽的には親近性のあるジャンルではある。フォークソングやグループサウンズはこの主成分分析では軽音楽系であるが、歌謡曲や演歌のような大衆音楽性も持ち合わせている音楽ジャンルと考えられる。団塊世代が青年期に好んだ音楽は雑食的ではあったが、正統音楽と大衆音楽の両方を同じように好むという層はあまり多くなかったと思われる。

表 11 青年期に好きだった音楽の主成分分析（インターネット調査 2013）

	成分		
	1	2	3
海外のポップス	.754		
ビートルズ	.715		
ロック	.601		-.511
ジャズ・ブルース	.587		
グループサウンズ	.547		
フォークソング	.539		
映画音楽	.535		
歌謡曲		.710	
演歌		.688	
クラシック音楽			.680

因子抽出法：主成分分析

※数値は0.5以上のみ表示

次に、これらの音楽ジャンルへの嗜好が、どのような基本属性や音楽環境と関連していたのか分析していく。

表 12 団塊世代が「青年期に好きだった音楽」へのロジスティック回帰分析(インターネット調査 2013)

従属変数	クラシック音楽	歌謡曲	演歌	グループサウンドズ	フォークソング	海外のポップス	ジャズ・ブルース	ビートルズ	ロック	映画音楽
性別	.805	1.215	2.545**	1.300	1.356	.911	1.971*	1.457	1.709 ⁺	.863
教育年数(本人)	.815**	1.090	1.203**	1.144 ⁺	.879	.897	.970	.928	1.002	.864 ⁺
教育年数(父親)	.983	1.013	.967	.973	.997	.997	.964	1.014	.975	1.032
教育年数(母親)	1.025	.982	1.109 ⁺	.988	1.137 ⁺	.920	.963	.964	.964	.975
15歳頃の居住地規模	1.232	.773	.667**	.884	1.260	.977	1.233	.994	1.000	.938
15歳頃の世帯収入レベル	.911	.910	.984	1.002	1.012	.903	1.089	1.000	.923	.758
子供の頃:										
父親の音楽聴取頻度	1.384*	1.056	1.043	.997	1.473 ⁺	1.197	1.096	1.074	1.042	1.085
母親の音楽聴取頻度	.836	1.066	1.125	1.072	1.055	1.065	1.070	1.014	1.197	1.157
小中学生の頃:										
音楽の授業が好きだった	2.749***	1.420 ⁺	1.045	1.271	1.521 ⁺	1.650*	1.097	1.298	.979	1.283
楽器演奏・歌が得意だった	.960	.814	.870	.967	.733	1.027	1.299	1.103	1.327	1.359
子供の頃音楽の習い事の有無	1.268	.614	.566 ⁺	.953	1.261	.463*	.695	.741	.875	.800
子供の頃の音楽聴取方法										
ラジオ	1.101	1.269	1.102	1.424*	1.461 ⁺	1.350 ⁺	1.127	1.627**	1.440*	1.370 ⁺
テレビ	.728*	1.368*	1.218	1.137	.991	1.047	.968	1.131	1.143	.922
レコード	1.393 ⁺	.949	.747 ⁺	1.066	.830	1.567**	.984	.973	1.080	1.125
コンサート	1.158	.997	1.161	1.108	1.327	.993	1.404*	1.463*	1.042	.671 ⁺
映画館	.935	.896	.914	.795	1.000	1.299	1.476*	1.089	1.218	1.923**
定数	.461	.132	.180	.020	.006	.424	.114	.059	.215	.245
N	373	373	373	373	373	373	373	373	373	373
X ²	86.438***	26.605*	54.673***	18.385	28.104*	69.230***	59.964***	45.513***	40.589**	40.472**
Nagelkerke R ²	.276	.099	.187	.071	.126	.236	.200	.161	.141	.169

(注1) *** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, ⁺ $p < 0.10$ (注2) 数値はオッズ比

(注3) 性別のオッズ比が1.0より大きい場合は男性、小さい場合は女性である。

教育年数(本人・父親・母親)のオッズ比が1.0より大きい場合は負、小さい場合は正の関連である。

青年期に好きだった音楽 10 種類を従属変数とし、その頃の基本属性や子供の頃の音楽環境を独立変数として、より精度の高い二項ロジスティック回帰分析を行った（表 12）。基本属性として、青年期後半（20 代後半）にはすでに本人の教育年数がほぼ確定していたと考えられるので独立変数に投入した。他は、性別（ダミー）、教育年数（父と母）、15 歳頃の居住地規模、15 歳頃の世帯収入レベル、子供の頃の父母の音楽聴取頻度、小中学生の頃「音楽の授業が好きだったか」「歌や楽器演奏が得意だったか」、子供の頃の音楽の習い事の有無、子供の頃の音楽聴取方法（ラジオ、テレビ、レコード、コンサート、映画館）の変数を投入した。

表 12 のロジスティック回帰分析一覧の数値はオッズ比である。この分析は重回帰分析に比べると有意確率が厳しく出る傾向にある。そのため、P 値の***は 0.1%未満、**は 1%未満、*は 5%未満、+は 10%未満で有意とした。なお、教育年数については、教育年数が短い（学歴が低い）データから並んでいるため、従属変数（「好きだった」=0、「好きではなかった」=1）と教育年数の長い（学歴が高い）方が正の相関の場合、オッズ比が 1.0 より小さい値で出ること踏まえて考察していく。

表 12 より、青年期に好きだった音楽ジャンルへの二項ロジスティック回帰分析の結果、カイ 2 乗 (χ^2) が有意でなかったのは、グループサウンズであった。ゆえに、グループサウンズの分析結果は参照にとどめ、考察には入れないこととする。

まず、表 11 の第 1 主成分である、フォークソング、海外のポップス、ジャズ・ブルース、ビートルズ、ロック、映画音楽については、ジャズ・ブルースとロックが男性に好まれ、映画音楽のみ本人の教育年数が長いほど好む傾向がみられた。フォークソングに関しては子供の頃の父親の音楽聴取頻度と、フォークソングと海外のポップスは学校の音楽の授業と正の関連がみられた。特に、海外のポップスは、音楽の習い事をしていないが音楽の授業が好きでレコードをよく聴いていた層が好むという、やや学校教育順応型の音楽ジャンルであった。また、この第 1 主成分の音楽ジャンルを好む層は、ジャズ・ブルースを除いて子供の頃ラジオをよく聴いていた。海外のポップスはレコードと関連している。さらに、ジャズ・ブルースやビートルズ好きはコンサートによく行き、ジャズ・ブルースと映画音楽好きは映画館でよく聴いたという結果になり、これらは外出型の音楽鑑賞に関連した音楽ジャンルであるといえる。第 1 主成分の軽音楽は、多くが斬新なメロディやハーモニー、リズムで構成され、エレキギターなどが使用され、ファッションも奇抜なことから、大人への反発とともに、新しさやカッコよさを求める若者から大きく支持されていったと考える。

第 2 主成分の歌謡曲を好む団塊世代は、学校の音楽の授業を好み、テレビでよく音楽を聴いていたといえる。演歌を好むのは男性が多く、本人と母親の教育年数が短く、15 歳頃の居住地規模が小さく、音楽の習い事をしていなくてレコードも聴いていなかったといえる。演歌には負の関連要因が他のジャンルに比べて多い。そして、第 2 主

成分の歌謡曲と演歌をみると、全く関連が異なっている。同じ大衆音楽のくくりではあるが、歌謡曲は偏りが少なく誰にでも好まれる音楽ジャンルといえるのではないか。ちなみに、「歌謡曲と演歌の両方が好きだった」という層を調べたところ 175 人存在し、その関連要因は、「性別」(2.093^{**})「教育年数」(1.161^{*})「15 歳頃の居住地規模」(.740^{*})「子供の頃の音楽の習い事の有無」(.579⁺)であり、演歌の影響をより強く受けていた。

第 3 主成分であるクラシック音楽についてみると、「教育年数(本人)」と「子供の頃の父親の音楽聴取頻度」「小中学生の頃音楽の授業が好きだった」と「子供の頃の音楽聴取方法：レコード」に正の関連があり、「子供の頃の音楽聴取方法：テレビ」に負の関連がみられた。青年期にクラシック音楽を好んだ団塊世代は、本人の教育年数が長く、子供の頃の父親の音楽聴取頻度が多く、テレビはあまり見なくてレコードをよく聴いていて、学校の音楽の授業が好きだったといえる。特に本人の教育年数と音楽の授業について効果がみられた。このことから、当時クラシック音楽は、学校教育に順応した音楽ジャンルであったと考えられる。

以上の結果から、クラシック音楽と歌謡曲・演歌を好む層では、大きく異なることが見出された。特に、クラシック音楽は父親の関心が高かったことと学校教育に順応した正統的な音楽ジャンルであり、歌謡曲や演歌は、地方で本人や母親の教育年数が短く、音楽の習い事の経験が少なく、レコードよりテレビをよく見聴きしていた大衆的な一般庶民が好む音楽ジャンルであったことがわかる。ちなみに、「クラシック音楽と演歌の両方が好きだった」という層を調査したところ 73 人存在し、関連要因は①「教育年数(母親)」(1.149⁺)②「子供の頃の父親の音楽聴取頻度」(1.633^{*})③「音楽の授業が好きだった」(2.130^{**})④「楽器演奏・歌が得意だった」(.579^{*})であった。これは、クラシック音楽の関連要因②③と演歌の要因①の両方の要因がミックスした結果となった。

3. 「青年期に好きだった音楽」と「父母が好きだった音楽」との相関

次に、父母の好きだった音楽と団塊世代の青年期に好きだった音楽との偏相関関係をみていく(表13)。

表13は、他の変数の影響を除いてみる必要があるため、性別、教育年数(本人・父親・母親)、15歳頃の居住地規模、15歳頃の世帯収入レベルを制御変数とした。

表 13 青年期に好きだった音楽と父母が好んだ音楽との偏相関係数表(インターネット調査 2013)

		青年期に好きだった音楽									
		クラシッ ク音楽	歌謡曲	演 歌	フォーク ソング	グループ サウンズ	海外の ポップス	ジャズ・ ブルース	ビートル ズ	ロック	映画音楽
df=365											
父が 好き だった 音楽	クラシック音楽	.186***	-.073	-.020	.080	.010	.131*	.078	.032	.008	.001
	唱歌・童謡	.090	.008	.015	.058	.105*	.078	.112*	.143**	.076	.104*
	民謡・邦楽	.043	.018	.067	.053	.052	.104*	.067	.094	.063	.049
	歌謡曲	.078	.081	.059	.136**	.105*	.142**	.090	.148**	.078	.085
	演 歌	-.021	.178**	.139**	.139**	.126*	.062	.072	.112*	.085	.007
	軍 歌	-.015	.167**	.065	.107*	.100	.006	.051	-.012	.006	.043
	ポピュラー音楽	.027	.029	.024	.086	.027	.020	.007	-.008	.016	.072
	フォークソング	.041	-.145**	-.077	.036	-.088	.067	.102	-.001	.053	.047
	ジャズ	.053	-.016	.003	-.045	.056	.087	.097	.016	.119*	.059
	映画音楽	.076	-.033	-.067	.061	-.044	.134*	.086	.016	.095	.086
母が 好き だった 音楽	クラシック音楽	.183***	-.067	-.040	-.052	-.043	.146**	.079	.037	.113*	.090
	唱歌・童謡	.144**	.044	.005	.126*	.066	.151**	.124*	.140**	.041	.146**
	民謡・邦楽	.024	.051	.064	.129*	.106*	.108*	.129*	.106*	.002	.132*
	歌謡曲	.005	.075	.113*	.201***	.126*	.136**	.118*	.145**	.049	.088
	演 歌	-.104*	.152**	.122*	.108*	.143**	.040	.028	.060	.063	.030
	軍 歌	.054	-.046	-.020	.042	-.123*	-.036	-.037	-.089	-.022	-.014
	ポピュラー音楽	.069	.025	-.073	-.003	.082	.084	.065	.084	.183***	.062
	フォークソング	.111*	.030	-.020	-.016	.017	.020	.085	.077	.151**	-.009
	ジャズ	.004	.049	.040	-.074	.052	.045	.094	.045	.100	.025
	映画音楽	.028	.086	-.040	.021	.019	.128*	.090	-.020	.094	.053

※偏相関係数の *** は0.1% 水準、** は1% 水準、* は5% 水準で有意 (両側)

※制御変数：性別、教育年数 (本人・父親・母親)、15歳頃の居住地規模、15歳頃の世帯収入レベル

※「父(母)の好きだった音楽：ロック」に関しては、回答者が0人だったため相関関係が成立しなかった。

表13より、父母がともにクラシック音楽を好んだ団塊世代は、青年期にクラシック音楽と海外のポップスを好んだといえる。ここから、6-(4)-2で前述したようなクラシック音楽と海外のポップスの親近性が、父母の影響も一因であることがわかる。第2主成分である歌謡曲と演歌は、父母ともにやはり演歌を好んでいた。そして、第1主成

分である軽音楽系は、父母ともに多くが唱歌・童謡と歌謡曲と正の相関関係にあった。民謡・邦楽は、母親のみと正の相関関係にあった。第1主成分の中で、フォークソングとグループサウンズは父母ともに演歌と正の相関がみとめられた。この父母の影響は、6-(4)-2で述べたように、フォークソングとグループサウンズが第2主成分の歌謡曲・演歌と親近性があることの一因であると考えられる。また、ロックについては、母親のみに相関がみられた。クラシック音楽やポピュラー音楽やフォークソングを好む母親は当時では珍しかったと考えられる。その母親の子供がロックを好むようになるのは、進歩的な母親の影響であろうか。全体的に、青年期の軽音楽系の嗜好が、父母の日本的・大衆的な音楽嗜好と大きく相関していることがわかった。しかし、このような全く異種の音楽ジャンルが親子で伝承されることは珍しいので、この背景には親だけでなく、ポップスが流行したという社会的背景が大きく影響していたのではないかと推測する。ただし、クラシック音楽と、歌謡曲・演歌については、この分析でみる限り、社会背景の影響よりも父母の影響の方が強いのではないかと考えられる。

4. 団塊世代の世代観・ノスタルジアと青年期に好きだった音楽の関係

インターネット調査2013では、「団塊世代についてどう思うか」という質問を10種類行った。その中で、青年期に関わる質問項目として、「競争が激しかった」「学生運動に関心があった」「ビートルズ世代だと思う」がある。選択肢は、「非常にそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4点尺度である。また、「あなたはどの時期の音楽にノスタルジーを感じるか」という質問に対し、82.6%が青年期に流行した音楽だと回答した。ここでは、この3つの世代観とノスタルジアが、青年期に好きだった音楽ジャンルとどのような相関関係にあるのかを調べる。この場合、他の変数の影響を考慮し、性別、教育年数（本人・父親・母親）、15歳頃の居住地規模、15歳頃の世帯収入レベルを制御変数として、団塊世代の世代観と青年期に好きだった音楽との偏相関係数を表14に示す。

表14より、「団塊世代は競争が激しかった」と回答した人は、青年期にクラシック音楽、演歌、フォークソング、ビートルズの音楽嗜好と正の相関関係にあった。「学生運動に関心があった」は、クラシック音楽、フォークソング、海外のポップス、ジャズ・ブルース、ビートルズ、ロックへの嗜好と正の相関関係がみられた。また、「ビートルズ世代だと思う」は、フォークソング、グループサウンズ、海外のポップス、ジャズ・ブルース、ビートルズ、ロックへの嗜好と正の相関関係にあった。特に、青年期にビートルズやロック、海外のポップスを好んだ層は偏相関係数も高かった。

表14 団塊世代のイメージと青年期に好きだった音楽の偏相関係数表(インターネット調査2013)

団塊世代について	青年期に好きだった音楽									
	クラシック音楽	歌謡曲	演歌	フォークソング	グループサウンズ	海外のポップス	ジャズ・ブルース	ビートルズ	ロック	映画音楽
競争が激しかった	.112*	.077	.119*	.128*	.049	.089	.095	.137**	.074	.073
学生運動に興味があった	.125*	.033	-.020	.109*	.059	.167**	.171**	.162**	.138**	.099
ビートルズ世代だと思う	.026	.048	-.075	.119*	.216***	.302***	.210***	.449***	.356***	.098
青年期に流行した音楽にノスタルジアを感じる	-.063	.141**	-.052	.227***	.260***	.163**	.062	.194***	.103*	.080

※偏相関係数の *** は0.1% 水準、** は1% 水準、* は5% 水準で有意(両側)

※制御変数：性別、教育年数(本人・父親・母親)、15歳頃の居住地規模、15歳頃の世帯収入レベル

また、「競争が激しかった」と回答した団塊世代は「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると71.0%であり、受験戦争だけでなく、その後の人生において激しい競争をくぐり抜けてきたという意味合いも大きい。特に、青年期にクラシック音楽と演歌両方に正の相関がみられたということは、いろいろな層の団塊世代が「競争が激しかった」と感じてきたことの表れであると考えられる。「学生運動に関心があった」層は35.0%で、特に演歌を好まなかった層である。学生運動は大学生が主に関心をもっていたことから、6-(4)-2で述べたように、教育年数に関連しているクラシック音楽や海外のポップス系と相関したのだと考えられる。また、「ビートルズ世代だと思う」は69.6%で、やはり同じ第1主成分の軽音楽系に正の相関がみられた。クラシック音楽と全く相関していないのは、当時ビートルズは不良の音楽であったことから、学校教育とは相反するものだったからと考える。そして、演歌とは偏相関係数がマイナスであり、演歌を好んだ層はビートルズをあまり好まなかったといえる。

また、「青年期に流行した音楽にノスタルジアを感じる」と回答した82.6%の団塊世代は、歌謡曲、フォークソング、グループサウンズ、海外のポップス、ビートルズ、ロックへの嗜好と正の相関があり、特に、団塊世代の世代観の上位に挙げられているフォークソング、グループサウンズ、ビートルズを好んでいたことがわかった。これらは、団塊世代の代表的な青春の音楽であったといえる。

5. 青年期に好きだった音楽にみる階層性

以上6-(4)-2、(4)-3より、青年期にクラシック音楽を好んだ層は、本人の教育年数が長く、学校の音楽の授業、レコードをよく聴き、父親もよく音楽を聴いていたという結果になり、学校教育に順応し、音楽環境に恵まれた家庭に育った層であることが考察された。また、クラシック音楽と親近性の高かった海外のポップスも、レコードをよく聴き、学校の音楽の授業が好きだった層が好み、クラシック音楽と合わせてハイカルチャーな音楽嗜好が認められた。また、子供の頃両親がクラシック音楽を好んだ層は、青年期にクラシック音楽や海外のポップスを好んでおり、家庭での音楽環境がベースとなっていた。以上のことから、クラシック音楽と海外のポップス嗜好には、ハイカルチャーな両親から継承された階層性の高さをみることができる。

反対に、演歌を好んだ層は男性に多く、本人と母親の教育年数が短く、15歳の頃小規模な町村に住んでおり、子供の頃音楽の習い事はしていなくて、レコードもあまり聴かなかった傾向がみられた。また、子供の頃両親共に演歌を好んでおり、母親が歌謡曲好きだった以外は他のどの音楽ジャンルとも関連していない。また、演歌を好んだ層は、「学生運動に関心があった」と「ビートルズ世代だと思う」にも関連しておらず（偏相関係数は演歌のみマイナス）、団塊世代の代表的な世代観を青年期から持たずに生きてきた人が多いと考えられる。これらのことから、青年期に演歌を好んだ層は、大衆音楽を好む両親からの影響がみられ、クラシック音楽を好んだ層と比較すると階層性が低いと思われる。ただし、6-(4)-2で述べたように、「クラシック音楽と演歌の両方が好きだった」という層が73人存在し、クラシック音楽と演歌両方の関連要因がミックスした結果となっており、演歌のみを好む層と演歌も他の音楽ジャンルも好む層ではその階層性は異なってくると考えられる。

(5) 団塊世代の30～40代(1980～96年頃)

1. 時代背景

団塊世代の社会人としての30～40代(1980～96年頃)の主な社会背景をまとめた。

- 1982年 東北新幹線開業
- 1983年 インターネット開始、ファミリーコンピュータ発売、東京ディズニーランド開園
- 1985年 科学万博つくば開催、プラザ合意、日本航空ジャンボ機墜落
- 1986年 株価高騰(バブル期突入)、男女雇用機会均等法、ダイアナ妃来日
- 1988年 リクルート事件、瀬戸大橋・青函トンネル開通、東京ドーム完成
- 1989年 昭和天皇崩御、消費税実施
- 1990年 統一ドイツ誕生、株暴落
- 1991年 バブル崩壊、湾岸戦争、ソ連邦消滅、育児休業法成立
- 1993年 皇太子ご成婚
- 1995年 阪神大震災、地下鉄サリン事件、ウィンドウズ95発売
- 1997年 消費税5%に引き上げ、長野新幹線開業
- 1998年 長野冬季オリンピック開催、携帯電話世帯普及率50%を超える

音楽メディアの流れ

- 1982年 CD発売
- 1984年 CDプレーヤー本格的普及、第二次カラオケブーム(映像と歌詞が見られるモニター)
- 1987年 CDがレコードを追い抜く カセットも人気
- 1991年 CDが勢いを増す。90年代はCDの時代
- 1992年 レコード生産打ち切りへ
- 1993年 SONY MD発売、第三次カラオケブーム(通信カラオケとカラオケボックス)
- 1998年 カセットテープのシェア激減
- 1999年 インターネットによる音楽配信始まる

団塊世代の30～40代、1980～96年頃は、まさに日本経済が乱高下した時代であった。1973年の第一次オイルショック以降、それまでの高度経済成長期から経済の低成長に向かっていた。しかし、1986年に株価が暴騰し「バブル景気」に突入した。その頃、30代後半の団塊世代の多くの勤め人は中間管理職になり、仕事人間として社会に貢献していた。多くの日本人がバブルに踊らされたのもつかの間、1991年に膨れ上がった

バブルがはじけ崩壊した。そして多くの不良債権が残された。その後、日本経済は長い低迷の時代を迎えたのである。そして、その頃、情報の技術革新においてインターネットが普及しIT革命が起こっている。

1970年頃から団塊世代の結婚ラッシュとなり、1971年から団塊世代の女性が第1子を出産し始め、第二次ベビーブームが起こった。このベビーブームで生まれた子供を一般に団塊ジュニア世代と呼ぶ。しかし単純にはそう言えない場合もあるため、団塊世代の子供たちの生年については6-(5)-2で述べる。団塊世代の20代～40代前半（1970～96年頃）は子育ての時期でもあった。

音楽メディアは、1982年のCD発売以来、1990年代はCDの時代であった。反対に、レコードは衰退し、生産が打ち切りになった。また、カラオケに関して、1980年代前半に映像と歌詞を見ながら歌える第二次カラオケブームが起こり、1990年代前半には通信カラオケとカラオケボックスによる第三次カラオケブームが起こっている。そして、1995年頃にウィンドウズ95が発売され、携帯電話も普及し、本格的なIT革命が始まった。音楽にも1999年頃からインターネットによる音楽配信が始まり、CDを購入して聴く方法から、インターネットのダウンロードによる音楽聴取が取って代わりつつある。

2. 団塊世代の子育て期

1971～75年頃の第二次ベビーブームで生まれた子供たちを一般に団塊ジュニア世代と呼ぶ。本研究でも前例にならい世代分けではそのように定義している。しかし、1971年では団塊世代は20～24歳であり、女性はまだしも男性はまだ父親になる人は多くなかったと思われる。団塊世代の女性は、1970年頃から本格的に出産期に入ったが、団塊世代の男性には1973年から本格的に子供が生まれ始めた。三浦(2005)²⁴によると、団塊世代の子供の比率が高いのは1973～80年であり、全出生数1454万人のうち、父母のどちらかが団塊世代である子供は924万人、63.5%を占める。最も多いのは76年で、71.5%である。三浦は、第二次ベビーブームと団塊ジュニアを同義語として扱うマスコミやマーケティング業界に異議を唱え、この1973～80年生まれを「真性団塊ジュニア世代」と名付けている。筆者もこの三浦の説には納得している。さらに、本研究では、1947～51年生まれを団塊世代と定義しており、狭義の団塊世代である1947～49年生まれよりさらに幅広い出産期を考慮する必要がある。よって、本章での団塊世代の子供にあたる層は、1973～82年生まれを「真性団塊ジュニア世代」として分析する。6-(5)-2では、この真性団塊ジュニア世代が15歳の頃の世帯収入レベルや父母について、

JGSS-2008のデータにより分析する。この場合、父または母は団塊世代（1947~51年生まれ）に限定して行う。

はじめに、真性団塊ジュニア世代が15歳の頃の世帯収入レベルの分布を表15に示す。団塊世代を父と持つ真性団塊ジュニア世代の15歳頃（1988~97年頃）の世帯収入レベルは、「ほぼ平均」が53.7%、「平均より多い」「平均よりかなり多い」が合わせて26.4%であり、平均以上と感じていた真性団塊ジュニア世代は78.9%にもなった。2008年時点での振り返りではあるが、15歳頃の生活レベルはまあまあであったと感じていることがわかる。時代背景で見ると、1986~91年の日本はまさにバブル期であり、非常に景気が良かった時期と重なる。そのため、父親の収入も増えた時期であったことが、世帯収入レベルの意識を上げた要因ではないかと考える。その後、日本の経済は低迷していくのだが、バブルがはじけた1~2年間は、まだバブルの余韻に浸っていた時期かもしれない。

表15 真性団塊ジュニア世代：15歳頃の世帯収入レベル（父親は団塊世代に限定）JGSS-2008

		度数	%	有効%	累積%
有効	平均よりかなり多い	2	1.0	1.1	1.1
	平均より多い	46	23.8	24.2	25.3
	ほぼ平均	102	52.8	53.7	78.9
	平均より少ない	38	19.7	20.0	98.9
	平均よりかなり少ない	2	1.0	1.1	100.0
	合計	190	98.4	100.0	
欠損値	無回答	3	1.6		
合計		193	100.0		

次に、真性団塊ジュニア世代の「15歳の頃の世帯収入レベル」への関連要因について重回帰分析を行った。その結果、表16より、父親の教育年数が関連していた。父親の教育年数が長いほど15歳頃の世帯収入レベルは高かったといえる。父親（団塊世代）の教育年数の平均は、12.62年であった。ちなみに、母親（団塊世代）の教育年数の平均は12.20年であった。

**表 16 真性団塊ジュニア世代「15歳頃の世帯収入レベル」への
重回帰分析（JGSS-2008）（父親は団塊世代に限定）**

従属変数：15歳頃の世帯収入レベル	
性別	-.014
15歳頃の居住地規模	.027
教育年数（父親）	-.208 *
教育年数（母親）	-.110
<hr/>	
N	169
<hr/>	
調整済みR ²	.063 **

(注1) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(注2) 数値は標準化係数 β

性別の標準化係数 β は、-が女性、+が男性である。

教育年数(父親・母親)の標準化係数 β は、-が正の関連、+が負の関連である。

真性団塊ジュニア世代が15歳頃の父の職種で上位6位までを以下に示す。父親を団塊世代に限定したため192人と少ないが、事務員や外交員といったホワイトカラーの職種が上位にきている。団塊世代の父親は農業が1位であったのに対し、その子世代の団塊世代はホワイトカラーが必要とされる時代となったといえる。

○真性団塊ジュニア世代が15歳の頃の父の職種(父親は団塊世代に限定)(JGSS-2008)

192人中 上位6位まで

1、総務・企画事務員	20人	10.4%
2、外交員（保険・不動産は除く）	13人	6.8%
3、自動車運転者	11人	5.7%
4、道路工夫・土工	7人	3.6%
5、農耕・養蚕作業者	6人	3.1%
6、自動車組立工・整備工・建設作業者・大工	5人	2.6%

次に、真性団塊ジュニア世代の15歳頃の父親の就労形態や役職、企業規模を以下に示す。

表17 真性団塊ジュニア世代：15歳頃の父の就労形態(父親は団塊世代に限定)(JGSS-2008)

	度数	%	有効%	累積%
経営者・役員	7	3.6	3.6	3.6
常時雇用の一般従業者	136	70.5	70.5	74.1
有効 臨時雇用(パート・アルバイト・内職)	1	.5	.5	74.6
自営業主・自由業者	46	23.8	23.8	98.4
家族従業者	2	1.0	1.0	99.5
父はいなかった	1	.5	.5	100.0
合計	193	100.0	100.0	

表18 真性団塊ジュニア世代：15歳頃の父の企業規模(父親は団塊世代に限定)(JGSS-2008)

	度数	%	有効%	累積%
1人	20	10.4	10.4	10.4
小企業(2~29人)	45	23.3	23.4	33.9
中企業(30~299人)	30	15.5	15.6	49.5
大企業(300~999人)	13	6.7	6.8	56.3
有効 大手大企業(1,000人以上)	23	11.9	12.0	68.2
官公庁	27	14.0	14.1	82.3
わからない	33	17.1	17.2	99.5
無回答	1	.5	.5	100.0
合計	192	99.5	100.0	
欠損値 非該当	1	.5		
合計	193	100.0		

表19 真性団塊ジュニア世代：15歳頃の父の役職(父親は団塊世代に限定)(JGSS-2008)

	度数	%	有効%	累積%
役職なし	39	20.2	28.7	28.7
職長・班長・組長など	6	3.1	4.4	33.1
係長(係長相当)	12	6.2	8.8	41.9
課長(課長相当)	19	9.8	14.0	55.9
有効 部長(部長相当)	9	4.7	6.6	62.5
わからない	48	24.9	35.3	97.8
無回答	3	1.6	2.2	100.0
合計	136	70.5	100.0	
欠損値 非該当	57	29.5		
合計	193	100.0		

表17より、この頃父親となった団塊世代は、常時雇用の一般従業者が70.5%で、自営業主・自由業者の23.8%を加えると、この二つで94.3%になる。バブル期には働き口に困ることはなかったと思われる。企業規模は、中小企業で39.0%、大企業は18.8%、官公庁は14.1%という分布になっている(表18)。この頃、役職についていた父親は、この調査のわかる範囲で33.8%であり、多くが中間管理職になっていた(表19)。彼らはバブル景気とともに、仕事人間となり、日本の経済を牽引していった。特に、1970年代から様々な業界でコンピュータが導入され始め、この大規模なシステム構築に携わったのは、当時働き盛りの団塊世代であった。まさにコンピュータ時代を推進してきた立役者でもあったのである²⁵。

一方、真性団塊ジュニア世代が15歳頃の母親の就労状況は、表20より、無職が24.9%で、このほとんどが専業主婦であったと思われる。また、臨時雇用は30.1%と多く、常時雇用が17.1%、自営業は10.4%と続く。母親の71.5%は何らかの仕事に就いていたという結果になった。

表20 真性団塊ジュニア世代：15歳頃の母の就労状況(母親は団塊世代に限定)(JGSS-2008)

	度数	%	有効%	累積%
仕事はもっていなかった	48	24.9	24.9	24.9
臨時雇用・パート・アルバイト	58	30.1	30.1	54.9
常時雇用：一般職・役職なし	33	17.1	17.1	72.0
常時雇用：専門的な仕事	12	6.2	6.2	78.2
常時雇用：仕事内容はわからない	1	.5	.5	78.8
有効 自営業・家族従業者：農林漁業	20	10.4	10.4	89.1
自営業・家族従業者：農林漁業以外	11	5.7	5.7	94.8
内職	3	1.6	1.6	96.4
母はいなかった	4	2.1	2.1	98.4
わからない	3	1.6	1.6	100.0
合計	193	100.0	100.0	

では、真性団塊ジュニア世代が15歳頃の父母のしつけはどのようなものだったのか。

表21 真性団塊ジュニア世代：15歳頃の父親のしつけ(父親は団塊世代限定)(JGSS-2008)

	度数	%	有効%	累積%
厳しく、一方的にしかることが多かった	24	12.4	12.6	12.6
厳しかったが、あなたの意見も聞き入れてくれた	122	63.2	63.9	76.4
有効 やさしく、何でもいうことを聞いてくれた	32	16.6	16.8	93.2
あなたに無関心だった	12	6.2	6.3	99.5
いなかった	1	.5	.5	100.0
合計	191	99.0	100.0	
欠損値 無回答	2	1.0		
合計	193	100.0		

表22 真性団塊ジュニア世代：15歳頃の母親のしつけ(母親は団塊世代限定)(JGSS-2008)

	度数	%	有効%	累積%
	13	5.2	5.2	5.2
	167	66.3	66.5	71.7
有効	64	25.4	25.5	97.2
	6	2.4	2.4	99.6
	1	.4	.4	100.0
合計	251	99.6	100.0	
欠損値 無回答	1	.4		
合計	252	100.0		

表21、22より、父母とも「厳しかったが、あなたの意見も聞き入れてくれた」が65%前後で最も多い。そして、厳しさでは父親が、何でもいうことを聞いてくれる優しさでは母親が勝っていた。この結果では「厳しかった」という評価が多いが、一般に団塊世代の子育ては、友達のような家族・親子という関係が築かれ、父親は威圧的でなく、自由な雰囲気の家が作られていったといわれる。

しかし、逆に言えば、「わが子を叱れない」「子供に迎合する」と評された子育ての結果として、いじめ、不登校、後のパラサイトシングル、フリーター、ひきこもりなどの増加を生み、「子育てに失敗した世代」ともいわれるようになっていった²⁶。

3. 団塊世代の子育て期における音楽との関連

6-(5)-2で、団塊世代の子育て期について、時代背景や家庭、特に父親としての社会的状況を中心に述べた。では、その子育ての中で音楽との関わりはどのようなであったか。インターネット調査2013のデータから、子育て期の音楽教育や音楽環境について、その関連をみていくこととする。

研究Ⅰのインタビュー調査において、「結婚して、子供に音楽教育をさせたり、家族で音楽を楽しんだ。」という団塊世代の語りがみられた。これをもとに、インターネット調査2013では、①「子供に音楽教育をさせたか」と②「結婚後、家族で音楽を楽しんだか」という質問をした。①の選択肢は、「かなりさせた」「周りの子と同じくらいさせた」「あまりさせない」「全くさせてない」「子供はいない」で、②は、

「非常に楽しんだ」「楽しんだ」「あまり楽しんでいない」「全く楽しんでいない」「子供はいない」であり、①②とも「子供はいない」を欠損値とした。確かに未婚や子供のいないの団塊世代も存在するが、この調査では、調査対象者の88.2%に配偶者がおり、子供がいることに適合する対象者が423人存在したので分析をすることとした。まず、①と②の分布を以下に示す。

表23 ①団塊世代の子供への音楽教育（インターネット調査2013）

	度数	%	有効%	累積%
かなりさせた	55	11.0	13.0	13.0
周りの子供と同じようにさせた	170	34.0	40.2	53.2
有効 あまりさせていない	84	16.8	19.9	73.0
全くさせていない	114	22.8	27.0	100.0
合計	423	84.6	100.0	
欠損値 子どもはいない	77	15.4		
合計	500	100.0		

表24 ②団塊世代：「結婚後、家族で音楽を楽しんだか」（インターネット調査2013）

	度数	%	有効%	累積%
非常に楽しんだ	22	4.4	5.2	5.2
楽しんだ	151	30.2	35.7	40.9
有効 あまり楽しんでいない	187	37.4	44.2	85.1
全く楽しんでいない	63	12.6	14.9	100.0
合計	423	84.6	100.0	
欠損値 子どもはいない	77	15.4		
合計	500	100.0		

表23より、子供への音楽教育は、「周りの子とおなじようにさせた」が40.2%と一番多く、「かなりさせた」と合わせると53.2%である。団塊世代自身、子供の頃の音楽の習い事は、24.4%が「した」と回答しており、その子供世代は2倍以上に増えたことになる。この頃は日本中に音楽教室（大手企業や個人教室）が開設されており、特に幼児期、小学校低学年時には皆が通う光景がみられた。

また、表24より、結婚後家族で音楽を楽しんだ家庭は、「非常に楽しんだ」「楽し

んだ」を合わせると40.9%であった。ニューファミリーを目指した多くの団塊世代は、家庭で音楽を楽しむスタイルを構築していったと考える。

以上二つの質問項目の分布を踏まえ、次にその関連要因を調べることにする。この①と②をそれぞれ従属変数として、インターネット調査2013の中から適切な変数を独立変数として投入して重回帰分析を行った。今回、独立変数に配偶者の教育年数を加えた。子育て期以降の離婚・死別を考慮すると正確さに欠けるが、子供への音楽教育や家族での音楽環境に配偶者の影響は必須なので、この分析において投入することとした。

表 25 より、①「子供への音楽教育」では、団塊世代自身が音楽の習い事をした経験があり、青年期にはクラシック音楽が好きだった層が、自分の子供たちにも音楽教育をよくさせていたという結果となった。6-(3)-3 で述べたように、子供の頃、音楽の習い事を「していた」団塊世代は24.4%（男性は12.8%、女性は36.0%）で、女性の方が多かった。習い事の内容としては、16.4%が「ピアノ・オルガン」で突出して多かった。また、「子供の頃の音楽の習い事の有無」と「青年期に好きだった音楽：クラシック音楽」の相関係数は0.202（1%水準で有意）であり、音楽の習い事をした団塊世代は、青年期にクラシック音楽を好んだといえる。そして、これらの層が、子育て期に自分の子供たちに音楽教育をよくさせたことがわかった。

また、②「結婚後、家族で音楽を楽しんだ」では、子供の頃の母親の音楽聴取頻度が多く、小中学生の頃音楽の授業が好きで、楽器や歌が得意で、青年期にはクラシック音楽が好きだった層が、結婚後の家庭で音楽をより楽しんだといえる。「母親の音楽聴取頻度」と「母親が好きだった音楽：クラシック音楽」は正の相関があり（0.287**）、また「母親の音楽聴取頻度」と「青年期に好きだった音楽：クラシック音楽」も正の相関（0.180**）がみられ、音楽をよく聴くクラシック音楽好きな母親に育てられ、学校の音楽教育にも順応し、青年期にクラシック音楽が好きになっていった層が、結婚後の家庭でも家族と音楽を楽しんだという結果となった。

以上①と②の結果から、団塊世代の子供への音楽教育や音楽環境づくりに共通してみられたのは、クラシック音楽との関連である。青年期にクラシック音楽を好んだ層は次世代にも音楽を継承させ、共に楽しみたいという願望があらわれた結果となった。一般的に、クラシック音楽という正統音楽は、階層性の高い音楽ジャンルである。そのクラシック音楽を好んだ親に影響され、学校の音楽教育に順応し、自らクラシック音楽を好きになっていき、さらには次世代に継承していこうとする層は、やはり階層性の高い層であると推測することができる。

表 25 団塊世代の子育て期の音楽教育・環境（重回帰分析：インターネット調査 2013）

従属変数：	①子供への音楽教育	②結婚後家族で音楽を楽しんだ
性別	.017	-.032
教育年数（本人）	-.024	-.021
教育年数（配偶者）	-.028	-.079
15歳頃の居住地規模	-.026	.018
15歳頃の世帯収入レベル	.045	-.040
子供の頃：		
父親の音楽聴取頻度	-.010	.0108
母親の音楽聴取頻度	.126	.133 *
音楽の習い事の有無	.127 *	.075
小中学生の頃：		
音楽の授業が好きだった	.030	.130 *
楽器や歌が得意だった	.091	.129 *
青年期に好きだった音楽：		
クラシック音楽	.153 **	.099 *
歌謡曲	-.011	.072
演歌	-.029	-.044
フォークソング	-.072	.019
グループサウンズ	.085	.058
海外のポップス	.004	.026
ジャズ・ブルース	-.021	.101*
ビートルズ	.014	-.023
ロック	.029	.070
映画音楽	.070	.054
N	392	392
調整済みR ²	.139 ***	.300 ***

(注1) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(注2) 数値は標準化係数 β

性別の標準化係数 β は、-が女性、+が男性である。

教育年数(本人・配偶者)の標準化係数 β は、-が正の関連、+が負の関連である。

※全ての独立変数の VIF 値は 2 未満であり、重大な多重共線性は生じていない。

(6) 団塊世代の50代半ば (JGSS-2003の分析)

1. 時代背景

- 2000年 介護保険制度スタート
- 2001年 米国同時多発テロ、家電リサイクル法施行、IT基本法制定
- 2002年 住民基本台帳ネットワーク稼働、完全学校週休五日制
- 2003年 日本郵政公社営業開始、アメリカ・イラク戦争、地上デジタル放送開始
- 2004年 インドネシアスマトラ島沖地震、鳥インフルエンザ発生、韓流ブーム
- 2005年 愛知万博開催

○音楽メディアの流れ²⁷

- 2000年 DVDの普及本格化、BSデジタル放送開始
- 2002年 CDのシェア95.7%でピークとなり、以後下がっていく。
- 2003年 映像の録画はDVD+R・HDDなどデジタルメディアが主役に。
携帯電話の音楽配信「着うた」拡大
- 2004年 iPodなどHDD携帯プレーヤーが大人気。
書き込み型DVDドライブは全規格対応が主流に。
- 2005年 iPod+iTunes Music Storeがオーディオ市場を席卷。
ビデオ・音楽鑑賞のプラットフォームとしてのパソコンが多数登場。

1995年頃から世界的にインターネットが普及し、情報・通信の主流になっていった。Windows95が発売され、パソコンが急激に普及し、さらにインターネットを利用した携帯電話もめざましく普及していった。それにつれて音楽聴取の方法もiPodなどの音楽配信が人気となった。2003年頃からは音楽メディアにおいてもまさにIT革命といえる時期であった。2003年前後に流行した歌手は、浜崎あゆみや宇多田ヒカル、Mr.Children、ORANGE RANGEなどであった。また、2003年に大ヒットした、SMAPの「世界に一つだけの花」は、どの世代にも共感し親しまれる歌であった。

2003年頃の団塊世代は50代半ばになり、会社などでは中心的存在として活躍していた。しかし、バブル崩壊後、景気の低迷で終身雇用の神話が崩れ、リストラや早期退職が進められるようになった。それまで会社人間として組織と共に突き進んできた団塊世代にとって、これは危機的状況であった。また、団塊世代の子供たちもすでに成人していたが、その頃から、団塊ジュニア世代のニートやフリーター、ひきこもりなどの増加という社会問題がクローズアップされてきている。

ここではJGSS-2003のデータを用い、この年の団塊世代の階層帰属意識とそれに伴う音楽聴取の関連を分析していく。

2. 2003年における団塊世代の階層帰属意識と就労状況

JGSS-2003には「階層帰属意識」の質問項目がある。「かりに現在の日本の社会全体を、以下の5つの層に分けるとすれば、あなた自身は、どれに入るとお考えですか。」という質問に、選択肢は「上」「中の上」「中の中」「中の下」「下」の5点尺度である。表にその分布を男女別に示す。

表26より、2003年時点で、団塊世代の階層帰属意識は、「中の上」以上の上流意識が11.4%、「中の中」の中流意識は47.4%でおよそ半数を占めていた。「中の下」以下の下流意識は41.1%であった。「中の中」以上を合わせると58.8%で、約6割が中流以上と感じていた。性別では、女性の方がやや階層帰属意識が高めであった。ちなみに世帯年収の平均値・中央値は650～750万円で、最頻値は850～1000万円である。この結果から、2003年時点では、団塊世代の生活レベルや階層帰属意識が比較的高かったといえるのではないかと。そこで、団塊世代の就労状況を分析し、表27に示す。

表26 階層帰属意識と性別のクロス表 (JGSS-2003)

		性別		全体	
		男	女		
階層帰属意識	上	度数	0	1	1
		性別の%	0.0%	0.4%	0.2%
	中の上	度数	18	27	45
		性別の%	11.0%	11.4%	11.2%
	中の中	度数	70	120	190
		性別の%	42.7%	50.6%	47.4%
	中の下	度数	62	76	138
		性別の%	37.8%	32.1%	34.4%
	下	度数	14	13	27
		性別の%	8.5%	5.5%	6.7%
全体	度数	164	237	401	
	性別の%	100.0%	100.0%	100.0%	

2003年の時点で団塊世代は50代前半～半ばであり、表27より、男性は94.5%、女性は76.7%が就労していた。男性はほとんどが就労し、この時期は仕事人間としてバリバリ働いていたことがわかる。また、女性の就労率が意外にも高いことがわかる。

表27 団塊世代の就労の有無と性別のクロス表（JGSS-2003）

		性別		全体	
		男	女		
就労の有無	有職者	度数	155	181	336
		性別の%	94.5%	76.7%	84.0%
	無職者	度数	9	55	64
		性別の%	5.5%	23.3%	16.0%
全 体		度数	164	236	400
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

次に、団塊世代男性の業種の上位を示す。

団塊世代男性の業種上位6位（JGSS-2003）

- 1、製造業 28.4%
- 2、サービス業（医療・教育など含む） 15.4%
- 3、運輸業 12.9%
- 4、建設業 9.0%
- 5、農業 7.1%
- 6、小売業 6.5%

製造業が一番多く、次いでサービス業であった。このサービス業の内訳は、情報・通信3.2%、医療・福祉1.9%、教育・研究1.3%、その他9.0%である。

次に、団塊世代男女の就労地位を表28に示す。団塊世代男性の就労地位は、役職なしや臨時雇用、自営業、わからないを除き、47.0%が何らかの役職に就いていたことになる。一番多いのは、課長級17.4%であった。団塊世代男性の多くが企業などの組織でリーダーとして活躍していたといえる。

表28

団塊世代の就労地位と性別のクロス表（JGSS-2003）

		性別		全体	
		男	女		
就 労 地 位	経営者・役員	度数	14	15	29
		性別の%	9.0%	8.3%	8.6%
	常時雇用の一般従事者：役職なし	度数	38	38	76
		性別の%	24.5%	21.0%	22.6%
	常時雇用の一般従事者：職長・班長・組長	度数	12	2	14
		性別の%	7.7%	1.1%	4.2%
	常時雇用の一般従事者：係長・係長相当職	度数	8	4	12
		性別の%	5.2%	2.2%	3.6%
	常時雇用の一般従事者：課長・課長相当職	度数	27	0	27
		性別の%	17.4%	0.0%	8.0%
	常時雇用の一般従事者：部長・部長相当職	度数	12	2	14
		性別の%	7.7%	1.1%	4.2%
	常時雇用の一般従事者：役職はわからない	度数	7	7	14
		性別の%	4.5%	3.9%	4.2%
	臨時雇用・パート・アルバイト	度数	4	67	71
		性別の%	2.6%	37.0%	21.1%
	派遣社員	度数	1	1	2
		性別の%	0.6%	0.6%	0.6%
	自営業主・自由業者	度数	30	20	50
		性別の%	19.4%	11.0%	14.9%
家族従業者	度数	0	17	17	
	性別の%	0.0%	9.4%	5.1%	
内職	度数	0	1	1	
	性別の%	0.0%	0.6%	0.3%	
わからない	度数	2	7	9	
	性別の%	1.3%	3.9%	2.7%	
全 体	度数	155	181	336	
	性別の%	100.0%	100.0%	100.0%	

団塊世代女性の就労では、常時雇用以外の臨時雇用や自営業、家族従業者などが有職者181人中58.7%も占める。常時雇用の役職についていたのは、経営者や役員を含めても全体の12.7%であった。職場において、多くの女性は男性の補佐役であり、家事と両立をさせながらの就労であったと思われる。しかし、家庭の主婦が働くことにより、2003年時の世帯年収の平均値・中央値が650～700万円で、最頻値は850～1000万円という高い収入を得ることが可能になり、階層帰属意識も高くなったと考えられる。

3. 2003年における団塊世代の階層帰属意識と音楽

以上、団塊世代の階層帰属意識や就業状況を踏まえた上で、彼らの音楽との関わりをみていく。JGSS-2003では、音楽に関する質問は「娯楽の頻度：音楽鑑賞」と「娯楽の頻度：カラオケ」のみである。

表29より、音楽鑑賞の頻度について、「よくする」と「時々する」を合わせると、男性は53.4%、女性は59.2%であり、団塊世代の半数以上が音楽鑑賞をしており、特に女性の方が男性より音楽をよく聴いていたといえる。

表29 団塊世代の「娯楽の頻度：音楽鑑賞」と性別のクロス表（JGSS-2003）

		性別		全体
		男	女	
よくする	度数	11	20	31
	性別の%	12.5%	16.7%	14.9%
時々する	度数	36	51	87
	性別の%	40.9%	42.5%	41.8%
あまりしない	度数	24	26	50
	性別の%	27.3%	21.7%	24.0%
全くしない／知らない	度数	17	23	40
	性別の%	19.3%	19.2%	19.2%
全 体	度数	88	120	208
	性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

また、表30より、カラオケの頻度について、「よくする」と「時々する」を合わせると、男性は23.3%、女性は24.1%であり、男女差はみられない。会社人間の男性は、付き合いでカラオケによく行くと普通は考えるのだが、意外にも少ないという結果となった。

表30 団塊世代の「娯楽の頻度：カラオケ」と性別のクロス表（JGSS-2003）

		性別		全体
		男	女	
よくする	度数	1	4	5
	性別の%	1.1%	3.3%	2.4%
時々する	度数	20	25	45
	性別の%	22.2%	20.8%	21.4%
娯楽の頻度：カラオケ あまりしない	度数	39	49	88
	性別の%	43.3%	40.8%	41.9%
全くしない／知らない	度数	29	42	71
	性別の%	32.2%	35.0%	33.8%
無回答	度数	1	0	1
	性別の%	1.1%	0.0%	0.5%
全 体	度数	90	120	210
	性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

以上のことを踏まえて、団塊世代の階層帰属意識は、基本属性や「娯楽の頻度：音楽鑑賞」「娯楽の頻度：カラオケ」とどのように関連しているのだろうか。階層帰属意識を従属変数として、これらの変数を独立変数とした重回帰分析を行うこととする。さらに、他世代との比較も試みる。

最初に、団塊世代の階層帰属意識への重回帰分析を試み、表31の独立変数に加え、配偶者や父母の教育年数も投入してみたが、全く有意ではなかったため、この分析では削除した。

表 31 世代別「階層帰属意識」への重回帰分析 (JGSS-2003)

従属変数： 階層帰属意識	昭和 一桁 世代	戦前・ 戦中 世代	団 塊 世 代	断 層 世 代	新 人 類 世 代	団 塊 ジ ュ ニ ア 世 代	断 層 ジ ュ ニ ア 世 代
性別	.069	-.102*	-.059	-.038	.004	-.069	-.030
教育年数 (本人)	-.127	-.251***	-.097	.058	-.136	.052	-.064
世帯年収	-.312***	-.276***	-.422***	-.470***	-.224**	-.315**	-.288**
居住地の市郡規模	.078	-.080	-.130	-.032	.033	.106	-.174
就労の有無	-.003	.015	-.034	.017	-.060	-.072	.228*
健康状態	.262***	.245***	.169*	.184**	.115	.200	.261*
15歳頃の居住地規模	-.064	.055	-.011	.030	.062	.112	.160
15歳頃の世帯収入レベル	.056	.014	.112	.158*	.160*	.398***	.382***
娯楽の頻度：音楽鑑賞	.067	.013	.073	.034	.036	.184	-.039
娯楽の頻度：カラオケ	.016	.096	.163*	-.164*	.066	-.118	-.044
N	167	327	137	193	181	71	76
調整済み R ²	.241***	.253***	.315***	.284***	.115**	.204**	.381***

(注1) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(注2) 数値は標準化係数 β

性別の標準化係数 β は、-が女性、+が男性である。

教育年数(本人)と世帯年収の標準化係数 β は、-が正の関連、+が負の関連である。

(注3) 各世代の生年と2003年時の年齢

昭和一桁世代(1927~34年)…69~76歳 戦前・戦中世代(1935~46年)…57~68歳、
 団塊世代(1947~51年)…52~56歳 断層世代(1952~60年)…43~51歳
 新人類世代(1961~70年)…33~42歳 団塊ジュニア世代(1971~75年)…28~32歳
 断層ジュニア世代(1976~85年)…18~27歳

※全ての独立変数のVIF値は2未満であり、重大な多重共線性は生じていない。

表31より、どの世代も、階層帰属意識に対し「世帯年収」が関連していた。特に、団塊世代と断層世代の標準化係数が大きく、このあたりの世代は、2003年時43~56歳頃であり、社会的に一番収入を得ていた世代である。また、「健康状態」が「昭和一桁

世代」から「断層世代」まで関連していた。43歳以上の中高年層は、健康状態が良好なほど階層帰属意識が高いという結果になり、中高年期の健康が階層帰属意識に与える影響が読み取れる。また、断層世代以降の世代では、「15歳頃の世帯収入レベル」が階層帰属意識に関連していた。若くなるほど強い関連になっていることから、未婚者が多くなるほど生まれ育った家庭の世帯収入レベルが階層帰属意識に直結しているのであろう。「娯楽の頻度：音楽鑑賞」については、どの世代においても階層帰属意識と関連しなかった。さらに、団塊世代において、階層帰属意識に対して「娯楽の頻度：カラオケ」に正の関連がみられた。カラオケをよくする層は階層帰属意識が高くなっており、これは団塊世代のみの特徴であった。反対に、断層世代はカラオケをあまりしない層の方が階層帰属意識が高いという結果になった。団塊世代と断層世代で全く逆の現象がみられたのはなぜだろうか。

2003年時に団塊世代でカラオケを「よくする」と「時々する」層は23.8%（表30）でそれほど多くはない。団塊世代において、カラオケの頻度と基本属性の相関をみたところ、「健康状態」のみに正の相関（.145*）がみられただけで他の変数と相関はなかった。就労・仕事関係にも相関はみられなかった。しかし、JGSS-2003の他の変数との相関をみたところ、「娯楽の頻度：カラオケ」は多くの娯楽と相関し、また生活満足度の「余暇利用=.146*」「家庭生活=.167*」「家計状態=.142*」「友人関係=.184**」と正の相関がみられた。また、「生活水準向上機会の有無」では.275**の相関があり、団塊世代のみカラオケを生活水準向上の機会と捉えていることがわかった。以上のような前向きな変数への相関から、団塊世代がカラオケを肯定的に捉えていたことがわかる。また、それに加え、カラオケは歌を通した自己表現の場であり、団塊世代は友人と楽しみながら、さらに自分にスポットライトがあたる場やツールとしてカラオケが好まれ、利用されたとも考えられる。

しかし、次の世代である断層世代は、「娯楽の頻度：カラオケ」が「生活満足度：余暇利用」のみにしか相関がみられなかった。断層世代は、別名「しらけ世代」とも呼ばれ、人数も団塊世代より少なく、学生運動後に成人期を迎えた層で、何事にも熱くなりきれず、どこか冷めた傍観者のような風潮が好まれた世代である。このしらけ世代が、カラオケに夢中になって自己表現する様子は描きにくく、カラオケをあまり好まなかった層の階層帰属意識が高いという結果もうなずける。

以上の分析結果から、2003年時には約6割の団塊世代が中流以上の階層意識をもっていた。そして、団塊世代の階層帰属意識は、教育年数に関連なく、世帯年収と健康状態に関連がみられた。バブルがはじけて経済が低迷していた時期であり、管理職に

なっていた団塊世代は多かったものの、終身雇用の神話が崩れ、リストラや早期退職の危機に直面していた。彼らにとって、定年退職まで頑張り抜き、収入を得ることが階層帰属意識に直結したと思われる。そして、50代となった団塊世代は、徐々に衰えてくる体力・体調に気がつき、健康であることの大切さを実感して、医療費や健康食品、ダイエット、フィットネスなどに時間やお金を消費し始めた。このような健康維持に関する意識・行動が階層帰属意識と結びついたのでと考えられる。そして、音楽との関連は、データが少ないため多くは語れないが、団塊世代の特徴として、カラオケをする層の階層帰属意識が高いことがわかった。ひとくくりにされがちな団塊世代の自己表現の場としてカラオケが使われ、「生活水準向上の機会」として捉えられているとすれば、階層帰属意識と関連することも肯ける。

(7) 団塊世代の退職期 (57~61歳) (JGSS-2008の分析)

1. 時代背景

- 2006年 高齢者雇用安定法施行、ライブドアショック
- 2007年 2007年問題、第1回東京マラソン開催、郵政民営化スタート、年金記録問題発覚
- 2008年 75歳以上対象の新医療制度スタート、リーマン・ショック
- 2009年 新型インフルエンザ感染拡大、民主党政権発足
- 2010年 口蹄疫問題、小惑星探査機「はやぶさ」帰還、中国漁船衝突事件

○音楽メディアの流れ²⁸

- 2005年 携帯電話での音楽ダウンロードや定額制音楽配信(subscription)と、技術の進歩によって音楽メディアは広がりを持つようになってきた。
- 2006年 CDシェアが79.7%。音楽配信による売上がシングルCDを越えた。
- 2007年 CDシェア70%に減る
- 2008年 パソコンや携帯電話の音楽配信が合わせて30.1%に伸びる
- 2009年 ダウンロードが成長すると共に、一度は死にかけていたLP/EPのシェアが2006年の0.1%から2009年には0.8%と伸びた。
- 2010年 CDのシェア49.1%に減る。パソコンと携帯電話のダウンロードは合わせて39.8%になった。LP/EPは1.3%へ成長。

2008年前後は、団塊世代の退職期にあたる。2007年から本格的に団塊世代の大量退職が始まるということで、その数年前から「2007年問題」が叫ばれていた。定年退職により、団塊世代が担ってきたITやその他の分野での技術や技能の継承が追いつかず、生産性の低下を招くのではないかと懸念された問題である。しかし、2007年に多くの団塊世代が定年退職したものの、そのまま引き続き正規雇用や非正規雇用での勤務の継続がみられた。そのため、大きな生産性の低下はみられず、その5年後の2012年にその問題は先延ばしされた形となった。

2008年9月15日には、サブプライムローン問題を発端として、アメリカの投資銀行であるリーマン・ブラザーズが破綻し、いわゆる「リーマン・ショック」が巻き起こった。これが引き金になり、世界的な金融危機にみまわれ、日本でも、日経平均株価が大暴落を起こした。このリーマン・ショックにより世界的な経済の冷え込みで消費も落ち込んだ。さらに、金融不安による急激な円高が進み、米国市場への依存度が強い

自動車などの輸出産業から大きな打撃が広がり、日本経済も大きく低迷していった。

また、2009年には新型インフルエンザウイルスによる世界的感染が起こり、日本でも連日の過熱した報道でパニック寸前の状況であった。そんな中、9月には政権交代が起こり、自民党から民主党に政権が移った。以上のように、2008年前後は、政治、経済、新型インフルエンザウイルスのパニックなど、日本中が振り回され、新政権への期待とともに、不安や危機感も抱いた時期であった。

2008年前後の音楽の流行としては、ジャニーズの嵐やKAT-TUN、そしてEXILEやGReeeeNなどの歌がヒットした。変わり種としては、2007年に秋川雅史の「千の風になって」、2009年には団塊世代の遅咲きの歌手、秋元順子の「愛のままで…」が人気となった。

音楽メディアにおいては、2008年前後はCDのシェアが70%以下になり、反対に、インターネットのダウンロードによる音楽配信が30%ほどに伸びてきていた。また、消滅寸前であったLPやEPが少しずつ注目されるようになった。これは、デジタルな音に飽きてきた音楽愛好家や昔の音へのノスタルジアを求める消費者のニーズが増えてきたと考えられる。

最後に、団塊世代を対象とした余暇活動の調査について見ておく。社会経済生産性本部「レジャー白書2006」に団塊世代の「趣味・創作部門」における余暇活動参加率が掲載されている。その上位7位までを男女別に表32に示す。

表 32 団塊世代の「趣味・創作部門」における余暇活動参加率 (2006)

順位	団塊男性 (n=127)	%	団塊女性 (n=121)	%
1	園芸・庭いじり	39.4	園芸・庭いじり	53.7
2	日曜大工	26.8	音楽会・コンサートなど	37.2
3	スポーツ観戦(テレビは除く)	22.0	美術鑑賞(テレビは除く)	24.0
4	音楽会・コンサートなど	17.3	観劇(テレビは除く)	23.1
5	写真の制作	15.7	編物・織物・手芸	17.4
6	美術鑑賞(テレビは除く)	11.8	洋裁・和裁	15.7
7	観劇(テレビは除く)	7.9	コーラス	7.4

社会経済生産性本部「レジャー白書 2006」より作成

表 32 は、余暇活動の「趣味・創作部門」における団塊世代の男女それぞれの種目順位と参加率を示した。参加率とは、ある余暇活動を 1 年間に 1 回以上行った人の割合

である。この調査では、2006年において、団塊世代の男女とも、30種目中、音楽会や美術鑑賞、観劇など、芸術・芸能の鑑賞が上位にきている。女性の場合コーラスもあり、音楽に関する趣味への参加は多かったといえる。

2. 団塊世代の「娯楽の頻度：音楽鑑賞」への関連要因（JGSS-2008の分析）

JGSS-2008には、JGSS-2003と同じく「娯楽の頻度：音楽鑑賞」の質問項目がある。その分布を男女別に表33に示す。

表33 団塊世代の「娯楽の頻度：音楽鑑賞」と性別のクロス表（JGSS-2008）

		性別		全体	
		男	女		
娯楽の頻度：音楽鑑賞	よくする	度数	28	43	71
		性別の%	11.3%	17.3%	14.3%
	時々する	度数	78	92	170
		性別の%	31.5%	36.9%	34.2%
	あまりしない	度数	76	57	133
		性別の%	30.6%	22.9%	26.8%
	まったくしない／知らない	度数	66	57	123
		性別の%	26.6%	22.9%	24.7%
	全 体	度数	248	249	497
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

表33より、音楽鑑賞を「よくする」と「時々する」を合わせると、男性が42.8%、女性が54.2%である。JGSS-2003に比べると、男性は10.6%、女性は5.0%減少している。2008年時点で何らかの職に就いている男性は87.4%、女性は56.1%である。2003年（男性有職者94.5%、女性有職者76.7%）に比べれば、有職者は減少している。全体的に時間の余裕ができた割合が多いにもかかわらず音楽鑑賞の頻度は減っている。この5年間で、音楽鑑賞をする団塊世代が減ったのは何故だろうか。加齢によるものか、社会的背景であろうか。加齢効果に関しては、JGSS-2008のデータから読み取ることは難しい。社会的背景として考えられるのは、6-(6)-1でも述べたように、2008年9月のリーマン・ショックである。この調査が2008年10月からであることから、リーマン・ショック直後の暗雲立ち込める日本経済の中で、報道にも危機感があり、音楽鑑賞をゆっ

くりと味わう雰囲気や余裕がなかったことが、調査結果にも表れたのではないだろうか。これは仮説ではあるが、社会状況が社会調査に与える影響は大きいと考えられる。

次に、団塊世代の音楽鑑賞頻度はどのような要因と関連しているのであろうか。「娯楽の頻度：音楽鑑賞」を従属変数とし、8つの基本属性を独立変数として重回帰分析を行った。さらに、いろいろな変数を投入して試してみたところ、父親の教育年数に関連し、他世代には見られない団塊世代の特徴がみられた。

表34より、2008年において、「娯楽の頻度：音楽鑑賞」は、「性別」「居住地の市郡規模」「教育年数（父親）」に関連がみられた。女性で大都市に住んでいて、父親の教育年数が長い団塊世代は、音楽鑑賞をよくするといえる。他世代と比較したところ、「居住地の市郡規模」「教育年数（父親）」に関連したのは団塊世代のみであった。JGSS-2003でも同じ独立変数を投入し重回帰分析を行ったが、調整済みR²乗が全く有意ではなく、モデルに説明力がないため関連要因を見出すことはできなかった。ゆえに、この結果はJGSS-2008にみられた結果である。この条件に当てはまる女性は47人ヒットした。これらの女性は、専業主婦が48.9%、臨時雇用15.6%、常時雇用20.0%であった。父親も本人も配偶者も学歴が平均教育年数より高く、健康状態は良好、15歳頃の世帯収入レベルは平均より上が78.7%であった。世帯年収はほぼ平均であるが階層帰属意識や生活満足度も高かった。好きな音楽は主にポピュラー音楽とクラシック音楽であった。当時57～61歳であるので、更年期を過ぎ、子供たちも自立し、健康で自由な時間を得た女性たちであった。また、15歳頃の世帯収入レベルが高かった層が多く、これは父親の学歴が高いことと相関し、そのような女性たちは音楽をよく聴いたといえる。特に大都市に居住している女性たちは、コンサートにもよく行ったのではないかと推測できる。2008年頃は女性のライフサイクルに音楽鑑賞がフィットした時期だったと言えるのではないか。

表34 世代別「娯楽の頻度：音楽鑑賞」への重回帰分析(JGSS-2008)

	昭和 一桁世代	戦前・ 戦中世代	団 塊 世代	断 層 世代	新 人 類 世代	団 塊 ジ ュ ニ ア 世代	断 層 ジ ュ ニ ア 世代
性別	-.013	-.098*	-.120*	-.114*	-.177***	-.002	-.073
教育年数(本人)	-.101	-.257***	-.077	-.040	-.013	-.020	-.156**
世帯年収	-.077	.013	-.021	-.006	-.051	.063	-.015
居住地の市郡規模	.116	-.056	.117*	.025	-.009	.027	-.049
就労の有無	-.140*	-.035	.062	-.008	.018	.008	.017
健康状態	.148*	.039	.087	.064	.007	-.023	-.024
15歳頃の居住地規模	-.007	.107**	-.055	.030	-.038	-.026	.136*
15歳頃の世帯収入レベル	-.056	-.029	.032	.066	-.005	-.003	.076
教育年数(父親)	-.076	-.050	-.235**	-.039	-.077	-.088	.017
教育年数(母親)	-.070	-.093	.117	-.062	-.041	.085	.066
N	266	629	341	525	540	296	384
調整済み R ²	.076**	.128***	.068***	.029**	.024*	-.024	.026*

従属変数 娯楽の頻度：音楽鑑賞

(注1) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(注2) 数値は標準化係数 β

性別の標準化係数 β は、-が女性、+が男性である。

教育年数(本人・父親・母親)と世帯年収の標準化係数 β は、-が正の関連、+が負の関連である。

(注3) 各世代の生年と2008年時の年齢

昭和一桁世代(1927~34年)・・・74~81歳

戦前・戦中世代(1935~46年)・・・62~73歳、

団塊世代(1947~51年)・・・57~61歳

断層世代(1952~60年)・・・48~56歳

新人類世代(1961~70年)・・・38~47歳

団塊ジュニア世代(1971~75年)・・・33~37歳

断層ジュニア世代(1976~85年)・・・23~32歳

※全ての独立変数のVIF値は2未満であり、重大な多重共線性は生じていない。

3. 団塊世代の「好きな音楽」への関連要因（JGSS-2008の分析）

JGSS-2008では、「好きな音楽」という質問項目において、「クラシック音楽」「ロック」「ジャズ・ブルース」「ポピュラー音楽」「演歌」の5種類のジャンルが挙げられ、選択肢は「非常に好き」「好き」「どちらともいえない」「嫌い」「非常に嫌い」の5点尺度である。この中で「非常に好き」「好き」を合わせた割合を男女別にまとめたものを以下に示す。

表 35 団塊世代が好きな音楽の男女別クロス表（JGSS-2008）

順位	音楽ジャンル	男（127人）%	女（139人）%	全体（266人）%
1	演歌	70.5	63.3	66.8
2	ポピュラー音楽	43.3	61.9	53.0
3	クラシック音楽	25.9	51.0	49.1
4	ジャズ・ブルース	23.0	34.8	29.2
5	ロック	10.3	18.7	14.7

※数値は「非常に好き」「好き」を合わせた割合

表 35 より、2008 年における団塊世代が好きな音楽は、1 位が演歌であった。特に男性の割合が高い。青年期の好きな音楽では、演歌が好きな層は 9 位で 37.2%であった(表 10)。この結果から、演歌は青年期以降に好きになった人が多い音楽ジャンルといえる。これは、加齢とともに好みが変わるとい理由と共に、社会での仕事やコミュニケーションのツールとしても演歌は必要であったからではないだろうか。他の音楽ジャンルでは女性が男性より高かった。特に、クラシック音楽は男性の約 2 倍も好きな層が存在した。これらの結果から、複数の音楽ジャンルが好きという層は多いと思われる。

次に、好きな音楽について、他世代と比較する。表36より、「クラシック音楽」や「ジャズ・ブルース」は世代による差はあまり大きくない。「ロック」や「ポピュラー音楽」は若い世代になるほど大きく増加している。特徴的なこととして、「演歌」が団塊世代を境に、急激に減少していることである。考えられる理由として、前述した加齢効果が考えられる。さらに、次の断層世代や新人類世代の親たちは、青春時代の1950～60年代に、海外からのポップスやロック、ジャズなどをラジオで夢中になって聴いた世代である。その親の影響を受けた断層世代は、子供の頃から自然とポピュラー音楽やロックに慣れ親しんだこともこの理由に挙げられるのではないか。反対に、団塊世代の親たちの多くは、時代的な理由もあり日本的な旋律や歌詞で構成された音楽を好んだ世代である。団塊世代はその親たちの日本的な音楽の影響を受けて育って

いる。このことから、団塊世代は演歌（日本的な音楽）を好む最後の世代といえるのではないか。これは、加齢効果以上に、団塊世代の世代効果とも考えられる。

表 36 世代別「好きな音楽」の割合（JGSS-2008）（％）

	昭和一桁 世代179人	戦前・戦中 世代464人	団塊世代 266人	断層世代 312人	新人類世代 351人	団塊ジュニア 世代175人	断層ジュニア 世代264人
クラシック音楽	35.8	44.2	49.1	42.3	42.7	43.4	42.8
ロック	5.6	11.5	14.7	21.2	31.6	45.1	49.8
ジャズ・ブルース	25.1	34.3	29.2	30.6	29.4	28.6	37.0
ポピュラー音楽	27.1	46.1	53.0	65.4	74.4	73.1	74.5
演 歌	69.9	74.9	66.8	34.7	15.7	12.0	9.8

※数字は、「非常に好き」と「好き」の合計の割合

また、「好きな音楽」と「娯楽の頻度：音楽鑑賞」との相関について調べてみると、「性別」と「教育年数(本人)」を制御変数とした偏相関係数は、「クラシック音楽」.246^{***}、「ロック」.182^{**}、「ジャズ・ブルース」.353^{***}、「ポピュラー音楽」.302^{***}、「演歌」-.169^{**}であった。つまり、音楽鑑賞をよくする層は、クラシック音楽、ロック、ジャズ・ブルース、ポピュラー音楽をよく聴くが、演歌を好む層はあまり音楽を聴かないという結果になった。2008年時点で演歌を好む団塊世代は多いが、演歌については好きではあるけど、わざわざ聴いたりはしないといえる。演歌は能動的に聴く音楽というよりは、カラオケや宴会でのコミュニケーションのためのツールという要素も大きいのではないだろうか。特に、日本の管理職男性の大衆文化志向は仕事上で必要であり、団塊世代にも男性にこのような傾向がみられた。管理職男性（課長級以上で高学歴）の60.0%が演歌好き（JGSS-2008）であり、これは他世代に比べ突出して多い割合だった。（断層世代は32.4%、新人類世代は18.2%、その他の世代は管理職が非常に少なく比較できなかった。）

次に、「好きな音楽」の関連要因を調べ、他世代と比較するために、各世代ごとに5種類の音楽ジャンルを従属変数として、8つの基本属性を独立変数として重回帰分析を行った。

表37より、全ての世代において、「クラシック音楽」は教育年数の長い層が関連していた。クラシック音楽のような正統的な音楽ジャンルは、学校教育現場で最も重視される音楽であり、どの世代も学歴と大きく関連しているであろう。

表37 世代別「好きな音楽」への重回帰分析の一覧表 (JGSS-2008)

世代区分	従属変数： 好きな音楽	独立変数						N	調整済 みR2乗
		性別	教育 年数	世帯 年収	居住地 の市郡 規模	就労の 有無	15歳頃 の居住 地規模		
昭和 一桁世代	クラシック音楽		-.259 **				.173 *	167	.140 ***
	ジャズ・ブルース				.164 *	-.202 *		167	.120 ***
	ポピュラー音楽		-.289 **					165	.160 ***
	演歌						-.187 *	173	.049 *
戦前・ 戦中世代	クラシック音楽	-.172 ***	-.346 ***			-.156 **	.128 **	445	.200 ***
	ジャズ・ブルース	-.107 *	-.168 **					442	.039 **
	ポピュラー音楽		-.331 ***					443	.131 ***
	演歌		.219 ***	.100 *			-.096 *	451	.078 ***
団塊 世代	クラシック音楽	-.204 **	-.250 ***					255	.135 ***
	ポピュラー音楽	-.160 *	-.211 **					255	.085 ***
	演歌		.186 **	.151 *	.157 *		-.239 ***	257	.129 ***
断層 世代	クラシック音楽	-.253 ***	-.244 ***					304	.102 ***
	ジャズ・ブルース		-.244 ***					302	.052 **
	ポピュラー音楽	-.132 *	-.163 *		.141 *			304	.037 *
	演歌	.248 ***	.145 *				-.153 *	303	.107 ***
新人類 世代	クラシック音楽	-.213 ***	-.207 ***					338	.076 ***
	ロック	.156 **						338	.025 *
	ジャズ・ブルース		-.306 ***					337	.073 ***
	ポピュラー音楽			-.160 **				338	.023 *
世代 ユニア 団塊シ	クラシック音楽		-.251 **			-.179 *		169	.100 **
	ジャズ・ブルース				.166**			169	.068 *
世代 ユニア 断層シ	クラシック音楽	-.275 ***	-.257 ***					255	.174 ***
	ポピュラー音楽	-.192 **					.151 *	255	.051 **

(注1) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(注2) 有意な関連があった独立変数のみ表示

(注3) 数値は標準化係数 β : 性別の標準化係数 β は、-が女性、+が男性である。

教育年数と世帯年収の標準化係数 β は、-が正の関連、+が負の関連である。

※全ての独立変数のVIF値は2未満であり、重大な多重共線性は生じていない。

さらに、表 37 の重回帰分析の結果をもとに、団塊世代の「好きな音楽」のパス解析を行い、図 11 のようなモデルを作成した。モデル適合度は、 $df=12$ 、 $\chi^2=15.240$ 、 $p=0.229$ 、 $CFI=0.987$ 、 $RMSEA=0.023$ で、当てはまりの良いモデルになった。

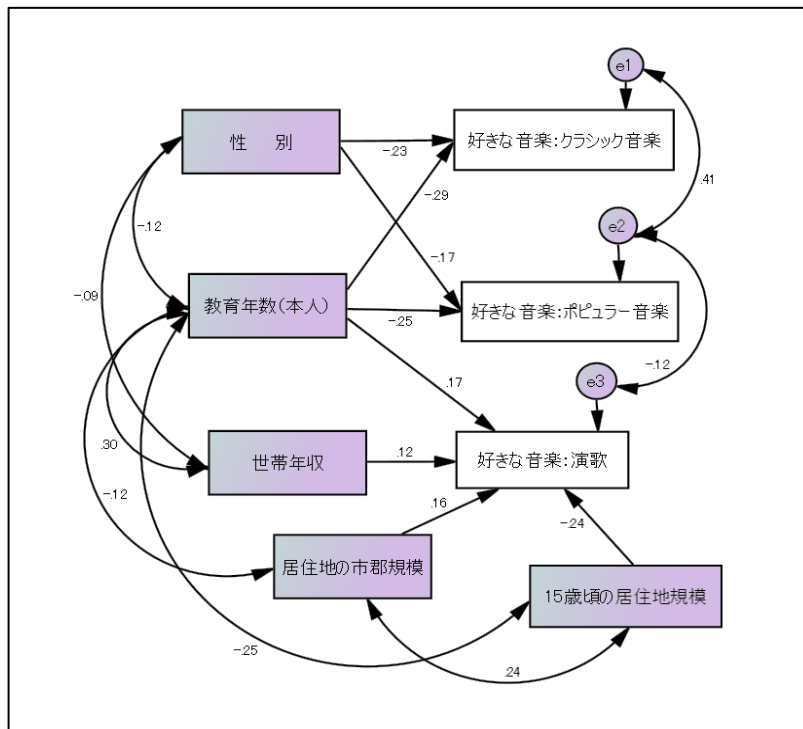


図 11 団塊世代の「好きな音楽」のパス解析 (JGSS-2008)

$n=255$ $df=12$ $\chi^2=15.240$ $p=0.229$ $CFI=0.987$ $RMSEA=0.023$

※数値は標準化推定値 (全ての数値が 5%水準で有意である)

性別の標準化推定値は、-が女性、+が男性である。教育年数(本人)と世帯年収の標準化推定値は、他の変数との関係において-は正の関連・相関、+は負の関連・相関である。

※関連(因果関係) \longrightarrow 相関 \longleftrightarrow

図 11 より、団塊世代の好きな音楽について、クラシック音楽とポピュラー音楽は、女性で教育年数が長い団塊世代がより好んでいる。これは、戦前・戦中世代にも同じようにみられた。演歌については、教育年数が短く、世帯年収も低く、15歳の頃は小規模な町村に住み、現在は大都市に住んでいる層がより好んでいる。「居住地の市郡規模」の関連は団塊世代のみの特徴であった。2008年時点で大都市に住んでいる団塊世代 97 人の中で、子供の頃地方に住んでいた層は 72.2% 存在し、この人たちは地方から大都市に移動し住みついた人たちである。この中に、いわゆる集団就職で都会に出てきた人たち(金の卵)も含まれているのではないかと推測できる。表 37 にみるように、団塊世代のみ大都市への移動が演歌の嗜好と関連したのは、世代効果といえるのではないかと推測できる。

4. 2008年における団塊世代の階層帰属意識と音楽

2008年の時点での団塊世代の階層帰属意識は、以下のようなものである。表38より、「中の上」以上の上流意識が13.3%、「中の中」の中流意識が42.1%、「中の下」以下の下流意識が44.6%であった。JGSS-2003と比較すると、上流意識が1.9%増え、中流意識が5.3%減り、下流意識が3.5%増えている。中流であると感じているのは女性の方が多い。

表38 団塊世代の階層帰属意識と性別のクロス表（JGSS-2008）

		性別		全体	
		男	女		
階層帰属意識	上	度数	2	0	2
		性別の%	0.8%	0.0%	0.4%
	中の上	度数	36	28	64
		性別の%	14.5%	11.2%	12.9%
	中の中	度数	95	114	209
		性別の%	38.3%	45.8%	42.1%
	中の下	度数	91	91	182
		性別の%	36.7%	36.5%	36.6%
	下	度数	24	16	40
		性別の%	9.7%	6.4%	8.0%
	全体	度数	248	249	497
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

表39 団塊世代の就労の有無と性別のクロス表（JGSS-2008）

		性別		全体	
		男	女		
就労の有無	有職者	度数	215	138	353
		性別の%	87.4%	56.1%	71.7%
	無職者	度数	31	108	139
		性別の%	12.6%	43.9%	28.3%
合計		度数	246	246	492
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

表 40 団塊世代の就労形態と性別のクロス表 (JGSS-2008)

		性別		全体
		男	女	
経営者・役員	度数	26	12	38
	性別の%	10.6%	4.9%	7.7%
常時雇用の一般従業者	度数	130	39	169
	性別の%	52.8%	15.9%	34.3%
臨時雇用 (パート・アルバイト・内職)	度数	11	57	68
	性別の%	4.5%	23.2%	13.8%
派遣社員	度数	3	3	6
	性別の%	1.2%	1.2%	1.2%
自営業主・自由業者	度数	45	11	56
	性別の%	18.3%	4.5%	11.4%
就労形態 家族従業者	度数	0	16	16
	性別の%	0.0%	6.5%	3.3%
主に家事をしている	度数	2	91	93
	性別の%	0.8%	37.0%	18.9%
定年などで仕事をやめた	度数	13	4	17
	性別の%	5.3%	1.6%	3.5%
失業中	度数	6	7	13
	性別の%	2.4%	2.8%	2.6%
身体上の事情で働けない	度数	7	5	12
	性別の%	2.8%	2.0%	2.4%
その他	度数	3	1	4
	性別の%	1.2%	0.4%	0.8%
全 体	度数	246	246	492
	性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

表39より、2008年時点では、男性の有職者が87.4%で、2003年の94.5%から7%ほど減っている。女性も2003年の76.7%から56.1%まで減った。男性は、主に2008年前後での定年退職で減ったと考えられる。表40でみると、2008年では、定年などで仕事を辞めた男性は5.3%で、52.8%の男性がまだ常時雇用の状態にあった。女性の場合は臨時雇用者が多く、2003年の37.0%から23.2%に下がっており、加齢に加え、景気低迷で臨時雇用の職が減ったという社会背景も大きいであろう。ちなみに、2008年時の世帯年収は、平均値が500～550万円、中央値が450～500万円、最頻値は450～550万円であった。2003年時の世帯年収（平均値と中央値650～750万円、最頻値850～1000万円）に比べると、かなり減少している。これは、定年退職や女性の有職者の減少に伴い、世帯の収入が減ったからと考えられる。

次に、2008年時の団塊世代の階層帰属意識に対して、その関連要因をみていく。まず、階層帰属意識を従属変数とし、8つの基本属性を独立変数とした。さらに、独立変数には、音楽に関する変数（「娯楽の頻度：音楽鑑賞」「娯楽の頻度：カラオケ」「好きな音楽：クラシック音楽、ロック、ジャズ・ブルース、ポピュラー音楽、演歌」）も加えた。この結果を他世代と比較したものを以下に示す。

表41より、団塊世代の階層帰属意識は、「教育年数（本人）」「世帯年収」「健康状態」「娯楽の頻度：音楽鑑賞」「好きな音楽：クラシック音楽」と正の関連がみられた。教育年数が長く、世帯年収が多く、健康状態が良好で、音楽をよく聴き、クラシック音楽を好む団塊世代は、階層帰属意識が高いという結果になった。他世代と比較すると、「娯楽の頻度：音楽鑑賞」については団塊世代のみ階層帰属意識と関連していた。

さらに、表41の結果をもとに、団塊世代の階層帰属意識へのモデルを作成しパス解析を行った。この場合、世代比較の一覧には入れなかったが「教育年数（配偶者）」の変数も階層帰属意識に関連していたためこれも加えた（配偶者のいる割合が少ない世代があるため表41の独立変数には含めなかった）。その結果、図12のように、モデル適合度は、df=4、カイ2乗=5.900、p値=0.207、CFI=0.995、RMSEA=0.031で、当てはまりの良いモデルとなった。

図12より、基本属性である「世帯年収」「教育年数（本人）」「教育年数（配偶者）」「健康状態」は、階層帰属意識に正の関連がみられ影響を及ぼしていた。標準化推定値をみると、特に「世帯年収」が-0.35で一番階層帰属意識と関連が強い。また、表41の重回帰分析で階層帰属意識に有意であった「好きな音楽：クラシック音楽」と「娯楽の頻度：音楽鑑賞」は、因果関係が確定できないため相関関係とした。「娯楽の頻度：音楽鑑賞」は階層帰属意識との標準化推定値が0.17で強い相関ではなかった。重回帰分析では、音楽鑑賞の頻度と階層帰属意識の関連は団塊世代のみの特徴であったが、このパス図の標準化推定値からは互いにそれほど大きな影響を及ぼしていないことがわかった。

表 41 世代別「階層帰属意識」への重回帰分析 (JGSS-2008)

従属変数：	昭和 一桁世代	戦前・ 戦中世代	団 塊 世 代	断 層 世 代	新 人 類 世 代	団 塊 ジ ュ ニ ア 世 代	断 層 ジ ュ ニ ア 世 代
性別	.003	.079	.084	-.023	.016	-.048	-.091
教育年数 (本人)	-.105	-.023	-.187 **	-.041	-.117 *	-.228 **	-.381 ***
世帯年収	-.356 ***	-.288 ***	-.409 ***	-.415***	-.422 ***	-.189 *	-.083
居住地の市郡規模	-.022	-.029	-.012	.101	-.053	-.054	.018
就労の有無	-.098	.014	-.091	-.118 *	-.107 *	.234 **	-.042
健康状態	.125	.103**	.157 **	.158 **	.026	.182 *	.091
15 歳頃の居住地規模	.144	-.063	-.013	.010	.038	.030	.022
15 歳頃の世帯収入レベル	.124	.239 ***	.025	.066	.117 *	.147	.050
娯楽の頻度：音楽鑑賞	.091	.041	.139 *	-.093	.081	-.038	.061
娯楽の頻度：カラオケ	.048	.112*	-.002	.053	-.005	.071	-.060
好きな音楽：							
クラシック音楽	.096	.144 *	.261 ***	-.022	.112 *	.033	.013
ロック	.037	-.073	.064	-.033	-.034	.067	-.033
ジャズ・ブルース	-.122	.037	-.106	.113	-.007	.045	-.002
ポピュラー音楽	-.048	-.006	-.086	-.086	-.094	-.063	-.070
演歌	.027	-.073	.080	-.084	.020	.134	-.041
N	163	426	250	293	330	169	251
調整済み R ²	.199 ***	.259 ***	.354 ***	.234 ***	.256 ***	.205 ***	.153 ***

(注 1) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(注 2) 数値は標準化係数 β : 性別の標準化係数 β は、- が女性、+ が男性である。

教育年数(本人)と世帯年収の標準化係数 β は、- が正の関連、+ が負の関連である。

(注 3) 各世代の生年と 2008 年時の年齢

昭和一桁世代(1927~34 年)…74~81 歳 戦前・戦中世代(1935~46 年)…62~73 歳、
 団塊世代(1947~51 年)…57~61 歳 断層世代(1952~60 年)…48~56 歳
 新人類世代(1961~70 年)…38~47 歳 団塊ジュニア世代(1971~75 年)…33~37 歳
 断層ジュニア世代(1976~85 年)…23~32 歳

※全ての独立変数のVIF値は2未満であり、重大な多重共線性は生じていない。

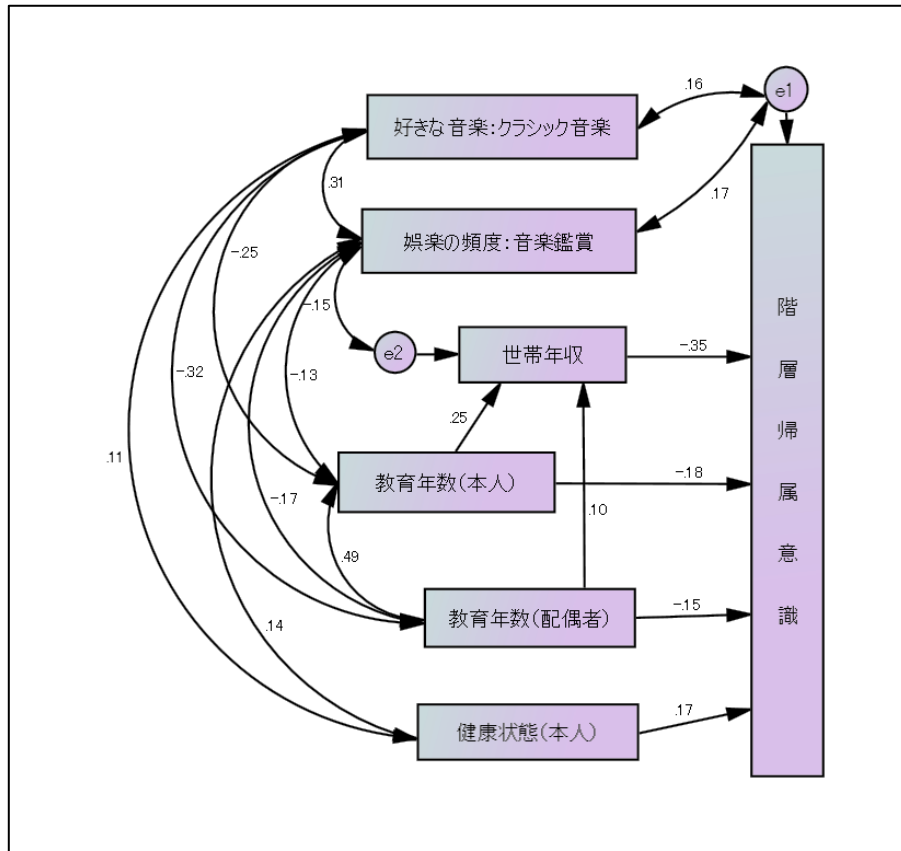


図12 団塊世代の階層帰属意識へのパス解析 (JGSS-2008)

n=250 df=4 $\chi^2=5.900$ p=.207 CFI=0.995 RMSEA=0.031

※数値は標準化推定値 (全ての数値が 5%水準で有意である)

教育年数(本人・配偶者)と世帯年収の標準化推定値は、他の変数との関係において
 -は正の関連・相関があり、+は負の関連・相関である。

※関連(因果関係) → 相関 ↔

JGSS-2008 における団塊世代の階層帰属意識について、JGSS-2003 と異なるのは「教育年数 (本人)」が関連したことである。団塊世代全体では「教育年数 (本人)」は階層帰属意識と関連がみられたが、男女別で重回帰分析をすると、男女とも「教育年数 (配偶者)」と関連がみられた。本人や配偶者の教育年数が長いほど世帯年収は高く、階層帰属意識も高いという結果が出ている。また、2003 年と同様、健康状態が良好なほど階層帰属意識も高いという結果になった。これは他世代にもみられる傾向である。また、そのような教育年数の長い層は、音楽をよく聴き、クラシック音楽を好む傾向にあり、階層帰属意識と相関したと考えられる。

(8) 団塊世代の高齢期への移行期 (62～66歳) (インターネット調査 2013 の分析)

1. 時代背景

2011年	東日本大震災、東京電力福島第一原発事故、九州新幹線開通
2012年	2012年問題、東京スカイツリー開業、 衆議院議員選挙自公圧勝、第2次安倍内閣発足
2013年(上半期)	アベノミクスによる経済効果で円安が加速 富士山が世界遺産に登録、参議院議員選挙で自民党が圧勝 2020年の東京オリンピック招致決定

○音楽メディア・聴取方法

- 2011年²⁹ 携帯電話新規販売台数の約半数がスマートフォンとなる。
エルダー層 (50～60代) の有料聴取 (音楽を聴くために音楽商品を購入したり、お金を支払ったりしたことがある) が大幅に減少し、50代で38%、60代で30%。CD購入率は34.9%、レンタル率は23.4%、有料音楽配信購入率は10.7%。
- 2012年³⁰ 日本のスマートフォン普及率は39.9%。「定額聴き放題」「クラウド型」の音楽配信サービスが国内でも次々と開始。新品CD購入率は29.4%、有料音楽配信・着うたフル購入率は12.1%。CDレンタル率は21.6%。音楽の楽しみ方では、YouTube等の無料動画配信サイトが最も利用率が高く、次いでラジオ、テレビ、カラオケ、DVDの順。
- 2013年 音楽の流通形式の主流が、パッケージや音源を買って聴くという形から、音源そのものは所有せずにストリーミング (ファイルをダウンロードしながら、同時に再生をすること) などを通じて聴くという形へ移行してきている。

2011年から2013年現在までの日本は、まさに激動の道の上であった。2011年3月11日に起きた東日本大震災と、それに伴う東京電力福島第一原発事故は、誰もが予想しないほどの大惨事となった。被災地の惨状と、放射能漏れへの恐怖、日本中での節電対策など、この時、この国はもう終わりだと誰もが感じたであろう。しかし、日本は、そのどん底から少しずつ這い上がっていく力を持っていた。現在は、被災地支援が少しずつ実を結び、復興に向かいつつある。そんな中、音楽の力も見逃すことはできない。多くのアーティストたちが被災地で音楽を通じて支援金や被災者の心のケアに取り組んだり、全国各地でチャリティコンサートを開催したり、テレビなどメディアで支援したりとめざましい活躍をみせた。日本中を音楽の力で繋いだと言っても過言で

はない。

その後、東京スカイツリーが開業したり、2012年12月に発足した安倍内閣の経済政策であるアベノミクス効果により、デフレで低迷していた日本経済が徐々に回復に向かい始めた。また、2013年9月に東京オリンピック（2020年開催）の招致が決定し、日本は未来に向かって活気が戻りつつある。

音楽メディアでは、2012年頃から携帯電話に代わりスマートフォンが大きなシェアを占めるようになった。その普及につれ、有料音楽配信サービスも普及し多様化している。音楽の流行としては、2008年頃からアイドルグループのAKB48の人气が上昇する。2009年には、「AKB現象」「国民的アイドル」と呼ばれるほどの地位を得るようになっていった。その後、次々にAKB系列や他の少女アイドルグループが結成され、現在はまさにアイドルが氾濫している感もある。また現在では、ジャニーズの「嵐」も、SMAPを超えるほどの国民的アイドルグループになっている。

2007年問題の先送りとして心配された団塊世代の2012年問題であるが、退職による技術力の低下を生み出すという懸念以上に、不況下での人件費削減の利点もあり、さほど深刻な問題なく通り過ぎて行ったと思われる。

2. 「娯楽の頻度：音楽鑑賞」（インターネット調査2013）の関連要因

JGSS-2003や2008では、質問用紙の「娯楽の頻度：音楽鑑賞」において、「CD、ラジオ、コンサートなど」と説明が書かれている。しかし、それ以上の詳細な調査はなされていない。そこで、インターネット調査2013では、現在の音楽鑑賞の方法や音楽行動について質問した。特に、コンサートについては、その内訳を記載した。以下の表42～45の数値は、音楽鑑賞を「よくする」「時々する」を男女別に合計したものである。

表42より、インターネット調査2013では、音楽鑑賞を「よくする」が25.6%、「時々する」43.2%であった。合計すると、調査対象者500名のうち68.8%が音楽鑑賞をしていることになる。男女にさほど差はみられなかった。

表42 団塊世代の「娯楽の頻度：音楽鑑賞」と性別のクロス表（インターネット調査2013）

			性別		全体
			男性	女性	
娯楽の頻度：音楽鑑賞	よくする	度数	70	58	128
		性別の%	28.0%	23.2%	25.6%
	時々する	度数	100	116	216
		性別の%	40.0%	46.4%	43.2%
	あまりしない	度数	48	54	102
		性別の%	19.2%	21.6%	20.4%
	全くしない	度数	32	22	54
		性別の%	12.8%	8.8%	10.8%
	全 体	度数	250	250	500
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

次に、今までの調査と比較したものを表43に示す。インターネット調査2012は、本研究ではあまり使用しないが、団塊世代男女1000名を対象に行った調査である。この結果も含めて「娯楽の頻度：音楽鑑賞」を比較する。JGSS-2008では、2003より「よくする」と「時々する」の合計が8.2%も減少している。この理由は、6-(7)-2で述べた。そして、インターネット調査2012では、2008より14.8%増加している。これはインターネット調査であるため、母集団がインターネット環境の可能な調査対象者であり、JGSSの調査に比べるとやや階層性の高い層が多い。そのため音楽鑑賞をよくする割合もより多くなる。それを考慮しても、2012年には鑑賞頻度が増えていると思われる。さらにインターネット調査2013では、5.5%増えている。同じインターネットによる調査であるから、これは増加と認めることができる。以上の結果から、退職前後の2008年は減少したものの、特に2012年以降は、多くの団塊世代が完全退職しているため、余暇として音楽鑑賞をする団塊世代は徐々に増えてきたと思われる。

表43 各調査における団塊世代の音楽鑑賞頻度（「よくする」「時々する」を合わせたもの）の割合比較

調 査	男 (%)	女 (%)	全体 (%)
JGSS-2003(10~11月)	53.4 (88人中)	59.2 (120人中)	56.7 (208人中)
JGSS-2008(10~11月)	42.8 (248人中)	54.2 (249人中)	48.5 (497人中)
インターネット調査2012(1月)	59.6 (500人中)	67.0 (500人中)	63.3 (1000人中)
インターネット調査2013(4月)	68.0 (250人中)	69.6 (250人中)	68.8 (500人中)

次に、音楽鑑賞の方法についての調査結果を示す。

表44 団塊世代の音楽鑑賞の方法（インターネット調査2013）

音楽鑑賞の方法	男(250人中)%	女(250人中)%	全体(500人中)%
テレビ	76.4	72.4	74.4
インターネット	64.8	54.8	59.8
C D	58.4	58.4	58.4
ラジオ	46.8	44.2	45.4
ビデオ・DVD	49.6	42.8	45.2
コンサートに行く	22.0	37.2	29.6
ウォークマン（イヤホン）で聴く	28.8	16.0	22.4
カセットテープ	7.6	11.2	9.4

※数値は音楽鑑賞方法で「よくする」「時々する」を合計したもの

表44より、最も頻度の高い鑑賞方法はテレビである。音楽番組だけでなくドラマや映画も含まれるので、より幅広い音楽を手軽に楽しむことができる方法である。意外なのは、2番目に「インターネット」が「よくする」と「時々する」を合わせて59.8%であったことだ。インターネット環境にある調査対象者なので当然かもしれないが、団塊世代という年齢を考慮すると結構高い割合である。内容は、有料・無料の音楽配信やYou Tubeなどの動画も含まれると思われる。また、CDやラジオ、DVDもよく利用されている。

コンサートに「よく行く」「時々行く」層は29.6%である。女性の方がかなり多い。「音楽鑑賞方法：コンサート」の選択肢のうち、「よくする」「時々する」「あまりしない」のいずれかを回答した321人を対象にコンサートの音楽ジャンルの内訳を調査した。

表45 コンサートの音楽ジャンル内訳（インターネット調査2013）（2つまで選択可）

コンサートの音楽ジャンル	男(147人中)%	女(174人中)%	全体(321人中)%
クラシック音楽	41.5	55.2	48.9
ポピュラー音楽	43.5	36.8	39.9
歌謡曲・演歌	29.3	28.7	29.0
ジャズ	24.5	16.1	19.9
ロック	10.2	6.9	8.4

※「音楽鑑賞：コンサートに行く」で、「よくする」「時々する」「あまりしない」と回答した321人を対象（複数可）

※ 数値は各音楽ジャンルのコンサートに行くとは回答した割合

表45より、コンサートに「よく行く」「時々行く」「あまり行かない」と回答した321人中、約半数の48.9%がクラシック音楽のコンサートに行くとは回答している。やはり女性の方が多い。次にポピュラー音楽のコンサートが39.9%であった。これは男性の方が多い。歌謡曲・演歌のコンサートは29.0%で、男女差は無く、ジャズのコンサートは19.9%で男性の方が多かった。ロック8.4%と少なく、男性の方が多かった。コンサートのジャンルによって性差がみられた。他世代との比較はできないが、団塊世代にとって、コンサートといえば、クラシック音楽を指すことが多いと思われる。そこで、それぞれのコンサートの音楽ジャンルにおいて、性別を制御変数とした偏相関関係をみってみる。

表46 コンサートにおける音楽ジャンルの偏相関係数表（インターネット調査2013）

	クラシック音楽	ポピュラー音楽	演歌・歌謡曲	ジャズ	ロック
クラシック音楽	1	-.346***	-.367***	.041	-.269***
ポピュラー音楽	-.346***	1	-.128*	-.224***	-.022
演歌・歌謡曲	-.367***	-.128*	1	-.269***	-.120*
ジャズ	.041	-.224***	-.269***	1	-.045
ロック	-.269***	-.022	-.120*	-.045	1

※偏相関係数の *** は0.1% 水準、** は1% 水準、* は5% 水準で有意（両側）

※制御変数：性別

※「音楽鑑賞：コンサートに行く」で、「よくする」「時々する」「あまりしない」と回答した321人を対象（複数可）

表46より、それぞれの音楽ジャンル同士で有意だったものは全て負の相関であった。このことから、コンサートにおいては、それぞれ好みの音楽ジャンルのコンサートに行くことが多く、複数のジャンルに渡って行く団塊世代は少ないといえる。コンサートは、時間や場所が限定され、ほとんどが有料であるという理由から、好みの音楽ジャンルに目的を絞ってコンサートに行くことが多いと考えられる。

次に、団塊世代の2013年現在の音楽行動や活動について述べる。本研究のほとんどが音楽聴取を中心として調査してきたが、音楽聴取よりも能動的な音楽行動について触れておく。ここでは、研究Ⅰのインタビュー調査において、「現在の音楽との関わり方」として挙げられたいくつかの項目のうち、本調査での音楽行動の上位4項目をまとめて表47に示す。

表47 団塊世代の現在の音楽行動・活動（インターネット調査2013）

音楽行動	男(250人中)%	女(250人中)%	全体(500人中)%
「ながら聴き」をする	63.5	73.6	68.4
カラオケに行く	29.2	16.8	23.0
楽器演奏をする	14.8	13.6	14.2
声楽や合唱をする	8.4	10.8	9.6

※数値は音楽行動で「よくする」「時々する」を合計したもの

表47より、音楽行動において、「ながら聴き」をする割合が68.4%と多い。特に女性に多い。インタビューでは、家事やドライブをしながら音楽を聴くケースが多かった。「ながら聴き」自体を他の音楽行動と同じレベルで比較するのは多少ずれているが、他のことをしながら楽しめるのは音楽の大きな特徴であるので、質問として取り上げてみた。一般的には、コンサートのように集中して音楽を聴くことを音楽鑑賞というが、本研究においては、他の事をしながらでも意識的に音楽を聴いていれば音楽鑑賞と捉えて分析している。その方が娯楽の観点からは自然であると考えられる。

現在、楽器を演奏する団塊世代は14.2%であった。青年期にギターが流行したことを考えると、思ったより少ない割合である。しかし、潜在的にはもっと楽器を演奏してみたい層は存在するのではないだろうか。大人の音楽教室も増えている現状から、今後、余暇を利用して楽器に触れる団塊世代は増えていくと考えられる。また、声楽や合唱をする団塊世代は9.6%であり、こちらも今後コーラスに参加して楽しむ人は増えていくであろう。カラオケについては以降で触れる。

以上で述べてきた音楽鑑賞や音楽行動の結果を踏まえ、インターネット調査2013における「娯楽の頻度：音楽鑑賞」の関連要因を分析する。

表 48 のように、「娯楽の頻度：音楽鑑賞」を従属変数とし、A～E のモデルに分けて独立変数を投入し重回帰分析した。

表 48 「娯楽の頻度：音楽鑑賞」への重回帰分析モデル(インターネット調査 2013)

従属変数：娯楽の頻度：音楽鑑賞	A	B	C	D	E
性別	-.043	.012	-.029	.007	.024
教育年数(本人)	-.072	-.077	-.087	-.062	-.056
世帯年収	.019	.022	.016	.049	.042
居住地の市郡規模	.005	.029	-.010	.018	.024
就労の有無	.067	.071	.060	-.002	-.002
健康状態	.019	-.023	.014	.009	.010
15歳頃の居住地規模	.103*	.036	.087	.027	.023
15歳頃の世帯収入レベル	.074	.049	.010	-.046	-.044
教育年数(父親)		.055			
教育年数(母親)		.016			
子供の頃：父親の音楽聴取頻度			.238***	.115**	.102*
母親の音楽聴取頻度			.082	-.044	-.054
現在の音楽鑑賞方法：					
コンサートに行く				.207***	.188***
ウォークマン(イヤホン)で聴く				.136***	.128***
テレビ				.079*	.079*
ラジオ				.075*	.052
CD				.463***	.425***
現在の音楽行動：					
楽器演奏をする					.046
声楽や合唱をする					-.026
カラオケに行く					-.027
「ながら」聴きをする					.121**
N	484	365	484	484	484
調整済み R ²	.018*	-.009	.099***	.514***	.521***

(注1) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(注2) 数値は標準化係数 β : 性別の標準化係数 β は、-が女性、+が男性である。

教育年数(本人・父親・母親)と世帯年収の標準化係数 β は、-が正の関連、+が負の関連である。

※各モデルにおいて、全ての独立変数のVIF値は2未満であり、重大な多重共線性は生じていない。

モデル A は 8 つの基本属性、モデル B は父母の教育年数を投入した。その結果、B は調整済み R² 乗が有意ではなくなり、採用しないこととした。モデル C では子供の頃の父母の音楽聴取頻度を投入したところ、父親の音楽聴取頻度に大きな関連がみられた。さらにモデル D では、現在の音楽鑑賞の方法を、モデル E では現在の音楽行動を投入した。その結果、モデル E の調整済み R² 乗が.521 で 0.1% で有意になり、一番値が大きいことからこのモデル E を採用することとする。

モデル E において、「娯楽の頻度：音楽鑑賞」は、「父親の音楽聴取頻度」と鑑賞方法では「コンサートに行く」「ウォークマン(イヤホン)で聴く」「テレビ」「CD」と、音楽行動では「ながら聴きをする」と正の関連がみられた。特に CD には大きな関連がみられた。また、コンサートによく行き、ウォークマンもよく利用するという音楽鑑賞の形態から、行動的な団塊世代がイメージできる。また、子供の頃の父親の音楽聴取頻度が現在の音楽鑑賞頻度に関連していることは、世代の継承という視点から特徴的である。

3. 「現在の好きな音楽」（インターネット調査2013）の関連要因

インターネット調査2013では、「あなたは現在どのくらい次の音楽が好きですか。」という質問項目で、表49の10種類の音楽ジャンルについて1「非常に好き」2「好き」3「あまり好きでない」4「嫌い」の選択肢で回答を求めた。このジャンルは「青年期に好きだった音楽」と同じである。フォークソングやグループサウンズ、ビートルズは他の音楽ジャンルに含まれるが、団塊世代の世代観を代表する音楽であるため、この3つのジャンルは単独で質問した。さらにロジスティック回帰分析や主成分分析をするために、1と2を合わせて「好き」とし、3と4を合わせて「好きでない」として、回答を2項にまとめた。

2013年現在、団塊世代が好きな音楽の順位は表49のようになった。「映画音楽」と「フォークソング」はきわめて人気が高い。その他も、「演歌」と「ロック」を除き50%以上が「好き」と回答している。「映画音楽」と「クラシック音楽」は、男性より女性が多く好み、「フォークソング」「グループサウンズ」「ジャズ・ブルース」「演歌」「ロック」は男性の方がより好んでいる。特に、「クラシック音楽」と「演歌」では、男女差が大きいといえる。この表から、多くのジャンルにおいて好む割合が大きいことから、現在、団塊世代はいろいろなジャンルの音楽を好んでいることがわかる。三浦(2007)の言葉で表現すると「団塊世代の音楽趣味は雑食的」といえる³¹。

表 49 団塊世代が現在好きな音楽（インターネット調査 2013）

順位	現在好きな音楽	男(250人中)%	女(250人中)%	全体(500人中)%
1	映画音楽	77.2	81.2	79.2
2	フォークソング	81.2	76.0	78.6
3	歌謡曲・J-POP	68.8	67.6	68.2
4	ビートルズ	67.6	66.8	67.2
5	クラシック音楽	60.0	72.8	66.4
6	グループサウンズ	62.0	55.6	58.8
7	海外のポップス	58.0	55.6	56.8
8	ジャズ・ブルース	57.2	52.4	54.8
9	演歌	58.4	40.4	49.4
10	ロック	39.6	28.8	34.2

※数値は「好き」な割合

次に、これらの「現在好きな音楽」と「青年期に好きだった音楽」を男女別に比較してみると図 13、図 14 のようになった。図 13 は団塊世代の男性である。青年期の頃よりも現在好む割合が増えた音楽ジャンルは、「クラシック音楽」「演歌」「ジャズ・ブルース」で、特にクラシック音楽は約 20% も増えている。図 14 の女性もほぼ同じ結果であった。逆に減ったものは、男女とも「フォークソング」「グループサウンズ」「海外のポップス」である。このことから、「クラシック音楽」「演歌」「ジャズ・ブルース」は青年期以降に出会い好きになった団塊世代も多くおり、大人の音楽の代表といえるであろう。その反対に、青年期に流行した「フォークソング」「グループサウンズ」は現在下火であり、「海外のポップス」も加齢とともにやや減少していると思われる。しかし、ロックに関しては、好む層は少ないが、青年期から減少もしていない。加齢とともに一番減少しそうな音楽ジャンルであるのに横ばいであるということは、ロックにはコアなファンがいるといえるかもしれない。この調査でみる団塊世代の音楽の嗜好は、男女ともおよそ青年期と同じような分布であるが、加齢や流行などで多少変化していくことが考察された。

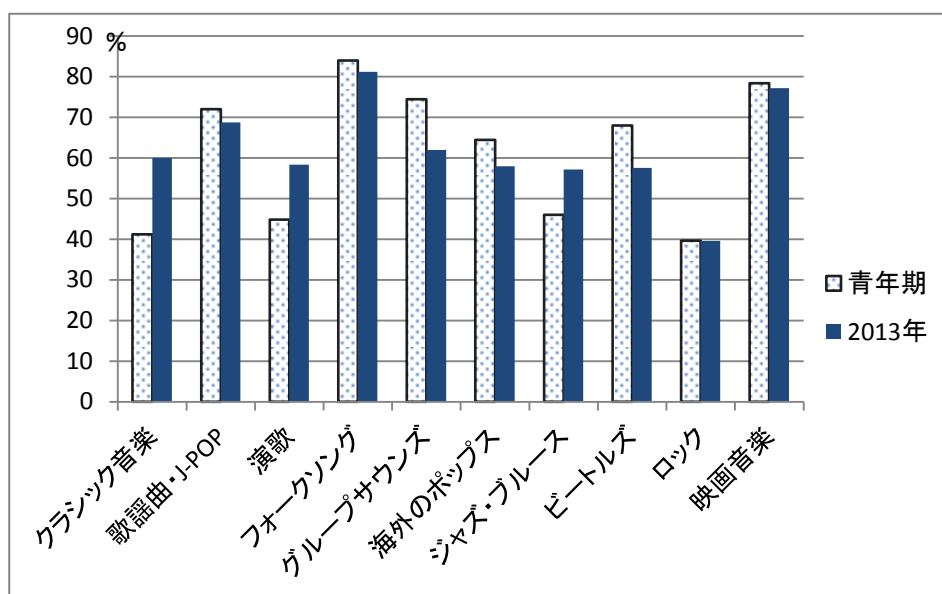


図13 団塊世代（男）青年期と現在好きな音楽の比較（インターネット調査2013）

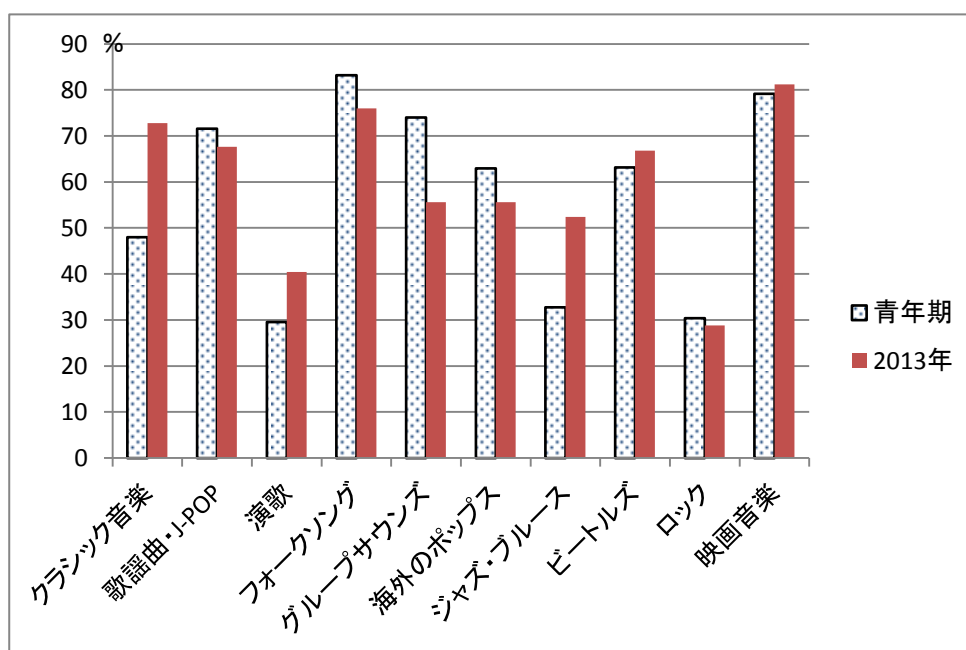


図14 団塊世代（女）青年期と現在好きな音楽の比較（インターネット調査2013）

次に、「現在好きな音楽」の10種類の音楽ジャンルを主成分分析しグループ分けをした。因子抽出法による主成分分析の結果、主成分係数は0.5以上のみ表示すると表50のようになった。第1主成分はポップス、ジャズ、フォークソングなどのいわゆる軽音楽系と映画音楽である。海外と日本の両方の音楽が含まれている。第2主成分は、

演歌と歌謡曲・J-POP の大衆音楽（グループサウンズも含む）であった。第 3 主成分は、クラシック音楽で、ロックは好まない、いわゆる正統音楽を好むグループであった。グループサウンズが第 2 主成分にも含まれている以外は、「青年期に好きだった音楽」とほぼ同じ主成分に分けられた。

表50 団塊世代「現在好きな音楽」の主成分分析(インターネット調査2013)

現在好きな音楽：	成分		
	1	2	3
海外のポップス	.715		
ビートルズ	.696		
ジャズ・ブルース	.648		
ロック	.595		-.558
グループサウンズ	.580	.512	
映画音楽	.545		
フォークソング	.502		
演歌		.763	
歌謡曲・J-POP		.587	
クラシック音楽			.616

因子抽出法：主成分分析

※主成分係数は0.5以上のみ表示

この3つの主成分のうち、異なる主成分同士で相関のあるものは、クラシック音楽とフォークソング（相関係数=.207**）、クラシック音楽と海外のポップス（.243**）、クラシック音楽とジャズ・ブルース（.324**）、クラシック音楽と映画音楽（.303**）、歌謡曲・J-POPとフォークソング（.314**）、歌謡曲・J-POPと海外のポップス（.202**）であった。同じ主成分同士以外で、これらの組み合わせの音楽も好んでいるという結果になった。このことから、団塊世代が2013年現在好む音楽は雑食的であると考えられる。

以上の結果を踏まえ、「現在好きな音楽」の各音楽ジャンルへの嗜好が、どのような基本属性や音楽環境と関連していたのか分析していく。そこで、現在好きな音楽10種類を従属変数とし、8つの基本属性や現在の音楽鑑賞方法、音楽行動を独立変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。表51のロジスティック回帰分析一覧の数値はオッズ比である。

表 51 団塊世代の「現在好きな音楽」へのロジスティック回帰分析(インターネット調査 2013)

従属変数	クラシック音楽	歌謡曲・J-POP	演歌	グループサウンズ	フォークソング	海外のポップス	ジャズ・ブルース	ビートルズ	ロック	映画音楽
性別	.610 ⁺	.955	3.413 ^{***}	1.288	1.834 [*]	.995	1.313	1.028	1.520 ⁺	.962
教育年数(本人)	.911	.951	1.211 ^{**}	1.060	1.000	.881 [*]	.982	.956	.975	.977
世帯年収	1.043	.993	1.006	1.005	1.041	.989	1.029	1.007	1.023	1.015
居住地の市郡規模	1.361 ^{**}	1.040	1.084	1.107	1.021	1.273 [*]	1.241 [*]	1.126	1.316 [*]	1.048
就労の有無	.860	.628 [*]	.545 [*]	.936	.562 [*]	.823	1.038	.907	1.267	.568 [*]
健康状態	1.170	1.007	.921	.959	1.051	1.033	1.259 [*]	1.095	.901	1.029
15歳頃の居住地規模	1.101	.926	.699 ^{**}	.874	1.039	1.202	1.380 [*]	1.286 [*]	1.015	1.332 ⁺
15歳頃の世帯収入レベル	.984	.878	1.092	.888	1.034	1.128	1.036	1.091	1.017	.934
音楽鑑賞:										
コンサートに行く	2.065 ^{***}	.882	.752 ⁺	.885	1.146	1.153	1.372 [*]	1.248	1.111	1.418 ⁺
ウォークマン(イヤホン)	1.008	.969	.874	1.004	.781 ⁺	.937	1.181	.987	.993	.873
テレビ	1.013	1.528 ^{**}	1.439 [*]	1.028	1.175	.958	1.039	.993	1.134	1.265
ラジオ	1.085	1.091	1.088	1.237 ⁺	1.195	.945	1.056	1.062	.856	1.174
CD	1.468 [*]	1.233	1.045	.975	1.200	1.394 [*]	1.234	1.413 [*]	1.277	.951
カセットテープ	.957	1.120	1.626 ^{**}	1.229	1.444 ⁺	.967	1.190	.757 ⁺	1.117	.942
ビデオやDVD	.897	.865	.781	.975	1.043	1.313 [*]	.873	1.175	1.195	1.111
インターネット	1.038	1.116	1.048	1.248 [*]	.932	1.157	1.201 ⁺	1.078	1.183	1.162
音楽行動:										
楽器演奏をする	1.040	.784 ⁺	.913	1.012	.935	1.091	1.269 ⁺	.974	1.192	1.161
カラオケに行く	.792	1.996 ^{***}	1.753 ^{***}	1.526 ^{**}	1.272	1.055	1.003	1.164	1.252 ⁺	.995
「ながら聴き」をする	1.266 ⁺	1.135	.981	1.212	1.366 [*]	1.243	1.212	1.196	1.036	1.378 [*]
定数	.048	.163	.005	.015	.004	.118	.001	.034	.020	.019
N	484	484	484	484	484	484	484	484	484	484
X ²	100.57 ^{***}	68.295 ^{***}	105.09 ^{***}	53.532 ^{***}	49.486 ^{**}	84.336 ^{***}	88.558 ^{***}	62.716 ^{***}	64.929 ^{***}	56.489 ^{***}
Nagelkerke R2	.252	.185	.260	.141	.151	.215	.224	.170	.172	.172

(注1) *** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, + $p < 0.10$

(注2) 数値はオッズ比:性別のオッズ比が1.0より大きい場合は男性、小さい場合は女性である。

教育年数(本人)と世帯年収のオッズ比が1.0より大きい場合は負、小さい場合は正の関連である。

表51より、まず特徴的なことは、第1主成分である軽音楽系（「グループサウンズ」「フォークソング」「海外のポップス」「ジャズ・ブルース」「ビートルズ」「ロック」）+映画音楽において、いくつかのジャンルに居住地が関係していることである。15歳の頃や現在、大きな都市に住んでいる団塊世代に第1主成分の音楽を好む層が多い。ジャズ・ブルースを好む層は、居住地に加え、「健康状態」が良好でコンサートによく行き、インターネットでの音楽鑑賞をよく行い、楽器演奏もする前向きな層である。第2主成分の特徴として、歌謡曲・J-POPや演歌を好む層はともテレビでの音楽鑑賞が多い。また、歌謡曲・J-POPは無職で楽器演奏をあまりしない層に好まれている。演歌は、無職、男性で教育年数が短く、地方出身でコンサートに行かない、カセットテープをよく利用する層に好まれている。第3主成分のクラシック音楽は、女性で大都市に住み、コンサートによく行き、CDをよく聴くが、カラオケにはあまり行かない層に好まれている。

全部の主成分を通して特徴的なことは、「世帯年収」「15歳頃の世帯収入レベル」がどの音楽ジャンルにも関連していなかったことである。JGSS-2008では、世帯年収が演歌に負の関連をしていたが、このインターネット調査2013では経済的側面が音楽嗜好に関連していなかった。このことから、青年期に比べると、音楽ジャンル嗜好への経済的格差は減ってきたといえるのではないか。「性別」については、「演歌」「フォークソング」「ロック」は男性が好み、「クラシック音楽」は女性が好む結果となった。特に演歌は、オッズ比が3.413と一番大きく、演歌は男性が好む音楽であるといえる。「教育年数」については、「演歌」は教育年数が短い層に、「海外のポップス」は教育年数が長い層に好まれている。また、第1主成分と第3主成分の音楽ジャンルは、大都市に居住している（していた）層に好まれる傾向があった。大都市は、コンサートに行ったり、CDを購入する環境が整っていることも一因であると考えられる。

その他の特徴として、カラオケによく行く層は、歌謡曲・J-POP、演歌、グループサウンズ、ロックを好むという結果になった。特に、第2主成分の音楽に顕著である。また、「ながら聴き」をするのは、クラシック音楽とフォークソングと映画音楽に関連がみられた。他の音楽ジャンルでも「ながら聴き」は行われているが、特にクラシック音楽や映画音楽は歌詞を伴わない曲が多く、BGMとして利用されやすいのではと考える。さらに、「コンサートに行く」がクラシック音楽と大きく関連し、「コンサートによく行くほどクラシック音楽を好む効果が高い。」といえる。この点に音楽の階層性を垣間見ることができる。全体的には、第2主成分の「歌謡曲・J-POP」や「演歌」は、フォークソングを除いた他の主成分に比べて負の関連が多く、特にテレビやカラオケを好む傾向が大きい。第1主成分や第3主成分の親近性に比べると、第2主成分は特にクラシック音楽とは親近性が低い音楽ジャンルであると考えられる。

しかし、「クラシック音楽と演歌の両方が好き」という層を調べたところ153人も存在した。その関連要因は「性別（2.024**）」「居住地の市郡規模（1.312*）」「就労の有

無 (.588*)」「15歳頃の居住地規模 (.766*)」「カセットテープで聴く (1.534**)」となり、「居住地の市郡規模」以外は「演歌」の関連要因に近く、「クラシック音楽と演歌の両方が好き」の場合、演歌の影響が強いという結果になった。

また、「演歌と海外のポップスの両方が好き」は130人存在し、その関連要因は「性別 (2.517**)」「居住地の市郡規模 (1.271*)」「ウォークマンで聴く (.720*)」「CDで聴く (1.455*)」「カセットテープで聴く (1.409**)」「カラオケに行く (1.346*)」となり、「性別」と「カセットテープで聴く」と「カラオケに行く」は演歌の関連要因で、「居住地の市郡規模」と「CDで聴く」は海外のポップスの関連要因であった。この場合も演歌の影響の方が大きいように思われる。特に、「クラシック音楽+演歌」「海外のポップス+演歌」のどちらの場合も性別のオッズ比が大きく、演歌好きな男性の影響が考えられる。しかし、演歌を含む複数の音楽嗜好において、演歌の「教育年数」の影響はみられなくなっている。さらに、「クラシック音楽と歌謡曲 (J-POP)」は233人存在し、「コンサートに行く」「テレビ・CDで聴く」「カラオケに行く」に関連がみられ、クラシック音楽と歌謡曲それぞれの要因が混合しており、ほぼ同じ影響力であることが分かった。「クラシック音楽と演歌と海外のポップスすべてが好き」な層は99人で、「男性である」「カセットテープでよく聴く」のオッズ比が大きく、やはり、演歌の影響力が大きかった。他にもいろいろ試した結果から、「演歌>クラシック音楽=歌謡曲=海外のポップス」という影響力の強弱が導かれた。ロックに関しては、「演歌=ロック>海外のポップス、しかし、クラシック音楽>ロック」であった。また、ジャズ・ブルースに関しては、「演歌>ジャズ・ブルース>クラシック音楽=海外のポップスで、ジャズ・ブルース=ロックしかし、歌謡曲 (J-POP) >ジャズ・ブルース」と複雑な関係がみられた。以上の結果から、演歌を好む層の音楽嗜好への影響力は他の音楽ジャンルに比べて強いものがあると考察された。

4. 2013年の団塊世代の階層帰属意識と音楽

団塊世代の階層意識を分析するために、インターネット調査2013の「階層帰属意識」の男女別の分布をみてる。表52より、「上」と「中の上」を合わせた上流意識層は、男性が20.4%、女性が16.4%である。「中の中」の中流意識層は、男性が42.8%、女性が52.8%である。「中の下」と「下」を合わせた下流意識層は、男性が36.8%、女性が30.8%である。この結果から、女性は男性に比べて中流意識が強いといえる。

表52 階層帰属意識と性別のクロス表（インターネット調査2013）

		性別		全体	
		男性	女性		
階層帰属意識	上	度数	4	3	7
		性別の%	1.6%	1.2%	1.4%
	中の上	度数	47	38	85
		性別の%	18.8%	15.2%	17.0%
	中の中	度数	107	132	239
		性別の%	42.8%	52.8%	47.8%
	中の下	度数	72	58	130
		性別の%	28.8%	23.2%	26.0%
	下	度数	20	19	39
		性別の%	8.0%	7.6%	7.8%
	合計	度数	250	250	500
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

次に、階層帰属意識を以下の4つの調査を比較する。ただし、JGSS調査とインターネット調査では調査対象者（母集団）が異なるため、単純に比較することはできない。しかし、年度を追っておよその傾向をみることは可能である。

表53 各調査における団塊世代の階層帰属意識の変遷

調査	上流意識%	中流意識%	下流意識%
JGSS-2003 (401人)	11.4	47.4	41.1
JGSS-2008 (497人)	12.9	42.1	44.6
インターネット調査2012 (1000人)	14.3	44.8	40.9
インターネット調査2013 (500人)	18.4	47.8	33.8

※上流意識は、階層帰属意識の「上」と「中の上」、中流意識は「中の中」、下流意識は「中の下」と「下」

表53より、2008年では、2003年より中流意識が減り、下流意識が増えている。これは、定年退職前後で就労の形態が変化した時期であり、さらに景気の低迷が追い打ちしたことも原因と考えられる。その後、2012年、2013年と中流意識以上が増えている。加齢とともに無職になり世帯年収も減っているのだが、反対に階層帰属意識は高くなっている。これはどのような要因が関連しているのでしょうか。まず、就労の有無の視点でみる。

表54 団塊世代の就労の有無と性別のクロス表(インターネット調査2013)

		性別		合計	
		男性	女性		
就労の有無	有職者	度数	128	62	190
		性別の%	51.8%	25.7%	38.9%
	無職者	度数	119	179	298
		性別の%	48.2%	74.3%	61.1%
合計		度数	247	241	488
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

表55 各調査における団塊世代の有職者の変遷

調査	男(%) (人中)	女(%) (人中)	全体(%) (人中)
JGSS-2003 (52～56歳)	94.5 (164)	76.7 (236)	84.0 (400)
JGSS-2008 (57～61歳)	87.4 (246)	56.1 (246)	71.7 (488)
インターネット調査2012 (61～65歳)	68.0 (500)	29.4 (500)	48.7 (1000)
インターネット調査2013 (62～66歳)	51.8 (247)	25.7 (241)	38.9 (488)

表54より、2013年における団塊世代の就労の有無は、有職者が38.9%である。そして、JGSS-2003以降の有職者の変遷は、表55のとおりである。母集団の人数は異なるがその割合でみていくと、年を追うごとに有職者の割合は減少している。2012年で23%減少し、その1年後ではさらに10%減少している。特に女性の減り方が大きい。2008年ごろは正規雇用から非正規雇用への移行が多くみられ、まだ有職者が71.7%いたが、2012年から2013年にかけて完全リタイアがどんどん進み、有職者が減少している。

表56 就労形態と性別のクロス表（インターネット調査2013）

		性別		全体
		男性	女性	
経営者・役員	度数	23	5	28
	性別の%	9.2%	2.0%	5.6%
常時雇用の一般従業者	度数	26	13	39
	性別の%	10.4%	5.2%	7.8%
非常勤・臨時・パート	度数	19	26	45
	性別の%	7.6%	10.4%	9.0%
派遣・契約社員	度数	14	4	18
	性別の%	5.6%	1.6%	3.6%
自営業主・自営業者	度数	46	11	57
	性別の%	18.4%	4.4%	11.4%
就労形態 家族従業者	度数	0	3	3
	性別の%	0.0%	1.2%	0.6%
主に家事をしている	度数	1	124	125
	性別の%	0.4%	49.6%	25.0%
定年などで仕事をやめた	度数	111	47	158
	性別の%	44.4%	18.8%	31.6%
失業中	度数	4	2	6
	性別の%	1.6%	0.8%	1.2%
身体上の理由で働けない	度数	3	6	9
	性別の%	1.2%	2.4%	1.8%
その他	度数	3	9	12
	性別の%	1.2%	3.6%	2.4%
全 体	度数	250	250	500
	性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

また、有職者、無職者を含め2013年の団塊世代の就労形態は、表56のようである。特に目立つのは、「定年などで仕事をやめた」男性が44.4%、「主に家事をしている」女性が49.6%である。2008年には常時雇用の一般従業者が34.3%であったのに対し、2013

年では7.8%に落ちた。2003年から2013年現在にかけて、団塊世代の就労形態は年齢とともに大きく変化してきたことがわかる。

次に、以上のことを踏まえ、インターネット調査2013における階層帰属意識の関連要因を分析する。階層帰属意識を従属変数、8つの基本属性と、「教育年数（配偶者）」、さらに音楽に関する変数である「娯楽の頻度：音楽鑑賞」と「音楽行動：カラオケに行く」「音楽鑑賞：コンサートに行く」「音楽鑑賞：CDを聴く」「現在好きな音楽：クラシック音楽」「現在好きな音楽：海外のポップス」の6つを独立変数として投入し重回帰分析を行う。配偶者の教育年数については、性別によって大きく階層帰属意識に関連する予測があったため独立変数に加えた。重回帰分析の結果は、団塊世代全体と男女別に表57に示す。

表 57 団塊世代の階層帰属意識への重回帰分析モデル(インターネット調査 2013)

従属変数：階層帰属意識	全体	全体	男	女
性別	.002	.008	-	-
教育年数(本人)	-.043	.034	-.065	.034
教育年数(配偶者)	-.009	-.085	-.026	-.166*
世帯年収	-.357***	-.341***	-.322***	-.343***
居住地の市郡規模	.035	.031	.028	.008
就労の有無	-.136**	-.139**	-.144*	-.128
健康状態	.060	.051	.075	.003
15歳頃の居住地規模	.061	.061	.028	.092
15歳頃の世帯収入レベル	.167**	.169***	.251***	.090
娯楽の頻度：音楽鑑賞		.109	.137	.079
音楽行動：カラオケに行く		.135**	.095	.177**
音楽鑑賞：コンサートに行く		.081	.156*	.052
音楽鑑賞：CDを聴く		-.074	-.167	-.025
現在好きな音楽：クラシック音楽		.029	-.004	.094
現在好きな音楽：海外のポップス		-.090	-.070	-.103
N	421	421	221	200
調整済み R ²	.204***	.237***	.249***	.203***

(注 1) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(注 2) 数値は標準化係数 β : 性別の標準化係数 β は、-が女性、+が男性である。

教育年数(本人・配偶者)と世帯年収の標準化係数 β は、-が正の関連、+が負の関連である。

※各モデルにおいて、全ての独立変数のVIF値は2未満であり、重大な多重共線性は生じていない。

表57より、全体では、「世帯年収」「就労の有無」「15歳頃の世帯収入レベル」「音楽行動：カラオケに行く」の4つの変数が「階層帰属意識」に関連した。中でも、「就労の有無」は階層帰属意識と負の関連がみられ、無職の方が階層帰属意識が高いという結果となった。また、男女別でみると、関連要因に差異がみられた。そこで、この結果をもとに男女別にパス解析をしパス図を作成した（図15と図16）。

図15の男性のモデル適合度は、 $df=14$, $\chi^2=17.273$, $p=0.242$, $CFI=0.985$, $RMSEA=0.031$ 、図16の女性のモデル適合度は、 $df=12$, $\chi^2=14.972$, $p=0.243$, $CFI=0.977$, $RMSEA=0.032$ で、どちらも当てはまりの良いモデルとなった。

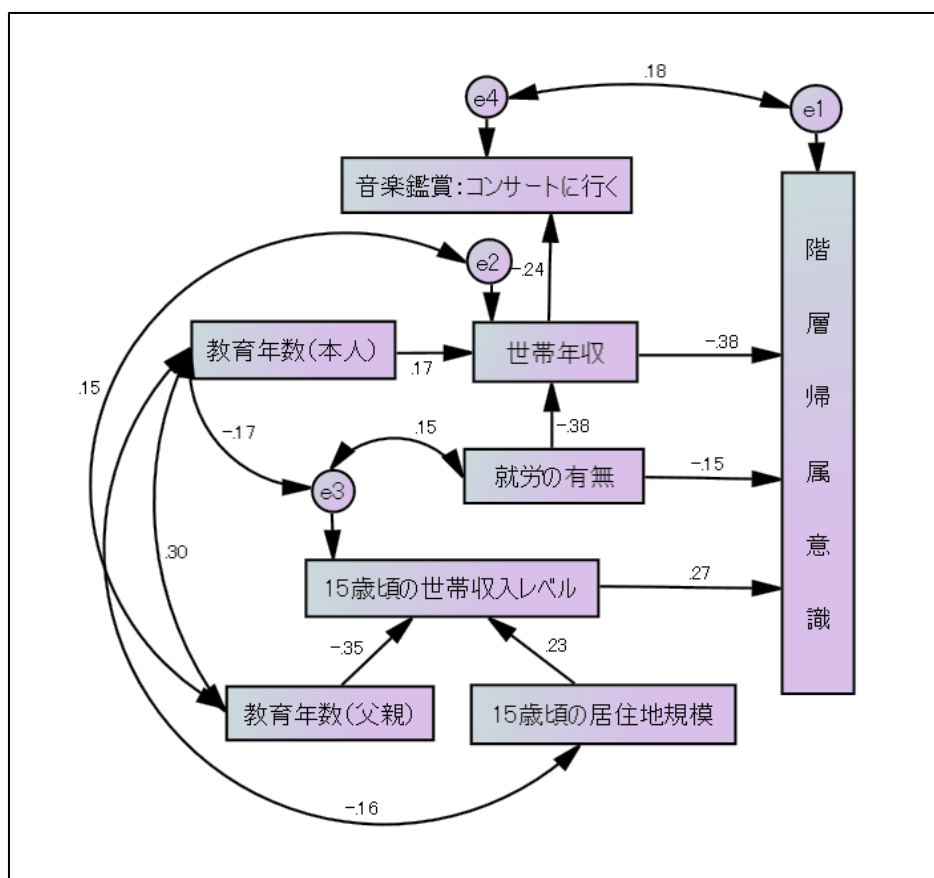


図15 団塊世代（男性）の階層帰属意識へのパス解析（インターネット調査 2013）

$n=221$ $df=14$ $\chi^2=17.273$ $p=0.242$ $CFI=0.985$ $RMSEA=0.031$

※数値は標準化推定値（全ての数値が5%水準で有意である）

教育年数(本人・父親)と世帯年収の標準化推定値は、他の変数との関係において、
 -は正の関連・相関、+は負の関連・相関である。

※関連(因果関係) → 相関 ↔

まず、団塊世代男性のパス図（図 15）をみると、「世帯年収」が一番大きく階層帰属意識に関連していた。その世帯年収には、本人の教育年数や就労の有無が関連していた。本人の学歴が高く有職者の年収は高いといえる。

次に、「15 歳頃の世帯収入レベル」が階層帰属意識と関連し、「教育年数（父親）」や「15 歳頃の居住地規模」が影響していた。大きな都市に住み、父親の学歴が高い層は 15 歳頃の世帯収入レベルも高く、階層帰属意識にも関連している。15 歳頃の生活レベルが、後の階層帰属意識に関連していた。

また、音楽関係では、表 57 の重回帰分析では、男性の場合「音楽鑑賞:コンサートに行く」が階層帰属意識に関連していた。しかし、因果関係が確定できないため、図 15 のパス図では「音楽鑑賞:コンサートに行く」と「階層帰属意識」は正の相関関係となっている。また、「世帯年収」が「音楽鑑賞:コンサートに行く」に関連していた。男性にとって、世帯年収が高くコンサートへよく行く層は、階層帰属意識も高いといえる。

さらに、「就労の有無」と「教育年数（本人）」が「世帯年収」に正の関連をしていた。男性で学歴が高く有職者の方が世帯年収が高いといえる。しかし、その「就労の有無」が階層帰属意識に負の関連をしていたことが男性の特徴である。無職者は主に定年退職者であるが、これらの層は世帯年収も 400 万円前後が多く、それにもかかわらず階層帰属意識が高い。これは、インターネット調査 2013 だけでなく、インターネット調査 2012 でも同様であった。さらに、JGSS-2008 においても、明らかな有意ではないが同じような傾向がみられた。理由としては、これらの調査の「有職者」には常時雇用者だけでなく、非正規雇用者（臨時・パート・派遣など）や自営業者が多く含まれているからだと考える。インターネット調査 2013 では非正規雇用者と自営業者が 32.4%含まれていた。そして、非正規雇用層は全体的に階層帰属意識が低めであった。反対に、約 60%にのぼる無職者（多くは定年退職者や専業主婦）の方は、世帯年収は 400 万円前後で高くないが、定年退職者本人と専業主婦の配偶者（夫）の教育年数は長く、どちらも大学と大学院卒業者の合計が 50%以上で、非正規の有職者（大卒は 29.5%）と比べ学歴が高かった。この無職の定年退職者を分析すると、57.2%が大学卒以上の学歴を有していた。一般的に団塊世代の大学卒業者は 20%未満であることから、この層は学歴が比較的高いといえる。そして、おそらく多くが社会人として大企業に勤めたり、役職に就いていたり、社会的にステイタスの高かった層であると推測する。それに伴い、退職金や預貯金などの金融資産や固定資産も相応に有しているであろう。重回帰分析では本人の教育年数は階層帰属意識と有意ではなかったが、相関係数は 0.224 で 1%で有意であり、間接的に関連はあると考える。この定年退職後の無職層の男性は、かつての成功した自分、社会的に承認された自分を退職後も引きずり、

仮に世帯年収は高くなくても、貯蓄などで生活にさほど窮していない層であり、総合的に自分たちを高く評価していると考えられる。

次に、団塊世代女性のパス図（図 16）をみると、「世帯年収」が階層帰属意識と関連していた。これは男性と同じであるが、その世帯年収は、「教育年数（本人）」「教育年数（配偶者）」「就労の有無」と正の関連がみられた。さらに、「教育年数（配偶者）」が階層帰属意識と直接関連していた。このことから、女性の階層帰属意識には、配偶者（夫）の学歴が大きく影響していることがわかる。反対に、本人、配偶者ともに教育年数と女性における就労の有無は相関していなかった。女性の無職者は女性全体の 74.3%（179 人）で、そのうちの 69.3%が「主に家事をしている」で、26.3%が「定年などで仕事をやめた」であった。「主に家事をしている」層はいわゆる専業主婦であると思われる。そして、団塊女性の教育年数は平均 13.25 年で高校卒業者が最も多く、その配偶者は平均 14.23 年で大学卒業以上が 50.7%を占めていた。夫の学歴が高いということは、その収入や社会的ステイタスも高かったと推測できるので、団塊世代女性は夫の学歴や社会的ステイタスを自分に投影し、自らの階層を判断していたと考えられる。

また、女性の場合、表 57 の重回帰分析では「音楽行動：カラオケに行く」が階層帰属意識と関連していた。しかし、「音楽行動：カラオケに行く」と「階層帰属意識」には因果関係が確定できないため、図 16 のパス図ではこれらを正の相関関係があるとした。女性において、カラオケによく行く層は音楽鑑賞をよくやり、さらに音楽鑑賞をよくする人は、本人の教育年数も長い層である。しかし、「音楽行動：カラオケに行く」と「教育年数（配偶者）」とは負の相関関係にあり、カラオケをよくする女性の夫の教育年数は長くない（学歴が高くない）という結果になった。逆にいえば、カラオケをしない女性の配偶者（夫）の学歴は高いともいえる。学歴が高い夫は妻とカラオケを楽しむ習慣があまりないのであろうか。このように、女性のパス図から不思議な関連がみられた。では、なぜ、団塊世代女性のカラオケ好きが階層帰属意識に関連するのであろうか。

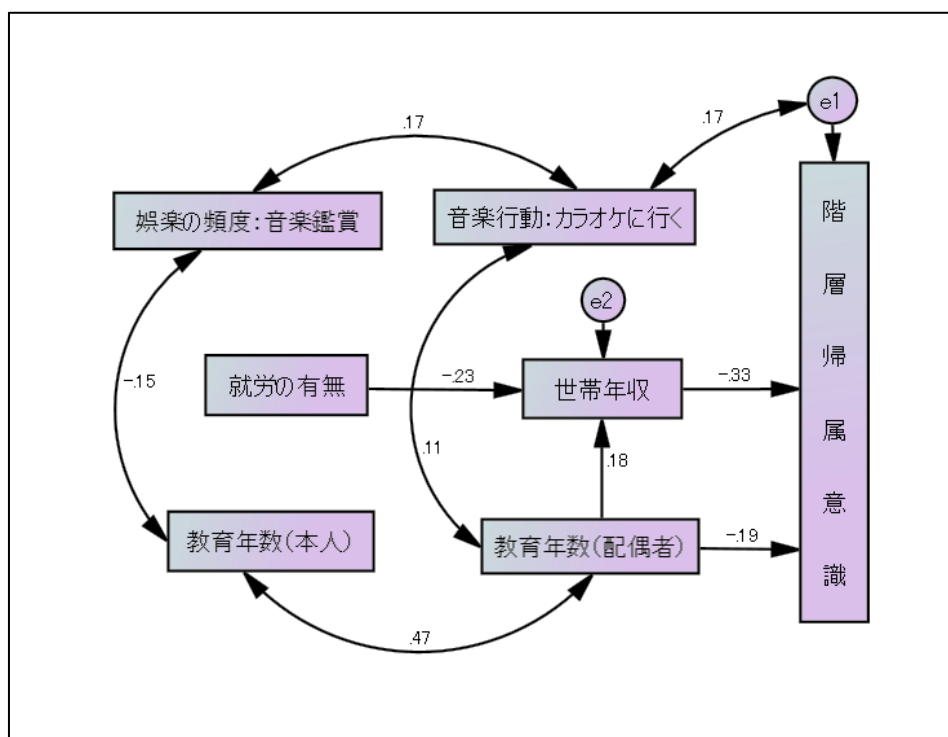


図 16 団塊世代（女性）の階層帰属意識へのパス解析（インターネット調査 2013）

n=200 df=12 $\chi^2=14.972$ p=0.243 CFI=0.977 RMSEA=0.032

※数値は標準化推定値※数値は標準化推定値（全ての数値が 5%水準で有意である）

教育年数(本人・配偶者)と世帯年収の標準化推定値は、他の変数との関係において、
 -は正の関連・相関、+が負の関連・相関である。

※関連(因果関係) → 相関 ↔

6-(6)-3 で述べたように、JGSS-2003 において「娯楽の頻度：カラオケ」は団塊世代のみ階層帰属意識に関連していたことが特徴であった。この場合、男女別で重回帰分析を試みたが、調整済み R² 乗が有意でなく説明力が足りないため、男女差を分析できなかった。インターネット調査 2013 では、女性に特徴がみられ、このモデルでは「娯楽の頻度：音楽鑑賞」のみと正の関連がみられた。では、カラオケに行く女性はどのような層であろうか。カラオケに「よく行く」と「時々行く」団塊女性たちは 16.8%で、さほど多くはない。その教育年数の平均は 13.40 年、配偶者の教育年数が 13.94 年、無職者は 68.3%、世帯年収の平均は 450 万円前後であった。これらの層は団塊世代としては一般的で、客観的には階層が高いとはいえない。

では、これらの層は、どのような音楽ジャンルを好んでいるであろうか。「音楽行動：カラオケに行く」と有意な相関関係にあったのは、現在好きな音楽のうち①「歌謡曲・J-POP (.254^{**})」②「演歌 (.183^{**})」③「フォークソング (.135^{*})」④「グループサウンズ (.216^{**})」であった。主成分分析では、①と②は第 2 主成分の大衆的音

楽、③と④は第 1 主成分の軽音楽系ではあるが、特に④は①②と親近性の高い音楽ジャンルであった。これらの音楽を好む層は、今までの分析からすると階層性はそれほど高くない層である。また、女性における「音楽行動：カラオケに行く」は、娯楽の頻度のうち「音楽鑑賞 (.183**）」「映画鑑賞 (.175**）」「パソコン (.215**）」「ドライブ (.230**）」「パチンコ・パチスロ (.218**）」と有意な相関がみられた。団塊世代の女性にしてはかなり広範囲でアクティブな趣味と相関している。カラオケによく行く女性は、大衆的な音楽を好み、趣味の多い層である。「パチンコ・パチスロ」も好むことから、ハイカルチャー志向の層ではないことがわかる。では、なぜカラオケが階層帰属意識に関連するのであろうか。

「マイ・ストアニュース」というホームページ³²に、高齢者のニーズについて記載されている。「カラオケは以前のゲートボールのように、『みんなで集まる』『みんなのプレーを見る』『長時間一緒に過ごす』『個人で練習する』などの役割があり、同世代の仲間と楽しい時間を過ごすニーズに合っている。」と記載されている。カラオケ業界も、昼間の空き時間を高齢者向けに安く販売することで設備の稼働率を高めることに繋がり、高齢者を新しいターゲットとしている。さらには、最近では老人ホームなどでの音楽療法としてもカラオケは注目されている。さらに、カラオケルームを歌以外のコミュニケーションの場に利用したり、「ひとりカラオケ」を楽しむ中高年も増えているという。これらのことから、多目的で利用できるカラオケは、余暇の時間を使い、安い料金で個人や仲間と楽しめ、昔の歌にノスタルジアを感じ、さらには歌をとおして自己表現できる場であり、「一括りにされたくない」団塊世代にとってはそのニーズを満たしている娯楽であるといえよう。特に女性はこうした場に幸福感を感じ、それが階層帰属意識の高さに繋がっているのではと考えられる。また、JGSS-2003 の分析では、団塊世代のみカラオケが「生活水準向上の機会」と相関していた。団塊世代にとってカラオケは生活水準が向上する機会の一つであるというプラスの捉え方をしていることは興味深い。

以上、男女別にパス図を作成しそれぞれの考察をした。全体を通していえることは、男女ともやはり世帯年収が一番階層帰属意識と関連していたことである。2013 年の調査時点での団塊世代の世帯年収の平均値と中央値は 450～500 万円で、最頻値は 250～350 万円であった。内閣府の「平成 25 年度版 高齢社会白書」にも団塊世代の世帯収入が記載されているが³³、ほぼ同じような分布であった。2013 年では団塊世代の 53.4% が年金生活者である。そして、2003 年、2008 年の世帯年収に比べるとかなり減収している。2003 年時の世帯年収は、平均値と中央値が 650～700 万円、最頻値が 850～1000 万円であった。2008 年時は、平均値が 500～550 万円、中央値が 450～500 万円、最頻値は 450～550 万円であった。この 10 年間で、平均値と中央値は約 200 万円、最頻値では 500 万円もの減収である。これは加齢とともに就労形態が激変した 10 年間であっ

たからである。そして、2013年現在は年金などへの移行期でもあり、有職者と無職者、年金受給者と年金未受給者の相違などから、世帯年収は年々変動し、格差も広がりつつある。さらに、世帯年収に加え退職金などを含めた貯蓄額が大きく関係していると思われる。この調査では貯蓄について質問していないので分析は不可能である。そこで、内閣府の「平成25年度版 高齢社会白書（全体版）」（p54、55）を抜粋すると、「貯蓄額の最頻値は1000～2000万円で15%であった。2000万円以上の貯蓄を有する世帯が22.7%ある一方で、貯蓄額100万円未満（貯蓄はないを含む）が19.6%となっている。」と記載してある。貯蓄額からも団塊世代の経済的格差は大きい。世帯年収のみでなく貯蓄などの金融資産や固定資産の保有という経済的側面が階層帰属意識に大きく関連していると推測することができる。

（9）学歴の世代間移動と音楽ジャンルとの相関

今までの分析で、階層帰属意識や世帯年収、音楽嗜好に教育年数が大きく関連していた。では、本人の教育年数にはどんな要因が関連しているであろうか。JGSS-2008を使って分析する。まず、団塊世代本人の最終学歴の男女別分布を表58に示す。

表58 団塊世代の最終学歴と男女別のクロス表（JGSS-2008）

		性別		全体		
		男	女			
最終学歴	新制中学校	度数	45	40	85	
		性別の%	18.2%	16.0%	17.1%	
	新制高校	度数	118	151	269	
		性別の%	47.8%	60.4%	54.1%	
	新制高専・短大	度数	21	40	61	
		性別の%	8.5%	16.0%	12.3%	
	新制大学	度数	61	18	79	
		性別の%	24.7%	7.2%	15.9%	
	新制大学院	度数	2	1	3	
		性別の%	0.8%	0.4%	0.6%	
	全 体		度数	247	250	497
			性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

表 58 より、団塊世代は高校卒業者が 54.1%と一番多い。次いで中学校卒業者 17.1%、大学卒業者 15.9%、高専・短大卒業者 12.3%である。男女別では、高校と短大卒業者は女性に多く、大学卒業者は男性（24.7%）に多い。団塊世代が進学する頃は、女性は高校かせいぜい短大卒業までが当たり前の時代であり、男性も、大学進学は女性よりかなり多いものの、人数が多いために狭き門であった。この調査において、男性の平均教育年数は 12.66 年、女性は 12.15 年、全体では 12.40 年である。

次に、学歴への関連要因を調べるため、本人の教育年数を従属変数、教育年数に関わる変数の「性別」「父親の教育年数」「母親の教育年数」「15 歳頃の居住地規模」「15 歳頃の世帯収入レベル」を独立変数として、重回帰分析を行った（表 59）。

表 59 本人の教育年数への重回帰分析（JGSS-2008）

従属変数：教育年数（本人）	
性別	-. 212 ***
教育年数（父親）	. 133 *
教育年数（母親）	. 271 ***
15 歳頃の居住地規模	-. 158 **
15 歳頃の世帯収入レベル	-. 210 ***
N	348
調整済み R ²	. 287 ***

(注 1) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(注 2) 数値は標準化係数 β

従属変数の教育年数（本人）に対し、性別の標準化係数 β は-が男性である。

教育年数（父親・母親）は+が正の関連であり、15歳頃の居住地規模・15歳頃の世帯収入レベルは-が正の関連である。

表 59 より、本人の教育年数は、「性別」「父親の教育年数」「母親の教育年数」「15 歳頃の居住地規模」「15 歳頃の世帯収入レベル」すべてに正の関連がみられた。性別は、この分析の場合男性が関連している。この傾向は、他世代でも同じようにみられた。両親の学歴が高く、15 歳頃に大都市に住み、15 歳頃の世帯収入レベルが高かった団塊世代は、本人の教育年数も長いといえる。

次に、配偶者の教育年数も入れて、相互の教育年数の偏相関をみってみる。この場合、制御変数は、「性別」「15 歳頃の居住地規模」「15 歳頃の世帯収入レベル」とする。

表 60 より、本人、配偶者、父親、母親の教育年数すべてが正の相関関係にあった。特に、父親と母親の偏相関係数、次いで本人と配偶者の偏相関係数が高い。世代を超えて、夫婦の学歴は強く相関していることがわかる。

表 60 団塊世代本人、配偶者、父母の教育年数の偏相関係数表 (JGSS-2008)

	教育年数 (本人)	教育年数 (配偶者)	教育年数 (父親)	教育年数 (母親)
教育年数 (本人)	0	.454***	.313***	.356***
教育年数 (配偶者)	.454***	0	.318***	.363***
教育年数 (父親)	.313***	.318***	0	.638***
教育年数 (母親)	.356***	.363***	.638***	0

n=304

※偏相関係数の *** は0.1% 水準で有意 (両側)

※偏相関係数の+は正の相関である。

※制御変数：性別、15歳頃の居住地規模、15歳頃の世帯収入レベル

次に、団塊世代の子供が6割以上を占める真性団塊ジュニア世代(本研究の場合1973～82年生まれ)の教育年数とその親世代(団塊世代)の教育年数の偏相関をみしてみる。この場合、制御変数は「性別」とする。また、父親、母親ともに団塊世代に限定する。表 61 より、真性ジュニア世代の教育年数、その父母(団塊世代)の教育年数は、すべて相互に正の相関をしていた。

表 61 真性団塊ジュニア世代とその父母(団塊世代限定)の教育年数の偏相関係数表 (JGSS-2008)

	教育年数 (真性団塊ジュニア)	教育年数 (父親)	教育年数 (母親)
教育年数 (真性団塊ジュニア)	0	.487***	.357***
教育年数 (父親)	.487***	0	.592***
教育年数 (母親)	.357***	.592***	0

※偏相関係数の *** は0.1% 水準で有意 (両側)

※偏相関係数の+は正の相関である。

※制御変数：性別

最後に、団塊世代本人と真性団塊ジュニア世代の「好きな音楽」と教育年数、さらに、「団塊世代が子供の頃、父母が好きだった音楽」と教育年数の偏相関をみしてみる。団塊世代と真性団塊ジュニア世代については、JGSS-2008 を利用し、制御変数は

「性別」とした（表 62）。父母については、JGSS-2008 にデータが存在しないため、インターネット調査 2013 を使用する。制御変数は、「性別」と「教育年数（本人）」とした（表 63）。配偶者に関しては、配偶者自身の好きな音楽ジャンルはどの調査でも判別できないため削除した。

表 62 団塊世代本人と真性団塊ジュニアの教育年数と好きな音楽の偏相関係数表（JGSS-2008）

好きな音楽	教育年数（本人）	教育年数（真性団塊ジュニア）
クラシック音楽	-.231**	-.297***
ロック	-.008	-.107
ジャズ・ブルース	-.166*	-.243***
ポピュラー音楽	-.228**	-.150**
演 歌	.233**	.047

※偏相関係数の *** は0.1% 水準、** は1% 水準、* は5% 水準で有意（両側）

※偏相関係数の－は正の相関、＋は負の相関である。

※制御変数：性別

表 63 団塊世代の父母の教育年数と好きだった音楽の偏相関係数表（インターネット調査 2013）

団塊世代が子供の頃： 父母が好きだった音楽	教育年数（父親）	教育年数（母親）
クラシック音楽	-.153**	-.129*
歌謡曲	.108*	.130**
演歌	.133**	-.091
ポピュラー音楽	-.130*	-.035
唱歌・童謡	-.069	-.135**

※偏相関係数の *** は0.1% 水準、** は1% 水準、* は5% 水準で有意（両側）

※偏相関係数の－は正の相関、＋は負の相関である。

※制御変数：性別、教育年数（本人）

表 62 より、団塊世代本人の教育年数は「クラシック音楽」と「ジャズ・ブルース」「ポピュラー音楽」に正の相関がみられ、「演歌」には負の相関がみられた。教育年数が短い団塊世代は、演歌をより好むといえる。真性団塊ジュニア世代では、演歌を除いて団塊世代と同じであった。

表 63 より、団塊世代の父母の教育年数と、団塊世代が子供の頃父母が好きだった音楽の偏相関をみたところ、父母とも「クラシック音楽」と正の相関があり、「歌謡曲」では、負の相関がみられた。

以上表 60～63 の結果から、団塊世代を取り巻く配偶者、父母、子供（真性団塊ジュニア世代）すべての教育年数は相互に正の相関をしていた。さらに、配偶者についてはデータがなかったが、それ以外は世代を超えて教育年数が長い層はクラシック音楽を好んでいることがわかった。反対に、歌謡曲や演歌を好む層は、教育年数も短かった。ここから、団塊親世代→団塊世代→団塊子世代と教育年数（学歴）は世代間で移動（継承）し、その中でも学歴が高い層はクラシック音楽の好みを世代間で継承してきたと考えられる。さらに詳しくいえば、研究Ⅱの 6-(4)-3 表 13 を参照にすると、クラシック音楽の好みは父母から影響され、青年期のクラシック音楽好きをとおして現在にも繋がっているといえる。演歌に関しては、父母から団塊世代には継承が認められたが、真性ジュニア世代への継承は確認できなかった。

(10) 団塊世代のイメージと格差意識

1. 団塊世代の世代イメージ

インターネット調査 2013 において、「団塊世代についてどのように思うか」を質問した。「非常にそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「全く思わない」の 4 点尺度のうち「非常にそう思う」「そう思う」を合計した割合を表 に男女別に示す。

表 64 「団塊世代についてどう思うか」と性別のクロス表（インターネット調査 2013）

順位	団塊世代についてどう思うか	男(250人)%	女(250人)%	全体(500人)%
1	人数が多い	94.4	92.8	93.6
2	日本の発展に寄与した	80.0	77.2	78.6
3	競争が激しかった	72.4	69.6	71.0
4	ビートルズ世代だと思う	67.2	72.0	69.6
5	ひとくくりにされたくない	70.4	66.8	68.6
6	老後の不安がある	62.4	62.0	62.2
7	格差を感じる	62.4	54.8	58.6
8	団塊世代でよかった	46.8	45.2	46.0
9	経済不況で苦労した	44.8	39.6	42.2
10	学生運動に関心があった	38.0	32.0	35.0

※数値は「非常にそう思う」と「そう思う」の割合の合計

表 64 より、団塊世代のイメージについて、「人数が多い」は 93.6%もの調査対象者が感じていた。「日本の発展に寄与した」と思っている人も多く、青年期以降の日本を牽引し発展させてきた自負が感じられる。「競争が激しかった」は他のアンケートでも上位に上がる項目で、これは「受験戦争」に繋がっているケースが多かった。「ビートルズ世代だと思う」は、団塊世代の世代観の中で、音楽に関するものだが、フォークソングやグループサウンズと並んで、青春時代に触れた音楽を自らの世代観にしているところが団塊世代の特徴である。「一括りにされたくない」は、研究 I のインタビュー調査で聞かれた言葉である。「団塊世代」とい呼び方で世代を一括りにされがちだが、本当は個々にかなり異なっており、格差も存在するとインタビューからも感じられた。「老後の不安」はどの世代にも存在するが、特に高齢期にさしかかった団塊世代にとって、切実な問題として捉えられている。本研究のテーマにもなっている格差について、「格差を感じる」団塊世代の割合は 6 割近くで、特に男性に多い。また、団塊世代の 46%が「団塊世代でよかった」と自らを肯定している。しかし、日本の発展に寄与したのではあるが、バブル崩壊以降の経済不況では 42.2%が苦労したと回答している。団塊世代は経済を中心として良い時・悪い時を経験し乗り越えてきた世代でもある。また、「学生運動への関心があった」35.0%のうち、55.8%が大学卒業者であった。中学・高校卒業者は 27.0%で、大学生以外にも興味関心をもった団塊世代は思ったより多く存在していた。

さらに、6-(4)-3 表 14 の「団塊世代の世代観・ノスタルジアと青年期に好きだった音楽の関係」で、「競争が激しかった」「ビートルズ世代だと思う」「学生運動に関心があった」の 3 項目と青年期に好きだった音楽との相関関係を分析した。特に、「ビートルズ世代だと思う」「学生運動に関心があった」は、第 1 主成分である軽音楽系の音楽と有意な相関がみられた。団塊世代の青年期の特徴的な社会現象が、当時の新しい音楽と強く結びついていると感じられた。

2. 団塊世代を感じる格差について

インターネット調査 2013 で、「あなたはどんな格差を感じますか。特に大きいもの 2 つまでお答えください。」という格差についての質問をした。回答は格差が大きいもの 2 つまでという設定のため、結果を%で表すことは難しいことから、男女それぞれのべ人数で示す。

表 65 より、団塊世代が感じている格差のうち突出して多いのは「経済格差」である。経済格差を感じている 315 人を分析したところ、世帯年収は平均値が約 400~450 万円、中央値が 350~450 万円、最頻値は 250~350 万円であった。階層帰属意識は、上流意識が 13.7%、中流意識が 44.1%、下流意識が 42.3%であり、平均よりも下流意識の層が多かった。

「世代間格差」が2番目であったことは意外な結果であった。この理由について、推測にすぎないが、団塊世代はいつも人数が多い特殊な世代と言われ続けてきたことから、自分たちの世代が他世代と比較され、世代間の格差をより強く感じてきたからではないかと考える。

表 65 「どんな格差を感じるか」と性別のクロス表(インターネット調査 2013)

(大きいもの2つ選択)

	どんな格差を感じるか	男(のべ人数)	女(のべ人数)	全体(のべ人数)
1	経済格差(賃金・年金・資産など)	158	157	315
2	世代間格差	82	67	149
3	学歴格差	49	42	91
4	地域間格差	48	43	91
5	階層間格差	36	36	72
6	性別による格差	14	50	64
7	健康格差	25	24	49
8	医療格差	13	12	25
9	その他	4	7	11

※男性 250 人 女性 250 人 全体 500 人

本研究では、学歴と音楽との関連がよくみられたが、学歴格差を感じている層は91人であった。この91人の教育年数の平均値は13.17年であり、そのうち高校卒業者は50人であった。世帯年収は平均が400万円前後であり、階層帰属意識は、上流意識が15.4%、中流意識が46.2%、下流意識が38.5%であった。このことから、学歴格差を感じている層は、教育年数が団塊世代の平均値13.91年より短く、世帯年収も団塊平均の約450万円より低く、階層帰属意識も下流意識が平均の33.8%より多く、やや階層性が高くない層であるという結果となった。

「性別」による格差は、やはり女性の方がずっと多く、男女平等の教育下で育った団塊世代においても、男女の格差は横たわっているといえる。

(11) 今後団塊世代に求められる音楽（インターネット調査 2012 の分析）

1. 団塊世代に求められる音楽ジャンル

インターネット調査 2012 で、「今後どのような音楽ジャンルが団塊世代に支持されていくと思いますか。2 つまでお答えください。」という質問をした。選択肢は 10 種類であり、その中の 2 種類を選択している。複数回答のため、数字はのべ人数で男女別に表 66 に示す。

表 66 今後団塊世代に支持されると思う音楽ジャンル（インターネット調査 2012）

順位	音楽ジャンル	男 (のべ人数)	女(のべ人数)	全体 (のべ人数)
1	歌謡曲・演歌	303	254	557
2	フォークソング	179	184	363
3	クラシック音楽	87	109	196
4	日本歌曲・唱歌・童謡	88	107	195
5	映画音楽	54	99	153
6	ジャズ・ブルース	79	54	133
7	海外のポップス	56	74	130
8	ロック	19	17	36
9	その他	10	6	16

※男性 500 人 女性 500 人 全体 1000 人

(2 つまで回答)

表 66 より、今後団塊世代に支持されると思う音楽ジャンルで断然多かったのは「歌謡曲・演歌」であった。これはインターネット調査 2013 で主成分分析した第 2 主成分と同じである。歌謡曲と演歌を別けて質問していないので内訳はわからないが、これらは日本の旋律や情緒のある歌詞が多く用いられている。団塊世代の根底に流れる日本的な音楽への郷愁が支持される理由なのであろうか。2 番目は「フォークソング」である。青春時代に触れた音楽で今なお好きな音楽は、今後も支持されていくのであろう。次いで、「クラシック音楽」や「日本歌曲・唱歌・童謡」がきている。これらの音楽は古くからの伝統があり、今後も繰り返し聴いたり、歌い継がれていく音楽である。さらに、「映画音楽」「ジャズ・ブルース」「海外のポピュラー音楽」「ロック」と続く。これらは第 1 主成分の音楽ジャンルである。性別では、「歌謡曲・演歌」「ジャズ・ブルース」は男性に、「クラシック音楽」「日本歌曲・唱歌・童謡」「映画音楽」「海外のポップス」は女性に多く支持されている。

2. 団塊世代に求められる音楽のイメージ

次に、「今後どのような雰囲気音楽が団塊世代に支持されていくと思いますか。」を質問した。こちらも、ひとり2つまでの回答であるので、のべ人数で表す。この際、研究Ⅰのインタビューにおいて、「音楽とは」という語りの中から抽出されたものを選択肢とした。

表 67 今後団塊世代に支持されると思う音楽のイメージ(インターネット調査 2012)

順位	支持される音楽イメージ	男 (のべ人数)	女 (のべ人数)	全体 (のべ人数)
1	人生と重なる懐かしい音楽	273	273	546
2	よく聴いたことがある音楽	223	231	454
3	癒しを感じる音楽	225	221	446
4	楽しく元気になる音楽	111	146	257
5	歌詞に英語が少ない歌	19	20	39
6	新しいイメージの音楽	21	13	34
7	歌詞に英語などが多い歌	11	10	21
8	その他	7	2	9

※男性 500 人 女性 500 人 全体 1000 人

表 67 より、今後団塊世代に支持されると思う音楽のイメージで突出して多かったのは、「人生と重なる懐かしい音楽」である。人生の多くの場面で関わってきた音楽やノスタルジアを感じる音楽が団塊世代に最も愛される音楽であるといえる。次いで、「よく聴いたことがある音楽」と「癒しを感じる音楽」である。これも、前述の「人生と重なる懐かしい音楽」とリンクすると思われる。そして、表 66 で上位にきた「歌謡曲・演歌」「フォークソング」「クラシック音楽」「日本歌曲・唱歌・童謡」は、これらの要素を兼ね備えている音楽ジャンルだといえるだろう。性別では、あまり大きな差はないが、女性に「楽しく元気になる音楽」が男性より多く支持されていた。

本研究Ⅰにおいて、インタビューの結果として、「団塊世代が 50 歳代前後にさしかかると、青春時代の音楽や子供の頃に慣れ親しんだ音楽に懐かしさを感じるようになってくる。その『ノスタルジアとしての音楽』に『回顧・回帰』しようとした。聴くだけでなく、ギターとか『楽器などの再開』も見られた。」という結果図が得られた。研究ⅠとⅡの結果から、団塊世代の音楽との関係として、「ノスタルジア」がキーワードであると考えられる。

(12) 研究Ⅱのまとめと考察

研究Ⅰの結果から、「団塊世代における格差・階層意識は、音楽の受容とも関連があるのではないか。」という問題意識がみいだされた。この問題意識をもとに、研究Ⅱでは格差意識を階層意識と考え、団塊世代の誕生から現在までの音楽の受容と階層意識の関連を中心に、4種類の調査データを用いて統計解析した。手法としては、重回帰分析やロジスティック回帰分析、主成分分析、パス解析などである。ここでは、データの利用が可能な時期に制限されたが、各段階において、社会背景や音楽メディアの進歩を取り混ぜながら、音楽の受容や階層性を中心にまとめることができた。

研究Ⅱをとおして注目することは、団塊世代の父親の存在である。まず、子供の頃の階層性を表す変数として「15歳頃の世帯収入レベル」に注目した。団塊世代が15歳頃の世帯収入レベル（生活レベル）は、図10（p32）のようなパス図となった。父親の教育年数が世帯収入レベルに関連し、さらに、世帯収入レベルが子供の頃の父親の音楽聴取頻度やレコードやテレビの聴取、音楽の習い事に関連していた。次に、表12（p40）のロジスティック回帰分析の結果、団塊世代が青年期に好きだった音楽のうち「クラシック音楽」と「フォークソング」に「子供の頃の父親の音楽聴取頻度」が関連していた。しかし、母親の音楽聴取頻度はどの音楽ジャンルにも関連していない。

また、JGSS-2008の「娯楽の頻度：音楽鑑賞」への重回帰分析では（表34 p71）、世代比較した結果、団塊世代のみ父親の教育年数に関連がみられた。さらに、その「娯楽の頻度：音楽鑑賞」は「好きな音楽：クラシック音楽」とともに「階層帰属意識」に関連していた。これも団塊世代のみの特徴である。団塊世代の音楽聴取頻度は2013年では、「娯楽の頻度：音楽鑑賞」に「子供の頃の父親の音楽聴取頻度」が関連していた。さらに、団塊世代男性における階層帰属意識へのパス図（図15 p99）では、父親の教育年数が15歳頃の世帯収入レベルに関連し、その15歳頃の世帯収入レベルが階層帰属意識に関連していた。以上のことから、団塊世代の階層帰属意識や音楽環境・嗜好には「父親」が大きく影響していることがみえてきた。これらをまとめると図17のような関連図になった。（2つの調査をまとめたためパス解析は不可能である。）

一方、団塊世代の母親の影響については、父親ほど多くはない。表12の青年期に好きだった音楽へのロジスティック回帰分析では、「演歌」と「フォークソング」が好きな団塊世代の母親は、教育年数が短かいという結果になった。また、表25（p57）のように、団塊世代の子育て期において、子供の頃の母親の音楽聴取頻度が多かった団塊世代は、自らも「結婚後家族で音楽を楽しんだ」という結果になった。しかし、表13（p43）のように、父母とも好きだった音楽は子供にも影響を及ぼしており、両親からの音楽的影響は大きかったのではないかと考えられる。特に、学校の音楽教育に順応し、青年期にクラシック音楽が好きだった団塊世代は、自分の子供にも積極的

に音楽教育を施し、家族で音楽を共有していた。音楽教育の場面にも正統的文化の継承という階層性をみることができる。

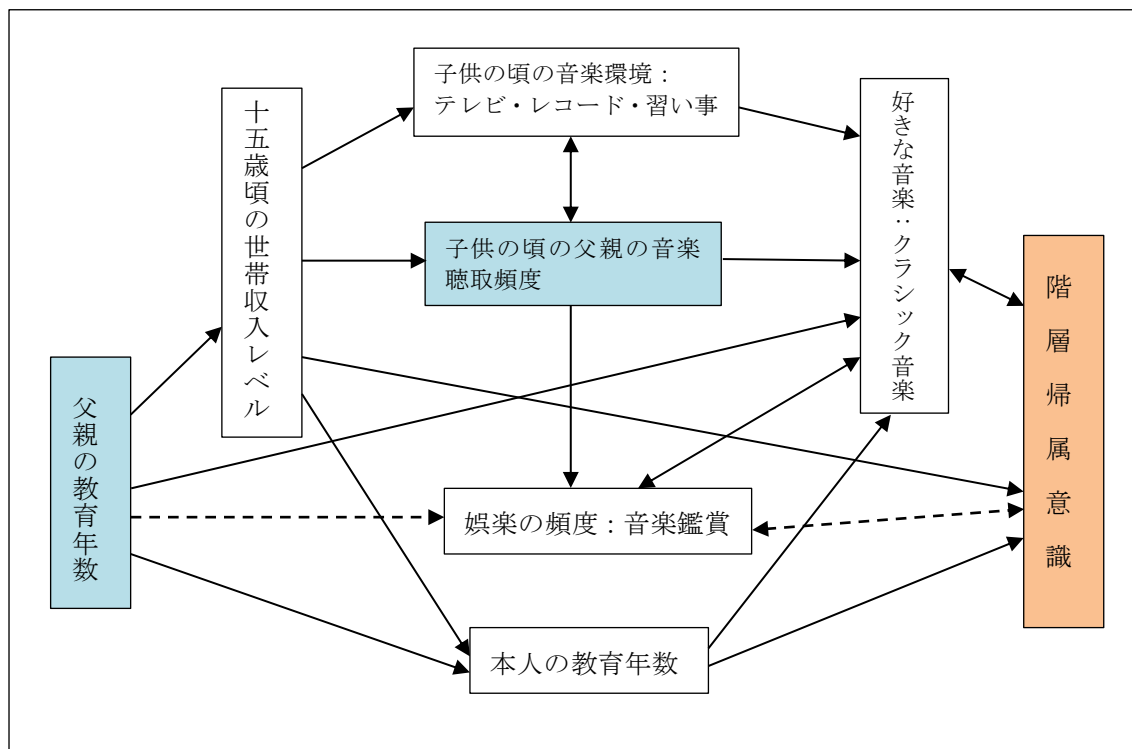


図 17 団塊世代の父親の影響の関連図（JGSS-2008、インターネット調査 2013）

※正の関連 ———▶ 正の相関 ◀———
 団塊世代のみの関連 - - - -▶ 団塊世代のみの相関 ◀- - - -▶

次に、団塊世代の階層帰属意識について、父親以外の関連要因について考察する。これについては、データ取得が可能な JGSS-2003 以降である。その後、JGSS-2008 とインターネット調査 2013 の調査を利用し、5 年間隔でみていく。この 3 つの時点で共通するのは、「世帯年収」が階層帰属意識と強く関連していたことである。これは、他の世代にも見られる現象である。しかし、団塊世代においては、この 10 年間に世帯年収が激変している。現役→定年退職→非正規雇用→完全退職という就労形態の変化を経験した団塊世代は非常に多い。6-(8)-4 (p103) で述べたように、2003～2013 年の 10 年間で、世帯年収の最頻値は 400～500 万円も減収している。これは、団塊世代の加齢効果である。さらに、2008 年はリーマン・ショックの直後という調査のため、その社会的影響も少なからず受けていると考えられる。この 10 年間の加齢や社会的変化に伴い、階層帰属意識に関連する要因が微妙に変化してきている。特に、かなりの団塊世代がリタイアしている 2013 年の調査では、世帯年収が激減しているにもかかわらず、特に男性の場合の「就労の有無」が階層帰属意識に負の関連を示したことである。

つまり、無職者（主に定年退職者）の方が階層帰属意識が高いという結果となった。これについては 6-(8)-4 (p100) で考察したように、定年退職者（学歴が高い）の多くが金融資産や固定資産を所有し、さらに現役の頃のステイタスや階層意識を引きずっていることの表れではないかと考えられる。

また、2003 年、2013 年では本人の教育年数は階層帰属意識に直接関連がみられなかった。逆に 2008 年では本人の教育年数が直接関連していた。2003 年は多くの男性が有職者で正規雇用に就いており、全体的に所得や地位が高かった。この状況で多くの団塊世代が経済的に安定しており、学歴格差が階層帰属意識に直接影響を及ぼさなかったのではと考える。2008 年になると団塊世代は 60 歳前後になり、定年退職や非正規雇用への移行など就労形態が激変した時期である。人数が多いゆえに正規雇用へ再就職することは厳しい現状であった。さらに、景気の低迷が重なり、再就職の口は減り、所得も減り、定年格差がみられた時期であった。こうした混乱の時期に自分の階層をはかるものは学歴であったのではないだろうか。これについては、団塊世代の前の「戦前・戦中世代」にも 5 年前の 2003 年（「戦前・戦中世代」の定年退職期）に同じ現象が起きていた。このような現象は、団塊世代に限らず、定年退職前後に起こりやすいのではないかと推測する。そして、2013 年には本人の教育年数が階層帰属意識に直接関連しなくなった。世帯年収に間接的に関わっているということになったが、周りの団塊世代がほぼりタイアし、就労による格差がなくなってきた状況では、教育年数(学歴)以上に経済的要因が階層帰属意識を決定する傾向が強まるのであろうか。以上のように、この 10 年間で団塊世代（特に男性）の就労形態の変化や社会情勢とともに階層帰属意識の要因に変化があったことは注目に値する。

一方、女性は 2008 年、2013 年と配偶者（夫）の教育年数が階層帰属意識に直接関連していた。団塊世代の定年退職が本格化した 2008 年頃から、女性は夫の学歴を自らの階層帰属意識に投影していると考えられる。（2003 年ではこの現象はみられなかった。）団塊世代の女性は専業主婦が多く、結婚後経済的に夫に頼る生活をしてきた。そして、高齢期にさしかかり、夫が定年退職もしくは非正規雇用になり世帯年収が減った現状において、夫の学歴が階層帰属意識に関連するという女性特有の現象がみられた。この現象は、団塊世代周辺の世代の女性にもみられた。

そして、階層帰属意識の男女差に伴い、2013 年では、男性はコンサートに行くこと、女性はカラオケをすることに階層性の高さがみられた。2003 年でも、カラオケが階層帰属意識に関連しており、特に「生活水準向上の機会」と大きく正の相関関係がみられた。この結果は、他世代との比較により、団塊世代のみの特徴であった。カラオケは友人とコミュニケーションを築け、自己表現の場でもあり、一括りにされたくない団塊世代にとって、カラオケで満足感を得られること、それが生活水準向上のひとつの機会でもあり、階層性につながるのではと考えられる。

次に、音楽嗜好と階層性について考察する。インターネット調査 2013 の音楽ジャンルは、青年期と現在ともに主成分分析をした。第 1 主成分は、海外や国内の軽音楽系、第 2 主成分は歌謡曲や演歌の大衆音楽、第 3 主成分はクラシック音楽（正統音楽）に分かれた。また、「青年期に好きだった音楽」と「現在好きな音楽」をそれぞれに二項ロジスティック回帰分析を行った。さらに、JGSS-2008 では好きな音楽と基本属性のパス図も作成した。これらの分析からみえてきたことは、音楽ジャンル嗜好にも様々な違いがみられたことである。以下に、各音楽ジャンルに対して、どのような層がより好むかを記載する。

クラシック音楽を好む層・・・女性、教育年数が長い、大都市に住む、CD をよく聴く、コンサートによく行く

ポピュラー音楽を好む層・・・女性（JGSS=2008 の場合）、教育年数が長い、大都市に住む、CD や DVD ・ビデオをよく聴く（見る）

演歌を好む層・・・男性、教育年数が短い、世帯年収が低い、無職が多い、15 歳の頃田舎に住んでいた、現在大都市に住んでいる（JGSS-2008 の場合）、音楽をあまり聴かない、カラオケによく行くがコンサートにはあまり行かない、管理職の男性

以上より、クラシック音楽とポピュラー音楽には親近性がみられるが、演歌は他の二つとは全く異なる層に好まれている。この結果からみると、クラシック音楽とポピュラー音楽を好む層は概して階層性が高く、演歌を好む層は階層性が低いといえるのではないか。

また、「娯楽の頻度：音楽鑑賞」と「好きな音楽」との相関において、音楽鑑賞をよくする層は、クラシック音楽、ロック、ジャズ・ブルース、ポピュラー音楽をよく聴くが、演歌を好む層はあまり音楽を聴かないという結果になった。この理由として、演歌を好む層は世帯年収が低い傾向にあり、時間やお金をかけてまで音楽鑑賞をする余裕がないとも考えられる。また、余裕のある団塊世代にとっても、特に 2008 年時点で、演歌は能動的に聴く音楽というよりは、カラオケや宴会でのコミュニケーションのためのツールという要素も大きかったのではないだろうか。特に、日本の管理職男性の大衆文化志向は仕事上で人間関係を円滑にするため必要であり、団塊世代にも男性にこのような傾向がみられた。管理職男性（課長級以上で高学歴）の 60.0% が演歌好き（JGSS-2008）であり、これは他世代に比べ突出して多い割合だった。団塊世代についていえば、「演歌は仕事をする上で必要」であるとともに、「本当に演歌が好き」という層が他世代に比べ多いからだと考えられる。

しかし、これは各音楽ジャンルを単独で分析した結果であり、「クラシック音楽も演歌も好き」という複数の音楽ジャンルを好む団塊世代も存在し、階層性については

一概にいえない場合もある。6-(8)-3 (p93) で複数嗜好のいろいろなケースを分析した結果、「演歌>クラシック音楽=歌謡曲 (J-POP) =海外のポップス」という影響力 (どの音楽ジャンルの関連要因に近い) の強弱が導かれた。ロックに関しては、「演歌=ロック>海外のポップス、しかし、クラシック音楽>ロック」であった。また、ジャズ・ブルースに関しては、「演歌>ジャズ・ブルース>クラシック音楽=海外のポップスで、ジャズ・ブルース=ロックしかし、歌謡曲 (J-POP) >ジャズ・ブルース」と複雑な関係がみられた。以上から、複数の音楽ジャンルを好む場合、演歌の影響力は他の音楽ジャンルに比べて強いものがあると考察された。(ただし、複数嗜好の場合、演歌の教育年数の関連はみられなくなった。) おそらく、演歌は日本古来の旋律を受け継ぎ、歌詞もきわめて日本的であり³⁴、そうした長い歴史のある音楽が日本人に支持されてきたからだと思われる。団塊世代の音楽嗜好にも根底には、日本の音楽が根強く流れていると考えられた。しかし、団塊世代を境に、後の世代から演歌を好む層が激減していった。これは、団塊世代より後の世代の両親は青年期に 1950 年代の海外のポップスを聴いてきた世代で、それが子供に継承されていったことや、1958年に学習指導要領(音楽科)が改訂、61年に実施され西洋音楽が多く共通教材になったこと、そしてテレビやレコードが普及し西洋的な新しい音楽を身近で聴くことができるようになったことが考えられる。この演歌の変化から、「団塊世代は演歌を好む最後の世代」といえるのではないか。

また、JGSS-2008 において他世代と比較したところ、演歌に団塊世代のみの特徴がみられた。演歌を好む層は、15歳の頃地方に住んでいて、その後大都市に移動し住みついた人たち、さらに教育年数が短く世帯年収も高くない人たちが多かった。ここから、いわゆる団塊世代周辺にみられる集団就職の人たちが多く含まれると推測する。このように社会背景が音楽嗜好にも影響していることは大変興味深い。

世代間の移動という観点からは、教育年数(学歴)において、団塊親世代→団塊世代→団塊子世代と正の相関がみられた。また、クラシック音楽の好みも教育年数と正の相関をし、同じように継承されていた。

以上研究Ⅱにおいて、様々な統計による分析から、団塊世代の音楽受容の特徴やその階層性を見出すことができた。そして、研究Ⅰで生成された問題意識である「団塊世代の格差・階層意識は彼らの音楽受容とも関連があるのではないか。」は検証されたといえる。さらに、他世代との比較から団塊世代のみの特徴(上記で下線を引いた部分)もいくつか見出され、団塊世代の音楽受容と階層性との関連は他世代と比べより顕著であると考察された。

次の総合考察では、研究Ⅰと研究Ⅱの結果をもとに質的・量的両視点から考察していく。

7. 総合考察

研究Ⅰのインタビュー調査から見えてきたことの中で最も強く感じられたことは、団塊世代が「競争社会」に生きてきたことであった。人数が多いことがその根源であり、そこから図6(p19)のような関係図ができあがっていった。中には、「団塊世代は一括りにされるが凄い階層がある。社会に有用な働きができる人とできない人だ。」と語る調査対象者も存在した。日本社会を中心となって牽引してきた団塊世代の中には、「日本の発展に寄与した」という自負とともに、一括りで捉えられがちな団塊世代には、見えにくい形で格差・階層意識が存在すると感じられた。研究Ⅱのインターネット調査2013においても、団塊世代は様々な格差を感じており、特に「経済格差」が約6割を占めていた。「老後の不安がある」にも約6割が「はい」と回答している。こうした将来への不安は、高齢期を迎えた団塊世代の今後の課題となりつつある。

インタビューでは、「自分にとって音楽とは何か」という質問を行い、その語りを分析ワークシートで分析した。生成された概念のうち、「時に格差を感じる概念がある」という概念に注目した。音楽に触れる時、他者との関係において、レベルの違いなど格差を感じる概念があるということである。この結果から、「団塊世代における格差・階層意識は、音楽の受容とも関連があるのではないか。」という問題意識が見出された。そこで、この問題意識を本研究のメインテーマとした。このテーマを研究するにあたり、団塊世代がどのように生き、どのように音楽を体験してきたかが重要なポイントとなった。

本研究の研究Ⅰでは、インタビュー調査2010による質的な分析で音楽体験の語りを構造化し、結果図を作成した。これにもとづき、研究Ⅱでは、大規模社会調査であるJGSS-2003とJGSS-2008、さらに、筆者が実施したインターネット調査2012、2013のデータを用い統計解析を行った。このように、質的研究と量的研究の両視点からこの問題意識をみていくこととした。詳細な分析結果はすでに研究Ⅰ、Ⅱの考察で述べている。これらの結果を総合して、団塊世代における音楽受容の特徴と階層性との関連を中心に以下にまとめていきたい。

研究Ⅱでは、団塊世代の誕生から現在まで時系列で音楽体験を分析した。格差・階層意識をはかるデータは「階層帰属意識」であった。団塊世代が子供の頃に関しては、「15歳頃の世帯収入レベル」を採用した。本来、「格差」と「階層帰属意識」は同一の定義ではない。「格差」は同類のもの間における量的に差異がある状態であり、「階層帰属意識」は自分がどの社会的階層に属しているかという主観的、個人的な意識である。しかし、本研究では、団塊世代の「格差・階層意識」に焦点を当てていることから、これを個人の意識レベルである「階層帰属意識」と同等の定義として分析を行うこととした。そして、この子供の頃の階層意識である「15歳頃の世帯収入レベ

ル」を従属変数とした重回帰分析や、さらに発展してパス解析（構造方程式モデリング）によるパス図を作成した。

まず、団塊世代が子供の頃から青年期において、「父親」が大きく影響していることが見出された。団塊世代の父親の特徴として、三浦（2005）は、「団塊世代の父親の多くが復員兵で、見合い結婚し、『封建的』『男尊女卑』『家父長制的』な価値観が色濃く残っている。」³⁵と述べている。典型的な保守的父親像である。まるで音楽とは関わりのなさそうな父親像ではあるが、本研究をとおして父親と音楽の関わりを調査したところでは、無意識としても、後の団塊世代の階層帰属意識や音楽の受容に影響を及ぼしていた。特に、団塊世代の特徴である、子供～青年期における音楽メディアの進歩（ラジオ・テレビ・レコード・テープレコーダーという鑑賞方法の劇的な変化）につれて、教育年数が長く経済力のある父親は、音楽が聴ける新しい機器を購入していった。「お父さんはテレビ、ステレオや楽器を買ってくれた。」また、この頃は、家父長的な家庭が多かったため、「ラジオやテレビのチャンネル権は父親にあった。」とインタビューで語られた。そして、そのような父親の音楽聴取頻度は高く、後の団塊世代の音楽聴取に結びついていった。こうした点から、「団塊世代は父親の思い出やイメージが音楽と結びついている世代」であるといえよう。ただし、「15歳頃の世帯収入レベル」が低く音楽的環境に恵まれなかった団塊世代も多い。そのような層は現在の階層帰属意識も高くない傾向にある。生まれた家庭での経済的優劣が現在まで直接・間接的に影響を及ぼし、それは階層意識や音楽の嗜好（正統音楽や大衆音楽の嗜好）にも関連しているという「機会の格差」を考慮する必要がある。

団塊世代は、いくつかのアンケート調査において、青年期に流行した音楽（フォークソング、グループサウンズ、ビートルズ）で自らの世代観を表現している。本研究においても、インタビューでビートルズなどについて語られ、統計的にも「青年期の音楽にノスタルジアを感じる」割合が82.6%と突出して多かった。この音楽ブームと学生運動が同時期に起こり、団塊世代の青年期は高度成長期であるとともに、政治的・社会的・文化的に激動の時代であった。この時期の青年層には独自のサブカルチャーが形成されていった。ビートルズという斬新な音楽もそのひとつで、その後の日本のポップスやロックに影響を及ぼしていった。1966年のビートルズ日本公演の頃はまだ熱狂的ではなかった若者も、その後多くがゆっくりとビートルズを好きになっていき（語りの分析結果）、現在自らの世代を「ビートルズ世代」と表現する団塊世代は約70%も存在する（研究Ⅱ）。三浦（2005）は、「ビートルズは世代結束のシンボル」と述べている³⁶。そして、ビートルズ好きは、子供の頃大きな都市に住んでいた層、CDをよく聴く層が多いが、その他の階層性や性差はほとんど見出されなかった。ビートルズはどの階層にも好まれ、さらにメディアで「団塊世代はビートルズ世代」だと刷り込まれてきたことも階層性を目立たなくさせている一因と考えられる。インタビ

ューでも語られたが、彼らは青年期に斬新な音楽を受容していったことから、「団塊世代は新しい音楽を自分たちの手にしていった世代」（語りの言葉を引用）といえるのではないだろうか。富貴島（2008）は、「当時の若者（独身貴族）の三種の神器は『ステレオ、楽器、カメラ』であり、これは仲間意識と連帯感の象徴でもあった。」と述べている。この中に音楽関係はステレオ、楽器の二つが入っており、当時、音楽をすることは若者の間でステイタスであったと考えられる。

青年期に好きだった音楽へのロジスティック回帰分析を行った結果、青年期のクラシック音楽嗜好には、ハイカルチャーな両親から継承された高い階層性がみられた。反対に、演歌嗜好にも親からの継承がみられたが、総じて階層性は高くなかった。

団塊世代は20～30歳前後で多くが結婚をし、生まれた子供たちは団塊ジュニア世代（正確には真性団塊ジュニア世代）と呼ばれる。団塊世代はアメリカ風のニューファミリーを理想として家庭を築いていった。この1970年代は「一億総中流時代」ともいわれていた。日本国民のほとんどが中流意識を持っていたと解釈されるが、本当のところは均一化が進んだのではなく、「地位の非一貫性」の増大によって「多様な中間層」が増え、階層性が見えにくい時代であったといわれる³⁷。

団塊世代の子育て期（30～40代）は、1980年前後から徐々に「格差拡大」が進んだ時期である。橋本（2009）は、「格差拡大は、二度にわたるオイルショック、高度経済成長の終焉、プラザ合意以降の円高の下での企業経営の変化、バブル景気とその崩壊という一連の出来事と密接な関係がある。」と述べている³⁸。本研究では、この子育て期において、「子供たちへの音楽教育」や「家族で音楽を楽しんだ」への関連要因を分析した。学校の音楽教育に順応し、青年期にクラシック音楽が好きだった団塊世代は、自分の子供にも積極的に音楽教育を施し、家族で音楽を共有していた。格差が拡大する時期において、このような階層性の高い団塊世代は子供への音楽教育や音楽の共有に熱心であったと考察された。1985年のSSM調査では、「一部の階級で、親から子供へと階級所属が受け継がれる固定化傾向がみられる」（橋本2009）³⁹という結果も報告されている。音楽教育もその傾向のひとつとして捉えられるであろう。

さらに時代は進み、団塊世代の退職期にあたる2007～2012年は就労形態が大きく変化した時期であった。その中でも大きく変化したのは収入であった。定年退職前（現役時代）に比べると完全リタイア後では世帯年収が激減している。それに伴い「階層帰属意識」への関連要因にも変化がみられた。詳細は研究Ⅱで述べたので省略するが、特に景気が低迷し、本人の就労状態が揺れ動いている時期（2008年頃）に教育年数（本人と配偶者）が階層帰属意識に直接関連していた。賃金の学歴間格差が生じた時期と思われる。この現象は、団塊世代よりも前に退職を迎えた「戦前・戦中世代」にもみられ、世代効果というよりも加齢による効果と考えられる。ただし、団塊世代の特徴は、定年退職前後の人数が格段に多かったことと、この時期にリーマン・ショック（2008

年)を経験している点で前世代とは異なり、社会背景が大きく影響していたといえる。また、団塊世代(特に男性)の音楽鑑賞の頻度においても、2008年は他の時期に比べかなり減少していた。就労状態や社会背景が音楽鑑賞の頻度にも影響したと考察された。この時期の「好きな音楽」のうち、「クラシック音楽」は階層帰属意識と正の関連をしていた。しかし、団塊世代の好きな音楽の第1位は「演歌」であり、特に男性は70.5%で他のジャンルと比べと突出して多かった。人生の節目に翻弄された団塊男性の「演歌好き」は、何故か哀愁を感じる結果であった。

2013年では、団塊世代の男性の場合、定年退職者(学歴は高め)の方が有職者(非正規労働者を含む)よりも階層帰属意識が高いという結果になった。収入はかなり減少したにもかかわらず、所有している資産や過去の社会的地位などで自らの階層をはかっていると考えられた。また、女性に関しては、「配偶者(夫)の教育年数」が階層帰属意識に直接関連していたことが特徴である。これは団塊世代周辺にみられる現象であり、この世代の女性は専業主婦が多く、長年経済的に夫に依存してきたことから、若い世代に比べ夫の学歴が階層帰属意識に直接関連したと考える。これらの結果から、2013年現在の団塊世代は、収入や資産のみでなく、過去のステータスや配偶者の学歴からも自らの階層を意識しているといえる。これは加齢に伴う現象であるとともに、ここから、団塊世代特有の激しい競争社会で戦い続けてきた男とそれを支えてきた専業主婦である妻の自負という構図がみえてくる。

さらに、女性の場合は「カラオケ」をよくする方が階層帰属意識も高いという興味深い結果となった。このカラオケの現象は、2003年において、団塊世代のみの特徴であった。インタビューでは、調査対象者が「まさにカラオケなんていうのは一種の接待なのかもしれない。友だち同士とか人と人のつながりの手段としてのお付き合いではないか。」と語っていた。カラオケは他人との交流の場であり、自己表現の満足感が得られ、さらに団塊世代の特徴として「生活水準向上の機会」と捉えている点で階層帰属意識と結びつくと考えられる。

次に、団塊世代の音楽嗜好について考察する。2008年では、「クラシック音楽やポピュラー音楽が好き＝教育年数が長い」「演歌が好き＝教育年数が短い、世帯年収が低い」という結果であり、音楽嗜好の階層性がみられた。2013年では、「海外のポップスが好き＝教育年数が長い」「演歌が好き＝教育年数が短い」となり、学歴に関してはクラシック音楽の階層性が目立たなくなった。海外のポップスに関しては、多くの歌詞に英語が使用されているため、学校教育との関連がみられると考える。いずれにしても、本研究をとおして演歌の階層性は低いといえる。片岡(1998)も、「クラシック音楽は、学校制度が保証した正統的な音楽ジャンルである。・・・また、演歌は大衆音楽としてブルーカラー層(特に男性、学歴が低い)に好まれる。」と述べている。また、団塊世代のみの現象として、演歌は、子供の頃地方に住み、その後大都市

に移動した層（特に、教育年数が短く、世帯年収が高くない層）に多く好まれていることが挙げられる。このことから、中学や高校卒業後、集団就職で地方から大都市に移動した人々がより演歌を好むのではないかと推測される。演歌には恋愛の歌以外に、ご当地ソング、望郷もの、人生もの、母ものも多く、そうした歌を都会に出てきた人々は聴いたり歌ったりして、故郷を思い出したり慰められたりしたのかもしれない。

さらに、団塊世代の特徴として、演歌を好む割合（団塊世代は 66.8%）が、次の断層世代に移行する際に半減し（34.7%）、以降の世代で激減していたことである。これは、加齢による効果も考えられるが、それ以上に団塊世代以降から演歌嗜好が激減し西洋化していった背景に、育った家庭環境、学校教育の学習指導要領（音楽科）の改訂、音楽メディアの進歩などの社会背景が大きく関与していると考察された。この現象をみると「団塊世代は演歌を好む最後の世代」といえるのではないか。

また、音楽嗜好の性差として、女性はクラシック音楽を、男性は演歌をより好んでいた。片岡（2002）は、「文化消費のジェンダー差は、女性の方がハイカルチャー志向であり、女性に大きな文化消費の差が存在する。」さらに、「文化資本は女性を媒介として世代間再生産され、高地位の男性は高い文化資本を配偶者に求めるという形での婚姻を通じて、次世代への文化資本伝達と社会的再生産を果たす。」と述べている。女性は婚姻でより高地位の男性を獲得し、子供に繋ぐための手段として、クラシック音楽のような正統的音楽を好む傾向にあるということだが、確かに暗黙のうちにそういう価値観を親や社会から植えつけられて育った影響も考えられる。しかし、それ以上に、女性の本来備わった感性がクラシック音楽にマッチしているというのが一番の理由ではないだろうか。

男性の演歌嗜好については、片岡（1998）は、「演歌は学歴が高い男性にも好まれている。日本の管理職男性の大衆文化志向は管理をする上での重要な要件である。」としている。団塊世代にも男性にこのような傾向がみられた。管理職男性（課長級以上で高学歴）の 60.0%が演歌好き（JGSS-2008）であり、これは他世代に比べ突出して多い割合だった。しかし、団塊世代についていえば、「演歌は管理をする上での重要な要件」であるとともに、「本当に演歌が好き」という層が他世代に比べ多いからだと考えられる。

音楽嗜好の最後に、「団塊世代の音楽趣味は雑食的」（三浦2006）であることが本研究でも考察された。「クラシック音楽も演歌も歌謡曲も海外のポップスも好き」という団塊世代も存在する。以上の分析では、単一の音楽ジャンルへの関連をみてきたが、複数嗜好の場合も考慮する必要がある。いくつかの複数の音楽ジャンルを組み合わせるロジスティック回帰分析した結果、影響力の強さ（複数嗜好の内どの音楽ジャンルの関連要因が強い）は「演歌>クラシック音楽=歌謡曲（J-POP）=海外のポップス」であった。（ちなみにロックは、「演歌=ロック>海外のポップス、しかし、

クラシック音楽>ロック」であった。また、ジャズ・ブルースに関しては、「演歌>ジャズ・ブルース>クラシック音楽=海外のポップスで、ジャズ・ブルース=ロックしかし、歌謡曲（J-POP）>ジャズ・ブルース」と複雑な関係がみられた。）以上の結果から、団塊世代にとって演歌を好む層の音楽嗜好への影響力は他の音楽ジャンルに比べて強いものがあると考察された。演歌は日本古来の旋律を受け継ぎ、歌詞もきわめて情緒的であり、そうした長い歴史のある音楽が日本人に支持されてきたと思われる。「団塊世代には演歌のような日本的な音楽が根底に流れており、その上に西洋的な音楽が付け加えられていった。」と考えられる。そして、こうした演歌を好む層がいかにかくましく他の階層と戦ってきたか、音楽嗜好の影響力の強弱からも伝わってくるようだ。

次に、「階層の世代間移動と音楽の関連」について考察する。この場合、階層を推し量るものは階層帰属意識であるが、本人以外のデータが無く世代間移動を証明することが不可能であった。そこで、教育年数を階層の代表として考える。研究Ⅱ

（JGSS-2008）の結果より、教育年数（学歴）において、団塊親世代→団塊世代→団塊子世代と世代間で正の相関がみられた。また、クラシック音楽の好みも教育年数と正の相関をし、同じように継承されていた。高学歴とクラシック音楽嗜好は互いに関連し合いながら、世代間を移動していた。

ピエール・ブルデューは、著書『ディスタンクシオン』において、文化資本を有する上流階級の集団は正統的文化を好み、文化資本を有しない集団は正統的趣味を好まず大衆的趣味を好むことを統計的に実証している。裕福な家庭の子が進学等で有利というだけでなく、文化資本(上品で正統とされる文化や教養や習慣等)の保有率が高い学生ほど高学歴であることを証明した。また、「文化資本の保有率が高い高学歴の学生は、その子供も親の文化資本を相続し、同じく高学歴になる。」としている。また、ピエール・ブルデューとジャン・クロード・パスロンの共著『再生産』⁴⁰において、「教育は象徴的権力であり、支配階級のもつ文化が学校というシステムにおいて評価され、支配階級の子供も高い学歴を獲得し、高い階級へと再び再生産される。」ことを明らかにしている。

以上がブルデューの理論の一部であり、家庭環境による文化資本の保有率が高ければ、学歴も高く正統的趣味を好み、またそれは子供にも継承されていくという説はおおよそ団塊世代にも当てはまった。しかし、フランスは歴史的にも上流や下流という階級・階層がはっきりしており、「文化資本を有する上流階級の集団は正統的文化を好み、文化資本を有しない集団は正統的趣味を好まず大衆的趣味を好む。」と言えたとしても、日本社会にはすんなりとは当てはまらない。日本では、階層が存在したとしてもはっきりと線引きはできないことが多く、たとえ上流の階層でも、正統的趣味だけではなく大衆文化もともに好む傾向・雰囲気があるからである。

片岡（2008）は、ブルデューの「エリート文化 vs 大衆文化」という分極構造を「文化排他性仮説」と呼び、日本の場合と区別している。日本の文化は大衆化し、文化的に平等な社会であると言われている。片岡はそのような文化的寛容性を「文化的オムニボア」として「威信の高いハイカルチャーから、威信の低い大衆文化までの幅広い文化趣味をもつオープンな嗜好性」と定義した。団塊世代も「雑食的」にいろいろな音楽を好むことから、まさにそのような「文化的オムニボア」であるといえる。その中で唯一正統的音楽であるクラシック音楽を好む層は、団塊世代の親世代から子世代まで学歴と共にその継承がみられた。

また、片岡（2002）は、「文化資本は母親から娘へ継承される」と述べているが、本研究では、団塊世代の子供の頃の音楽的環境において、父親の関与が大きく認められた。もちろん、父親の経済力という点では同じ視点であるが、本研究において「父親の音楽聴取頻度」がその後の音楽嗜好に関連したことを考えると、父母両方の影響が文化資本の再生産に関連したと考える方が妥当である。また、経済が低迷した現在の日本において、婚姻市場では、「クラシック音楽などの正統的文化をたしなむ（コストのかかる）女性」より「資格を持って働ける女性」に価値が高まりつつある。高学歴高収入の男性に至っても、リスク回避のため妻に専業主婦を希望する男性は減少しているのが現状である。片岡の理論がそのまま当てはまらない世の中になってきている。時代背景と共に、音楽嗜好と婚姻市場の関係は変化するものであろう。

以上、本研究において、団塊世代の音楽受容（音楽聴取や音楽行動や音楽嗜好）の特徴やその中にみる階層性を様々な分析から考察してきた。質的・量的両視点による調査・分析をとおして、人数が多く競争社会を生き抜いてきた団塊世代は、強く格差や階層を意識してきたと感じた。特に、学歴格差や経済的格差は階層帰属意識と結びついていた。そして、その階層意識は音楽の受容とも関連しているという結果となった。この結果から、研究Ⅰで生成された問題意識である「団塊世代における格差・階層意識は、音楽の受容とも関連があるのではないか。」は検証できたといえる。さらに他世代との比較から、「団塊世代の音楽受容と階層性との関連がより顕著な世代」と付け加えたい（「研究Ⅱのまとめと考察」参照）。

総合考察の最後に、今後の団塊世代の音楽における方向性を考えてみることにする。今後、団塊世代に支持されると思う音楽ジャンルは、インターネット調査2012では、1位が「歌謡曲・演歌」で突出して多かった。やはり、日本的な音楽を好む傾向がみられる。次いで、2位「フォークソング」、3位「クラシック音楽」、4位「日本歌曲・唱歌・童謡」である。次に支持される音楽イメージは、1位「人生と重なる懐かしい音楽」、2位「よく聴いたことがある音楽」、3位「癒しを感じる音楽」4位「楽しく元気になる音楽」である。インタビュー調査でも、「癒し」「多様性」「ノスタルジア・継続性」「オリジナル性」が挙げられた。これらを総合すると、団塊世代が今後

求めるであろう音楽の特徴は、「人生、癒し、ノスタルジア、日本的、楽しさ」がキーワードになると思われる。

一方、内閣府の「団塊の世代の意識に関する調査結果」（2012）では、「趣味や勉強に取り組みたい」が5年後は多少減少するであろうという結果が掲載されている⁴¹。長年の日本経済の低迷に加え、2011年の東日本大震災以降、日本中が大きな不安の中で生きてきた。今後は「老年格差」が進み、経済的な不安も増し、趣味や勉強をあきらめる高齢者が増加すると予測される。本研究でも、「老後の不安がある」と回答した団塊世代は62.2%と多い。さらに、今後加齢が加わると、音楽においても、コンサートや音楽活動は控える方向に進むであろう。しかし最近では、アベノミクスによる経済効果や2020年の東京オリンピック招致が決定し、明るい話題が増えたことで、今後の音楽への需要が増えることを期待したい。

さらに、現在は、「介護時代」に突入しており、高齢者施設などで、指導者やカラオケを使った音楽療法が期待されている。今後、介護が必要となり音楽を個人の趣味としてできなくなった場合でも、音楽療法という形にシフトし、懐かしい音楽や楽しい音楽を楽しむ可能性は残されている。特に、カラオケは高齢者向けの音楽ビジネスとして現在注目されているという。団塊世代はカラオケと階層帰属意識の関連がみられることから、こうした音楽療法には積極的に臨み、一生音楽を楽しんでいけることであろう。団塊世代の今後の音楽との関わりを見守っていきたいと考えている。

8. 本研究の限界と今後の研究の方向性

本研究は、「団塊世代と音楽の関わり」という、世代研究とライフヒストリー研究と音楽社会学の合体した研究であった。特に、団塊世代の音楽受容と階層性の関連に焦点をあてたことから、階層研究にも及び、研究の視点が分散しがちになり、それをリンクさせまとめていくことは困難な道のみであった。また、団塊世代の研究をするにあたり、他世代との比較もする必要があり、そこから団塊世代特有の事象を導き出すことも容易ではなかった。本研究では、質的・量的両視点から調査・分析を行った。この複眼的な視点は、ボリュームのある団塊世代の研究には必要であったと感じている。特に、質的研究で生成された問題意識を、量的研究で検証していく形は、科学的な研究方法として妥当であったと思っている。

本研究で反省すべき点は、インタビュー調査に中学卒業者が除外されたことである。実際は中学卒業者2名にコンタクトを取り、メールでやり取りした後、面接する予定であったが、「音楽の話は特にない。」「うまく話せないからやめたい。」との意向があり中止となった。メールには、中卒であることの悔しさやその後の苦勞が書かれ、学歴の大きな壁を感じずにはいられなかった。そして、音楽との関わりにおいても、「音楽を楽しんでする暇はなかった。働くことで精いっぱいだった。」「タクシーの運転手をしながら音楽を聴いていた。」という言葉の重みを感じていた。このように、中学卒業者がインタビューに含めることができなかったことが今回の質的研究の限界であると感じている。

量的研究では、母集団が団塊世代を代表し、その傾向を推測することが可能な層化2段抽出法による大規模社会調査 JGSS-2003,2008 を利用した。また、この調査法によるデータで、他世代との比較も行うことができたが、しかし、音楽に関する変数がきわめて少なかったことが欠点である。そこで、この不足分を埋めるべく、団塊世代男女を対象にインターネット調査 2012, 2013 を実施した。その結果、音楽に関する様々なデータは取得できた。しかし、インターネット調査は、インターネットが可能な調査対象者に限定されるため、総じて学歴が高い傾向がみられた（平均教育年数が約 1.5～2.0 年の高い）。JGSS の調査とインターネット調査では母集団の散らばりが異なるという点で、その分析結果に不安が伴う。しかし、インターネット調査以外の量的研究を行使することは個人では不可能と判断し、教育年数などのギャップを常に頭に置きながら研究を続けた。

以上のような研究方法の限界が存在するが、必要に応じてそれぞれの調査の利点が活かされ、幅の広い研究が可能になったと考える。

また、本研究で取り上げた音楽行動は、主に音楽聴取と音楽ジャンル嗜好であった。

これはどちらかという受動的音楽行動である。本来音楽には、演奏や歌唱したり、作曲したり、企画したりという能動的な音楽行動も含まれる。今後は、音楽の幅を広げ、能動的音楽行動にも視点をあてる必要があると感じた。

本研究では団塊世代という特定の世代を対象に調査・分析を行ったが、本来は「人間と音楽の関わり」を社会学的に捉えていく目的があるため、全世代を対象にした研究をする必要がある。今後の具体的な研究の方向性は、団塊世代の今後を追っていくとともに、全世代を対象とした質的、量的両方の研究を進めていきたいと考えている。

最後に音楽の意味について触れておきたい。2011年の東日本大震災を境として、日本人の価値観が大きく変化したと考えられる。災害時などの緊急時には音楽はあまり役に立たないと思われている。実際、震災直後では音楽は何の力にもなれなかった。しかし、その後、被災者の心の癒しや復興に向けて、音楽による様々なイベントや慰問が行われ、音楽の力があらためて認識されるようになってきている。音楽には人間の心を動かす力があると感じている。

はたして、音楽は人間にとってどのような意味をもつのであろうか。この根底に流れる壮大なテーマに向かって、今後の研究を進めていければと考えている。

脚注

- 1 総務省統計局.2012.ホームページ <http://www.stat.go.jp/info/today/032.htm>
(2013年9月12日現在)
- 2 堺屋太一.1976.『団塊の世代』第1版. 講談社.
- 3 公益財団法人ハイレブ研究所.2012.「団塊世代の退職後のライフスタイルに関する研究」
ホームページ <http://www.hilife.or.jp/wordpress/?p=441> (2013年9月12日現在)
- 4 竹内宏編.2008.「団塊世代の男女に聞く『自分たちの世代観調査』くらしの友」アンケート調査年鑑 2008年版 vol.21.杉並書房:973-985
- 5 宮入恭平.2010.「団塊世代によるノスタルジアとしての音楽消費」余暇学研究 13:28-39
- 6 上藤 顕.2005.「50歳からの音楽レッスンに戦略的に取り組む」商工ジャーナル 31(5):20-22
- 7 Bourdieu, Pierre、1930年8月1日 - 2002年1月23日)は、フランスの社会学者。コレージュ・ド・フランス名誉教授。哲学から文学理論、社会学、人類学まで研究分野は幅広い。著書『ディスタンクシオン』が有名。文化資本、社会関係資本、象徴資本の用語やハビトゥス (Habitus)などの概念で知られる。
- 8 Bourdieu, Pierre.1979. *La Distinction. Critique sociale du jugeme* :Editions de Minuit=1990.石井洋二郎訳『ディスタンクシオン (社会的判断力批判) I II』藤原書店.
- 9 トライアングレーション(triangulation)とは三角測量という意味で、複数の研究技法を組み合わせて仮説的推論の妥当性を高めていく研究方法である。
- 10 香川正弘・鈴木真理・佐々木英和編.2008.「よくわかる生涯学習」ミネルヴァ書房:46-47
- 11 一定の質問に従って面接を進めながら、被面接者の状況や回答に応じて、面接者が質問の順序・内容・表現などを変えることができる面接法。一定の方向性を保ちつつ自由度を合わせ持つことから、被面接者の語りに沿って面接を進めることができるという利点がある。
- 12 JGSS-2003の調査対象者は、2003年9月1日時点で全国に居住する満20～89歳の男女(大正2年9月2日～昭和58年9月1日生まれ)3663人。うち団塊世代は405人。調査地点数:489地点、抽出方法:層化2段無作為抽出法。調査は2003年の10月下旬から11月下旬にかけて実施された。音楽に関する質問は、「娯楽の頻度:音楽鑑賞」と「娯楽の頻度:カラオケ」である。
- 13 JGSS-2008の調査は2008年の10月下旬から11月下旬にかけて実施された。調査対象者は、2008年8月31日時点で全国に居住する満20～89歳の男女(大正7年9月1日～昭和63年8月31日生まれ)4220人。うち団塊世代は501人。調査地点数は529地点。層化2段抽出法により対象者を抽出している。層化は、全国を6ブロックに分け、

各ブロック内で市郡規模に応じて大都市・人口 20 万人以上の市・人口 20 万人未満の市・郡部の 4 つに分ける方法をとっている。国勢調査の調査区を調査地点の抽出単位とし、各層から調査地点を抽出している。調査地点数は、ひとつの調査地点の対象者数が最大でおよそ 15 になるように設定している。各調査地点における対象者の抽出は、選挙人名簿（許可されない場合は住民基本台帳）からの系統抽出により行っている。データの回収方法は、面接法と留置法を組み合わせたものである。以上のような層化 2 段抽出法による大規模社会調査の結果から母集団の傾向を推測することは可能であると考えられる。全質問項目の中で、音楽に関する質問は、「娯楽の頻度：音楽鑑賞」と「娯楽の頻度：カラオケ」と「好きな音楽」についてである。

- 14 平成25年4月に実施。日本全国の1947～51年生まれの団塊世代500人（男250人、女250人）を対象に、楽天リサーチ社によりインターネットアンケート調査を行った。
- 15 平成22年度、日本興亜福祉財団の「ジェロントロジー研究助成金」45万円を得て、2012年1月に実施。日本全国の1947～51年生まれの団塊世代1000人（男500人、女500人）を対象に、Net Mile社によりインターネットアンケート調査を行った。
- 16 北城格太郎.2006.『団塊世代 60 年』生産性出版.巻末資料の「団塊世代 60 年 年表」参照。
- 17 「父親の教育年数」と「母親の教育年数」は、旧制と新制の学制を混合して表した。旧制尋常小学校（6年）、旧制高等小学校（8年）、新制中学校（9年）、旧制中学校・高等女子学校・実業学校・師範学校（11年）、新制高等学校（12年）、新制短期大学・高等専門学校（14年）、旧制高等専門学校・高等師範学校（15年）、新制大学（16年）、旧制大学（17年）、新制大学院（18年）
- 18 研究Ⅱで使用する4つの調査データにおいて、JGSS-2003とJGSS-2008の層化2段抽出法の社会調査とインターネットアンケート調査2012、2013では調査方法が異なり母集団に違いが生じていることである。一番顕著なことは、教育年数に差異があり、インターネット調査の対象者の方がやや教育年数が高い傾向がみられた。以下にその平均教育年数をまとめる。

各調査における男女別平均教育年数

調 査	男（年）	女（年）	全体（年）
JGSS-2003	12.83	12.25	12.49
JGSS-2008	12.66	12.15	12.40
インターネット調査 2012	14.39	13.48	13.93
インターネット調査 2013	14.57	13.25	13.91

JGSS 調査に比べるとインターネット調査の方が全体で約 1.5 年平均教育年数が長い。この理由としては、65 歳前後でインターネットが使える団塊世代に限られてくるからである。

技術的な問題だけでなく、インターネット環境が整えられる経済力も必要である。そして、このような層は総じて学歴や階層帰属意識が高い傾向にある。しかし、世帯年収においては、教育年数ほどの差異はみいだされなかった。

- 19 「メディア年表」ホームページ <http://web.thn.jp/wbf/history/index.htm> 参照 (2013年7月27日現在)
- 20 北城格太郎他.2006.『団塊世代 60年』生産性出版:p48 抜粋.
- 21 北城格太郎他.2006.『団塊世代 60年』生産性出版:p52 参照.
- 22 北城格太郎他.2006.『団塊世代 60年』生産性出版:p57 抜粋.
- 23 「日本映画の歴史」ホームページ <http://www.cinelibre.jp/cinema/rekishi.html> より抜粋.
(2013年9月16日現在)
- 24 三浦展.2005.『団塊を総括する』牧野出版:p116-120.
- 25 北城格太郎他.2006.『団塊世代 60年』生産性出版:p62 抜粋.
- 26 三浦展.2005.『団塊を総括する』牧野出版:p32-37.参照.
- 27 「メディア年表」ホームページ <http://web.thn.jp/wbf/history/index.htm> 抜粋. (2013年7月30日現在)
- 28 「30秒でわかる音楽メディア」ホームページ
http://gigazine.net/news/20110829_music_industry_change/ 抜粋. (2013年8月5日現在)
- 29 「2011年度メディアユーザー実態調査報告書」参照.
ホームページ <http://www.riaj.or.jp/report/mediauser/pdf/softuser2011.pdf> (2013年8月13日現在)
- 30 「2012年度メディアユーザー実態調査報告書」参照.
ホームページ <http://www.riaj.or.jp/report/mediauser/pdf/softuser2012.pdf> (2013年8月13日現在)
- 31 三浦展.2007.「団塊格差 2000人実態調査」文藝春秋9月号:186-197
- 32 「マイ・ストアニュース」ホームページ
<http://www.myomiseneews.com/2013/04/08/the-feature-of-successful-new-businesses-targeting-the-elderly/> (2013年8月24日現在)
- 33 内閣府.2013.「平成25年度版高齢社会白書(全体版)第3節 団塊世代の意識」:53-38
ホームページ http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/25pdf_index.ht
(2013年9月12日現在)
- 34 「演歌」は、日本の歌謡曲から派生したジャンルの一つ。日本人独特の感覚や情念に基づく娯楽的な歌曲の分類。「艶歌」「怨歌」という字を当てる時もある。ヨナ抜き音階が多い。歌詞の内容は“海・酒・涙・女・雨・北国・雪・別れ”がよく取り上げられ、

これらのフレーズを中心に男女間の切ない情愛や悲恋などを歌ったものが多い。その他は、ご当地ソング、望郷もの、人生もの、幸せ夫婦もの、母もの、任侠ものなどがある。

- 35 三浦 展.2005.『団塊を総括する』牧野出版:P44 抜粋.
- 36 三浦 展.2005.『団塊を総括する』牧野出版:P58-61 抜粋.
- 37 橋本健二.2009.「『格差』の戦後史—階級社会 日本の履歴書—」河出ブックス:137-141
「地位の非一貫性」とは、「学歴は低いが所得は高い」など、所得や学歴、威信などの地位尺度の高低が一貫していないこと。
- 38.39 橋本健二.2009.「『格差』の戦後史—階級社会 日本の履歴書—」河出ブックス:167-174
- 40 Bourdieu,Pierre & Passeron,Jean-Claude.1970. *La reproduction, elements pour une theorie du systeme d'enseignement* :Editions de Minuit=1991.宮島 喬訳『再生産（教育・社会・文化）』藤原書店.
- 41 現在、生活上で重視していることをみると、「仕事・事業をしたい」が最も高く 42.5%であり、次いで「趣味や勉強に取り組みたい」 21.5%、「家族との交流を大切にしたい」 15.2%、「のんびりと過ごしたい」 7.7%の順となっている。一方、5年後、生活上で重視したいこととしては、「のんびりと過ごしたい」が最も高く 38.2%であり、次いで「趣味や勉強に取り組みたい」 19.2%、「家族との交流を大切にしたい」 15.2%、「仕事・事業をしたい」 8.3%の順となっている。

引用参考文献

○著書

- ・ Bourdieu, Pierre.1979. *La Distinction. Critique sociale du jugeme* :Editions de Minuit=1990.石井洋二郎訳『ディスタンクシオン（社会的判断力批判） I II』藤原書店.
- ・ Bourdieu,Pierre & Passeron,Jean-Claude.1970. *La reproduction, elements pour une theorie du systeme d'enseignement* :Editions de Minuit=1991.宮島 喬訳『再生産（教育・社会・文化）』藤原書店.
- ・ 天沼 香.2007.『団塊世代の同時代史』吉川弘文館.
- ・ 香川正弘・鈴木真理・佐々木英和編.2008.『よくわかる生涯学習』ミネルヴァ書房.
- ・ 北城格太郎他.2006.『団塊世代 60 年』生産性出版.
- ・ 木下康仁.2008.『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い』弘文堂.
- ・ 木村章一.2007.『図説 戦後昭和史 団塊の世代』インテリリスト A-1.
- ・ 西條剛央.2008.『ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編』新曜社.
- ・ 西條剛央.2008.『ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM アドバンス編』新曜社.
- ・ 斎藤友里子・三隅一人編.2011.『現代の社会階層 3 流動化のなかの社会意識』東京大学出版会.
- ・ 堺屋太一.1976.『団塊の世代』第 1 版. 講談社.
- ・ 堺屋太一.2008.『団塊の世代「黄金の十年」が始まる』文藝春秋.
- ・ 堺屋太一・Stephen・G・magel 他.2009.『日本 米国 中国 団塊の世代』出版文化社.
- ・ 数土直紀.2010.『日本人の階層意識』講談社.
- ・ 橋本健二.2009.『格差の戦後史－階級社会 日本の履歴書－』河出書房新社.
- ・ 丸林実千代.1999.『生涯音楽学習 入門』音楽之友社.
- ・ 三浦 展.2005.『団塊を総括する』牧野出版.
- ・ 三浦 展.2005.『下流社会－新たな階層集団の出現－』光文社.
- ・ 三浦 展.2007.『団塊格差』第 1 版.文藝春秋.
- ・ 盛山和夫.2004.『社会調査法入門』有斐閣ブックス.

○研究論文・記事

- ・ Charles, McIntyre.2011. “News from somewhere: the poetics of Baby Boomer and Generation Y music consumers in tracking a retail revolution. ” *Journal of Retailing and Consumer Services*, 18 (2): 141-151.
- ・ Sato, Atsushi.2008. “Prospects of employment and life design of Dankai No Sedai, or the Japanese baby-boom generation ” *Japan labor review*. vol. 5. no. 2: 35-57
- ・ 岩間暁子.2012.「専業主婦は今後どうなるのか－ジェンダー論と階層論の観点から－」公益財団法人生活協同組合総合研究所.生活協同組合研究通巻 442 号:5-12
- ・ 上藤 顕.2005.「50 歳からの音楽レッスンに戦略的に取り組む」商工ジャーナル 31(5):20-22
- ・ 片岡栄美.1992.「社会階層と文化的再生産」数理社会学会.理論と方法 7(1):33-55

- ・片岡栄美.1997.「家庭の文化的環境と文化的再生産過程および現代日本の文化構造--1995 年 SSM 全国調査データにみるわが国の文化的再生産過程」 関東学院大学文学部紀要 (81):187-237
- ・片岡栄美.1998.「音楽愛好者の特徴と音楽ジャンルの親近性--音楽の好みと学歴・職業」 関東学院大学.人文科学研究所報.22:147-162
- ・片岡栄美.2002.「階層研究における「文化」の位置—階層再生産と文化的再生産のジェンダー構造—」 年報社会学論集.第 15 号:30-43
- ・片岡栄美.2008.「芸術文化消費と象徴資本の社会学--ブルデュー理論からみた日本文化の構造と特徴」 文化経済学 24:13-25
- ・川口孝泰.2007.「量的研究の進め方—質的研究との比較を通して—」 看護教育 vol48.No3:198-202
- ・木下康仁.2007.「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法」 富山大学看護学会誌.第 6 巻 2 号:1-10
- ・佐藤郁哉.2005.「トライアングレーション (方法的複眼) とは何か？」 インターナショナル ナーシングレビュー.第 28 巻.第 2 号.通巻 120 号:30-36
- ・鍛冶博之.2010.「カラオケの商品史 (1)」 社会科学 (通号 89):49-80
- ・長谷川倫子.2009.「音楽愛好者の語りにみる学校教育での音楽学習—音楽愛好へどのように繋がっていったか—」 音楽学習学会紀要,音楽学習研究第 5 巻:11-19
- ・長谷川倫子.2011.「団塊世代はどのように音楽と関わってきたか—音楽の語りをとおして見る世代像—」 日本応用老年学会.応用老年学.Vol.5 No.1:50-59
- ・長谷川倫子.2012.「団塊世代における音楽体験と音楽聴取の関連要因について」 公益財団法人 日本興亜福祉財団.平成 22 年度ジェロントロジー研究報告 No.10:31-40
- ・樋口 昭.1994.「文化変容としての演歌」 埼玉大学紀要教育学部.第 43 巻第 1 号:47-57
- ・富貴島 明.2008.「団塊世代と歌謡曲(1)」 城西大学経済学部紀要:34-67
- ・三浦 展.2006.「団塊格差 2000 人実態調査」 文藝春秋 9 月号:186-197
- ・宮入恭平.2010.「団塊世代によるノスタルジアとしての音楽消費」 余暇学研究 13:28-39
- ・八木正一.2007.「戦後史を生きた団塊世代とその音楽シーン」 音楽文化の創造 46:9-13

○白書・調査書、統計資料、ホームページ

- ・JMR 生活総合研究所.2006.『消費社会白書 2006』
- ・Net Mile リサーチ.2009.「団塊世代の意識についての調査レポート」
ホームページ https://mixi-research.co.jp/voluntary/2009/pdf/200908_3.pdf (2013 年 9 月 12 日現在)
- ・大阪府教育センター「学習指導要領の変遷」平成 14 年度
ホームページ <http://www.osaka-c.ed.jp/hensenpdf/hensen.htm> (2013 年 9 月 12 日現在)

- ・ 国立教育政策研究所「学習指導要領データベース」
ホームページ <http://www.nier.go.jp/guideline/> (2013年9月12日現在)
- ・ 公益財団法人ハイレイフ研究所.2012.「団塊世代の退職後のライフスタイルに関する研究」
ホームページ <http://www.hilife.or.jp/wordpress/?p=441> (2013年9月12日現在)
- ・ 社会経済生産性本部.2006.『レジャー白書 2006』
- ・ 総務省統計局.2012.ホームページ <http://www.stat.go.jp/info/today/032.htm> (2013年9月12日現在)
- ・ 竹内宏編.2008.「団塊世代の男女に聞く『自分たちの世代観調査』くらしの友」アンケート調査年鑑 2008年版 vol.21.杉並書房:973-985
- ・ 内閣府.2012.「団塊の世代の意識に関する調査結果」共生社会政策,高齢社会対策
ホームページ <http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h24/kenkyu/gaiyo/> (2013年9月11日現在)
- ・ 内閣府.2013.「平成25年度版高齢社会白書(全体版)第3節 団塊世代の意識」
ホームページ http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/25pdf_index.html
(2013年9月12日現在)

[Acknowledgement]

日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学 JGSS 研究センター（文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点）が、東京大学社会科学研究所の協力を受けて実施している研究プロジェクトである。

謝 辞

本研究において、インタビュー調査にご協力いただいた 13 名の方々、さらに、インターネットアンケート調査にご協力いただいた 1000 名にも及ぶ方々に深く御礼申し上げます。皆様方のご協力なくして研究を進めることはできませんでした。皆様のご協力に報いることができるよう、これからも研究を進めて参りたいと思います。

また、研究へのご指導をいただきました安藤孝敏先生、折に触れて貴重なご意見をいただきました専攻の先生方、そして専攻外の先生方にも感謝申し上げます。

さらに、安藤研究室や他の研究室の院生の皆さん、いろいろと貴重なご意見や励ましをいただきありがとうございました。

また、学外において、友人やアドバイザーとして暖かく見守ってくださった、高橋伸之先生、神谷正義先生、弘山貞夫先生にも感謝申し上げます。

そして、博士論文の研究のため相当な我慢を強いられ、協力してくれた家族にも感謝いたします。

皆様のおかげで何とか博士論文を提出する日を迎えました。この研究で学んだことを忘れず、これからも精進を重ねて参りたいと思います。

長谷川 倫子

資 料

資料目次

内 容	頁
研究 I	
研究協力依頼書	1
研究倫理順守に関する誓約書	2
インタビューガイド	3
分析ワークシート	
1. 図 4	4
2. 図 5	27
3. 図 6	34
研究 II	
各調査の調査票、コードブック	41
各調査における団塊世代の基本属性の分布	
1. JGSS-2003	51
2. JGSS-2008	54
3. インターネット調査 2012	58
4. インターネット調査 2013	61

研究Ⅰ 研究協力依頼書

本日はご多忙のところ時間を割いていただきありがとうございます。以下の「研究趣旨」ならびに別紙「研究倫理順守に関する誓約書」をご一読の上、可能なようでしたら是非インタビューに協力していただきたくお願い申し上げます。なお、本研究にご協力いただいた方には、わずかではありますが、謝礼として商品券二千円を謹呈させていただきます。ご査収いただければ幸いです。

研究の趣旨

本研究では、団塊世代の方や高齢者の方を対象に、人生におけるご自身の音楽体験を語っていただき、その言葉を分析、構造化し、「人間と音楽との関わり」を理論として構築し、生涯音楽学習に何がしかの示唆が得られないかという趣旨で行います。

平成22年 月 日

横浜国立大学大学院環境情報学府博士課程後期
環境イノベーションマネジメント専攻
研究者 長谷川倫子

横浜国立大学大学院環境情報研究院教授
指導教員 安藤 孝敏

研究Ⅰ 研究倫理順守に関する誓約書

本研究では、以下の研究倫理に沿って実施されます。

- (1) 匿名性は以下のような形で担保します。まず、お名前が公開されることはいっさいございません。また、公開される際には、人物が特定される可能性のあるイニシャルなどを用いることもありません。
- (2) 研究の協力はいつでも拒否することができます。また、それは研究協力者の当然の権利ですので、拒否されても研究協力者が不利益をこうむることは決してありません。また部分的に発言箇所をカットしたい等のご希望がありましたらご遠慮なく申し出てください。なお、そうした場合でも、お時間を割いていただけたことに対して、謝礼はお渡しいたします。謝礼を受け取った後でも、返却する必要はございません。
- (3) 記録のために用いた IC レコーダーの情報は、基本的な分析が終了した時点で、研究者のみが管理致します。
- (4) 録音データは、保管する必要がなくなった時点で、全てのデータを完全に破棄します。
- (5) インタビューの内容等のデータについては、以下の範囲内において使用させていただく可能性があります。

1. 学会や研究会でのシンポジウム、口頭発表ならびにポスター発表
2. 学会誌、学術誌

なお、これは必ずしもこれらの媒体で公表するというのではなく、その可能性があるものを挙げております。

ご不明な点がございましたら、研究者にご確認ください。以上の研究趣旨や倫理的誓約をお読みになった上で、研究にご協力いただける方は、以下の研究承諾書へのご記入をお願い致します。

平成22年 月 日

横浜国立大学大学院環境情報学府博士課程後期

環境イノベーションマネジメント専攻

研究者 長谷川倫子

横浜国立大学大学院環境情報研究院教授

指導教員 安藤 孝敏

***** 研究承諾書 *****

上の、研究趣旨や倫理的承諾をふまえ、研究に協力することを承諾致します。なお、研究承諾書は2部作成し、研究者と研究協力者で1部ずつ保管することに同意します。

平成22年 月 日

お名前

研究Ⅰ インタビューガイド

インタビューガイド（団塊の世代の方用）

1、事前質問

- ・氏名
- ・年齢（生年月日）
- ・職業
- ・出身地
- ・好きな音楽ジャンル
- ・楽器、合唱などの経験

2、主な質問項目

①現在は、何か音楽を楽しんでいますか？どのように楽しんでいますか？

- ・好きな音楽は何か。その理由も。

②これまでの人生の中で、どのような音楽と出会い、どのように関わってこられたか？

- ・学校において
- ・家庭において
- ・社会において
- ・その他

③これまでの人生の出来事と、音楽が結びつくことはありますか？

戦争、戦後の復興、恋愛、結婚、別れ、喜び、悲しみなど・・・

④音楽が、ご自分の人生にどのような影響を及ぼしてきたと思いますか？

⑤音楽への嗜好や思い、考え方などは、どのように変化してきましたか？

⑥ご自身にとって、音楽とは何でしょうか？ 価値、意味・・・（歌詞のある歌と歌詞のない音楽についてはどう思われますか？）

⑦団塊の世代であることに対するの思いがあればお聞かせください。

⑧今後、団塊世代の方が高齢者になっていく時、どのような音楽が必要とされると思われますか？

⑨その他

研究 I 分析ワークシート

1. 本論 p15 図 4 「団塊世代の音楽体験についての語りの結果図」の各概念の分析ワークシート

(1) カテゴリー「学校での音楽」

概念名	音楽の授業：プラスの印象
概念の内容 (定義)	小中学校での音楽の授業についてプラスに感じていたこと（現在感じていること）。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の授業の印象はどうでしょうね、週2～3時間あったんですかね、面白かったんじゃないですか、当時はね。いろいろな歌を先生が教えてくれて歌っていくというのはね。伴奏を弾いてくれて、歌っていたと。そういうのは意外と楽しかったと。 ・小学校はね、僕は笛が吹けるようになって、それで音楽の時間が好きになったんだよね。 ・私の学校ではとても音楽の先生好きになりまして、男の先生。とってもいい先生だったと思います。その先生がピアノの先生だったんですが、とても授業が面白くて、音楽のエピソードいっぱい聞かせてもらいました。それで音楽好きになりました。あと、学校では吹奏楽も経験しました。 ・その時の、まあ先生の解説も良かったと思うんですけど、すごく雄大なイメージを描いたんです。それまでの、何ていうかな、小学校の時に器楽やってたんですね。それで器楽の時の、例えば「きょうはカルメンをみんなで演奏しましょう。タンタタタララ、ランタタ…」そういうのとか、そう、いろいろな曲を見てきたのと全然違う世界があると、ほんとふと思ったんですね。その先生がやたらバロックが好きだったと思うんですけど(笑) ・音楽の授業で小学校のころっていったら、そんなことですよ。中学に入ってから、なんか『荒城の月』だとかね。いい曲があるなと感じたね。
メ モ	「学校での音楽」の下位概念

概念名	音楽の授業：マイナスの印象
概念の内容 (定義)	小中学校での音楽の授業についてプラスに感じていたこと（現在感じていること）。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽（の授業）っていうのは極めてはっきり言えば嫌な存在でした。要するに楽しくないんだもん。音楽と言いながら、楽しくないんだよね。学ぶんだよね、まさに。私はどっちかといえばまじめに勉強したっていうことではないけど、それなりに学校の成績は悪くなかったんで、一応点数は取れるわけ、音楽も。でもそれはほんとに自分が好きだとか演奏するとか歌うとか、そういうことがすごくいいとか楽しいとかそういうものではなかったわけよね。 ・ほんとに教育が貧しかったと私は思ってるのよ。別に音楽の時間だけじゃなくっても。いろんなそういう環境や教材や条件があまりにも乏しかったってのがあるし。それから教える先生たちも言っちゃ悪いけどそんなに教育っていうことに対して優れた力が持っていたとは思えないわけで。先生たちにとってみてもなんだか興味のないやつらが50人も集めて一つの教室で教えたって・・・ ・今の子どもたちはみんなではないけど、もっとはるかに学校の音楽からいろんなものを得られるっていうものがあると思うんだよね。それが無いんだもんね。 ・(授業で) 難しいことやるなあということで、「ハニホヘトイロハ」だと思ったんですけど。あのころキョロキョロしとったら「おまえは気合が入とらん。」って言って往復ビンタくらって。 ・(学校の音楽の印象は) ないですね。ええ。全く印象に残ってない。全く音楽はほとんど影響されてないです。 ・やっぱり演奏するっていうのは明日から誰でもできるわけじゃないじゃない。やっぱり技能、技術を覚え、練習を積んでかなければいけないことですよね。だから私たちの時代の最大の不幸っていうのはそういう小・中・高といったみんなが本来一番親しみやすい、また成長する時代にそういうものを自分たちが実践できるって機会がほとんどなかったっていう、これはすごい残念なことです。
メモ	「学校での音楽」の下位概念

概念名	音楽教師の影響
概念の内容 (定義)	学校で音楽を教えてくれた教師から何がしかの影響を受けたと感じていること。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・ だけど僕は笛を持って。先生に「笛でいいか」って言ったら「いい」って言うからね。いい加減っていうか気持ちが広い先生でしたね。そのときに先生がもし「ハーモニカだけで笛はだめ」なんて言ったら、また嫌いになってたかもしれないしね。 ・ 私の学校ではとても音楽の先生好きになりまして、男の先生。とってもいい先生だったと思います。その先生がピアノの先生だったんですが、とても授業が面白くて、音楽のエピソードいっぱい聞かせてもらいました。それで音楽好きになりました。あと、学校では吹奏楽も経験しました。 ・ 中学校の時の器楽の先生、その私に目を開かしてくれた先生が中学校の合唱部の顧問になったんです。 ・ だから小学校の時のその器楽の先生が中学校で合唱になって、その先生のおかげで、私はピアノはちょっとだけは習いに行ったんですけど、そのちょっと習いに行った先生よりもはるかに上手に教えてもらって。
メモ	「学校での音楽」の下位概念

概念名	歌や楽器演奏の楽しさ
概念の内容 (定義)	学校の授業や課外活動で、歌や楽器を演奏したことが楽しかったということ。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校教育の中で言えば、やっぱりハーモニカの合奏とか、あるいは合唱、小学校だったら小学校の音楽の合唱というのは印象には残っていますね。歌は下手だけれども。 ・ 結構好きでした。横笛って難しいんだけど、マスターしてくると何となく楽しくて、よく吹いていたと思います。何を吹いていたかというのを忘れちゃったけれども。やはり鼓笛隊のメロディーって行進曲だったりするんじゃないかな。ああいうのを吹いていたと思います。 ・ 「ブラームスの子守歌」。それだとか、あと何があったかな。「ローライ」とか。それからなんだろう。でも授業、歌を歌うのはきらいじゃなかったですね。そういうのは。すごく気持ちよく歌ってました。 ・ いろいろな歌を先生が教えてくれて歌っていくというのはね。伴奏を

	弾いてくれて、歌っていたと。そういうのは意外と楽しかったと。 <ul style="list-style-type: none"> ・もう合唱はめっちゃくちゃ楽しかったです。みんなでやるっていうことも楽しかったし。
メモ	「学校での音楽」の下位概念

概念名	音楽の課外活動や行事の影響
概念の内容 (定義)	現在の音楽との関わりには、学校での課外活動（部活など）や行事（合唱コンクールなど）の影響を受けたと感じていること。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・(中学の入学式でブラスバンドの演奏を聴き) もう全然次元の違う音がわ〜っと聴こえてきたんで、それでもう大ショックを受けた。「おれはもう絶対あそこへ入る」つつつね。それでもう音楽にずっとはまりこんでいった。 ・中学校でブラバンに入ったってことが自分の人生を大きく変えたと思うね。 それまで実に何て言うかなあ、努力っていうのをいい加減にしてたんだよね。毎度最後の最後までやらなかったんだよ。ところが中学に入ってブラバンに入って何事も徹底してやるってことをとにかく覚えたの。10回とにかく間違えないで自分のパート吹けるように、そういう練習していったでしょ。そういう何て言うか、最後の最後までやりきるっていうか、努力しきるっていうかそういうのを覚えた。 ・みんなで力を合わせて、とにかく自分のパートをやりきる。それでほかの連中と合わせながら、気持ちを合わせながら自分のパートをやりきる。そのことによってコンクールでいいところをやっていくっていう、そういうのをそこで覚えたのかな。それまでおれすごい自分勝手に、ものすごいわがままな男だったのが、すごいいい加減だったのに、チャラチャラしてたのに中学行って変わったんだね。変身したの。 ・吹奏楽入って、やっぱり舞台上がって演奏会があるじゃないですか。みんな聞いとらんだろうけど、やるほうはね。舞台上がるという緊張感とそれを目標に向かって練習すると。そのために練習するというのは、何となく勉強になったかもしれませんね。 ・ものすごく僕自分勝手な男だってね、本当に人と協調するのがすごい嫌だったのね。人となんか一緒にやるってすごく嫌だった。とにかく自分わがまま勝手だったのが、ブラスバンドやって、そうでもなくなったっていうのが。家族とも協調できるようになったじゃない。

	・高校で合唱部に入って3年間やってました。きちっと。本当にがんばってやってました。その影響で現在もコーラスをしています。
メモ	「学校での音楽」の下位概念

(2) カテゴリー「音楽があった家庭」

概念名	家庭での音楽聴取や歌唱
概念の内容 (定義)	子供の頃、家庭で音楽を聴いたり歌ったりして楽しんだということ。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・僕と同世代の子どもたちを集めて、クリスマスの時に一緒に歌ったりとかいうのがやっぱり今考えてみると僕がやってることそのものなので、子どもの時代に一緒にみんなで歌うということがすごく楽しかったっていうのが僕の脳のどっかにくっきり入ってるんでしょうね。 ・テレビが普及してきてから、親がすごく歌謡曲を聴いていたので一緒に聴いていたと思います。横文字のシャンソンか何かだと思んですけども、そういうのが流れていて結構聴いていたと思います。 ・ラジオで何か結構歌謡曲は聞いてましたね。 ・中学校 15～16 ぐらいから田舎にもテレビが入って。全部の家じゃないですけども、入ってきたものですから、テレビで当時の歌謡曲を覚えたというか、聴きました。当時、昭和 37～38 年にうちにもテレビが入って、歌謡曲、当時は橋幸夫、舟木一夫。御三家の舟木一夫の『高校3年生』。 ・ほんとにテレビっ子だから、テレビが入ってきた時だから、学校から帰ってきて、中学の話ね、帰ってきて、3時から始まる映画を、試験が始まると早く帰れるじゃん。そうすると部活もないから、帰ってきてテレビ見るような子でしたから、すごいテレビっ子だったの。 ・だからちっちゃい時にあったレコードとかいうのが、そういうレコードが多かった。クラシック音楽よりも私には多かったのね、邦楽が。
メモ	「音楽があった家庭」の下位概念

概念名	家族からの影響
概念の内容 (定義)	子供の頃、家族から音楽の影響を受けたと感じていること。
具体例	・おやじは昔、浪花節のCDが出てあれを聞いたのは覚えとるんで

	<p>すけどね。だから浪曲でも嫌いじゃないですね。浪曲、講談ね。今聞いても別に抵抗ないですけどね。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・だから父親がだからお友だちと一緒に端唄かなんか分かんないけど、そういうことでちょっと一緒にやっていたりしたのはありました。 ・わが家は、僕の生まれた家っていうのは音楽なんて全然やるような家じゃなかったんだけど、おれが「ウクレレが欲しい」って言ったらウクレレ買ってくれたり。「笛が欲しい」って言ったら笛を買ってくれたり。そういうものすごい教育パパだったんだよね。 ・小さい時はよく琴とかね、母親が琴をしたりとか、だから琴とか・・・邦楽関係が多かったね。雅楽とか、まあ、家が古かったから余計に。家でよく。(レコードですか?) うん、レコードやね。レコードも聴いたし、あるいはよく母親が連れて行ってくれたし。 ・母もやっぱり歌は好きでした。母はいわゆる小学校の唱歌みたいなものが、そいから童謡ですね。音楽の絶えない家でした。 ・母親が美空ひばりを好きで、しょっちゅう聴いていたりしたので、美空ひばりの歌は結構覚えているんじゃないかな。それから御三家の辺りと東京ロマンチカとか、あの辺は学校ではできなかったけれども ・小学校のころは記憶として残ってんのは父、自分のおじいさんが寝る時に「荒城の月」をよく歌ってくれてたんですよ。 ・姉がイタリアオペラが好きで、よくアリアを小学生、小学校入る前のころによく聞かされていました。あれが好きになった原因じゃないかと思います。
メモ	「音楽があった家庭」の下位概念

概念名	メディアの主体的聴取
概念の内容 (定義)	子供の頃、いろいろな音楽メディアで進んで音楽を聴いていたということ。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオはあったんですけどもね。当時は三つの鐘、ラジオ番組でNHKの、今の紅白ではない何て言ったかな。のど自慢。そのような番組がずっとあったですね。それを聴く程度ですね。大人の、当時の歌謡曲というのをね。 ・中学校 15~16 ぐらいから田舎にもテレビが入って。全部の家じゃないですけども、入ってきたものですから、テレビで当時の歌謡曲を覚えたというか、聴きました。当時、昭和 37~38 年にうちにもテレ

	<p>ビが入って、歌謡曲、当時は橋幸夫、舟木一夫。御三家の舟木一夫の『高校3年生』。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほんとにテレビっ子だから、テレビが入ってきた時だから、学校から帰ってきて、中学の話ね、帰ってきて、3時から始まる映画を、試験が始まると早く帰れるじゃん。そうすると部活もないから、帰ってきてテレビ見てるような子でしたから、すごいテレビっ子だったの。 ・だからちっちゃい時にあったレコードとかいうのが、そういうレコードが多かった。クラシック音楽よりも私には多かったのね、邦楽が。
メモ	「音楽があった家庭」の下位概念

概念名	音楽の習い事
概念の内容 (定義)	子供の頃、音楽関係の習い事をしていた。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・一番時間を割いていたのは日本舞踊だったんですけど、日本舞踊も長くやってたし。 ・小さいころ、もう小学校入ったぐらいから日本舞踊を習ってて、先生が家に来て教えてくれる。家の中は週に1回必ずそういう。邦楽よね。そいで家に蓄音器とかそういうのもあっても、父親がだから端唄(はうた)とか小唄とかそういうものを、一緒に違う先生に習ってたかな。なんかそういうこともあったね。 ・姉の友人のピアニストの先生のところピアノを始めた。そりゃまあ小学校の5年生だったと記憶してます。高校3年ぐらいまで、いろんな先生に習って。ベートーベンのソナタぐらいまでやりました。
メモ	「音楽があった家庭」の下位概念

(3) カテゴリー「音楽がなかった家庭」

概念名	家族で音楽を楽しむ習慣はなかった
概念の内容 (定義)	子供の頃、家庭で音楽を楽しむ雰囲気や習慣がなかった。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼくが育ったときには音楽はなかったです。 ・小学校1年かそのときかな。なんでみんながうまく歌えるんだろうと思ったことと関係すると思うけれども、保護者会の際に家で音楽をもっと聴かせてくださいと言われてたということが記憶に残っていま

	す。 ・家庭内で歌を歌うことは、うちではなかったですね。百姓ですので。ラジオはあったんですけどもね。
メモ	「音楽があった家庭」の下位概念

(4) 青少年期の社会参加

概念名	音楽を伴う地域行事
概念の内容 (定義)	子供の頃、音楽を伴う祭りなどの地域の行事に参加していた。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・阿波踊り・・・町の中でみんな、今はそういう町の中で、町内でやるようなことないんだけど、そのころはうちの町内でみんなやってたんだね。家の前までみんな踊りに来るわけ。それでそういうリズムに乗ってみんな自然に勝手に踊ってるわけ。近所でみんなね。笛を吹いたり太鼓をたたいたり、三味線鳴らしたりして。うちのばあさんなんかは三味線しゃかしゃか弾いたり。そういうのをやってて。そういう音楽ってというか阿波（あわ）踊りのためのリズムというか、それは阿波踊りが始まる2、3カ月前からもうジャンジャカジャンジャカ始まってたね。そういうのは体でそういうリズムを覚えてたっていうのはあるね。 ・子どものころは、家の建前、集落中が集まって家を建てると、ご苦労さんということで振る舞うわけ。そこで音楽が始まるわけですね。みんなの好きな。子どものころから聞きながら。どこかで建前があると大人たちが一杯飲みながら歌うと。当時の歌は「粋な黒堀」だとか「お富さん」だとか、そういうのを聴いて育っているの。
メモ	「青少年期の社会参加」の下位概念

(5) 学生運動

概念名	参加・興味・傍観
概念の内容 (定義)	青年期に活発化した学生運動に対し、活動に参加したり、興味を持ったり、傍観したりしていたということ。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・やっぱり反戦的な・・・（フォークのような？）僕自身が学生運動をやっていた方だから、音楽がどうこうというより、運動の方が一生懸命だったし・・・、要するにアンチ権力、権力に対して、何か自己表

	<p>現しようという、そういう中で、中高大学で聴いてきた、先ほど言っていたモーツァルトやバッハだとかシューベルトとか・・・</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ぼくは、さっき言ったように覇気がないし意気地がないので、(学生運動に)怖くて行けなかったです。参加していません。彼らのことをよく知らないけれども、気持ちはシンプです。頑張れというのはいかにも無責任を絵に描いたようなものだから、頑張れも言いませんでしたけれども。機動隊が入って来たときには、本当に、ぼくは何もやっていないけれども、うーんというものがありました。 ・何て言うかな。関係あったっていうか、かなり影響を受けたことは確かだね。「学生運動やらんもんは潜りじゃ」ってね。一緒にデモ行くとか。学校のロックアウトに協力するとかね。さまざまやりました。哲学科の人間でやらない人間は潜りじゃってね。やっぱり許せないものは徹底的に許せないっていうか、徹底的に拒絶するね。どんなに自分が不利になろうとも、貫くところありますね。 ・その安保闘争のところを、70年安保ですね、知っている世代と知らない世代。もう1個上の60年安保闘争を知ってる世代と知らない世代。私奇妙なことに大学の時のこの「学問とは生きることである」って言った先生は60年安保の真ただ中だったんですよ。樺美智子は死にましたよね。デモの中でつぶされて死にましたけど、その世代の先生ってすごく共通するものがあるって私は討論の中でいつも感じたんですけど。この真ん中辺は通じないんです。 ・学生紛争で、結果的に権力に負けていくわけ。だから、権力に負けたから、反抗するよりも権力の頂点についていこうとするわけ。権力を自分たちが持つことによって、自分たちのということがあったわけ。だけど、自分たちの全てがヘッドに立ったかということ、必ずしもそうでない年代、それは難しい。
メモ	「学生運動」の下位概念

(6) 音楽ブーム

概念名	フォークソング
概念の内容 (定義)	青年期に巻き起こった音楽ブームの中で、フォークソングが流行したこと。
具体例	・音楽そのものじゃなくて、そういうきゃあきゃあいうのに対して、なんだ変なことをやっているなというのがあるんです。だけど、フォーク

	<p>クセーダーズは何か親近感を持っていました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「おらは死んじまっただ」とか、「イムジンガー」だとか、そこら辺は親近感を持っていました。ビートルズを当時は知らなかったんです。 ・いわゆる団塊世代ってのはちょうど学生時代ってのは、高校から大学、大学院まで行ったのが、いわゆるジャパニーズフォークというのが大はやりだった時代なのよね。だからそういうのってずいぶんたくさん知ってるし、聴いてるよね。 ・日本のフォークもそうですね。はやる、はやってましたですかね。それもそこそこに好きだったという感じです。 ・やっぱりあれとちがうかなあ、70年安保。続いてベトナム戦争。そういった中で、平和ということを求めていく中で、静かな形でありながら、社会批判をしてフォークソングとか・・・ ・フォークソングはあまり好きじゃないの。おれは吉田拓郎は好きだけでも、あとは何言っとるかよく分からなんだね。井上陽水は個別には知ってましたけどね。あれもああいう類の世界でね。生意気な世界かなと思ったんですけど。なまちょろいというか。 ・フォークソングも。もう僕の友達もやっぱりそのころの連中の影響でときどきチョロチョロ聴いたかな。
メモ	「音楽ブーム」の下位概念

概念名	グループサウンズ
概念の内容 (定義)	青年期に巻き起こった音楽ブームの中で、グループサウンズが流行したこと。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・グループサウンズもやっぱり、いや、そこそこに好きだったと思うんです。 ・グループサウンズ辺りは（カタカナが少なくてうるさくなくて）まだ大丈夫なんですね。あの辺りはまだいいですけどもね。 ・テレビでいろいろと聴きました。「タイガース」とか「スパイダース」。 ・「ブルーコメッツ」のような品のいいグループサウンズが好きだった。 ・グループサウンズにはあんまり興味はなかったです。そのころクラシックの先生からいろんな勉強教えてもらってたんで、そっちに夢中になってましたから。 ・グループサウンズってのはどっちかっていうと、あれはちょっと何ていうか、そのころは安っぽいという感じもあったんでね。

	<ul style="list-style-type: none"> これは私の本心がばれてしまいますがグループサウンズは、けっと思っていました。きゃあきゃあいつているわけでしょう。なんだと思って。音楽そのものじゃなくて、そういうきゃあきゃあいうのに対して、なんだ変なことをやっているなというのがあれです。だけど、フォークセーダーズは何か親近感を持っていました。
メモ	「音楽ブーム」の下位概念

概念名	ビートルズ
概念の内容 (定義)	青年期に巻き起こった音楽ブームの中で、世界的に流行したザ・ビートルズの音楽や風俗に興味を持ったこと。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・ビートルズね、テレビ見てました。あのとき中学の頃かな。東京へ来たことありますよね。あのときにテレビ見たら好きになりました。飛行機を降りてくるところから、変なのが来てはやりだなと。ラジオは聞いてますよ、歌は。テレビでやったじゃないですか、東京。武道館かどっかで。画像を見てから。すごいなと思いましてね。それから好きになった。そうです。音楽っていうよりもそのビジュアル的なものを見てびっくりした。説得力ちゅうのか。生の迫力ちゅうのか。ラジオしか聞いたことないでしょ。 ・ビートルズ以降から、日本もタイトルをカタカナだとかローマ字みたいな。 ビートルズは全部英語ですからね。でも、ビートルズは受け入れられる。 あのころのビートルズは知らなかったらたたかれちゃうね。 ・ビートルズが大きいですね、私の中では。特にビートルズを、何とかいう有名な編曲者の編曲がとてつぱりすごいんだなと思いました。リバプールでやってた時代とは違ってね。そういうのに触れた時に、ああ、こういうのってすごいんだあと。特にビートルズの曲の持つてる力っていうのは、これは大したものだなと思いました。その時がやっぱり大きな変化の時だったんじゃないでしょうか。 ・全然フィーバーしてなかったです。でも、曲自体はもちろん「イエスタディ」であるとか、それから「ミッシェル」とかあんなのすごいいなと思いましたけど。初期のギャーギャーいうのは全然駄目でありまして。 ・だからビートルズでもってポップスに対してアレルギーが無くなった

	<p>のかな。何でも聴けるようになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビートルズなんてまさしくいろんな音をレコーディングの時に入れたり、いろんなことをしていった人たちじゃない。そいで私たちは、私は子どもにだからビートルズとかそういうことすごく聴かせた。
メモ	「音楽ブーム」の下位概念

(7) 結婚後の家庭における音楽

概念名	夫婦や子供と楽しむ
概念の内容 (定義)	結婚後、家族（夫婦や子供）と一緒に音楽を楽しんでいる。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・私の世界はなかったね。全然違うものだったと思うね。音楽をする、音楽をあれほど大好きな人と結婚したことによって、ものすごい膨らんできたね。 ・夫婦でコンサートに聴きに行く機会がものすごい多いから、だからありがたいことにいい音楽はすごく ・だからムード音楽は好きなんですよね。結婚してCD買ってそういう曲は聴いとったですよね。 ・うちも子どもがちっちゃい時代はちょっと主人ばかりが音楽を一生懸命やってたっていう形で遠のいてるけれども、遠のいてたけれども、一緒に動けるようになっていくとそれこそオーケストラ、もう一緒にお付き合いしてるって感じです。（人間関係が広がってきたってことですね、音楽を通じて。）それはもう全くそうよね。すごいですよね。 ・うちの女房が音楽あんまり接してなかったんですけど、結婚してからギターやったり、今、津軽三味線やってますね。生まれが津軽なものですから。 ・子どもがね、子どもがやんちゃばかり、男が3人だからやんちゃばかりしてて。心を静かにさせるためにレクイエムを聴かせた。（笑）。 ・子どもたちがごろごろしてようと、そばにしようと何してもお父さんがチェロを練習してるわけだから、子どもたちはチェロの音を聴いて大きくなった。
メモ	「結婚後の家庭における音楽」の下位概念

概念名	子供への音楽教育
概念の内容 (定義)	結婚後、子供へ音楽教育をさせた。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもがそこらでピアノを習っているの、今のドとかレとか言いますね。そんなのがとれるのかということ saying いたから、そういう形では触れていると思います。 ・習いに行かせたんですよ。そしたら女房があんまり怒るもんだから「もうやりたくない」と。厳しくっていうのと、期待したんですよ。一番上が女だったものですから。それで子供が挫折しましてね、それから音楽嫌いになったね、娘は「もう習いに行きたくない」と。それでもう1人娘がおるんですけど、それも行かせようと思ったら上のお姉さんがやらんもんだから「あんまりやりたくない」って言って嫌っちゃったのね。 ・自分が今度家庭持った時は子どもたち、今、男の子2人いるんですが、2人ともピアノはぜひ習ってほしいと思って、町のそういう音楽教室に行ってもらいました。
メモ	「結婚後の家庭における音楽」の下位概念

(8) 新しい音楽への興味

概念名	クラシック音楽やポップスとの出会い
概念の内容 (定義)	社会人になって、新たにクラシック音楽やポップスが好きになった。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・社会に出てから、そのときにフルートをやろうかなと思って、結構高いフルートを買ってきて、先生について習わなかったけれども、しばらくは我流で吹いていましたね。 ・ぼくより 20 歳ぐらい上の人かな、その人たちがそれこそモーツァルトとか何とか好きな人が何人かいて、さっきのアシュケナージの話もたまたまそうなんですけれども、アシュケナージが来ていると、これはどうなのと言ったら、これは世界の5本の指に入る、お前行ってこいと言われて。行くなら S 席を取るんだぞと言われて、そうか S 席かと思って行って、S を聞いたら1万円と言われてびっくりしたことがあります。 ・オーケストラに入ったのは 30 代になってからです。結婚してから以

	<p>後です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽の出会いは、あのころはダンスパーティーがあったんですよ暮れに。ダンスパーティーね。ブルースやそれこそタンゴやらワルツやらを習いに行っ、そこで音楽を聴いたんですよ。ダンスホールがあるじゃないですか、名古屋に。今もあるかどうか知らんけど。社交ダンスを習いに行きまして、そこからそのダンス音楽ですよ。関心が出たのが。そしたら友達が、吹奏楽やってたやつが電電公社へ入りましてバンド作とったんです。会社のダンスパーティーにそいつを演奏で依頼したりして。ダンス音楽を聴きながらよく酒を飲んでたんですよ。そういうことでダンス音楽っていうのか、サム・テイラーだとか、ああいうやつもはやとった当時は。 ・クラシック音楽同好会出まして、クラシックったら敷居の高い金持ち層の特権階級の方がおやりになる世界かと思いましたが、演歌しか知らない人間が入っていても「そうでもないな」と。「良きやいいだろう。聴いて良きやいいじゃないか」と。
メモ	「新しい音楽への興味」の下位概念

概念名	ビートルズへの静かな興味
概念の内容 (定義)	1966年に来日したザ・ビートルズにリアルタイムで熱中したのではなく、その後ゆっくと興味を持ち始めたということ。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・リアルタイムで「キャーキャー」はほとんどしなかったです。多分そういうのとちょっと違って、みんなが「わー」って騒いでるのを客観的に見て、冷えて見えてたんですが、ビートルズの曲に、その曲に、ああすごいんだなというふうに入って。ちょっと入り口が違うと思いますね。・・ひかれたんですよ。こういうジャンルでこういうふうにするんだっていう、論理で。 ・(リアルタイムで熱中していたのは) 実に少なかったね。大学生の中ではごく一部だった。下宿の友達1人しかいなかった。あとはみんな彼に「どうだ、いいだろう、いいだろう」って無理に聴かされて。そうすると時々彼らがフルオーケストラの編成でやったりすることあるでしょ。「あ、いいじゃない」って。それで彼に無理に聴かされてやとポップスに対するアレルギーが無くなったのかなっていう感じかな。 ・ビートルズを当時は知らなかったんです。何も分からなくて、後になって弟がレコード2を枚買ってきました。そのうちの前半の方はとても好きになりました。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ビートルズなんかやってたら、「エレキなんかやって、おまえら不良だ」って言われたんです。だからそういう社会背景もあって、あんまり積極的にそういう方にはいかない性格だったんで。(リアルタイムよりも、その後ひかれていった感じですか?)。そうそうそうそう、そうですね。そうですね。 ・僕もきれいじゃないけれども、あんまりそんなにうんと好きだった記憶はないです。全然フィーバーしてなかったです。フィーバーしてる人間もいましたけど、そんなに、極少数です。曲自体はもちろん「イエスタデイ」であるとか、それから「ミッシェル」とかあんなのすごくいいなと思いましたが。初期のギャーギャーというのは全然駄目でありまして。
メモ	「新しい音楽への興味」の下位概念

(9) 仕事に関わる音楽

概念名	宴会での音楽 (カラオケなど)
概念の内容 (定義)	社会人になって、仕事に関わる音楽として、宴会で歌ったり、カラオケで歌ったりした。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・大人になってくるので、ある程度金があればたまには飲みに行きますのでね。そういうところでは当時は有線の全盛期ぐらいでしたかね。当時はスナックにもカラオケやマイクがなかったですので、有線会社から流れてくる音楽を聴くだけです。 ・石原裕次郎から入りまして、当時は。石原裕次郎から入って、いろんな歌になってくるんですよね。歌はそのうちに鳥羽一郎になりました。何でかと言うと証券会社の営業をやったものですから、海へ出て行くのと一緒になんです。稼ぎの関係でね。あれが鳥羽一郎です。ずっと鳥羽一郎一本絞りでやるとるんです。 ・軍歌はね、あれはね、ぼくらは市役所へ勤めている若いころ歌っていたのでね。50年代半ばぐらいまでは軍歌を歌っていたんじゃないですかね、宴会のときにね。職場で年に数回、忘年会、親睦会と出掛けますのでね。 ・結局仕事に行けば心のやすらぎの持てる歌は何かあるとかね。だからそういう、そのときどきでやっぱりいろいろ音楽に触れますと自分でいいように考えますよね。 ・「明治一代女」とか「浮いた、浮いたよ」すごく古い。またそれもめちゃめっちゃ(年配の上司に)受けて。「なんであんたそんな歌知って

	<p>んの」って。「私ね、父も母も明治生まれなんだ」って言ったら、またそれもめちゃくちゃ受けて。だから本当に社会人になってみると、やっぱり場を白けさせないとか、そういう選曲をすることの大事さとか思ったんですよ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何かちょっとやる気を出すときに、軍歌もちょっと出てくる。これは若いときに仕事をやりながら、口には出さないけれども。(何か頭の中に描いて) <p>そうですね。それはあったでしょうね。当然、職場ではそんなね。</p>
メモ	「仕事に関わる音楽」の下位概念

概念名	癒しの音楽
概念の内容 (定義)	社会人になって、音楽が仕事などで疲れた時の癒しとなった。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・私、それこそ本当にレコードの時にたくさん買ってしまったので、今もプチっとかいう音が気になりながら聴くんですけど、やっぱりぼーっとしたい時とか、なんかつらかった時とかは結構聴いてます。本当にそれを流しながらぼーっとしてるっていうか、コーヒー飲みながら聴いてるって。結構それが、「あー、『G線上のアリア』で救われた」とか、そういう気がする時あるんです、ふと。 ・結局仕事に行けば心のやすらぎの持てる歌は何かあるかとかね。だからそういう、そのときどきでやっぱりいろいろ音楽に触れますと自分でいいように考えますよね。 ・やすらぎを求めとるのかもしれんね。そのときどきの気分に合わせて。そうですね。今はピアノ曲が。 ・心にね、豊かさを与えることと、もうひとつ大事なのは、癒してくれるもの。いろんな意味で癒してくれる。だから、豊かさに繋がるんですね。だから、何気なく流れている曲が耳に応答して、そういう精神的を安らぎを与えながら、活力になっていくというかね。 ・インドのシタールはテンポも同じでジンジンとやっているけれども、じわーっとくるんです。それをそれこそステレオで照明を落として聴いていると、すごく気持ちがすーっとするんです。すごく合うんです。
メモ	「仕事に関わる音楽」の下位概念

(10) ノスタルジアとしての音楽

概念名	かつての音楽への回顧・回帰
概念の内容 (定義)	かつて好きだった音楽や流行した音楽へ懐かしさを感じ、人生とオーバーラップすること。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・お勤めをした時に知り合った彼と散歩をしたんです。由紀さおりの「夜明けのスキヤット」が重なったんだからきっと。その人とその音楽が重なるっていうのはきっとそうなんだと思う。 ・例えば僕が「無縁坂」を歌うと、みんな自分のお母さんのこと思い出す。その瞬間に自分のお母さんの、優しかったお母さんであり、それから苦しい悲しいことがあったお母さんでありって、みんな思い出して。 ・絶対「神田川」今でも泣けます。ほんとにいい曲です。さだまさしの歌とか大好きです。やっぱり曲も良かったし、歌ってる内容も良かったですよ。あの辺の歌とか、そういうそれぞれが一番輝いていた時の歌は絶対忘れない。 ・今 90 代の人が戻るのはいさゝか時の、幼い時の歌だけど、今の団塊の世代の人たちが年にとって懐かしいって涙を出すのは案外高校や大学の時の歌。だからその時の、高校の時のみんなで歌おうって言った時の最初が「若者たち」だったり、「学生時代」だったりするんですよ。
メモ	「ノスタルジアとしての音楽」の下位概念

概念名	楽器などの再開
概念の内容 (定義)	かつて楽しんでいた楽器演奏や歌唱をまた再開すること。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・上の子の幼稚園のお友達のお母さんがそのママさんコーラスに入っていて、「ああ、行きたいな」と思ってたんですけど、うち下に2歳半の弟がいたので、その子が学校に上がったときに即入りました。昔はこのところで団地祭りとかあっていろいろすごい、ここの団地も初めは。今はすたれちゃいましたけど、すごいはやってて。ママさんコーラスはいつも出て歌ってたんです。すごい性格地味で出れないタイプなんで、本当はそんなところ（コーラス）へ出るタイプじゃないんで、本当に自分1人で電話を掛けて、「行きたい」と言って「見学に来てください」と言われて入ったくらいだから、一応好きなんだと思います。続いているし。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ハーモニカはやっぱり手近なあれで、安い楽器でしたから、ハーモニカは確かに吹いていたことが。よみがえったわけです。非常に便利な道具で。 ある時に極最近です。友人が、木谷さんハーモニカはいんじゃないかって言うんで、やってみたらよかった。 ・勤めてしばらくの間、僕が結婚をして仕事人間になるまでの間は何かあればギターを持って出掛けるというのが多かったんですね。 ・2001年です、再開したのが。月に4～5回歌うようになりましたから。そうすると音楽が自分の中にずーっと入ってきて、僕が寄ってったんですかね。非常に深いつながりができて、それは今の僕につながります。 ・10年間ブランクがあっただけでちょうど始めたばかりで1年経ったところなんですけど。板橋区の第九にも去年まで出たんですね。10年ブランクがあったんで、本当に久しぶりに舞台上で歌ったんですけど。まあちょっと覚えてたかなんかやってたら、第九は気持ち良く歌えた。
メモ	「ノスタルジアとしての音楽」の下位概念

(11) 音楽活動

概念名	音楽サークル
概念の内容 (定義)	少しゆとりができたことから、音楽のサークルや同好会に参加して音楽を楽しんでいる。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・週1で合唱に2時間くらい。2時間弱ですね。2時間弱歌いに行つて週1回。月4回。パートはソプラノ、今はメゾにいます。 ・オーケストラに入ったのは30代になってからです。結婚してから以後です。 ・音楽の同好会で月に1回コンサートをやると。生演奏の。クラシックを1,000円かそこらで。それで「〇〇さんどうですか」って言われて、ちょこちょこ行つとったんですよ。生演奏、土曜日の夜。97年か98年ぐらいの。ちょうどクラシック同好会が始まって10回ぐらいあとかもしれんですね。それからずっと参加しています。最近、出席率は悪いけどね。 ・一番初めにママさんコーラスっていうのをやってたときには、個人レッスンもあって。そういうところで一応立ち方から何から、最初から入ったときから個人レッスンっていうのがあって、20分くらいで。そ

	ういうのも最初から受けてて、ずっとそっちでやってるときに何かこう基礎をやっぱりさせてもらったので。初めは、一番初めはアルトだったんです。なんでこういうふうにだんだん声がやっぱり出るようになっていった。
メモ	「音楽活動」の下位概念

概念名	地域・社会活動
概念の内容 (定義)	音楽を聴いたり演奏したりして楽しむだけでなく、音楽を伴った地域活動や社会活動を積極的に行っている。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を自分で弾いて楽しむこともありますけれども、もともと音楽家になりたいと思っておりまして。ただ、この年になるまで、それが自分が思ってるような生かされ方はしてなかったんですが、この地域活動やってる中で音楽がとっても役に立ってというのが分かってきて。それで今音楽を作ってさしあげたり、演奏してさしあげたりすることで非常に楽しんでおります。 ・主にお年寄りの施設や障害を持つての方の施設に行って、その利用者の方とご一緒に歌を歌ったり、僕が歌ったりという、それが日常生活の中にある。それが基盤になって、コンサートホールで自分のバンドでコンサートをしたりというような形で楽しんでいます。 ・音楽と美術のコラボレーションやったり、それからホームコンサートで弾いたり、そういう企画やったり、一緒に。そいで毎月毎月自分の家でサロンコンサートやってらっしゃる人もいるので、そのサロンコンサートと一緒に企画したり、出演したり、相談に乗ったりしています。 ・実は不登校の子ども、私中学校にPTAの会長をしていた時期がありまして。そういう学校のそういう仕組みとか、人間関係を理解してくれてると思ったのでしょうか、当時の校長さんから不登校の子どもさん預かってくれと。だったらせっかくだから人数が人数だから、ロックバンド作ろうと。それでギター弾けるようにして。そいからドラムも用意してあげて。それで町の公民館のようなところでですね、そこで演奏会までこぎつけましてね。それを5年間ぐらいやりました。それで音楽の好きな大人たちにも協力してもらって。最高ですと、観客を含めて40人ぐらいが月1回そういう音楽の集まりやりました。その人たちの力で、その後ドイツからオペラの演奏家とか、もちろん

	<p>インストロメンタルも含めて、それからあと歌手ですね、そういう人たちに来てもらって。これは板橋区の財団の文化芸術振興財団の協力も頂いて、10年間ほど続きました。その交流はいまだにあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夫がチェロを演奏をするので、夫婦で老人ホームを訪問しています。私自身が太極拳をやっているから、体づくりってということと、音を作ったり音楽作ったりする以前の問題のことを私がやっているものだから、それとの関連でまた膨らんでくることもあって。老人ホームとのかかわりとか、社会とのかかわり方の、かかわり合いにおいても音楽が持つ可能性というふうに自分たちができることって考えたら、またその世界も出てくるわけ。
メモ	「音楽活動」の下位概念

(12) 現在における音楽の楽しみ方

概念名	テレビやCDによる音楽聴取
概念の内容 (定義)	現在、テレビの音楽関連の番組やCDで音楽を楽しんでいる。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・だからテレビで、今テレビって音がすごくいいですよ。だからテレビで私よくクラシックの番組聴いてます。それでBSなんかでよくやってんです。夜中とか。 ・今楽しんでいるのは、主にCDとかを聴いて楽しむとか、あとはFMを聴いて楽しむとか。それからときどきテレビ番組で『題名のない音楽会』とかあるでしょう。ああいう音楽番組を。NHKの音楽番組見て楽しむ、その程度ですね。 ・この間NHKで『SONGS』というやつをやってみてね。芸能生活40周年でNHKの紅白へ出るとか出んとか言っていましたけども。あれからNHKがだいぶ特集組みまして。2時間ぐらいですかね、合わせて2時間ぐらいのやつをDVDでとりまして、最近の陽水を見たり。それからついでにCDも買ってきましてね。自分がこの曲聴いていいなと思えばCD買ってくりゃいいし。そういうふうに考えられるようになった。 ・昔のレコードを出してきたりするけれども、それは民族音楽のころのレコードといったところですね。インドのシタールはテンポも同じでジンジンとやっているけれども、じわーっとくるんです。それをそれぞれこそステレオで照明を落として聴いていると、すごく気持ちがすーっ

	<p>とするんです。すごく合うんです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CD とかも流しっぱなしで朝からでも聴いていられます。もちろんスクリーンテーマ、映画音楽ならジャンルは何でもいい。マカロニウエスタンであれポップスであれ。
メモ	「現在における音楽の楽しみ方」の下位概念

概念名	コンサート
概念の内容 (定義)	現在、コンサートや音楽会、時には映画鑑賞に出かけて音楽を楽しんでいる。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・ちょくちょくコンサートに行きますね。はい。それもアマチュアのコンサートも含めてですけども。 ・コンサートの機会があれば何でも行きますね。このところ忙しいからあまり聴いていないですけども。ついこの間は、前の職場で知り合った人から、日本的に有名な尺八と三弦の先生のコンサートのチケットをいただいて、4時間びっしり聴きました。ちょっと疲れまして。 ・歌舞伎が好きなもんで、歌舞伎を見に行きました。それからやっぱり尺八の音が好きだから、尺八やってる友だちの家行って、一緒に演奏聴いたりしてます。 ・のだめカンタービレの演奏が好きです。1回目の時はもともとテレビで知ってたんですよ、あれやってたから。そいで映画になったから、うちの人連れて行ったの。そしたらうちの人寝ちゃった。でも私はすごく楽しかったわけ。そいで2回目んときは、頼むからおれ連れて行かないでくれって言われて、娘に連れてってもらったの。そして、そいで娘に連れてってもらって、すごく私幸せな気分で帰れました。だから音楽聴いてこのごろ「ああ、良かった」って思えたのは、そうですね、結構良かったな、あれ。 ・名古屋のときは名フィルで好きな人がいましてね、ちょこちょこ行っとなつたです。現在は生演奏を聴くきっかけはセンチュリーの発表会と、それからクラシックの同好会ですね。
メモ	「現在における音楽の楽しみ方」の下位概念

概念名	カラオケ
概念の内容 (定義)	現在、カラオケで音楽を楽しんでいる。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・カラオケの時代に入りますとね、うちでカラオケの機械買ってカラオケやったりね。だから演歌とかね。昔は誰でも一緒にね。石原裕次郎から入りまして、当時は。石原裕次郎から入って、いろんな歌になってくるんですよね。歌はそのうちに鳥羽一郎になりまして。何でかと言うと証券会社の営業をやったものですから、海へ出て行くのと一緒なんですよ。稼ぎの関係でね。あれが鳥羽一郎です。ずっと鳥羽一郎一本絞りでやっとなるんです。 ・夫婦で「きょう行こうか」。カラオケだけで行くわけじゃないですよ。外食するじゃないですか。その後でカラオケ屋さん、スナック寄って歌って帰ってくるっていう。 ・だからカラオケが出てきてからはほんとにどれを歌おうかって迷っちゃうぐらい。幅広く。なんでもいいんですよね。で、やっぱり今はもちろんキー操作ができるからどんな音域でもいいじゃないですか。 ・人と人のつながりなんか手段として、考えるという、まさにカラオケなんていうのは一種のこれは接待なのかもしれないけど。お付き合いかもしれない、友だち同士の。 ・カラオケでは演歌なんです。すごく面白いなって思ったのは「お酒はぬるめの爛がいい」とか、あれ好きなんです。私、あの曲って。みんなが爆笑するんですよ、あれ歌うと。どの辺が、「女は無口な人がいいって」歌うから爆笑(笑)。「どの辺が無口なんだ」とか言って。結構、お笑いになって面白いですよ。
メモ	「現在における音楽の楽しみ方」の下位概念

概念名	「ながら聴き」
概念の内容 (定義)	現在、ドライブや家事や仕事や飲食など何かをしながら音楽をかけて聴いている。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・車の中で。車を運転するときにとっても運転しやすいような軽い曲をね。そのときの気分によるけど松任谷由美さんとかね。軽い、気持ち良く運転できる曲とか。そのほかアニメの、娘からアニメのCDを奪って、それで聴いてたりね。 ・時間的には、車の中でMDに落としたのを聴くぐらいです。ピアノソ

	<p>ナタとか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今は、車を運転するときに、演歌のカセットか CD を聴く程度ですね。今、聴いているのは誰だったかな、神野美伽だったかな。車に乗ったときに堅いニュースを聞いているより音楽を聴いた方が進んでいくと。 ・これ（ウォークマン）で電車の中で聴いててほんとにさっきのマーラーのシンフォニーやっぱ聞こえないんだよね。ものすごいフォルテシモで。ピアノシモ全然聞こえない。 ・最近ですね。最近はね、井上陽水の CD を聞きながらワイン飲んだりね。それから、女房のピアノが古いものですから、去年の秋ですけども下取りして自動演奏機の付いたピアノを買おうと思って電気屋さんへ行ったんですけどね、高過ぎて。そしたら電子ピアノが同じようなやつがあったもんですから。安いのが。それを買いましたね。それで自動演奏のショパンとかクラシックのあれを聞きながら酒を飲んでます。 ・やっぱり、本業を含めていろいろがたがた忙しいでしょ。そすと、やっぱりじっくり音楽を楽しむってなかなかできないんです。だから、例えばこういう携帯オーディオってのはその時に便利でね。電車に乗ってる時、バスに乗ってる時とか、いろんな時に聴けると。あるいは、ちょっと自分でなんか仕事しながらでも、音楽を流すとか、そういう、やっぱりそういうのがほとんどになっちゃいます。だから自分からわざわざ聴きに行こうとか、あるいはひたすら音楽だけ聴こうとかいうような今は少ないですね。 ・CD とかも流しっぱなしで朝からでも聴いていられます。もちろんスクリーンテーマ、映画音楽ならジャンルは何でもいい。マカロニウエスタンであれポップスであれ。
メモ	「現在における音楽の楽しみ方」の下位概念

概念名	音楽の提供や企画
概念の内容 (定義)	現在、音楽を個人で楽しむだけでなく、いろいろな場で演奏を聴いてもらったり、音楽会の企画をしたりしている。
具体例	・主にお年寄りの施設や障害を持ってる方の施設に行き、その利用者の方とご一緒に歌を歌ったり、僕が歌ったりという、それが日常生活の中にある。それが基盤になって、コンサートホールで自分

	<p>のバンドでコンサートをしたりというような形で楽しんでいます。頻度としては、月に3～4回やってまして。技量を上げるために、バンドのライブが一番効くもんですから。ピアノも、全部で5つ。5人入るとベースとボーカルとピアノと手話歌と。それから僕の弾き語りがあるという。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽と美術のコラボレーションやったり、それからホームコンサートで弾いたり、そういう企画やったり、一緒に。そいで毎月毎月自分の家でサロンコンサートやってらっしゃる人もいるので、そのサロンコンサートと一緒に企画したり、出演したり、相談に乗ったりしています。 ・夫がチェロを演奏をするので、夫婦で老人ホームを訪問しています。私自身が太極拳をやってるから、体づくりっていうことと、音を作ったり音楽作ったりする以前の問題のことを私がやってるもんだから、それとの関連でまた膨らんでくることもあって。老人ホームとのかかわりとか、社会とのかかわり方の、かかわり合いにおいても音楽が持つ可能性というふうに自分たちができることって考えたら、またその世界も出てくるわけ。
メモ	「現在における音楽の楽しみ方」の下位概念

2. 本論 p17 図5 「自分にとって音楽とは何か」の各概念の分析ワークシート

(1) 個人的なものとして

概念名	癒しや満足感が得られるもの
概念の内容 (定義)	個人的なものとして、音楽とは癒しや満足感が得られるものである。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・思うにぼくはやはり、節目というか何かをやるときに音楽で気分をすっきりさせるというのがいいんじゃないですかね。 ぼくもあまりこの辺にはオーディオはないですけども、何か落ち着くというのがあると思うんですね。 ・やっぱりね、豊かさを与えてくれるっていうこと。心にね、豊かさを与えることと、もうひとつ大事なものは、癒してくれるもの。いろんな意味で癒してくれる。だから、豊かさに繋がるんですね。だから、何気なく流れている曲が耳に応答して、そういう精神的を安らぎを与えながら、活力になっていくというかね。だから、逆にいえば音楽というのは、やっぱり空気みたいなものかもしれないね。なければいけな

	<p>いというもの。けど、しょっちゅうガンガン聴くものでもない。というのが考え方の一つなただけ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やっぱ聞くと落ち着くというか。はい、好きだから。カラオケのテープとそういうのを流して。うちの主人も好きは好きなんです。 ・歌っていると、気持ちがよくなるわけです。自分が気持ちよくなる。それが僕にとっては非常に大きな意味がありまして。そのあたりから歌の世界に僕はずーっと自分が入っていったんです。はっと気が付くと、それまで考えて自分の人生と全然違うことをやってるという。 ・音楽でとても豊かになりましたよ。自分の物質的な物とかお金とか、これもとても大切だと思いますけども、自分の人生に非常に満足度が高いと思ってます。 ・(音楽は) すごいやっぱいいものです、私にとっては。明るいものっていうか、楽しいものっていうか。やっぱいつもあるっていうか。 ・非常にその(音楽の)クオリティーは高いと思ってます。満足度は。
メモ	「個人的なものとして」の下位概念

概念名	楽しむもの
概念の内容 (定義)	個人的なものとして、音楽とは楽しむものである。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・マジョリティーの人間にとって音楽ってのはあくまで一つのエンジョイメントですよ。楽しいってことが大事である。だから何がよくて、何が悪いとかいう理屈はいらないんだけど、ただし逆に言えばそういう多様さの選択肢が世の中にあってほしいと思うんだよね。 ・自分に対しても人に対しても与える影響の度合いっていうのが、全く違うと思う。多分それは波動だからだと思うんです。実際に体が震えるからだと思うんですが。だから、そういうものが自分がいろんな経緯によって、そういう楽しむことができる生活になってることはほんとに幸せなことだと思います。 ・音楽はデザート感覚というか。豊かになるとか、思い出がいろいろと回ってくるかなと。あまり悲しいのは思い出さないようにして、いいことを思い出しやすい音楽をかける方がいいのかな。 ・音楽とのかかわりの中で、そういう意味では興味があったところからいっても深く入るから、尽きないです。 ・それでオペラの本買って読んだら、「そう堅苦しいことはないんだ。

	楽しめばいいんです。」という先生の方針でね。そういうのなら聞きに行ってもいいなと思って。
メモ	「個人的なものとして」の下位概念

概念名	身近にあるもの
概念の内容 (定義)	個人的なものとして、音楽とは身近にあるものである。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・ う～んそうだなあ、音楽ねえ。僕にとって音楽っていうのはやっぱり何て言うか、生きていくための連れあいだね。いつも一緒にあるね。常にいつも音楽があるね。これがなきゃ寂しいだろうねと思うよ僕は。 ・ だから、逆にいえば音楽というのは、やっぱり空気みたいなものかもしれないね。なければいけないというもの。けど、しょっちゅうガンガン聴くものでもない。というのが考え方の一つなんだけど。 ・ 音楽が、というよりはこんなことを知りたいというものの一つに音楽もあるという点で、音楽に関心を持っていますということですね。
メモ	「個人的なものとして」の下位概念

概念名	人生と重なるもの
概念の内容 (定義)	個人的なものとして、音楽は人生の様々な出来事と重なっているものである。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・ その人とその音楽が重なるっていうのはきっとそうなんだと思う。 ・ (音楽は)「生きることの根底にあるもの」っていうイメージがすごい強いです。どんな時にも根底にあるもの。だから、例えば結婚式に招待されたりして行った時も、「そうか。この人たちはこの曲を選んだか」とかやっぱり思いますね。自分たちが今選びますよね、いろんな、入場の時の音楽とかいろいろ。 ・ 僕が「無縁坂」を歌うと、みんな自分のお母さんのこと思い出す。その瞬間に自分のお母さんの、優しかったお母さんであり、それから苦しい悲しいことがあったお母さんでありって、みんな思い出して。 ・ 恋愛・結婚もやっぱり歌を歌ってる中でいろいろつながってる面もありますし。 ・ 多分、音楽の好きな人はその時代の流行歌に対応していつているんだ

	と思うけれどもね。
メモ	「個人的なものとして」の下位概念

概念名	心情と呼応するもの
概念の内容 (定義)	個人的なものとして、音楽は心や感情と響き合うものである。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 苦しいときは「確かにあの音楽もうまいこと表現しとるな」とか。例えばこの曲はこういうふうだったかなとかいうのはあるんですよ。 ・ 悲しい歌を歌うことによって。でも触った時にざらっとして、不愉快な触り方じゃなくて、その瞬間にまた涙が出てくるんだけど、その涙ってというのは自分にとって不愉快なものではなくて、ほんとに悲しくて、またさめざめと泣いてしまうんだけど、涙が出た後は少し元気が出てくるみたいな。そんなようなもの。それはもう自分の技量がどうこうってことじゃなくて、そういうようになっちゃってるとしか言いようがなくて。 ・ 本来、音楽というのは、嬉しいことであれ、楽しいことであれ、逆境であれ、佳境であれ、それは心の叫びみたいなことから出てくることだし、その心の中からの叫びだから、自然と体も動くというね。そういうものだと思うね。だから、小さい子なんか曲を聴くと体が動くというのはそういうことなんだよ。 ・ 音楽はやっぱり自分の精神状態とマッチするかということによって・・・自然と流れているものでも、その時の気持ちによっていろんな形で受け止めることができる。だから、音楽というのは一面性だけじゃなくて、百人の人が聴けば百人に対応できるような形で訴えていくというのか込み込んでいくというのか・・・ ・ ここが音楽で、で、こっちが心とか魂とか、まあ、霊と言ってもいいかもしれない、魂と言ってもいいかもしれないし、心と言ってもいいかもしれないし。で、こっち側からポーンと来ると、ビーンと、で、こっち側の叫びがポーンと来ると、音楽へ反響してくる・・・(なるほど) こういうものじゃないのかな。
メモ	「個人的なものとして」の下位概念

概念名	こだわりがあるもの
概念の内容 (定義)	個人的なものとして、音楽は人それぞれのこだわりがあるものである。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・(好きな音楽は) ほかでは代えられないでしょう。ここでは大事なものと言わなければいけなかったんですね。 ・音楽はやはり年齢なのかな、ゆっくりの方が。映画でもそうだけれどもわーっと語彙(ごい)が多いやつよりは、ラブストーリー、ゆっくりな方が好きですね。 ・音楽でこの作曲かがこういう状態でこういうときに作ったんだと思うと、やはりどんな曲なんだろうというふうに聴いていい、音楽そのものではないんです。音楽で表現した人の、その音楽そのものを聴いて感じるということは、ぼくはあんまりないかもしれません。 ・僕が思っているのは、クラシックって言うのは必ずしもその作られた時代に必ずしも受け入れられていたのではなくて、どっちかという、批判されているかもしれない。けど、それが何十年かたって本人が亡くなってから評価されるというのと同じで、そういう点から言うと、ある意味アンチ・・・今までの在り方に対して新しいものを作りだしていくという、その創造性と言うのか、クリエイティブな面だとか、新しいものをプロデュースするということは、ある意味の従来の価値観を乗り越えようとする働きだから、 ・生演奏っていうのは、クラシック同好会で生演奏やるでしょ。あれいいですよ。CDなんかよりよっぽどいいですよ。 ・大作曲家とか名演奏家とかそういう方に音楽についてその人柄に触れるっていう、これは一番僕の原初的な喜びのところかもしれません。
メモ	「個人的なものとして」の下位概念

(2) 他者との関わりにおいて

概念名	コミュニケーションがとれるもの
概念の内容 (定義)	音楽とは他者とのコミュニケーションをとることができるものである。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・むしろいろんなつらい面やそういう苦しい面みたいなのをうんと感じてる方々と一緒に歌うことによって、そこで僕がその方々の気持ちにも触れあえる。その方々の思いが僕にも伝わってきてっていう中でハッピーになっていってるっていうのがありますので。

	<ul style="list-style-type: none"> ・歌ってる時のお互いにコミュニケーションができるっていうのがだんだん見えてきて、歌って聴かせるというよりも歌っていると、気持ちがよくなるわけです。 ・いろんな人間とのコミュニケーション取りながら、つながりが広がってきたっていうことあるんですけども。今は歌を歌うっていうことが一緒にくっついたので、何ていうのかな、速度も広さもかつては考えられないくらい速くなり、広がってきてるっていうのがあって。 ・知らない人ばかりが1つの音楽で皆さん集まってこられるから、そこで知り合いになるっていうのはすごいです。 ・音楽というものを媒体として人間関係うまく築けそうとか。 ・人と人がコミュニケーションをやっぱ取るという、それがすごく楽しいことなんだっていうことが僕の場合には一緒に歌を歌うというようなことを通じて体感してきたような気がします。 ・六感みたいなもの、六感、七感を含めてやってるわけでしょうね。つまりだから音そのものではないっていうのは多分そういうことなんだと思うんです。それは説明がなくなったってやっぱりお互いに感じ合うものがあるって、勝手に音以外でコミュニケーションどっかで取ってるんだと思うんです。そういうものがやっぱり効いて、もちろん音楽としても素晴らしいんだけど、それ以上に逆に胸を打たれて、っていうのはそういうところなんだと思うんです。 ・やっぱり音楽が彼らを結び付けたっていう。これはもう明確にそういうふうに私は言い続けてます。
メモ	「他者との関わりにおいて」の下位概念

概念名	ツールとしての働きがあるもの
概念の内容 (定義)	音楽とは目的を遂行するためのツールとしての働きもある。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・(音楽は) 人生であったり、夢であったり、それから友だちづくりのツールであったり、それから町のそういう社会貢献活動の中ではもうすごい大きな役割を果たしてくれる道具としても思っています。 ・やっぱり世代を超えて、時代を超えて世代を超えて、人との心を通わす道具としては最高のもんだと思ってますね。思いとか願いとか。 ・1つの社会を渡るツールみたいな感じですね。 ・祭りというかお祝い事ですね。盛り上げるために非常に効果的であっ

	<p>たと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歳がいけばいくほど、音楽がもっと社会的にある何かを訴える、あるいは社会をより良い状態にもっていくための働きとして、もっと評価されるべきだとか、あるいは、そういう音楽がもっと出てほしいと思います。
メモ	「他者との関わりにおいて」の下位概念

概念名	メッセージ性や影響力があるもの
概念の内容 (定義)	音楽には聴いている人にメッセージを伝えたり、影響力を与えたりする力がある。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・僕が感じてるのは音楽、特に歌ってというのがこんなに素晴らしいもんか、こんなに楽しいもんなのかってのはほんとに、この特に3～4年ほんとに感じるです。すごい力を持ってるんだなって、人間に与える力ってというのがほかにも僕は好きなこといろいろあるんですけども。自分に対しても人に対しても与える影響の度合いってというのが、全く違うと思う。多分それは波動だからだと思うんです。実際に体が震えるからだと思うんですが。 ・音楽と言うのは時代を必ず風刺するからね。どんな曲であれ。 ・それは人によると思うんですけど、やっぱりたくさん音楽を聴いてる人だったら、曲想そのものがすごい強いメッセージ性を持つていうことが分かると思うんですが、あまり音楽に興味のない人とかだと歌詞が与える思いってのはすごい強いと思いますね。だからその差がすごいあると思うんです。
メモ	「他者との関わりにおいて」の下位概念

概念名	時に格差を感じることもある
概念の内容 (定義)	音楽に触れる時、他者との関係において、レベルの違いなど格差を感じることもあるということ。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・クラシック音楽を常に聴いて大きくなった、そういう方と話なんかすると「全然違うな」って思うわけよ。 ・やっぱり大学に行って、それなりの形をとっていた人というのは、わりと音楽との関わりは深いと思う。友達やなんかを見ててもそうだしね。

	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の好きな人は例えば新しい歌を覚えて、皆さんに披露するということが多分あると思いますけれども、自分にはできない。 ・(団塊世代は)結果的にすごい人数いるんだけど、有効性を持てるのは3割か4割。あと多くは、日本経済を圧迫するだけの人たち。高齢者になった時にそういう人たちは、残念ながら音楽にも親しんで来なかった人であったり、歳をとっても音楽に関心がなかったり、という人が多い。 ・やっぱり人によっていろいろ音楽のレベルがあって、やっぱり聴き取り方は全然違うんじゃないかな。 ・若い時の影響を受けたことからすると、どうしてもやっぱり、何か時代を刺激する音楽・・・そういうものにわりと反応していくと思う。また、大事に思うと思う。だから、結構、例えばね、先ほど言った Exile、今の若い子からしたら Exile といったらすごく人気がある。60を超している団塊の世代の私でも、そういうものを素直に受け入れられる、というふうに対応していける。けど、多くの団塊の世代の人と話す、「Exile なんてあんな・・・」ってなってしまうわけ。その分かれ目がある。で、階層的に見ればね、階層で人をランク付けしているわけではないけど、要するに高学歴化・・・ ・変化があると言えば、それ私は演歌が好きなとは思ってなかったのね。少なくとも、小中高の出会いからしたら、やっぱりちょっと流行歌の歌手みたいなのはちょっとワンランク下みたいなイメージがあるじゃないですか。
メモ	「他者との関わりにおいて」の下位概念

3. 本論 p19 図 6 「語りにみる団塊世代像」の各概念の分析ワークシート

カテゴリー「人数が多い」

概念名	競争社会
概念の内容 (定義)	団塊世代は人数が多く様々な面で競争が激しかったということ。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・競争相手はめちゃくちゃ多いし、ちょっとほかの世代とは違う。すごく人数があふれてるもんだから、やっぱり目立つようにしないと駄目ですよね。強くしない人は埋没していくんですね。だから埋没していくことができる人とできない人とあると思うんですけど、そういう中であがいてるっていうのがすごい強くて。

	<ul style="list-style-type: none"> ・(競争率が高いということですか。) そうということですね。(人数が多く競争に) あふれていましたということです。 ・小中高ぐらいまでっていう時は日本もまだ貧しい時代だったから。物質的には恵まれなかった。しかも人数が多かったから。大変な時代だったけど。 ・おっとりしていちゃ生き延びられないです。そういう人が多いと思います。 ・団塊の世代というのはね、日本の社会にとってね両面、すごく日本の社会をバイタリティというか力強くしてきた年代のひとつでもあると、けれども残念ながら、ある意味、ゆとりを持ってものを確かめるとかね、味わうとか、そういうゆとりがない年代。 ・激しいというか、それが当たり前だったから別になんとも思わなかったけど。大学の入試が競争率 40 倍、50 倍って言っても、「はあ、何それ。大したことないじゃん」って。
メモ	「人数が多い」の下位概念

概念名	格差・階層
概念の内容 (定義)	団塊世代は一括りにされるが、格差や階層意識が存在する。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・階層によっても違うかもしれないけど。同じ段階と言っても凄く違いがあると思う。だから、団塊の世代として一括して括られること自体、私としてはね、団塊の世代として大きな特徴としては言えるかもしれないけど、すごい階層があるよってこと。 ・団塊の世代が高齢化していく時にね、大きく分けると二つくらいに分けられるの。高齢者になっても、さらに自分の価値観を持って社会に有用な働きができる人と、そういうものさえなくて、ただ自分の経験だけで来てしまった人と、大きく分かれてくると思う。だって、280万人くらいいるわけだから、団塊の世代は。もう分かれてる。だから、常に新しいものに対応して、さらに自分を高めようというごく一部と、8割ぐらいは、要するに濡れ落ち葉ではないけどもうひとつ弱い。けど、弱い中にも二通りあって、要するに、社会に何らかの形で貢献しようとしているボランティアだとかね、何か自分の経験したことを、自分の職種とは違ったところで何か社会的に関わっていきたいというのと、ダメな人と。だから、結果的にすごい人数いるんだけど、

	<p>有効性を持てるのは、3割か4割。あと多くは、日本経済を圧迫するだけの人たち・・・</p> <p>・高齢者になった時に社会に役に立たない人たちは、残念ながら音楽にも親しんで来なかった人であったり、歳をいっても音楽に関心がなかったり、という人が多い。経験しながら、わりとアート、音楽だけじゃなくていわゆる芸術・・・だから、msicという範疇じゃなくて、もうちょっと幅を広げて、アートという芸術という大きなジャンルをわりと持っている人が多いと思うね。</p>
メモ	「人数が多い」の下位概念

概念名	一括りにされたくない
概念の内容 (定義)	団塊世代は一括りにされるが、本当はされたくないと感じている。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・階層によっても違うかもしれないけど。同じ段階と言っても凄く違いがあると思う。だから、団塊の世代として一括して括られること自体、私としてはね、団塊の世代として大きな特徴としては言えるかもしれないけど、すごい階層があるよってこと。 ・団塊だけどひとくりにされたくない。「ふざけんじゃねえよ。年齢だけでくられてたまるか。」ただ、愛おしさはあるよね。人がいっしょくたにいっぱいいて、みんなグジャグジャ、ワーワーワーやった、お祭り騒ぎみたいな世代でしょ。最期までお祭り騒ぎであの世まで行きたいね。みんなで仲よく。
メモ	「人数が多い」の下位概念

概念名	すし詰め教室
概念の内容 (定義)	団塊世代は人数が多く、学校の教室もすし詰めのように子供でいっぱいだった。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・教育の立場で、学生だった時は教室が多かったり、何ていうの、人がたくさんいるっていうの。それのよく自覚がなかったんです。人からは、第三者からは言われても。これで当然だと思ってた。教室の数が53人とか56人が当たり前。でもすし詰めっていうけど、最初っからそうなんだからなんとも感じなかった、私。不便を全然感じてないし、何ていうの、たくさん、烏合(うごう)の衆って言っちゃなんだけど、

	<p>たくさんでいることが当たり前だったから。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人がいっぱいいて。いろんなやつがいっぱいいて。すんごいおもしろかった。元気があった。疾風怒濤（どとう）でね。すし詰め教室というくらいでね。もう人がいっぱい。そこらへんウジャウジャウジャウジャ。あんなおもしろい時代ってなかったんじゃないかと思って。
メモ	「人数が多い」の下位概念

概念名	友人が多い
概念の内容 (定義)	団塊世代は人数が多く友人が多い。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・人がいっぱいいて。いろんなやつがいっぱいいて。すんごいおもしろかった。元気があった。 ・今振り返ると、団塊の世代は競争が激しくて大変だったりと言うんだけど、遊びもゴルフはやるお酒は飲むわで一番いい時代だった。 ・たくさん、烏合（うごう）の衆って言っちゃなんだけど、たくさんでいることが当たり前だったから。お友達もたくさんできてって感じで。何ていうの、一緒に、特に仲良くならなくたって、一緒にいることの暖かさみたいのを感じて育ってます。 ・団塊世代のいいところは、1人っていうのもあるかも分からないけど、何人かが寄るともっと素晴らしいことができるってことを実感して知ってる世代やと思うのね。友だちがすごく多い世代ですから何人かを集めて何かできる世代っていうのかな。
メモ	「人数が多い」の下位概念

概念名	話し合いをする世代
概念の内容 (定義)	団塊世代は人数が多いこともあり、話し合いでいろいろなことを決めていった世代である。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・団塊の世代っていろんな人がいるから、いろんな意見が当然起こるじゃない。・・・自己主張も必ずする。だけどほかの周りの意見を絶対「どなんがあるかなあ」と思って聞く。みんなからいろんな意見を「どんな意見してるの」みたいな興味を持って聞いた。自分と違う意見っていうのはどういうことを視点にしてるんかなっていう興味でもって聞いてたから。話し合いをよくする世代であったってことそれ

	<p>は間違いない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小中、そっからもうそう。だから学校側と何かを交渉しようとする時には、こうしたら学校側の先生ときっちり話ができるっていうのをちゃんとした数字的、数字っていうかな、ちゃんとノーマルな形なのね。交渉の仕方をきっちり身に付けてる。団塊の世代の人たちっていうのはそういうの身に付けてるんじゃないかな。
メモ	「人数が多い」の下位概念

概念名	生み出す世代
概念の内容 (定義)	団塊世代は何か新しいものを生み出した世代である。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの在り方に対して新しいものを作りだしていくという、その創造性と言うのか、クリエイティブな面だとか、新しいものをプロデュースするということは、ある意味の従来の価値観を乗り越えようとする働きだから、だから、高校時代から大学時代って言うのは、特に、団塊の世代って言うのはそういうものに刺激を受けてく時代だから、価値観が変わっていく時代だし、変えなきゃいかんと思っている。 ・やっぱり団塊世代として思いがあればっていうのはそこです。あえていうならばその延長線に、であるならば自分が何かしなくちゃいけないというのが非常に強い思いがあって、それが僕の場合には本当にやりたかったことをやることと、本当はやらなければいけなかったことをやりたいという、その二つなんです。それが今の僕の生活なってるわけです。 ・団塊世代のいいところは、1人っていうのもあるかも分からないけど、何人かが寄るともっと素晴らしいことができるってことを実感して知ってる世代やと思うのね。だから何人かを集めて何かできる世代っていうのかな。 ・作り上げていくのは必ずミュージカル、私たちは。それは高、中高とかそういうの。だからそれはいわゆるちゃんと自分で脚本書いて。それから音楽っていうのはどこかから選んできたあれなんだけど、その時本当に中学校の時に「マンボ・ナンバーファイブ」なんていう、あんな曲誰が中学校で取り入れ(笑)、マンボなんか取り上げへんよと思うんだけど、そういうのを取り上げてみんなで踊ることもやったし。何やってるの。だから自分たち、その時代にはそんなこと知らないん

	<p>だけど、そういうこと知ってる友だちがいるわけじゃない。ませた連中がいるわけよ、中学校で。自分たちで作りに上げていったわけです。ミュージカルなんか特にそう。</p>
メモ	「人数が多い」の下位概念

概念名	音楽ブーム
概念の内容 (定義)	<p>団塊世代の青年期にフォークソングやグループサウンズやビートルズなどの音楽の流行が巻き起こった。</p>
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・いわゆる団塊世代ってのはちょうど学生時代ってのは、高校から大学、大学院まで行ったのが、いわゆるジャパニーズフォークというのが大はやりだった時代なのよね。だからそういうのってずいぶんたくさん知ってるし、聴いてるよね。 ・やっぱりあれとちがうかなあ、70年安保。続いてベトナム戦争。そういつた中で、平和ということを求めていく中で、静かな形でありながら、社会批判をしてフォークソングとか・・・ ・フォークソングも。もう僕の友達もやっぱりそのころの連中の影響でときどきチョロチョロ聴いたかな。 ・グループサウンズもやっぱり、いや、そこそこに好きだったと思うんです。 ・テレビでいろいろと聴きました。「タイガース」とか「スパイダース」。 ・「ブルーコメッツ」のような品のいいグループサウンズが好きだった。 ・グループサウンズってのはどっちかっていうと、あれはちょっと何ていうか、そのころは安っぽいという感じもあったんでね。 ・これは私の本心がばれてしまいますがグループサウンズは、音楽そのものじゃなくて、そういうきゃあきゃあいうのに対して、なんだ変なことをやっているなというのがあれです。だけど、フォーククセーダーズは何か親近感を持っていました。 ・ビートルズね、テレビ見てました。あのとき中学の頃かな。東京へ来たことありますよね。あのときにテレビ見たら好きになりました。飛行機を降りてくるところから、変なのが来てはやりだなと。画像を見てから。すごいなと思ひましてね。それから好きになった。そうです。音楽っていうよりもそのビジュアル的なものを見てびっくりした。説得力ちゅうのか。生の迫力ちゅうのか。ラジオしか聞いたことないでしょ。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ビートルズが大きいですね、私の中では。特にビートルズを、何とかいう有名な編曲者の編曲がとてもやっぱりすごいんだなと思いました。リバプールでやってた時代とは違ってね。そういうのに触れた時に、ああ、こういうのってすごいんだあと。特にビートルズの曲の持つ力っていうのは、これは大したものだなと思いました。その時がやっぱり大きな変化の時だったんじゃないでしょうか。 ・全然フィーバーしてなかったです。でも、曲自体はもちろん「イエスタデイ」であるとか、それから「ミッシェル」とかあんなのすごくいいなと思いましたけど。初期のギャーギャーというのは全然駄目でありまして。 ・だからビートルズでもってポップスに対してアレルギーが無くなったのかな。何でも聴けるようになった。
メモ	「人数が多い」の下位概念

研究Ⅱ 各調査の調査票、コードブック

1. JGSS-2003

JGSS-2003 のコードブックは膨大なページ数（337 ページ）があり本資料に掲載が難しいことから、以下のホームページからダウンロードをしてください。

日本版 General Social Surveys 基礎集計表・コードブック JGSS-2003

編集 大阪商業大学 比較地域研究所

東京大学 社会科学研究所

発行 大阪商業大学 比較地域研究所

2005 年 3 月

ホームページ

http://jgss.daishodai.ac.jp/research/codebook/JGSS-2003_Codebook_Published.pdf

2. JGSS-2008

JGSS-2008 のコードブックは膨大なページ数（342 ページ）があり本資料に掲載が難しいことから、以下のホームページからダウンロードをしてください。

日本版 General Social Surveys 基礎集計表・コードブック JGSS-2003

編集・発行 日本版総合的社会調査共同研究拠点

大阪商業大学 JGSS 研究センター

2010 年 3 月

ホームページ

http://jgss.daishodai.ac.jp/research/codebook/JGSS-2008_Codebook_Published.pdf

3. インターネット調査 2012

この調査は、平成 22 年度、日本興亜福祉財団の「ジェロントロジー研究助成金」45 万円を得て、2012 年 1 月に実施。日本全国の 1947～51 年生まれの団塊世代 1000 人（男 500 人、女 500 人）を対象に、Net Mile 社によりインターネットアンケート調査を行った。

この調査は、本研究のごく一部にのみ利用しており、その都度本論で説明しているため、本資料に調査票や集計表は添付しないこととする。

4. インターネット調査 2013

(1) 質問票

「団塊世代の音楽体験についてのアンケート」

アンケート質問事項

生年 1947～51年生まれ 男女

Q 1、現在の居住地の市郡規模をお答えください。

1、大都市（札幌市、仙台市、さいたま市、千葉市、東京都区部、横浜市、川崎市、新潟市、静岡市、

浜松市、名古屋市、京都市、大阪市、堺市、神戸市、広島市、北九州市、福岡市）

2、人口 20 万人以上の市（上記大都市以外）

3、人口 20 万人未満の市

4、郡部（町村）

Q 2、あなたの最終学歴（卒業したもの）をお答えください。

1、中学校、2、高等学校、3、高等専門学校・短期大学・専門学校、4、4年制大学、

5、大学院、6、その他（ ）

Q 3、あなたの配偶者の最終学歴（卒業したもの）をお答えください。

1、中学校、2、高等学校、3、高等専門学校・短期大学・専門学校、4、4年制大学、

5、大学院、6、その他（ ） 7、配偶者はいない

Q 4、あなたの父親の最終学歴（卒業したもの）をお答えください。

1、旧制尋常小学校 2、旧制高等小学校 3、旧制中学校・高等女学校・実業学校・師範学校、4、旧制高等専門学校・高等師範学校 5、旧制大学 6、新制中学校 7、新制高等学校、8、新制高等専門学校・短期大学・専門学校 9、新制大学 10、新制大学院

11、その他（ ） 12、わからない

Q 5、あなたの母親の最終学歴（卒業したもの）をお答えください。

1、旧制尋常小学校 2、旧制高等小学校 3、旧制中学校・高等女学校・実業学校・師範学校、4、旧制高等専門学校・高等師範学校 5、旧制大学 6、新制中学校 7、新制高等学校、8、新制高等専門学校・短期大学・専門学校 9、新制大学 10、新制大学院

11、その他（ ） 12、わからない

Q 6、現在のご家庭の世帯年収（合計）をお答えください。

- 1、 なし
- 2、 70 万円未満
- 3、 70～100 万円未満
- 4、 100～130 万円未満
- 5、 130～150 万円未満
- 6、 150～250 万円未満
- 7、 250～350 万円未満
- 8、 350～450 万円未満
- 9、 450～550 万円未満
- 10、 550～650 万円未満
- 11、 650～750 万円未満
- 12、 750～850 万円未満
- 13、 850～1,000 万円未満
- 14、 1,000～1,200 万円未満
- 15、 1,200～1,400 万円未満
- 16、 1,400～1,600 万円未満
- 17、 1,600～1,850 万円未満
- 18、 1,850～2,300 万円未満
- 19、 2,300 万円以上

Q 7、現在の就業形態をお答えください。

- 1、 経営者・役員
- 2、 常時雇用の一般従業者
- 3、 非常勤・臨時・パート
- 4、 派遣・契約社員
- 5、 自営業主・自営業者
- 6、 家族従業者
- 7、 主に家事をしている
- 8、 学生
- 9、 定年などで仕事をやめた
- 10、 失業中
- 11、 身体上の理由で働けない
- 12、 その他（ ）

Q 8、現在の健康状態をお答えください。

- 1、良い 2、まあまあ良い 3、普通 4、少し悪い 5、悪い

Q 9、あなたが15歳頃住んでいた場所の規模をお答えください。

- 1、大都市
2、中小都市
3、町
4、村

Q 10、あなたが15歳頃の家庭の世帯収入レベルをお答えください。

- 1、平均よりかなり多い
2、平均より多い
3、ほぼ平均
4、平均より少ない
5、平均よりかなり少ない

Q 11、現在の日本社会を以下の5つの階層に分けるとしたら、あなた自身はどれに入りますか。

- 1、上
2、中の上
3、中の中
4、中の下
5、下

Q 12、あなたは次の娯楽をどのくらい行っていますか。

	よくする	時々する	あまりしない	全くしない
音楽鑑賞（CD、ラジオ、テレビ、コンサートなど）	1	2	3	4
映画鑑賞（映画館・DVD・テレビなど）	1	2	3	4
パソコン（仕事以外の娯楽として）	1	2	3	4

ゲーム(テレビ・パソコン・ 携帯・スマートフォンなど)	1	2	3	4
園芸・庭いじり	1	2	3	4
ドライブ(運転・乗るだけ どちらも)	1	2	3	4
パチンコ・パチスロ	1	2	3	4

Q13、生活面に関する以下の項目について、あなたはどのくらい満足していますか。

	非常に満足している	満足している	どちらともいえない	不満である	非常に不満である
住んでいる地域	1	2	3	4	5
余暇の過ごし方	1	2	3	4	5
家庭生活	1	2	3	4	5
現在の家計の状態	1	2	3	4	5
健康状態	1	2	3	4	5
友人関係	1	2	3	4	5
配偶者との関係 (いる方のみ)	1	2	3	4	5

Q14、あなたは次の方法で音楽鑑賞をどのくらいしますか。

	よくする	時々する	あまりしない	全くしない
コンサートに行く	1	2	3	4
ウォークマン(イヤホン)で聴く	1	2	3	4
テレビ	1	2	3	4
ラジオ	1	2	3	4
CD	1	2	3	4
カセットテープ	1	2	3	4
ビデオやDVD	1	2	3	4
インターネット	1	2	3	4

Q15、Q14でコンサートに行くに答えた方（1、2、3）は、どのジャンルのコンサートに行きますか。2つまでお答えください。

- 1、クラシック音楽のコンサート
- 2、歌謡曲・演歌のコンサート
- 3、ポピュラー音楽のコンサート
- 4、ジャズのコンサート
- 5、ロックのコンサート

Q16、あなたは現在どのくらい次の音楽が好きですか。

	非常に好き	好き	あまり好きでない	嫌い
クラシック音楽	1	2	3	4
歌謡曲・J-POP	1	2	3	4
演歌	1	2	3	4
フォークソング	1	2	3	4
グループサウンズ	1	2	3	4
海外のポップス	1	2	3	4
ジャズ・ブルース	1	2	3	4
ビートルズ	1	2	3	4
ロック	1	2	3	4
映画音楽	1	2	3	4

Q17、あなたは、青年期（15~30歳くらいまで）の頃、どのくらい次の音楽が好きでしたか。

	非常に好き	好き	あまり好きでない	嫌い
クラシック音楽	1	2	3	4
歌謡曲・J-POP	1	2	3	4
演歌	1	2	3	4
フォークソング	1	2	3	4
グループサウンズ	1	2	3	4
海外のポップス	1	2	3	4
ジャズ・ブルース	1	2	3	4
ビートルズ	1	2	3	4
ロック	1	2	3	4
映画音楽	1	2	3	4

Q 18、団塊世代について次の項目についてどのように思いますか。

		そう思う	あまり思わ ない	全く思わな い
競争が激しかった	1	2	3	4
格差を感じる	1	2	3	4
人数が多い	1	2	3	4
ひとくくりにされたくない	1	2	3	4
日本の発展に寄与した	1	2	3	4
経済不況で苦勞した	1	2	3	4
ビートルズ世代だと思う	1	2	3	4
学生運動に関心があった	1	2	3	4
老後の不安がある	1	2	3	4
団塊世代でよかった	1	2	3	4

Q 19、あなたが小・中学生の頃、学校の音楽の授業は好きでしたか。

- 1、非常に好きだった
- 2、好きだった
- 3、あまり好きではなかった
- 4、嫌いだった

Q 20、あなたが小・中学生の頃、歌または楽器の演奏は得意でしたか。

- 1、得意だった
- 2、やや得意だった
- 3、あまり得意ではなかった
- 4、全くできなかつた

Q 21、あなたが子どもの頃、音楽関係の習い事をしましたか。習ったものをお答えください。(複数可)

- 1、歌
- 2、琴・三味線などの和楽器
- 3、ピアノ・オルガン
- 4、笛(フルートなど)
- 5、ヴァイオリンなどの西洋の弦楽器
- 6、日本舞踊
- 7、その他()

Q、22 あなたが子どもの頃、次の方法でどのくらい音楽を聴きましたか。

	よく聴いた	時々聴いた	あまり聴かなかった	ほとんど聴かなかった
ラジオ	1	2	3	4
テレビ	1	2	3	4
レコード	1	2	3	4
コンサートに行った	1	2	3	4
映画館に行った	1	2	3	4

Q23、あなたが子どもの頃、ご両親は音楽をどのくらい聴いていましたか。

	よく聴いていた	時々聴いていた	あまり聴いていなかった	ほとんど聴いていなかった	いなかったのかわからない
父親	1	2	3	4	5
母親	1	2	3	4	5

Q、24 あなたの父親はどんな音楽が好きでしたか。3つまでお答えください。

- 1、クラシック音楽
- 2、唱歌・童謡
- 3、民謡・浪曲・邦楽
- 4、歌謡曲
- 5、演歌
- 6、軍歌
- 7、ポピュラー音楽
- 8、フォークソング
- 9、ジャズ・ブルース
- 10、ロック
- 11、映画音楽
- 12、わからない
- 13、父親はいなかった

Q 2 5、 あなたの母親はどんな音楽が好きでしたか。3つまでお答えください。

- 1、クラシック音楽
- 2、唱歌・童謡
- 3、民謡・浪曲・邦楽
- 4、歌謡曲
- 5、演歌
- 6、軍歌
- 7、ポピュラー音楽
- 8、フォークソング
- 9、ジャズ・ブルース
- 10、ロック
- 11、映画音楽
- 12、わからない
- 13、母親はいなかった

Q 2 6、あなたが結婚して子どもを持った時、お子さまに音楽教育をさせましたか。(音楽教室、ピアノ等)

- 1、かなりさせた
- 2、周りの子供と同じようにさせた
- 3、あまりさせていない
- 4、全くさせていない
- 5、子どもはいない

Q 2 7、あなたが結婚して子どもを持った時、家族で音楽を楽しみましたか。

- 1、非常に楽しんだ
- 2、楽しんだ
- 3、あまり楽しんでいない
- 4、全く楽しんでいない
- 5、子どもはいない

Q28、あなたは現在、次の音楽活動・行動についてどのくらい行っていますか。

	よくする	時々する	あまりしない	全くしない
楽器演奏をする	1	2	3	4
声楽や合唱をする	1	2	3	4
カラオケに行く	1	2	3	4
カラオケ以外で歌う (鼻歌も含む)	1	2	3	4
「ながら」聴きをする (他の事をしながら聴く)	1	2	3	4
コンサートに行く	1	2	3	4
音楽サークルに参加	1	2	3	4
音楽会などの企画・運営	1	2	3	4
作曲などの創作活動	1	2	3	4

Q29、あなたはいつごろの音楽になつきさを感じますか。あてはまるもの2つまでお答えください。

- 1、学校で習った音楽（唱歌、童謡も含む）
- 2、子どもの頃、家庭で聴いたり歌ったり演奏した音楽
- 3、青年期に流行した音楽（フォークソング、グループサウンズ、ビートルズ、歌謡曲等）
- 4、社会に出てからよく触れた音楽（演歌、クラシック音楽、ジャズ等）
- 5、その他（ ）

Q30、あなたはどんな格差を感じますか。特に大きいもの2つまでお答えください。

- 1、学歴格差（教育格差）
- 2、経済格差（賃金、年金、貯金、資産など）
- 3、性別による格差
- 4、健康格差
- 5、医療格差
- 6、世代間格差
- 7、地域間格差
- 8、階層間格差
- 9、その他（ ）

研究Ⅱ 各調査における団塊世代の基本属性の分布

1. JGSS-2003

(1) 性別

		度数	%
有効	男	165	40.7
	女	240	59.3
	合計	405	100.0

(2) 教育年数（本人）

			性別		全体	
			男	女		
教育年数（本人）	新制中学校	度数	24	34	58	
		性別の%	14.6%	14.2%	14.4%	
	新制高等学校	度数	84	142	226	
		性別の%	51.2%	59.2%	55.9%	
	新制短期大学・高等専門学校	度数	11	47	58	
		性別の%	6.7%	19.6%	14.4%	
	新制大学	度数	42	17	59	
		性別の%	25.6%	7.1%	14.6%	
	新制大学院	度数	3	0	3	
		性別の%	1.8%	0.0%	0.7%	
	全 体		度数	164	240	404
			性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(3) 世帯年収

度数 有効	279	
欠損値	126	
平均値	11.04	650～700万円
中央値	11.00	650～700万円
最頻値	13	850～1000万円

(4) 就労の有無

			性別		全体
			男	女	
就労の有無	有職者	度数	155	181	336
		性別の%	94.5%	76.7%	84.0%
	無職者	度数	9	55	64
		性別の%	5.5%	23.3%	16.0%
全体		度数	164	236	400
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(5) 居住地の市郡規模

			性別		全体
			男	女	
市郡規模	14大市	度数	28	48	76
		性別の%	17.0%	20.0%	18.8%
	その他の市	度数	98	136	234
		性別の%	59.4%	56.7%	57.8%
	町村	度数	39	56	95
		性別の%	23.6%	23.3%	23.5%
全体		度数	165	240	405
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(6) 健康状態

			性別		全体	
			男	女		
健康状態（本人）	1：良い	度数	41	76	117	
		性別の%	24.8%	31.7%	28.9%	
	2	度数	40	69	109	
		性別の%	24.2%	28.8%	26.9%	
	3	度数	55	64	119	
		性別の%	33.3%	26.7%	29.4%	
	4	度数	25	25	50	
		性別の%	15.2%	10.4%	12.3%	
	5：悪い	度数	4	6	10	
		性別の%	2.4%	2.5%	2.5%	
	全体		度数	165	240	405
			性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(7) 15歳頃の居住地規模

			性別		全体	
			男	女		
15歳の頃の居住地（本人）	大都市	度数	23	33	56	
		性別の%	14.4%	14.2%	14.2%	
	中都市	度数	37	48	85	
		性別の%	23.1%	20.6%	21.6%	
	その他の市	度数	42	65	107	
		性別の%	26.3%	27.9%	27.2%	
	町・村	度数	58	87	145	
		性別の%	36.3%	37.3%	36.9%	
	全体		度数	160	233	393
			性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(8) 15歳頃の世帯収入レベル

			性別		全体	
			男	女		
15歳の頃の世帯収入 レベル	平均よりかなり多い	度数	0	4	4	
		性別の%	0.0%	3.4%	1.9%	
	平均より多い	度数	14	19	33	
		性別の%	15.9%	16.0%	15.9%	
	ほぼ平均	度数	33	57	90	
		性別の%	37.5%	47.9%	43.5%	
	平均より少ない	度数	32	26	58	
		性別の%	36.4%	21.8%	28.0%	
	平均よりかなり少ない	度数	9	13	22	
		性別の%	10.2%	10.9%	10.6%	
	全 体		度数	88	119	207
			性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

2. JGSS-2008

(1) 性別

		度数	%
有効	男	249	49.7
	女	252	50.3
	合計	501	100.0

(2) 世帯年収

度数 有効	501	
欠損値	0	
平均値	9.81	500～550万円
中央値	9.00	450～500万円
最頻値	9	450～550万円

(3) 教育年数 (本人)

			性別		全体	
			男	女		
教育年数 (本人)	新制中学校	度数	45	40	85	
		性別の%	18.2%	16.0%	17.1%	
	新制高校	度数	118	151	269	
		性別の%	47.8%	60.4%	54.1%	
	新制高専・短大	度数	21	40	61	
		性別の%	8.5%	16.0%	12.3%	
	新制大学	度数	61	18	79	
		性別の%	24.7%	7.2%	15.9%	
	新制大学院	度数	2	1	3	
		性別の%	0.8%	0.4%	0.6%	
	全体		度数	247	250	497
			性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(4) 就労の有無

			性別		全体
			男	女	
就労の有無	有職者	度数	215	138	353
		性別の%	87.4%	56.1%	71.7%
	無職者	度数	31	108	139
		性別の%	12.6%	43.9%	28.3%
全体		度数	246	246	492
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(5) 居住地の市郡規模

			性別		全体
			男	女	
居住地の 市郡規模	大都市	度数	48	49	97
		性別の%	19.3%	19.4%	19.4%
	人口20万人以上の 市	度数	66	64	130
		性別の%	26.5%	25.4%	25.9%
	人口20万人未満の 市	度数	101	106	207
		性別の%	40.6%	42.1%	41.3%
	町村	度数	34	33	67
		性別の%	13.7%	13.1%	13.4%
全 体		度数	249	252	501
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(6) 健康状態

			性別		全体
			男	女	
健康状態（本人）	1：良い	度数	52	75	127
		性別の%	21.1%	29.8%	25.5%
	2	度数	60	60	120
		性別の%	24.3%	23.8%	24.0%
	3	度数	100	86	186
		性別の%	40.5%	34.1%	37.3%
	4	度数	23	24	47
		性別の%	9.3%	9.5%	9.4%
	5：悪い	度数	12	7	19
		性別の%	4.9%	2.8%	3.8%
全 体		度数	247	252	499
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(7) 15歳頃の居住地規模

			性別		全体
			男	女	
15歳頃の居住地規模	大都市	度数	31	31	62
		性別の%	12.4%	12.3%	12.4%
	中小都市	度数	86	91	177
		性別の%	34.5%	36.1%	35.3%
	町	度数	91	90	181
		性別の%	36.5%	35.7%	36.1%
	村	度数	41	40	81
		性別の%	16.5%	15.9%	16.2%
全体		度数	249	252	501
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(8) 15歳頃の世帯収入レベル

			性別		全体	
			男	女		
15歳頃の世帯収入レベル	平均よりかなり多い	度数	4	8	12	
		性別の%	1.6%	3.2%	2.4%	
	平均より多い	度数	28	36	64	
		性別の%	11.4%	14.5%	12.9%	
	ほぼ平均	度数	97	118	215	
		性別の%	39.4%	47.4%	43.4%	
	平均より少ない	度数	77	72	149	
		性別の%	31.3%	28.9%	30.1%	
	平均よりかなり少ない	度数	40	15	55	
		性別の%	16.3%	6.0%	11.1%	
	全体		度数	246	249	495
			性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

3. インターネット調査 2012

(1) 性別

		度数	%
有効	男	500	50.0
	女	500	50.0
	合計	1000	100.0

(2) 世帯年収

度数 有効	1000	
欠損値	0	
平均値	9.37	450~500万円
中央値	9.00	450~500万円
最頻値	8	350~450万円

(3) 教育年数 (本人)

			性別		全体	
			男性	女性		
教育年数	中学校	度数	11	12	23	
		性別の%	2.2%	2.4%	2.3%	
	高等学校	度数	173	221	394	
		性別の%	34.6%	44.2%	39.4%	
	高等専門学校・短期大学・専門学校	度数	42	152	194	
		性別の%	8.4%	30.4%	19.4%	
	4年制大学	度数	250	110	360	
		性別の%	50.0%	22.0%	36.0%	
	大学院	度数	24	5	29	
		性別の%	4.8%	1.0%	2.9%	
	全体		度数	500	500	1000
			性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(4) 居住地の市郡規模

			性別		全体
			男性	女性	
居住地の 市郡規模	大都市（札幌市、仙台市、さいたま市、千葉市、東京都区部、横浜市、川崎市、新潟市、静岡市、浜松市、名古屋市、京都市、大阪市）	度数	191	207	398
		性別の%	38.2%	41.4%	39.8%
	人口20万人以上の市（上記大都市以外）	度数	145	124	269
		性別の%	29.0%	24.8%	26.9%
	人口20万人未満の市	度数	140	132	272
		性別の%	28.0%	26.4%	27.2%
	郡部（町村）	度数	24	37	61
		性別の%	4.8%	7.4%	6.1%
全 体		度数	500	500	1000
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(5) 就労の有無

			性別		全体
			男性	女性	
就労の有無	有職者	度数	340	147	487
		性別の%	68.0%	29.4%	48.7%
	無職者	度数	160	353	513
		性別の%	32.0%	70.6%	51.3%
全 体		度数	500	500	1000
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(6) 健康状態

			性別		全体	
			男性	女性		
健康状態	良い	度数	79	93	172	
		性別の%	15.8%	18.6%	17.2%	
	まあまあ良い	度数	159	136	295	
		性別の%	31.8%	27.2%	29.5%	
	普通	度数	173	199	372	
		性別の%	34.6%	39.8%	37.2%	
	少し悪い	度数	71	60	131	
		性別の%	14.2%	12.0%	13.1%	
	悪い	度数	18	12	30	
		性別の%	3.6%	2.4%	3.0%	
	全体		度数	500	500	1000
			性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(7) 15歳頃の居住地規模

			性別		全体	
			男性	女性		
15歳頃の居住地規模	大都市	度数	166	171	337	
		性別の%	33.2%	34.2%	33.7%	
	中小都市	度数	193	194	387	
		性別の%	38.6%	38.8%	38.7%	
	町	度数	120	106	226	
		性別の%	24.0%	21.2%	22.6%	
	村	度数	21	29	50	
		性別の%	4.2%	5.8%	5.0%	
	全体		度数	500	500	1000
			性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(8) 15歳頃の世帯収入レベル

			性別		全体	
			男性	女性		
15歳頃の世帯収入 レベル	平均よりかなり多い	度数	17	25	42	
		性別の%	3.4%	5.0%	4.2%	
	平均より多い	度数	82	84	166	
		性別の%	16.4%	16.8%	16.6%	
	ほぼ平均	度数	191	249	440	
		性別の%	38.2%	49.8%	44.0%	
	平均より少ない	度数	165	116	281	
		性別の%	33.0%	23.2%	28.1%	
	平均よりかなり少ない	度数	45	26	71	
		性別の%	9.0%	5.2%	7.1%	
	全 体		度数	500	500	1000
			性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

3. インターネット調査 2013

(1) 性別

		度数	%
有効	男	250	50.0
	女	250	50.0
	合計	1000	100.0

(2) 世帯年収

度数 有効	1000	
欠損値	0	
平均値	9.09	450~500万円
中央値	9.00	450~500万円
最頻値	8	350~450万円

(3) 教育年数（本人）

			性別		全体
			男性	女性	
教育年数（本人）	9中学校	度数	3	7	10
		性別の%	1.2%	2.8%	2.0%
	12高等学校	度数	78	128	206
		性別の%	31.5%	51.6%	41.5%
	14高等専門学校・短期大 学・専門学校	度数	23	63	86
		性別の%	9.3%	25.4%	17.3%
	16 4年制大学	度数	132	48	180
		性別の%	53.2%	19.4%	36.3%
	18大学院	度数	12	2	14
		性別の%	4.8%	0.8%	2.8%
	全 体	度数	248	248	496
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(4) 居住地の市郡規模

			性別		合計
			男性	女性	
居住地の市郡規模	大都市（札幌市、仙台市、さいたま市、千葉市、東京都区部、横浜市、川崎市、新潟市、静岡市、浜松市、名古屋市、京都市、大阪市）	度数	89	89	178
		性別の%	35.6%	35.6%	35.6%
	人口20万人以上の市（上記大都市以外）	度数	63	73	136
		性別の%	25.2%	29.2%	27.2%
	人口20万人未満の市	度数	75	70	145
		性別の%	30.0%	28.0%	29.0%
	郡部（町村）	度数	23	18	41
		性別の%	9.2%	7.2%	8.2%
合計	度数	250	250	500	
	性別の%	100.0%	100.0%	100.0%	

(5) 就労の有無

			性別		全体
			男性	女性	
就労の有無	有職者	度数	128	62	190
		性別の%	51.8%	25.7%	38.9%
	無職者	度数	119	179	298
		性別の%	48.2%	74.3%	61.1%
全体		度数	247	241	488
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(6) 健康状態

			性別		全体	
			男性	女性		
健康状態	良い	度数	73	67	140	
		性別の%	29.2%	26.8%	28.0%	
	まあまあ良い	度数	82	82	164	
		性別の%	32.8%	32.8%	32.8%	
	普通	度数	60	72	132	
		性別の%	24.0%	28.8%	26.4%	
	少し悪い	度数	30	25	55	
		性別の%	12.0%	10.0%	11.0%	
	悪い	度数	5	4	9	
		性別の%	2.0%	1.6%	1.8%	
	全体		度数	250	250	500
			性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(7) 15歳頃の居住地規模

			性別		全体
			男性	女性	
15歳頃の居住地規模	大都市	度数	86	82	168
		性別の%	34.4%	32.8%	33.6%
	中小都市	度数	108	97	205
		性別の%	43.2%	38.8%	41.0%
	町	度数	47	57	104
		性別の%	18.8%	22.8%	20.8%
	村	度数	9	14	23
		性別の%	3.6%	5.6%	4.6%
全体		度数	250	250	500
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%

(8) 15歳頃の世帯収入レベル

			性別		全体
			男性	女性	
15歳頃の世帯収入レベル	平均よりかなり多い	度数	9	17	26
		性別の%	3.6%	6.8%	5.2%
	平均より多い	度数	55	65	120
		性別の%	22.0%	26.0%	24.0%
	ほぼ平均	度数	119	113	232
		性別の%	47.6%	45.2%	46.4%
	平均より少ない	度数	51	45	96
		性別の%	20.4%	18.0%	19.2%
	平均よりかなり少ない	度数	16	10	26
		性別の%	6.4%	4.0%	5.2%
全体		度数	250	250	500
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%